

揖保郡太子町

鷗北遺跡・城山遺跡

— (国) 179号(太子道路)道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



令和6(2024)年3月

兵庫県教育委員会

揖保郡太子町

鷗北遺跡・城山遺跡

— (国) 179号(太子道路)道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



令和6(2024)年3月

兵庫県教育委員会



101



104



102



105



106



107



108



64



64



142

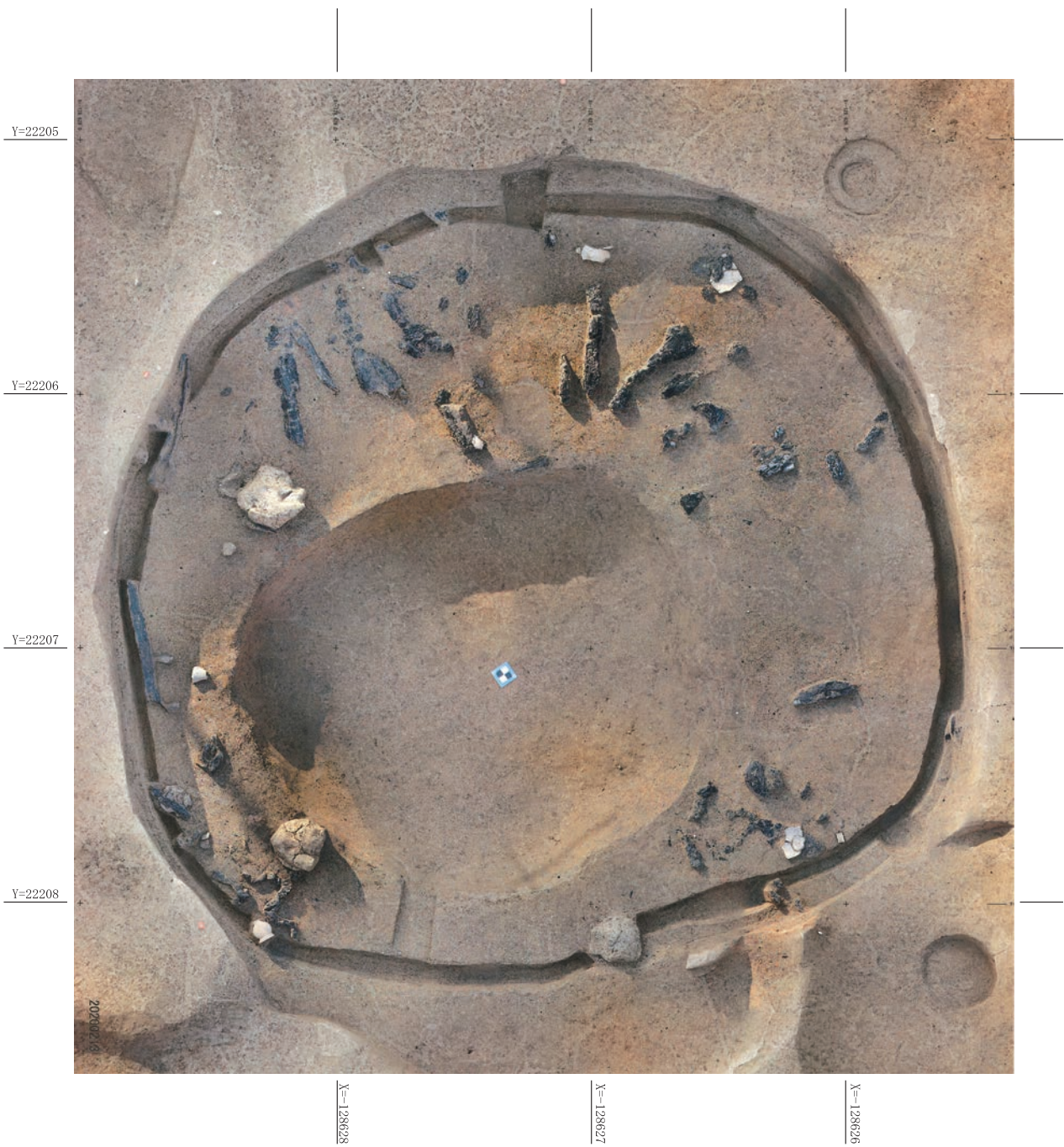
鶺鴒北遺跡 出土土器 (2)



城山遺跡 SK8全景（東から）



城山遺跡 SH2竈（北西から）



城山遺跡 SH 57 のオルソ画像（炭化材出土）



城山遺跡 SH 57 のオルソ画像（炭化材除去）



S H 57 垂木・周壁溝上にある壁構築材の検出状況 (①から)



S H 57 垂木・粘土・周壁溝上にある土器検出状況 (②から)



S H 57 垂木炭化材 (③から)



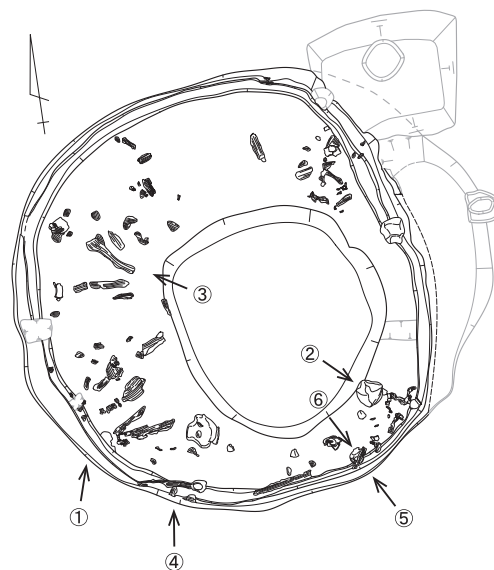
S H 57 炭化材 19 (④から)



S H 57 土器・炭化材・粘土出土状況 (1) (⑤から)



S H 57 土器・炭化材・粘土出土状況 (2) (⑥から)





SH 57 炭化材 25 (壁構築材) 断面 (①から)



SH 57 炭化材 24 (壁構築材) 断面 (②から)



SH 57 炭化材 13 (③から)



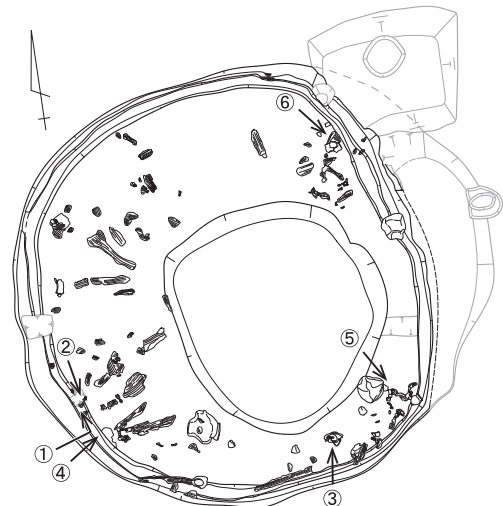
SH 57 加工痕のある垂木炭化材 (右から2つ目) (④から)



SH 57 炭化材 10 (⑤から)



SH 57 土器と炭化材 8 (⑥から)



例 言

1. 本書は兵庫県揖保郡太子町佐用岡および、揖保郡太子町鷗に所在する鷗北遺跡・城山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および出土品整理作業は、兵庫県西播磨県民局龍野土木事務所による、(国) 179号太子道路地域自主戦略交付金事業、防災・安全交付金事業(国) 179号(太子道路)、道路事業(国) 179号太子道路(現道拡幅部)、(国) 179号(太子道路)道路改良事業、に伴うもので、発掘調査は兵庫県西播磨県民局長(龍野土木事務所)の依頼を受けた兵庫県教育委員会が調査主体となり、調査機関として委託を受けた公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターが実施した。
出土品整理作業についても、兵庫県西播磨県民局長(龍野土木事務所)から依頼を受けた兵庫県教育委員会が公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターに委託して、兵庫県立考古博物館において実施した。
3. 本書で使用した写真のうち、遺構については発掘調査担当者が撮影したもの、空中写真は平成26年度に株式会社イビソク、平成28年度に株式会社アコード、令和元年度に株式会社オーシスマップに委託して撮影したものを使用した。
また、遺物写真については株式会社地域文化財研究所に委託して中本照雄氏が撮影したものおよび、国際文化財株式会社に委託して九鬼みずほ氏が撮影したものを使用した。
4. 鷗北遺跡、城山遺跡出土金属器は公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部整理保存課で保存処理を実施した。
5. 本書の執筆は第1章 第2節は松崎光伸、第3章・第7章 第2節は久保弘幸、4章は岸本一宏、5章 第1節の層序に関しては垣内拓郎がおこない、自然科学分析についてはパレオ・ラボ、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託、第6章にその結果を報告し、そのほかは、野田優人が執筆した。また、編集は整理技術員の寺西梨紗の補助のもと、野田が行った。
6. 本報告で使用した図面・写真および遺物は、兵庫県立考古博物館および魚住分館で保管している。

凡 例

1. 本書で使用した方位は第Ⅴ系国土座標（世界測地系）を基準とし、北は座標北をさす。標高の数値は海拔高（T.P.）を使用した。
2. 鶺鴒北遺跡・城山遺跡の調査について、兵庫県教育委員会が設定した調査別の遺跡調査番号は以下の通りである。

確認調査	平成 25（2013）年度	遺跡調査番号	2013163
	平成 27（2015）年度	遺跡調査番号	2015101
	平成 29（2017）年度	遺跡調査番号	2017122
本発掘調査	平成 26（2014）年度	遺跡調査番号	2014007
	平成 28（2016）年度	遺跡調査番号	2016077
	平成 31・令和元（2019）年度	遺跡調査番号	2019042
3. 土層断面の色調名は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）によるものである。また、土層名のうち、堆積物の粒度区分については、調査担当者が経験的に触感により判断したものである。
4. 遺物番号は本文・図版・写真図版とも同一とし、遺物の種類ごとに通し番号としている。遺物番号のうち、土器類・土製品は数字のみ、石器・石製品には「S」、金属器には「M」をそれぞれ冠し、種類ごとに通し番号としている。
5. 土器類実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、磁器は 40%、陶器は 20%、瓦質土器・瓦器は 10%の断面網掛けにしている。
6. 本書に掲載した挿図のうち、図 1 は国土地理院発行の 1/25,000 電子図「龍野」・「網干」、図 2 は兵庫県西播磨県民局龍野土木事務所から提供を受けたものをそれぞれ使用した。また、鶺鴒北遺跡の図版 1 は、国土地理院タイルを加工して作成した。

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	
第1節 位置と地理的環境	1
第2節 遺跡の歴史的環境	2
第2章 調査の経緯・経過と体制	
第1節 発掘調査に至る経緯	7
第2節 各調査の経過と整理作業	9
第3章 鶺北遺跡	
第1節 遺構	12
第2節 遺物	19
第4章 城山遺跡 平成28年度調査	
第1節 遺構	26
第2節 遺物	35
第5章 城山遺跡 令和元年度調査	
第1節 遺構	47
第2節 遺物	52
第6章 自然科学的分析・鑑定	
第1節 貝類同定	56
第2節 樹種同定	57
第3節 胎土分析	63
第7章 まとめ	
第1節 城山遺跡で検出した焼失建物跡について	75
第2節 鶺北遺跡より出土した平安時代後期～鎌倉時代の土器・陶磁器	77
第3節 遺跡の形成過程	78

巻頭図版目次

巻頭写真図版1	鶺北遺跡	出土土器(1)
巻頭写真図版2	鶺北遺跡	出土土器(2)
巻頭写真図版3 上	城山遺跡	SK8全景(東から)
下	城山遺跡	SH2竈(北西から)
巻頭写真図版4	城山遺跡	SH57のオルソ画像(炭化材出土)
巻頭写真図版5	城山遺跡	SH57のオルソ画像(炭化材除去)
巻頭写真図版6 1段左	城山遺跡	SH57 垂木・周壁溝上にある壁構築材の検出状況(①から)
1段右		SH57 垂木・粘土・周壁溝上にある土器検出状況(②から)

	2 段左		S H57	垂木炭化材 (③から)
	2 段右		S H57	炭化材 19 (④から)
	3 段		S H57	土器・炭化材・粘土出土状況 (1) (⑤から)
	4 段		S H57	土器・炭化材・粘土出土状況 (2) (⑥から)
巻頭写真図版 7	1 段左	城山遺跡	S H57	炭化材 25 (壁構築材) 断面 (①から)
	1 段右		S H57	炭化材 24 (壁構築材) 断面 (②から)
	2 段左		S H57	炭化材 13 (③から)
	2 段右		S H57	加工痕のある垂木炭化材 (右から 2 つ目) (④から)
	3 段		S H57	炭化材 10 (⑤から)
	4 段		S H57	土器と炭化材 8 (⑥から)

挿 図 目 次

図 1	周辺の遺跡	3
図 2	確認調査 トレンチの位置図	8
図 3	礫群集遺構 S X 1 出土土師器皿の口径・器高分布	20
図 4	鵜北遺跡出土の貝類	56
図 5	城山遺跡の炭化材 (1)	60
図 6	城山遺跡の炭化材 (2)	61
図 7	試料位置 (S H57)	63
図 8	碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成 (1)	69
図 9	碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成 (2)	70
図 10	碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成 (3)	71
図 11	碎屑物・基質・孔隙の割合	72
図 12	胎土薄片・土壤薄片	73
図 13	粘土塊薄片・粘土薄片	74
附図 1	S H57 炭化材出土位置	62

表 目 次

表 1	周辺の遺跡	3
表 2	掘立柱建物跡および柵の規模と方位	13
表 3	鵜北遺跡土坑一覧	15
表 4	鵜北遺跡出土の貝類	56
表 5	城山遺跡の樹種同定結果	57

表 6	試料一覽	63
表 7	薄片觀察結果 (1)	65
表 8	薄片觀察結果 (2)	66
表 9	薄片觀察結果 (3)	67
表10	薄片觀察結果 (4)	68
表11	鵜北遺跡 出土遺物觀察表 (土器・陶磁器)	81
表12	鵜北遺跡 出土遺物觀察表 (石器・石製品)	86
表13	鵜北遺跡 出土遺物觀察表 (金属器)	86
表14	城山遺跡 平成 28 年度調査 出土遺物觀察表 (土器)	87
表15	城山遺跡 平成 28 年度調査 出土遺物觀察表 (石器・石製品)	90
表16	城山遺跡 平成 28 年度調査 出土遺物觀察表 (金属器)	90
表17	城山遺跡 令和元年度調査 出土遺物觀察表 (土器、石製品)	91

鷗北遺跡

図版目次

図版 1	鷗北遺跡・城山遺跡の位置図(地理院タイルを加工して作成)	図版10	土坑(1)・その他の遺構
図版 2	調査区全体図	図版11	土坑(2)・溝
図版 3	調査区平面図および調査区西壁断面図	図版12	弥生時代の遺構
図版 4	掘立柱建物跡・柵・石組遺構(S X 1)位置図	図版13	遺構内出土の土器(1)
図版 5	掘立柱建物跡(1) S B 1	図版14	遺構内出土の土器(2)
図版 6	掘立柱建物跡(2) S B 2・S B 3	図版15	遺構内出土の土器(3)
図版 7	掘立柱建物跡(3) S B 4・S B 5・S B 6 柵 S A 1	図版16	遺構内出土の土器(4)
図版 8	石組遺構(S X 1)(1)位置図・断面図	図版17	包含層出土の土器(1)
図版 9	石組遺構(S X 1)(2)平面図	図版18	包含層出土の土器(2)、石製品
		図版19	出土石器・金属器

写真図版目次

写真図版 1	調査区遠景(北から) 調査区遠景(南から)	S X 1 炭化物集中1 検出状況(南から) S X 1 炭化物集中1 断面(南から)	
写真図版 2	調査区全景(東から) 調査区全景(南から)	S X 1 断面(北西から) S X 1 断面(部分:南から)	
写真図版 3	調査区全景(北から) 調査区全景(南から)	写真図版10	調査区南部の柱穴群(北から) S K 20断面(南西から) S K 23検出状況(南から) S K 23断面(東から)
写真図版 4	調査区西壁断面(1)(北から) 調査区西壁断面(2)(北から) 調査区西壁断面(3)(北から)	写真図版11	S K 35(左)・S K 36(右)断面(南西から) S K 48断面(南から) S K 61断面(西から) S K 62断面(西から) S K 63断面(西から) S K 94断面(南から) S K 95断面(東から) S K 103断面(西から)
写真図版 5	調査区西壁断面(4)(北東から) 調査区南壁断面(北から) 調査区北壁断面(南から)	写真図版12	S K 125断面(北から) S K 135断面(南西から) S K 133(左)・S K 288(右)完掘状況(南西から) S K 133断面(南西から) S K 166断面(東から) S K 167断面(南東から)
写真図版 6	掘立柱建物跡群(南から) 掘立柱建物跡群(北から)		
写真図版 7	S X 1 検出状況(南から) S X 1 検出状況(東から)		
写真図版 8	S X 1 遺物検出状況(南から) S X 1 遺物検出状況(西から) S X 1 遺物検出状況(部分:南から)		
写真図版 9	S X 1 礫検出状況(部分:南から) S X 1 礫検出状況(部分:南から) S X 1 礫検出状況(部分:西から) S X 1 断面(南から)		

	S K188・S K190断面(北西から)	作業風景
	S K168炭化物層検出状況(南から)	地元説明会
写真図版13	S K250検出状況(西から)	写真図版18 S B・S P出土土器
	S K250断面(北から)	写真図版19 S P293出土土器
	S D2断面(南東から)	写真図版20 S X1出土土器(1)、S D41出土土器(1)
	S D10断面(南から)	写真図版21 S X1出土土器(2)、S D41出土土器(2)
	S D21断面(南から)	写真図版22 S X1出土土器(3)、S D41出土土器(3)
	S D41畔2断面(南から)	写真図版23 S X1出土土器(4)、S D41出土土器(4)
	S D41上面遺物出土状況(西から)	写真図版24 S X1出土土器(5)
	S D41遺物出土状況(東から)	写真図版25 S X1出土土器(6)
写真図版14	S D2・S D78(北西から)	写真図版26 S K・S D・S X出土土器
	S D41・S D21(北から)	写真図版27 S D21・S D41出土土器
	S D153・S D154(東から)	写真図版28 包含層出土土器(1)
写真図版15	S D78断面(南から)	写真図版29 包含層出土土器(2)
	S D90断面(西から)	写真図版30 包含層出土土器(3)
	S D153断面(西から)	写真図版31 包含層出土土器(4)
	S D154断面(西から)	写真図版32 包含層出土土器(5)
	S D246断面(北から)	写真図版33 包含層出土土器(6)
	S X229検出状況(南から)	写真図版34 包含層出土土器(7)
	S X229断面(南東から)	写真図版35 包含層出土土器(8)
	S K22断面(南西から)	写真図版36 包含層出土磁器・土製品・瓦・石鍋
写真図版16	S K24検出状況(南から)	写真図版37 S K22・S K24・S K30・S K39
	S K24断面(東から)	S P80出土土器
	S K30断面(南西から)	写真図版38 S K22・S K24、S P151・S P199・S P208
	S K39断面(西から)	S P245出土土器
	S K39遺物出土状況(南から)	写真図版39 S D・S K・包含層出土石器
写真図版17	S P80遺物出土状況(南から)	写真図版40 S D・S K・S P・S X出土金属器
	S P208遺物出土状況(南から)	写真図版41 S D・S P・包含層出土金属器
	S P245遺物出土状況(南から)	

城山遺跡

図版目次

図版1	調査区の位置	図版19	竪穴住居(竪穴建物)跡の変遷
図版2	調査区南西壁土層断面	図版20	D-1～3区 SH156・SX142・SD149 平面・断面図
図版3	上層・下層全体図	図版21	C区 SK49・SD19 平面・断面図
図版4	NR1 平面・埋土土層断面	図版22	D-4区 SB1 平面・断面図
図版5	SK8	図版23	D-4区 SB1 土層注記
図版6	SH1・SH2	図版24	D-4区 柱穴群(1) 平面・断面図
図版7	SH1竈	図版25	D-4区 柱穴群(2) 平面・断面図
図版8	SP57・SH2竈	図版26	D-4区 SD・SK 平面・断面図
図版9	SH3・SH4	図版27	NR1 出土土器(1)
図版10	SB1・SB2	図版28	NR1 出土土器(2)
図版11	SB3～SB5	図版29	SK8 出土土器(1)
図版12	SK・SD・SP	図版30	SK8 出土土器(2)
図版13	調査区の位置	図版31	SK8 出土土器(3)
図版14	調査区全体平面図	図版32	その他 出土土器
図版15	D-4、C、D-1～3区南西壁土層断面図	図版33	出土石器・石製品・金属器
図版16	調査区断面 土層注記	図版34	出土遺物(1)
図版17	D-4区 SH57・SH160・SK161 平面・断面図	図版35	出土遺物(2)
図版18	D-4区 SH57内の炭化材立面図	図版36	出土遺物(3)

写真図版目次

写真図版1	調査区上空から北西を望む(南東から、 2016年9月14日撮影) 調査区上空から南東を望む(北西から、 2016年9月14日撮影)	写真図版5	調査区上層全景(南東から) NR1 全景(北西から)
写真図版2	調査区上空から南西を望む(北東から、 2016年9月14日撮影) 調査区全景(北東上空から、2016年9月14 日撮影)	写真図版6	NR1 埋土土層断面(南東から) SK8 全景(北から)
写真図版3	調査区全景(南東上空から、2016年9月14 日撮影) 調査区全景(北西上空から、2016年9月14 日撮影)	写真図版7	SK8 土器出土状況(西から) SK8 土器出土状況(南から)
写真図版4	調査区上層全景(北西から) 調査区下層全景(北西から)	写真図版8	SK8 埋土土層断面(東から) ①NR1内 甕216出土状況(南西から) ②SK8 土器出土状況(北西から) ③SK8 完掘状況(北から) ④SK8 完掘状況(南東から)
		写真図版9	SH1・SH2(東から) SH1・SH2・SB1(北西から)
		写真図版10	SH1 竈(南東から)

	①SH1 竈 上部埋土除去後(南東から)	③SP62 礎板石検出状況(南から)
	②SH1 竈 埋土土層断面(南西から)	④SP62 礎板石(北から)
	③SH1 竈 截ち割り断面(南東から)	⑤機械掘削状況(東から)
	④SH1 竈 截ち割り断面(南西から)	⑥遺構掘削状況(北から)
写真図版11	①SH1 埋土土層断面(南東から)	⑦遺構平面実測状況(西から)
	②SH1 埋土土層断面(北から)	⑧空中写真撮影状況(北西から)
	③SH1 竈脇 高坏277出土状況 (北東から)	写真図版17 調査区遠景(南東から) 調査区遠景(北西から)
	④SH1 煙道部 埋土土層断面 (南東から)	写真図版18 D-1・2・3区 全景(上が北西) D-4区 全景(上が南)
	⑤SH1内焼土1(南西から)	写真図版19 D-1・2・3区 全景(北西から) C区 全景(南東から)
	⑥SH1内焼土1 截ち割り断面 (北西から)	写真図版20 D-4区 全景(南東から)
	⑦SH1内焼土2 截ち割り断面 (北西から)	写真図版21 D-1区 南西壁断面(東から) D-2・3区 南西壁断面(北から)
	⑧SH1内SP57 埋土土層断面 (北東から)	写真図版22 C区 南西壁断面(北から) D-4区 南西壁断面(東から)
写真図版12	SH2 竈(南西から)	写真図版23 D-4区 検出状況(北から) SH57とSH160 全景(東から)
	①SH2 竈(南東から)	写真図版24 SH57とSK161 南北土層断面(西から) SH57とSK161 東西土層断面(南から) SH57とSK161 東西土層断面(南西から)
	②SH2 竈 埋土土層断面(北西から)	
	③SH2 竈 截ち割り断面(北西から)	
	④SH2 埋土土層断面(北東から)	
写真図版13	SH3・SH4・SB4・SB5(北西から)	写真図版25 SH57 垂木炭化材(aから) SH57 垂木炭化材(bから) SH57 炭化材(cから) SH57 炭化材(dから) SH57 壁構築材(eから) SH57 炭化材(fから)
	①SB5内SK1 埋土土層断面(南東から)	
	②SB5内SP65 截ち割り断面(東から)	
	③SB5内SP50 截ち割り断面(東から)	
写真図版14	SB2・SB3(南東から)	写真図版26 SH57 粘土出土状況(aから) SH57 土器・炭化物・粘土出土状況 (1)(bから) SH57 土器・炭化物・粘土出土状況 (2)(cから) SH57 土器・炭化物・粘土出土状況 (3)(dから)
	①SB3内SP6 截ち割り断面 (南西から)	
	②SB3内SP7 截ち割り断面 (南西から)	
	③SB3内SP56 截ち割り断面 (南西から)	
写真図版15	①SK5 埋土土層断面(北東から)	SK161 土器出土状況(eから)
	②SK6 (東から)	SH57 土器検出状況(fから)
	③SK6 礫検出状況(北東から)	写真図版27 SH57 周壁溝断面(北から) SK27 断面(西から) SK33 断面(西から) SD36 断面(東から) SD149 断面(東から)
	④SK6 埋土土層断面(北から)	
	⑤SD3 埋土土層断面(北から)	
	⑥SD4 埋土土層断面(南東から)	
	⑦SD5 埋土土層断面(北から)	
	⑧SB4内SP12 皿288出土状況 (北から)	
写真図版16	①SP32 礫出土状況(北東から)	SPX142 断面(北から D-2・3区)
	②SP41 石製品S15出土状況(南東から)	SPX142 断面(北から D-1区)

- 写真図版28 S H156 検出状況(南から)
S H156 南北土層断面(西から)
S H156 東西土層断面(北から)
- 写真図版29 S K49 断面(南から)
S D19 断面(南から)
S P58 断面(西から)
S P94 断面(東から)
S P122 断面(東から)
S P138 断面(南東から)
S P40 断面(東から)
S P48 断面(北東から)
- 写真図版30 S B1 検出状況(北西から)
S P103 断面(東から)
S P113 断面(東から)
S P121 断面(東から)
S P134 断面(南東から)
- 写真図版31 N R1 出土土器(1)
- 写真図版32 N R1 出土土器(2)
- 写真図版33 N R1 出土土器(3)、S K8 出土土器(1)
- 写真図版34 S K8 出土土器(2)
- 写真図版35 S K8 出土土器(3)
- 写真図版36 S K8 出土土器(4)
- 写真図版37 S K8 出土土器(5)
- 写真図版38 S H1・S H2・S H4・S B4内S P12
出土土器
- 写真図版39 S K7・S B1内S P(柱穴)・S B5内S P・
S P・包含層出土土器
S H1・S P(柱穴)・包含層出土鉄釘
- 写真図版40 N R1・S B5内S P(柱穴)・S P・
包含層出土石器
S K8・S P(柱穴)出土石製品
- 写真図版41 S K161出土土器(1)
- 写真図版42 S K161出土土器(2)
- 写真図版43 S K161・S H57・S H160埋土出土土器(1)
- 写真図版44 S K161・S H57・S H160埋土出土土器(2)
- 写真図版45 S K161・S H57・S H160埋土出土土器(3)
- 写真図版46 S H57・S H160埋土出土土器
- 写真図版47 S H57床面出土土器(1)
- 写真図版48 S H57床面出土土器(2)
- 写真図版49 出土土器(1)
- 写真図版50 S K161出土石製品
- 写真図版51 出土土器(2)
- 写真図版52 出土土器(3)
- 写真図版53 S X137出土土器
胎土分析土器一覧

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 位置と地理的環境

鶯北遺跡は、揖保郡太子町佐用岡に所在し、城山遺跡は揖保郡太子町鶯に所在する。両遺跡は、揖保川最大支流、林田川左岸の揖龍平野に位置する。揖龍平野は、播但山地を開析して南流する揖保川、その最大支流林田川および小規模河川である大津茂川の流域にあたる。現在は、揖保川上流のダム建設や各河川の治水工事により、河川の流れが定まっているが、かつての流路の痕跡が今も確認できる。

この各河川を含めた揖保川下流域の平野部は、扇状地的性格を有し、0.5～2 m程度の崖を境に、完新世段丘面と現氾濫原に分類され、更に完新世段丘面は、形成時期差により、ⅠとⅡの2つに分類される。これらは、『丁・柳ヶ瀬遺跡』・『東南遺跡』・『宝林寺北遺跡』・『福田片岡遺跡』等、周辺の遺跡の発掘調査結果から、完新世第Ⅰ面は縄文時代後期から弥生時代前期にかけて形成され、完新世第Ⅱ面は古墳時代後期から古代にかけて形成されたと考えられている。完新世第Ⅱ面は、更に旧自然堤防・旧中洲状微高地、旧河道、後背湿地に分かれ、現在、旧自然堤防・旧中洲状微高地は、居住地や耕作地に利用され、旧河道沿いに主要用水路が作られている。

両遺跡周辺は、法隆寺創建時からの所領地で、戦国時代まで続く荘園「鶯荘」の比定地であり、その秩序正しく区画された条里地割りと、それに伴う水路の名残は、現在でもこの地に残っている。

第2節 遺跡の歴史的環境

鶺鴒北遺跡、および城山遺跡は、揖保郡太子町に所在し、揖龍平野に展開する縄文時代～中世の遺跡である。以下、周辺の遺跡について時代ごとに概観する。(図1・表1)

旧石器時代

揖保郡太子町坊主山麓周辺に所在する坊主山遺跡(61)では、国府型ナイフ形石器や有舌尖頭器が出土している。

縄文時代

草創期・早期の遺跡は確認されていない。前期の遺跡は、片吹遺跡(8)が知られている。遺跡は、前期末から晩期中葉まで継続している集落遺跡で、前期末では土坑が検出され、北白川下層Ⅲ式土器が出土している。また、中期末から後期初頭の竪穴住居跡5棟や土器群が検出されており、本遺跡の最盛期と考えられる。

中期の遺跡は、片吹遺跡、平方遺跡(54)、城山遺跡(2)が知られている。平方遺跡では、竪穴住居跡、土坑等が検出され、土器、石器が多量に出土している。城山遺跡では、遺構は確認されていないが、土器が出土している。

後期の遺跡は、片吹遺跡、東南遺跡(38)、斑鳩寺南遺跡(25)等が知られている。東南遺跡は、後期前半の女性の土偶が出土し、後期中葉を中心とする竪穴住居跡、集石遺構、埋甕、土壇墓群が検出される集落遺跡である。斑鳩寺南遺跡では、土坑が検出され、土器、石器が出土している。

晩期の遺跡は、片吹遺跡、立岡遺跡(19)、常全遺跡(12)、助久五反畑遺跡(32)、東保遺跡(40)等が知られている。立岡遺跡では、晩期後半の埋甕が検出され、船橋式土器が出土している。常全遺跡では、晩期中葉以降の集石遺構が検出され、原下層式土器が出土している。平方遺跡、助久五反畑遺跡では、土坑が検出されている。東保遺跡では、多量の土器が出土している。確認されている晩期の遺跡では、いずれも住居跡は検出されていない。しかし、後・晩期から平野部において初期農耕に適した湿地が多く存在したことに加え、それに伴う段丘面上における集落形成の増加が想定されるため、今後住居跡が確認される可能性が高いと考えられる。

弥生時代

早期の遺跡は確認されていない。前期の遺跡は、平方遺跡、斑鳩寺遺跡(29)、鶺鴒石田遺跡(36)等が知られている。平方遺跡では、土坑や土器が確認されている。斑鳩寺遺跡では、貯蔵穴と土器が確認されている。鶺鴒石田遺跡では、遺構は確認されていないが、土器が出土している。

中期の遺跡は、立岡遺跡、鶺鴒遺跡(34)、福田片岡遺跡(4)、福田八軒屋遺跡(68)、福田天神遺跡(64)、馬場遺跡(27)等が知られている。立岡遺跡では、屋内に高床部を持つ隅丸方形の竪穴住居跡が検出されている。鶺鴒遺跡では、土坑、ピットが検出され、分銅形土製品が出土している。福田片岡遺跡では、楕円形竪穴住居跡1棟、土坑が検出され、住居内からは壺、高杯等の土器や打製石包丁、打製石鏃が出土している。また、土坑内からは土器の他、多量の炭化米が確認されている。福田八軒屋遺跡では、遺物が確認されている。馬場遺跡では、遺構は確認されていないが、土器、石器が出土している。中期以降、農業生産力の向上等を背景に、特に平野部を中心として遺跡数、規模が増大する。また、中期後半以降には、檀特山山頂遺跡に代表されるような高地性集落が出現するが、後期前半には衰退する。

後期の遺跡は、南柳遺跡（52）、立岡遺跡、常全日蓮寺遺跡（13）、鵜石田遺跡、阿曾丁田遺跡（6）、キツネ岩遺跡（41）等が知られている。南柳遺跡では、竪穴住居跡、木棺墓等が検出されている。立岡遺跡では、方形の竪穴住居跡、溝が検出されている。常全日蓮寺遺跡では、土器棺が検出されている。鵜石田遺跡では、庄内式甕や庄内併行期の土器が多量に出土している。阿曾丁田遺跡では、遺構は検出されていないが、土器が出土している。キツネ岩遺跡では、遺構は検出されていないが、時期不明の石鏃が出土している。

古墳時代

前期の遺跡は、鵜遺跡、鵜石田遺跡、城山遺跡、南柳遺跡、平方遺跡、片吹遺跡が知られている。何れも弥生時代から継続している集落遺跡で、この時期に規模が拡大する傾向にある。

前期の古墳は、松田山古墳（55）が知られている。松田山古墳は、直径20m程度の円墳で、埋葬施設として、割石積みの竪穴式石室に割竹型木棺が納められており、斜縁神獣鏡、筒形銅器、銅鏃、勾玉、管玉等が副葬されていた。その他、古墳ではないが、明神山1号墳（70）では、壺形土器を埋納した土器棺墓が検出されている。

中期の遺跡は、南柳遺跡、東保高田遺跡（35）、城山遺跡、馬場遺跡が知られている。南柳遺跡、東保高田遺跡、城山遺跡では、竪穴住居跡が検出されている。馬場遺跡では、遺構は検出していないが、土器が出土している。

中期の古墳は、黒岡山古墳群中の1基が知られている。埋葬施設は箱式石棺を主体部としており、副葬品として仿製銅鏡、鉄剣、ヤリガンナ等が出土している。

後期の遺跡は、船塚遺跡（22）、城山遺跡、鵜石田遺跡、太子山南麓遺跡（23）、鵜北遺跡（1）等が知られている。船塚遺跡、城山遺跡、鵜石田遺跡では、方形の竪穴住居跡等が検出されている。太子山南麓遺跡、南柳遺跡では、土坑、溝が検出されている。鵜北遺跡では、遺構は検出されていないが、土器が出土している。

後期の古墳は、丹生山古墳群（1～9号墳）（43・44・48）、東保山古墳群（1～5号墳）（42）、立岡山古墳群（2～7号墳）（18）等の群集墳が知られ、埋葬施設は大半が横穴式石室で、丹生山1号墳、東保山3号墳の埋葬施設は箱式石棺である。丹生山1号墳では、墳丘部から須恵器群、形象埴輪が、石棺周辺部から紡錘車、勾玉が出土している。東保山3号墳の蓋石は家形と推定される形に加工され、内面には側壁部及び小口部に溝の加工痕と朱の付着が確認されている。丹生山8号墳の埋葬施設は竪穴式石室で、盗掘により石室の一部が破壊されている。丹生山4・5・6号墳、東保山1号墳の埋葬施設は不明である。沼田古墳（47）は、埋葬施設に横穴式石室を持つ円墳である。

古代

大宝律令制定〔大宝元年（701）〕で確固たるものとなった律令体制により、公地公民制が確立し、地方行政組織が設立されたことにより、地方は国、郡、里（郷）に分かれ、条里制、交通網等の整備が実施されていく。

周辺地域は、播磨国揖保郡に所在し、『播磨国風土記』や『倭名類聚抄』に揖保郡の里（郷）名が記載されている。揖保郡では、条里地割において条里の「里」に代わり、「坊」を使用しており、『播磨国某荘別当葉能解』〔延喜八年（908）〕によると、この頃から播磨国において平城京、平安京、大宰府等と同様に条坊で呼称していたようである。

法隆寺所領荘園の「鵜荘」という文字は『法隆寺別当次第』の長暦三年（1039）の記事で初めて記さ

れ、『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』[天平十九年(747)]で、法隆寺が播磨国揖保郡に相当の不動産を領していたことから、以前より鶴荘が存在していた事が窺われる。

揖保川下流域を中心とする荘園開発は、古代から中世にかけて活発に行われ、少なくとも11世紀前半には成立していた鶴荘は、開発や寄進により、現在のたつの市誉田町福田・内山・舍利田、揖保郡太子町馬場・鶴・東南・東出・佐用岡にあたる地域まで広がる。

この時期の遺跡としては、笹山遺跡(67)、斑鳩寺遺跡、阿曾南遺跡(9)、福田片岡遺跡、立岡東遺跡(21)等が知られている。笹山遺跡では、緑釉陶器、軒丸瓦、軒平瓦が出土している。斑鳩寺遺跡では、仁王門基壇、築地塀基壇、土坑等が検出され、宝相華文軒平瓦、11世紀末葉の均整花菱文軒平瓦等が出土している。阿曾南遺跡では、南北条坊地割に一致する12世紀代の溝が検出され、緑釉陶器等が出土している。福田片岡遺跡では、奈良時代の溝、平安時代後期の水田畦畔、水路、溝が検出されている。立岡東遺跡では、平安時代後期の掘立柱建物跡が検出されている。

中世

鶴荘は、法隆寺(荘園領主)と悪党(在地開発領主)間の対立、寺僧と鶴荘に出向した雑掌との対立、幕府からの政治・経済的な圧力等により、次第に法隆寺による鶴荘支配の弱体化が進み、羽柴秀吉の播磨国平定[天正八年(1580)]により、その終焉を迎える。

古代から存在する山陽道は、その維持にあたり地域の実状に即した道路として変貌し、その後、元寇への備えとして筑紫大道(60)が整備される。

この時期の遺跡は、福田片岡遺跡、平方遺跡、福田天神遺跡、斑鳩寺遺跡、斑鳩小学校遺跡(30)、桜ヶ坪勝示石(59)等が知られている。福田片岡遺跡、平方遺跡では、道路状遺構が検出され、『法隆寺領播磨国鶴荘絵図(嘉暦図)』、『法隆寺領播磨国鶴荘絵図(至徳図)』等から筑紫大道の一部であることが判明している。更に、福田片岡遺跡では、方形区画溝で囲まれた居館跡、井戸、墓(火葬・土壙・木棺・石室)、土坑、柱穴が検出され、火打金、古銭、文書木簡、石鍋、漆器、瓦、土師器皿、瀬戸焼卸皿、備前焼甕等が出土している。福田天神遺跡では、鎌倉時代を中心とする掘立柱建物跡、溝、土壙墓、土坑等が検出され、土壙墓から輸入陶磁器が出土している。佐田構居跡(37)では、条坊地割に沿った東西方向の溝が検出されている。春日社跡(5)では、東西と南北の列石、礎石、集石遺構等が検出され、14世紀前葉の唐草文軒平瓦、15世紀以降の瓦や土師器皿等が出土している。斑鳩寺遺跡では、永禄八年(1565)、宝暦四年(1754)銘の軒瓦が確認されている。斑鳩小学校遺跡では、斑鳩寺の子院の1つである等覚坊(青龍院)跡が検出されている。阿曾北遺跡(7)では、中世後半の遺構(土壙墓群・畑跡・井戸・溝・土坑・柱穴等)が検出され、陶磁器、古銭が出土している。松尾遺跡(65)では、溝が検出され、土器が出土している。桜ヶ坪勝示石は、『法隆寺領播磨国鶴荘絵図(嘉暦図)』等にも描かれている石で、現状と絵図の位置が一致する鶴荘の境界を示した勝示石である。鶴荘勝示石(A)は、昔から地元で「太子の投げ石」と呼ばれ、太子町鶴北山根、佐用岡字宮ノ本、東南字田屋、東出字旗ノ前(2基)に所在し、合計5基の勝示石は、昭和46年(1971)に県指定史跡(県史48)となっている。石蜘蛛城跡(17)は、立岡山山頂に築かれた島津左衛門大夫忠行から島津左近将監忠長までの15代が居城した山城である。鶴構居跡(31)は江戸時代後期の地誌『播磨鏡』に記される居館跡とされるが、遺構等は確認されていない。

近世

関ヶ原の戦い[慶長五年(1600)]以後、播磨の地を領していた豊臣氏に代わり、池田輝政が徳川家

康より播磨一国をもらい受け、姫路に移封して以降、廃藩置県が施工〔明治四年（1871）〕されるまで、馬場村、宿（福田）村は、姫路藩－鶴藩－新宮藩－幕府直轄領－龍野藩と変遷していく。この時期の遺跡は、斑鳩寺遺跡、斑鳩寺北遺跡（28）、斑鳩寺西遺跡（26）、斑鳩小学校遺跡、鶴構居跡等が知られている。斑鳩寺遺跡では、子院である双樹院及び圓光院に伴う遺構（土坑・井戸・溝）、築地の基壇、石組み井戸等が検出され、近世陶磁器、瓦等が出土している。斑鳩寺北遺跡では、斑鳩寺の塔頭寺院に付随する遺構が検出されている。斑鳩寺西遺跡では、集石遺構等が検出されている。斑鳩小学校遺跡では、斑鳩寺子院の敷地を示す遺構等が検出され、近世陶磁器、瓦等が出土している。鶴構居跡では、江戸時代末に山陽道沿いに移転する前の寛永年間に建てられた鶴本陣に関連する遺構が検出されている。その他、佐田構居跡（37）では、近世陶磁器を転用した面子が出土している。

第2章 調査の経緯・経過と体制

第1節 発掘調査に至る経緯

鵜北遺跡（兵庫県遺跡地図番号：450246）の範囲内において、兵庫県西播磨県民局龍野土木事務所による（国）179号太子道路地域自主戦略交付金事業の工事が予定された。

工事予定地内が埋蔵文化財包蔵地にあたることから、兵庫県西播磨県民局長（龍野土木事務所）の依頼（平成25年9月6日付け西播（龍土）第273号）により、平成26年3月に確認調査が行われた。結果、事業地内の南部で遺物・遺構が確認されたので、兵庫県西播磨県民局長（龍野土木事務所）の依頼（平成26年4月14日付け西播（龍土）第51号）により、本発掘調査を実施した。

城山遺跡（兵庫県遺跡地図番号：450005）の範囲内において、兵庫県西播磨県民局龍野土木事務所による防災・安全交付金事業（国）179号（太子道路）、道路事業（国）179号太子道路（現道拡幅部）の工事が予定された。

工事予定地内が埋蔵文化財包蔵地にあたることから、兵庫県西播磨県民局長（龍野土木事務所）の依頼（平成27年6月3日付け西播（龍土）第1032－1号）、（平成30年1月11日付け西播（龍土）第1175号）により、平成27年8月、平成30年2月に確認調査が行われた。結果、遺物・遺構が確認されたので、兵庫県西播磨県民局長（龍野土木事務所）の依頼（平成28年5月9日付け西播（龍土）第1019号）（令和元年7月30日付け西播（龍土）第1102号）により、本発掘調査を実施した。

兵庫県西播磨県民局長（龍野土木事務所）からの依頼（令和3年3月1日付け西播（龍土）第1328号）（令和4年3月25日付け西播（龍土）第257－3号）（令和5年3月17日付け西播（龍土）第214号）により、令和3～5年度には整理作業を実施し、報告書作成をおこなった。

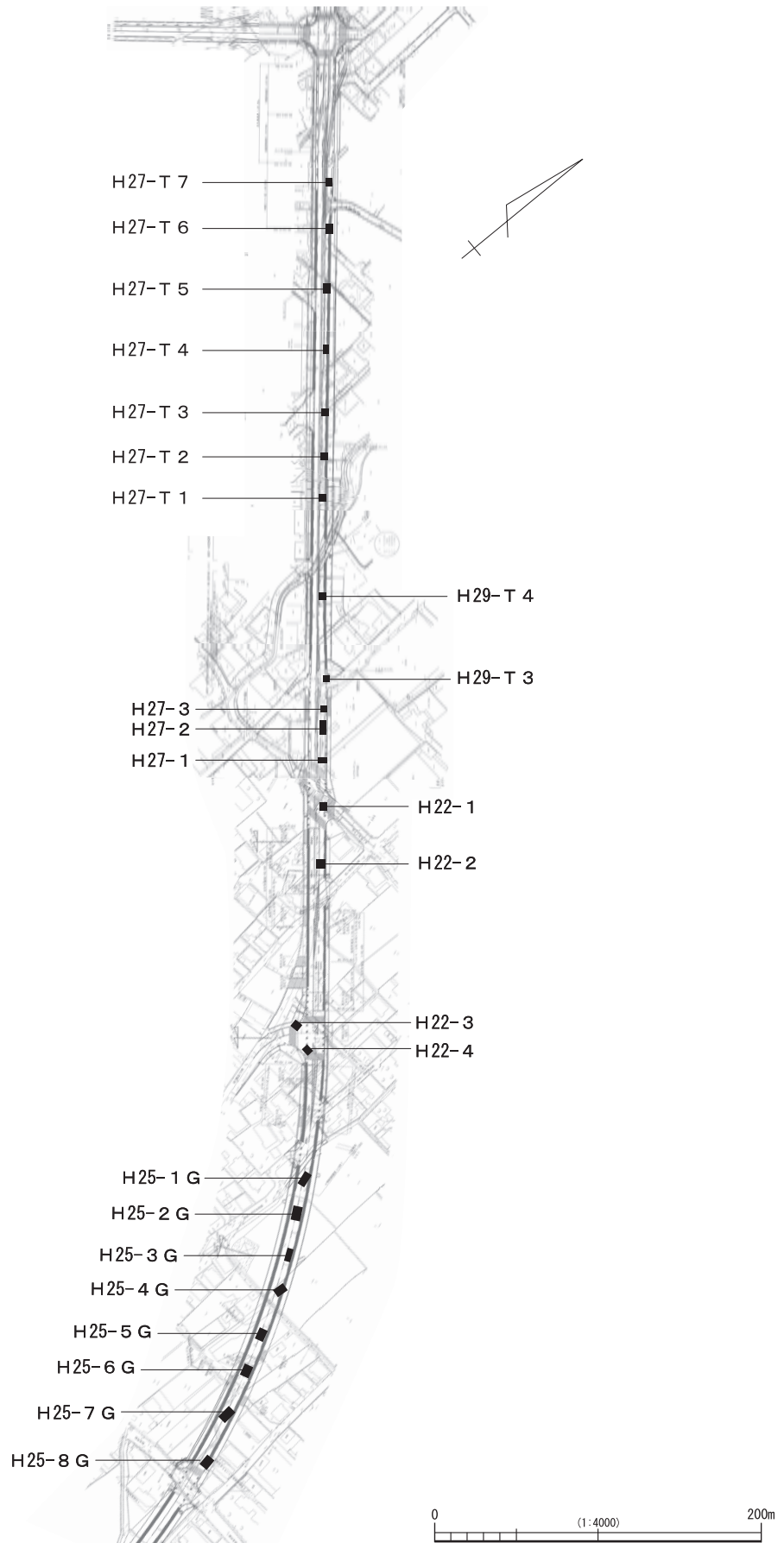


図2 確認調査 トレンチの位置図

調査番号 2015101
調査期間 平成27年8月3日
調査担当者 兵庫県立考古博物館 総務部
埋蔵文化財課 池田征弘
調査面積 12 m²

平成29(2017)年度

調査番号 2017122
調査期間 平成30年2月7日・2月8日
調査担当者 兵庫県立考古博物館 総務部
埋蔵文化財課 垣内拓郎、上田健太郎
調査面積 15 m²

(本発掘調査) 調査主体 兵庫県教育委員会

鶯北遺跡

平成26(2014)年度

調査番号 2014007
調査期間 平成26年5月31日～平成26年7月31日
調査担当者 公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部
調査第1課 永恵裕和
調査第2課 久保弘幸、竹林裕一
調査面積 701 m²

城山遺跡

平成28(2016)年度

調査番号 2016077
調査期間 平成28年8月18日～9月23日
調査担当者 公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部
調査課 岸本一宏、渡瀬健太
調査面積 174 m²

平成31・令和元(2019)年度

調査番号 2019042
調査期間 令和元年11月11日～令和2年2月28日
調査担当者 公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部
調査第1課 垣内拓郎
調査第2課 野田優人、松崎光伸
調査面積 334 m²

(整理作業)

出土遺物の整理作業に関しては、令和3～5年度に、水洗い、ネーミング、接合・補強、実測・拓本、復元、トレース、写真撮影、写真整理、保存処理、レイアウト等の作業を実施し、分析鑑定を依頼、原稿を揃えたうえで、報告書を刊行した。

令和3（2021）年度

作業内容	水洗い、ネーミング、接合・補強、実測・拓本、保存処理
作業体制	公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部
	調査第2課 垣内拓郎
	整理保存課 深江英憲、大嶋昭海、野田優人、久保弘幸、西口圭介
	整理技術員 栗山美奈、児玉昌子、藤尾裕子、藤田久範、荻野麻衣、菅生真理子、石原香苗、小野潤子、小林礼子、岡崎眞子、梶原奈津子、富永愛子、柏原美音、尾鷲都美子、古谷章子、寺西梨紗、西本奈生、大前篤子、桂 昭子、香山玲子

令和4（2022）年度

作業内容	実測・拓本、復元、写真撮影、写真整理、遺構図補正、トレース、分析鑑定
作業体制	公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部
	調査第2課 岸本一宏
	整理保存課 深江英憲、大嶋昭海、野田優人、久保弘幸、西口圭介
	整理技術員 小野潤子、小林礼子、岡崎眞子、梶原奈津子、富永愛子、亀井彩菜、柏原美音、尾鷲都美子、古谷章子、寺西梨紗、西本奈生、宮田麻子、松田聡子、新山玉綾子

令和5（2023）年度

作業内容	写真撮影、写真整理、トレース、レイアウト、報告書刊行
作業体制	公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部
	調査第1課 岸本一宏
	整理保存課 深江英憲、大嶋昭海、野田優人、稲本悠一、別府洋二
	整理技術員 柏原美音、寺西梨紗

第3章 鶺北遺跡

第1節 遺構

1. 本発掘調査区の層序と遺構面

調査区付近における現地表の標高は15 m前後、遺構面の標高は14.5 m前後を測る。調査区内の層序については、調査区壁面を精査して検討した結果、西壁面を代表として分層し、断面図および写真によって記録した(図版3、写真図版4～5)。調査区内の基本的層序は、全調査区を通じて概ね同様であったが、遺構検出面は南から北へ、ごく緩やかな傾斜をもって下がる。

現表土下には、わずかずつ層相の異なるシルト質極細砂～細砂が複数堆積していた。いずれも土壌化が認められ、細片化した遺物を包含するが、そのうち第3層～第7層は極めて強く締まっており、人力による掘削に困難を伴うほどであった。また第4層には特に顕著な土壌化が認められた。断面最下底に見られた第9層、第13層はともに砂礫層で、同一層である可能性が高い。いずれもコブル級の礫を含み、鶺北遺跡が立地する微高地を形成する礫層と考えられる。第8層は、第9層上面の凹部に堆積した砂層である。遺構は、古土壌層を除去した後、この第8層・第9層・第13層の上面で検出された。

検出された遺構は、弥生時代と平安～鎌倉時代の、2時期に大別される。

2. 平安時代～鎌倉時代

掘立柱建物跡、土坑、溝および礫群集遺構が検出された。遺構は調査区北半部の掘立柱建物跡群と、これと同一方位に延びる溝を中心とし、調査区南部にも溝および柱穴群、木棺墓の可能性のある土坑などがみられる。

(1) 掘立柱建物跡群

調査区北半にまとまって、掘立柱建物跡SB1～SB6が検出された(図版4)。これらの建物跡は、ほぼ同一方位をもって構築されており、ごく近接しつつも重複は認められない。建物跡群の中央に、南北にのびる柵SA1が位置し、その東側にSB1・2が、西側にSB3・6が位置する。SB2の北側にはSB4が位置する。またSB1・6の南に、SB5が位置する。建物跡の方位、規模等については、表2に示す。

なお調査区南端部付近で、顕著な柱穴の密集と、これを囲むように延びる東西・南北方向の溝(SD10・SD266)が検出されている(図版2・11、写真図版10、13)。掘立柱建物としては復元できなかったが、その可能性がある領域として留意される。

SB1 (図版5、写真図版6)

南北3間×東西5間の総柱式建物で、東西に長軸をもつ。今回検出された建物跡のうち、最大規模の建物跡で、占有面積は約69.8 m²、柱穴の規模は直径25～55 cmを測る。東辺はSD41の西側掘形に接し、一部の柱穴はSD41の底で検出された。石組み遺構SX1が、建物北東隅に重複する。

SB2 (図版6、写真図版6)

南北3間×東西4間の総柱式建物で、東西に長軸をもつ。占有面積は約45.4 m²、柱穴の規模は直径20～40 cmを測る。建物の南辺は、SB1の北辺に平行し、西辺はSB1の西辺とほぼ揃っている。また建物を構成する南北の柱穴列も、SB1の柱穴列とよく揃っていることから、企画的建物配置と判断

される。建物跡北辺では、通常の柱間の中に、柱穴が設けられており、他の辺よりも柱穴数が多い。石組み遺構 S X 1 が、建物南東隅に重複する。

表2 掘立柱建物跡および柵の規模と方位

建物跡	長軸方位	規模 (間×間)	規模 (m×m)	平均柱間 (m)	方位 (南北軸基準)
S B 1	東西	3×5	6.4×10.9	南北2.01 東西2.02	N2.8° W
S B 2	東西	3×4	5.5×8.25	南北1.83 東西2.06	N2.9° W
S B 3	不明	(3)×(3)	5.4×4.3	南北1.80 東西1.43	N0.3° W
S B 4	不明	(1)×(2)	1.2×2.1	南北1.05 東西2.1	N1.3° W
S B 5	不明	(3)×(2)	5.1×3.9	南北1.70 東西1.95	N2.9° W
S B 6	不明	(3)×(1)	4.85×1.70	南北1.61 東西1.70	N3.3° W
S A 1	南北	5	7.6	南北1.52	N0.1° W

S B 3 (図版6、写真図版6)

調査区内では3間×3間分が検出された。総柱式の建物跡で、S A 1を挟んでS B 2に隣接する。柱穴規模は、直径25～35cmを測る。建物跡の南・北辺は、S B 2のそれに揃えられている。建物北東部の柱穴2基を欠く。S B 3の南側はS A 1の分岐によって画され、東側はS A 1によって画されていることから、東および南に建物がのびる可能性は低い。また北・西側では、S B 3に属すると判断できる柱穴は検出されなかった。

S B 4 (図版7、写真図版6)

S B 2の北東に位置し、調査区内では1間×2間分が検出されたが、建物の北～東側の大部分は調査区外へのびる。S B 4の方位は、隣接するS B 2とほぼ揃っているが、柱列の位置は揃えられていない。柱穴の規模は25～35cmを測る。

S B 5 (図版7、写真図版6)

S B 1の南西に位置し、調査区内では2間×3間分が検出されたが、建物の西側は調査区外へのびる。S B 5の方位は、隣接するS B 1とほぼ揃っているが、柱列の位置は揃えられていない。柱穴の規模は25～30cmを測る。

S B 6 (図版7、写真図版6)

S B 1の西、S B 3の南に位置し、調査区内では1間×3間分が検出されたが、建物の西・南側は調査区外へのびる。S B 6の東辺の柱列は、S B 3とほぼ揃っている。柱穴の規模は、直径30cm前後を測る。

(2) 柵

S A 1 (図版7、写真図版6)

調査区北部の、掘立柱建物跡群内に位置する柱穴列を柵と認定し、S A 1とした。北端をS P 150とし、南端をS P 193とする6基からなる、直線的に南北方向に並ぶ柱穴列と、途中のS P 107から西方向に、直角に分岐する柱穴列を西側への分岐と考え、合わせてS A 1と呼称する。柱間にはややばらつきが見られるものの、柱穴列の方位は掘立柱建物跡とよく揃うことから、建物跡群を画するものと考えられる。柱穴の規模は、直径20cm～40cmを測る。

(3) 礫群集遺構

S X 1 (図版8・9、写真図版7～9)

S B 1 の北東部から、S B 2 の南東部に重複する位置で検出された遺構で、主要部は礫群集から成り、土器群と炭化物集中部が伴う。S B 1・S B 2 の屋内施設が破壊されたものか、あるいは掘立柱建物跡とは時期差があるものか、判断に苦しむ点がある。S B 1・2 の柱穴の一部が、S X 1 の礫によって被覆されているのは事実だが、これをもって直ちに、S X 1 がS B 1・2 より新しいと判断することは躊躇される。柱穴がS X 1 の礫に被覆される要因としては、①建物廃絶時における建物とS X 1 の破壊、②建物廃絶後の礫の二次的移動、という可能性も考慮する必要がある。

むしろ掘立柱建物跡の柱穴内出土遺物と、S X 1 の礫群集内出土遺物との間に、明確な時期の懸隔は認められないことから、S X 1 がS B 1・2 と同時的に存在していた可能性は捨象できない。

S X 1 を構成する礫は角礫、亜角礫を主体としており、これに河川の転礫を含むが、礫の一部には破砕ないしは熱破砕が認められたほか、多くの礫に被熱による変色（主に赤色化）が認められた。礫群集の北東角付近に、最も大型の角礫が位置しており、礫群集は面的に広がる東半と、直線的に列をなす西半とに、視覚的に区分できる。さらに東半の礫は、帯状の空間を挟んで2～3群のまとまりをなしている。礫群集の下底レベルはほぼ水平で同一面上にある。この東半の礫群集に伴って、多数の土器が出土した。

礫群集の南北に、炭化物集中部1・2が認められる。いずれも検出面からわずかな凹部をなし、濃密に炭化物が堆積していた（図版8・写真図版9）ことから、炉床に伴う可能性が考慮されるが、顕著な焼土は認められなかった。

（4）柱穴

多数の柱穴のうち、掘立柱建物跡としては復元できなかったが、図示可能な遺物を出土したものの位置を図示している（図版2 S P 17・S P 234・S P 255・S P 268・S P 293・S P 294）。

（5）土坑

多数の土坑が検出されている。土坑の計測値については、表3に一括して示している。

S K 20（図版12、写真図版10）

調査区南部の東壁側に位置し、東半は調査区外へ広がる土坑である。土坑底は平坦で、土坑内は小礫を散漫に含む暗褐色シルト質砂で埋積されていた。顕著な出土遺物は認められなかった。

S K 23（図版10、写真図版10）

調査区南東部に位置し、東西方向に長軸をもつ不整楕円形の土坑である。土坑底は段差をもつ。土坑内は礫混じりのシルト質砂で埋積されており、細片化した土師器が多数包含されていた。図示できる遺物は出土していないが、須恵器壺、土師器羽釜の小片が出土している。

S K 35・36（図版12、写真図版11）

調査区南部の東壁側に位置し、東半は調査区外へ広がる土坑である。土坑内はともに細礫を散漫に含むシルト質砂で埋積されていた。図示できる遺物は出土していないが、S K 36 から、須恵器・土師器の小片と、須恵器甕体部の破片が出土している。

S K 48（図版2、写真図版11）

調査区中央部に位置し、S D 21 を切る楕円形の土坑である。土坑内は礫の少ないシルト質砂で埋積されていた。急斜度の掘り込みを見せ、土坑底は平坦に掘られている。図示できる遺物は出土していないが、瓦器の壺および土師器の細片が出土している。

S K 61・62（図版10、写真図版11）

調査区中央部に、南北に並ぶ不整円形～楕円形の土坑である。S K 61 の土坑底は平坦に掘られており、

表3 鶺北遺跡土坑一覧

遺構番号	形態	長径	短径	深さ	遺構番号	形態	長径	短径	深さ
20	不整円形	75	(40)	9	95	不整楕円形	65	50	15
22	楕円形	(143)	(50)	42	103	略円形	65	60	23
23	不整楕円形	130	82	19	125	略円形	70	62	40
24	不整楕円形	150	111	30	133	小判形	135	92	19
30	不整楕円形	90	72	9	135	略円形	18	16	—
35	楕円形	42	(26)	9	166	不整形	124	101	19
36	楕円形	36	(26)	7	167	不整形	130	107	19
39	不定形	132	56	16	168	不整楕円形	(100)	90	12
48	楕円形	63	45	19	188	不整円形	50	45	12
61	楕円形	70	50	12	190	不整楕円形	79	60	17
62	不整円形	70	70	18	250	長方形	164	77	11
63	円形	50	49	10	288	楕円形	55	45	14
94	不整楕円形	65	(60)	24	単位はcmである。()は復元値を示す。				

S K62の土坑底はわん底状を呈する。土坑内は、いずれも炭化物粒を含むブロック状のシルト質砂による、人為埋土で充填されていた。S K61からは土師器の細片が出土したのみであるが、S K62からは土師器羽釜のほか、土師器皿の細片が出土している。

S K63 (図版10、写真図版11)

調査区中央部に位置し、S K62の東に隣接する円形の土坑である。形態・規模ともに、S K61・S K62に類似しており、これらと同様に、ブロック状をなす人為埋土で充填されていた。土坑底は皿状をなす。遺物は出土していない。

S K94・95 (図版2、写真図版11)

調査区中央部西寄りに位置する不整楕円形の土坑で、S K95が、S K94を切る。小礫混じりのシルト質砂で埋積されていた。いずれからも、土師器皿が出土している。

S K103 (図版2、写真図版11)

調査区中央部に位置する略円形の土坑で、土坑底は2段に凹む。土坑内は礫混じりのシルト質砂で埋積されており、所属時期が判断できない土師質土器の細片が出土している。

S K125 (図版2、写真図版12)

調査区中央部に位置する略円形の土坑で、底面が2段に掘りこまれていることから、柱穴とすべきかもしれないが、掘立柱建物跡に伴うものではない。土坑内は細礫混じりのシルト質砂で埋積されており、図示できる遺物は出土していないが、土師器皿の細片が出土している。

S K133 (図版2、写真図版12)

調査区中央東壁際に位置する小判形の土坑で、S B2の北東部と半ば重複する位置にある。土坑内は

細礫混じりのシルト質砂で埋積されており、土師器皿、羽釜、須恵器壺、瓦質土器の甕体部破片等が出土している。

S K135 (図版 2、写真図版 12)

調査区中央東壁際に位置する略円形の土坑で、あるいは柱穴とすべきかもしれない。土坑内は礫混じりのシルト質砂で埋積されており、中央に柱痕と思われる部分が検出された。古墳時代と思われる須恵器の小片が出土しているほか、図示できないが、土師器皿の小片が出土している。

S K166 (図版 10、写真図版 12)

調査区中央部に位置する不整形な土坑で、S D41 を切る。土坑底は不規則な凹面をなし、土坑内は礫混じりのシルト質砂で埋積されていた。所属時期を判断できない土師器・須恵器の細片が出土している。

S K167 (図版 10、写真図版 12)

調査区中央部に位置する不整形な土坑で、S K166 の東に隣接する。S D41 を切る。土坑底は不規則な凹面をなし、土坑内は礫混じりのシルト質砂で埋積されていた。図示できる遺物は出土していないが、須恵器壺の細片が出土している。

S K168 (図版 10、写真図版 12)

調査区北端に位置し、北半は調査区外へ広がる土坑である。土坑底はともに皿状を呈し、細礫を含むシルト質砂で埋積されていた。また底面に顕著な炭化物の散布が認められた。図示できる土器類は出土していないが、遊離遺物とみられるサヌカイト剥片が出土している。

S K188・190 (図版 10、写真図版 12)

調査区中央部西寄りに位置し、隣接した土坑である。土坑底はともにわん底状を呈し、小礫を含むシルト～極細砂で埋積されていた。

(6) 溝

S D 2 (図版 2・11、写真図版 13・14)

調査区南部に位置する。西壁に発し、屈折して南壁に至る溝で、幅 80～120 cm、深さ 30 cm前後を測る。溝底は深い凹面～逆台形をなし、砂礫、細粒の砂～シルト混砂で自然埋没していた。図化できない資料であるが、時期不明の須恵器小片が出土している。

S D10 (図版 2・11、写真図版 13)

調査区南部に位置し、南北方向に直線的に延びる溝で、溝の北端部はS D266 と直交する。S D10 とS D266 の間には重複関係はない。S D10・266 ともに幅は 20～30 cmを測り、深さは 5～10 cmほどである。S D10 とS D266 に囲まれた領域には、柱穴が密集しており、掘立柱建物跡を区画する溝であった可能性があるが、この領域で建物跡を復元することはできなかった。図化できない資料であるが、所属時期を確定できない土師器、須恵器の細片のほか、鉄釘が出土している。

S D21 (図版 2、写真図版 13・14)

調査区中央に位置する溝で、北東～南西方向に直線的に延びた後、北西方向へほぼ直角に屈折して終わる溝である。北東側はS D41 に切られる。幅 60～100 cmを測り、須恵器鉢、甕、瓦器壺、青磁碗等が出土している。

S D41 (図版 2・11、写真図版 13・14)

調査区中央を、南北にほぼ直線的に延びる溝で、調査区南部で終わる。延長方位は、掘立柱建物跡群

の方位と概ね一致しており、建物群の区画との関連が想起される。溝は北半部で幅 2.2～2.3 m、中央部で 4.5 m 前後、南半部で 3 m 前後を測る。検出面からの深さは 40 cm 前後を測り、溝底は緩やかな凹面をなす。溝内は、細粒の砂～シルト質砂で自然埋積されていた。土師器皿、羽釜、須恵器壺、鉢、甕、瓦質鉢、青磁、鉄釘、砥石、硯等が出土している。

S D42 (図版 2、写真図版 3)

調査区中央部に位置する、緩やかに曲がる溝で、東側は S D41 に切られる。幅 30 cm 前後を測り、図化できない資料であるが、所属時期不明の土師器細片、サヌカイト碎片等が出土している。

S D78 (図版 2、写真図版 15)

調査区南部に位置する、南北に直線的に延びる溝である。幅 50 cm 前後、深さ 20 cm 前後を測る。細粒の砂～シルト質砂で埋積されており、図化できない資料であるが、須恵器壺底部、白磁碗等の小片が出土している。

S D90 (図版 2、写真図版 15)

調査区中央部に位置し、北東～南西方向に広がりを見せる。調査時には S D (溝) としていたが、むしろ地形面の凹部に遺存した古土壌と考えられる。図化できない資料であるが、所属時期不明の土師器細片、須恵器の甕小片が出土している。

S D153・154 (図版 2・11、写真図版 14・15)

調査区北端部に位置し、やや斜行しつつ東西に延びた後、合流して屈折し、南北方向に延びる溝である。S D153 は幅 70～100 cm、深さ 10 cm 前後を測り、溝底は平坦である。S D154 は幅 30～40 cm、深さ 20 cm 前後を測り、溝底は逆台形をなす。いずれも細粒の砂～シルト質砂で自然埋積していた。合流部では明確な重複関係が認められなかったことから、同時存在の可能性があろう。図化できない資料であるが、土師器羽釜小片、所属時期不明の土師器細片のほか、弥生土器と考えられる破片も出土している。

S D246 (図版 2、写真図版 15)

調査区南部東壁寄りに位置し、南北に延びる溝である。幅 30 cm 前後を測り、深さは数 cm とごく浅い。出土遺物は認められなかったが、埋土の様相から、平安時代～鎌倉時代に属すると判断した。

(7) その他の遺構

S X 3 (図版 2、写真図版 3・10)

調査区南東隅に位置する凹部で、1/2 以上が調査区外へ延びるため、形態、深さなどは明らかではないが、全体に不整形で、調査区内ではごく浅い凹面をなすことから、地形面の凹部に古土壌が遺存したものの可能性が高い。所属時期不明の須恵器把手、甕、土師器細片等が出土している。

S X229 (図版 2、写真図版 15)

調査区北西隅で検出された、焼土・炭化物が平面的広がりを見せる遺構である。検出面が平安時代～鎌倉時代の遺構検出面より上位にあることから、後続する時期の遺構と思われるが、明確に時期を判断する根拠を欠く。検出時に時期不明の土師器・須恵器の細片等が出土しているが、これらが S X229 に伴うものであるか否かは、明らかにできなかった。

S X240 (図版 2、写真図版 3)

調査区北壁際に位置し、北半は調査区外へ延びる楕円形の土坑状遺構である。埋土中より近世末以降の磁器、瓦等が出土している。近世末～明治初頭の廃棄土坑であろう。

3. 弥生時代

弥生時代の遺物が出土し、明確にこれより時代が下る遺物が認められなかった土坑・柱穴等の遺構について、弥生時代の遺構として記載する。鶺鴒北遺跡においては、弥生時代と判断された遺構の埋土は、暗褐色～黒褐色を呈するものが多い。

(1) 土坑

SK22 (図版 12、写真図版 15)

調査区南部の東壁側に位置し、東半は調査区外へ広がる土坑である、土坑底は平坦で、土坑内は礫混じりの砂～シルト質砂で埋積されており、上層（8層）は人為的埋土の可能性が高いと判断された。弥生土器、および所属時期を判断できない土師質甕の細片などが出土している。

SK24 (図版 12、写真図版 16)

調査区南部に位置する不整楕円形の土坑である。土坑底は概ね平坦である。土坑内は、小礫を散漫に含む暗褐色の細砂～中砂で埋積されていた。弥生土器の甕底部が出土している。

SK30 (図版 12、写真図版 16)

調査区南部に位置する、不整円形の浅い土坑である。土坑底は皿状をなし、土坑内は淘汰の悪い砂礫を主体として埋積されていた。図示できる遺物は出土していないが、楡描文を施した弥生土器の壺体部小片、底部の小片が出土している。

SK39 (図版 12、写真図版 16)

調査区中央部に位置する、瓢形の土坑である。土坑底は緩やかな段をもつ凹面をなし、土坑内は小礫混じりのシルト質砂で埋積されていた。土坑底に接する状態で、弥生土器の壺が出土している。

(2) 柱穴

弥生時代の遺物を掲載した柱穴を示しているが（図版 2 SP80・SP151・SP199・SP208・SP245）、これらがすべて弥生時代に属するか否かは、柱穴の配置等に対応関係が見いだせるものがなく、判断が難しい。

第2節 遺物

1. 平安時代～鎌倉時代

(1) 掘立柱建物跡

SB1 (図版13、写真図版18)

建物跡を構成する柱穴24基のうち16基から、土師器皿、同羽釜、須恵器壺、同甕などの小片が出土している。これらのうち、図化可能なSP234より出土した遺物を記載する。

1・2は土師器皿である。口縁部は底部から短く立ち上がり、全体にユビオサエによる整形痕をとどめ、その後にナデ調整が施される。3は須恵器鉢（捏鉢）である。底部は回転糸切後にナデ調整を施す。内面は剝落が著しく本来の器壁をとどめていない。

このほかにSB1では、図示し得ない小片であるが、SP81・SP132から土師器皿・羽釜、SP176から須恵器甕、SP65・SP87・SP88・SP92・SP292から土師器皿が、それぞれ出土している。

SB2 (図版13、写真図版18)

検出された柱穴19基のうち、4基から土師器・須恵器が出土している。6はSP295より出土した須恵器鉢（捏鉢）である。体部は直線的に開いて立ち上がり、口縁部は上下に拡張される。内外面全体に回転ナデ調整が施される。

このほかにSB2では、図示し得ない小片であるが、SP227・SP241・SP243から平安時代～鎌倉時代の土師器、須恵器が出土している。

SB3

図示しうる遺物は出土していないが、SP206・SP223より、平安時代～鎌倉時代の土師器が出土している。

SB4

図示しうる遺物は出土していないが、SP145より、平安時代～鎌倉時代の土師器皿、須恵器壺の小片が出土している。

SB5

図示しうる遺物は出土していないが、SP173より、平安時代～鎌倉時代の土師器の小片が出土している。

SB6

図示しうる遺物は出土していないが、SP187より、平安時代～鎌倉時代の須恵器の小片が出土している。

(2) 礫群集遺構

10～64（15・24・36・37は除く）およびM3は、礫群集遺構（SX1）より出土した（図版13・14、写真図版20～23）。礫群集遺構の領域内からは、土師器皿、壺、須恵器鉢、黄釉陶器等が面的かつ視覚的に明瞭な群をなして出土し、その状況から礫群集遺構に伴う遺物と判断した。

10～50は土師器皿である。口径8cm前後、器高1～1.5cmの第1群と、口径10～12cm、器高2～2.8cmの第2群とに大別できる（図3）が、第2群はさらに、器高が高い群と低い群に細分可能かもしれない。ただし完形を保っていない資料の場合、器高の計測値には誤差を含む可能性が高いことから、ここでは敢えて細分はおこなわない。口径が15cmに達するものは突出した1個体のみである。

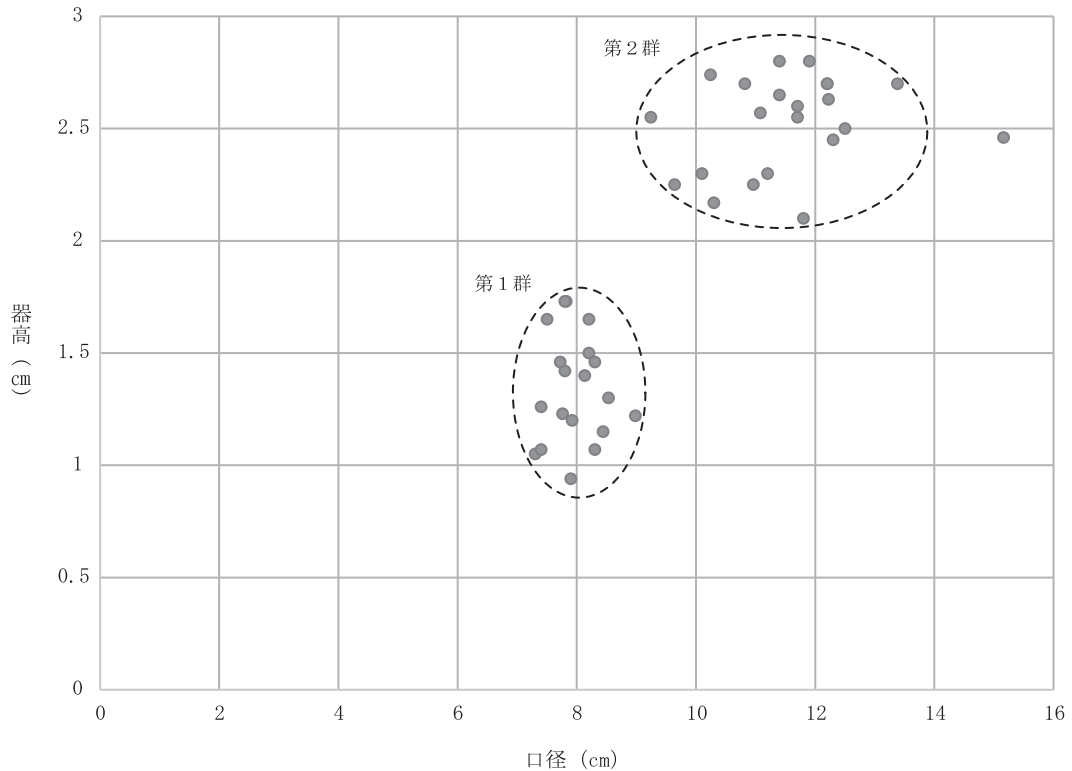


図3 礫群集遺構S X 1出土土師器皿の口径・器高分布

10～28は第1群の土師器皿である。いずれもユビオサエによって整形し、その後ナデ調整を施すが、特に底面に指頭圧痕が顕著に残る例が多い。底部から口縁部にかけては、やや屈折気味に立ち上がるものと、丸みを帯びつつ立ち上がるものが認められる。

29～49は第2群の皿である。底部から口縁部へ、丸みをもちつつ立ち上がるものが主体を占めるが、35は底部から屈折して外反しながら立ち上がる口縁部を見せる。第1群同様、底部を中心に指頭圧痕をとどめ、その後にナデ調整を施す。

土師器皿の中には、口縁部に煤状の付着物をとどめるもの(31)、二次的な被熱が認められるもの(38・45)が認められる。

51は須恵器播鉢である。内面に6条1単位のおろし目を施している。底面は回転ヘラ切り後に、ナデ調整を施す。

52・53は須恵器鉢(捏鉢)である。いずれも口縁部には片口を設けており、52では口縁部を上方に拡張し、53では上下に拡張している。52の外面は、二次的に被熱している。

55～61は土師器塼である。体部から外方へ屈折し、やや内湾気味にのびる口縁部を見せる。口縁端部は方形に終わるもの(55～58)、端部に凸帯状の膨らみをもつもの(59)がみられる。内面はやや粗い横方向のハケメ調整が施され、外面は縦方向のハケメのほか、ハケメ加えてヘラケズリを施すもの(55)がある。

62・63は土師器羽釜である。いずれも、やや内傾する口縁部をもち、内面は横方向の細かなハケメ調整が施される。

64は黄釉陶器の盤（洗と呼称される場合がある）である。厚みのある作りで、内面には黄褐色の釉を施した後、鉄絵と呼ばれる褐色～やや赤みを帯びた褐色の釉薬で、底面を中心に文様を描いている。他の出土例から、底面の文様は文字と円弧を組み合わせたものと考えられ、唯一「天」の一文字が判読できた。内底面からの立ち上がり部分には、山形の文を連続して施す。口縁部は玉縁をなす。

M3は幅の狭い、薄板状の鉄製品である。図上端がわずかに屈曲する。器種は判然としない。

(3) 柱穴

S P 4・S P 17・S P 101・S P 248・S P 255・S P 268・S P 293・S P 294より、図示可能な遺物が出土している（図版13・19、写真図版18・19・40・41）。その他多くの柱穴からも、平安時代後期～鎌倉時代に属する土師器・須恵器を中心とした遺物が出土している。

4は調査区南部に位置するS P 255より出土した、土師器皿である。口縁部は外反気味に立ち上がる。外面にはユビオサエによる整形痕をとどめ、その後にナデ調整が施される。5はS B 1・2間に位置するS P 268より出土した白磁碗である。ふくらみをもつ体部を見せ、口縁端部は短く外反する。口縁端部内面は釉を剥ぐ。7は調査区南部に位置するS P 17出土の須恵器鉢（捏鉢）である。体部は直線的に開いて立ち上がり、口縁部は上下に拡張される。内外面全体に回転ナデ調整が施される。8はS B 2の領域内に位置するS P 294より出土した土師器羽釜である。器壁は全体に薄く仕上げられている。外面は摩耗しているが、内面にはハケメ調整痕をとどめる。口縁端部は平坦な面をなしている。9はS B 2の領域内に位置するS P 293より出土した瓦質の甕である。外面には格子タタキを施し、内面は横方向のハケメ調整を施す。

M1はS B 1の領域東端に位置する、S P 4より出土したヘラ状鉄器である。両側縁が平行する板状鉄器の先端を、丸みをもった形状に作り、折り曲げている。M2はS P 248より出土した釘先端部である。断面は方形を呈する。M14はS B 1・2間に位置するS P 101より出土した銅銭である。3枚が固着しているが、片面は元豊通寶、相對する面は紹聖通寶である。中の1枚は観察できない。

(4) 土坑

S K 62（図版15、写真図版26）

66は土師器羽釜である。鏝下位にはわずかに煤の付着が見られるが、外面は摩耗のため調整痕を観察できない。内面には密な横方向のハケメが施される。

S K 94・95（図版15、写真図版26）

67はS K 94から、68はS K 95から出土した土師器皿である。67は全体に器表面が摩耗しているが、外面下部にはユビオサエ、内外面にはヨコナデが観察される。68は内外面ともに丁寧なヨコナデが施される。67・68ともにS X 1の項で分類した、第2群の土師器皿である。

S K 133（図版15・19、写真図版26・40）

69～71はS K 133より出土した土師器皿である。ユビオサエ整形後に、ナデ調整を施す。69は、S X 1の項で分類した、第1群の土師器皿である。70・71は、いずれも第2群の土師器皿である。内外面ともにヨコナデ調整が施される。70は口縁部の高低差が大きい、歪んだ形状を呈する。

M6・M7は鉄釘である。断面は方形を呈する。

S K 168（図版19、写真図版39）

S 4はサヌカイト剥片である。肉眼観察では、讃岐産サヌカイトと判断される。側面に平坦な打面をとどめており、ここに打撃が繰り返されたことにより、背面側縁辺は細かな潰れを見せる。S K 168の

炭層下から出土した。

S K188・190 (図版 15、写真図版 26)

72はS K190より出土した、須恵器鉢の口縁部である。端部は上方に拡張され、口縁部外面に垂直に近い面を作る。

S K250 (図版 15、写真図版 26)

73はS K250より出土した、瓦器の埴底部である。高台は逆台形状を呈する。埴の内側底面には、ヘラミガキが施されているが、器表面の摩耗が著しく、図化には至らなかった。

(5) 溝

S D10 (図版 19、写真図版 40)

M8は鉄釘の身部である。断面は方形を呈する。

S D21・41 (図版 15・19、写真図版 26・27・39・40)

図版 15 の 74・76 は、S D21 と S D41 の切り合い部分より出土し、いずれに帰属するのか判断できなかった遺物である。

74は青磁の小碗と考えられる。釉薬の色調はやや灰色を帯び、内面に刻線で施文するが、小片のため文様は不明である。75は須恵器壺の底部である。体部は丸みを帯びる。底面はヘラ切りと思われるが、切り離し後に、体部外面～底面外周にヘラケズリを施している。

76は土師器羽釜である。鏝は広く作られ、内外面ともに横方向～斜め方向のハケメ調整を施す。S D21・S D41に加え、S X1からも本個体の破片が出土した。77・78は土師器羽釜である。いずれも被熱しているが、78は被熱による赤色化が顕著であるほか、底面にも厚く煤が付着している。77は内面に横方向のハケメが認められる。78では、内面を横方向のハケメ、外面は縦方向のハケメで調整し、外底面は多方向の斜交するハケメ調整が施されている。79は、急斜度に立ち上がる体部を見せる瓦質の鉢である。内面上半に横方向の粗いヘラミガキが施されている。また下半は器表面がやや荒れた様相を呈し、使用痕とも見える縦方向の傷が多数付着している。

M4はほぼ直角に屈曲した釘である。断面は方形を呈する。M5は器種不明の鉄製品である。図で横方向に伸びる板状の軸の先端部が太く作られ、そこに設けられた孔に板状の鉄製品が通されている。何らかの器具の一部であろうが、器種を推定する根拠に欠ける。

S2は、淡赤褐色を呈する粘板岩を用いた砥石である。左図右側面には、石材切断時の擦切り痕を明瞭にとどめている。表裏両面ともに、使用による研磨痕、および金属器によって生じたと考えられる、切込みが認められる。S3は硯と判断した。黄灰色の粘板岩を用いている。図左側面には、石材切断時の擦切り痕をとどめており、右側面は破断面となっている。上部中央にごく緩やかな凹面が形成されており、この部分を墨溜まりと考えたい。

2. 弥生時代

(1) 土坑

S K22 (図版 16、写真図版 37・38)

80は壺の頸部～体部である。膨らみの小さな体部と、弱く屈曲して開く頸部を見せる。81は壺の底部であろう。外面には縦方向のヘラミガキが、密接して施されている。82は甕である。器壁は薄く、外面には縦方向のハケメが認められる。83・84は甕の底部であろう。外面には縦方向のヘラミガキが

施されている。

S K24 (図版 16、写真図版 37・38)

85は甕底部で、内外面ともに縦方向のヘラミガキが施されている。86は甕の体部～口縁部である。口縁部は強く屈折して開き、端部はわずかにつまみ上げられている。体部外面は縦方向のハケメ、内面は横～斜め方向のハケメ調整が施される。

S K30 (図版 16、写真図版 37)

89は甕である。直接接合する破片がないため、口縁部、体部、底部を図上復元した。口縁部は強く屈折して開き、端部はわずかにつまみ上げられている。体部外面肩部は縦方向のハケメ、体部中位～下部は縦方向のヘラミガキが施されている。体部上半内面は縦方向のナデ（または細かなハケメ）調整が施され、体部下半には縦方向のヘラケズリが認められる。

S K39 (図版 16、写真図版 37)

87は、頸部～口縁部を欠損した小型の壺である。体部内面は縦方向のハケメ調整が施される。体部外面は、上部が縦方向のハケメ、最大胴径の体部中位付近には横方向の丁寧なナデ、以下には縦方向のヘラミガキが施されている。88は広口壺である。頸部は細片化しており、口縁部と体部をつなぐことができなかった。体部は最大胴径が中位よりやや下にある。最大胴径より上部は器壁の風化が著しく、器面調整等は不明であるが、これより下位は縦方向のヘラミガキが施されている。また内面下半は、縦方向のハケメ調整が施されている。口縁部は水平に開き、端部は肥厚して外周はわずかに凹面をなす。

(2) 柱穴

S P80 (図版 16、写真図版 37)

90は大型の壺体部である。大型の破片が柱穴底で、土圧によって4つにひび割れた状況で出土した。外面には板状工具によると思われる、縦方向のナデが施され、内面にも板状工具によると思われるナデが施される。また内面にモミかと思われる圧痕が認められる。本遺物の内面中央には、焦げ跡状の黒色部が認められ、油脂状の付着物がわずかに残る。また外面には二次的被熱による赤色化が認められる。こうしたことから、壺体部の破片を、火熱を用いた作業に二次利用した可能性が想起される。

S P151 (図版 16、写真図版 38)

93は逆L字形と呼ばれる口縁部を見せる甕である。口縁部は断面三角形の凸帯を貼り付けることで形成されている。風化によりやや不鮮明ではあるが、口縁部直下に2段の櫛描直線文を巡らせる。

S P199 (図版 16、写真図版 38)

95は甕または壺の底部である。調整痕は識別できない。

S P208 (図版 16、写真図版 38)

92は強く屈曲して開く口縁部を見せる甕である。口縁端部は欠損が著しいが、キザミが施されていた可能性がある。内外面ともに煤が付着する。

S P245 (図版 16、写真図版 38)

94は大型の甕または壺の底部である。底部の厚みは3cmほどで、重厚な作りとなっている。内外面ともに風化が顕著で、調整痕等は識別できない。

3. 原位置を遊離した遺物・包含層および攪乱部出土

遺物包含層（古土壤層）中より出土した遺物、および後世の遺構中、堆積物中に遊離した遺物につい

て記載をおこなう。

(1) 弥生時代 (図版 16・17、写真図版 28・38)

古土壌層中、および平安時代～鎌倉時代の遺構埋土中より、原位置を遊離した弥生時代前期～中期に属する土器、石器が出土している。

91 は S X 1 の領域内より出土した壺口縁部である。外面には縦方向のハケメが施される。

96～100 は古土壌層 (遺物包含層) 中より出土した。

96 は櫛描き斜格子を施す、壺体部である。97 は、外面には3条と2条のヘラ描き沈線文を施し、その間に、刺突文を施した甕または鉢である。98 は口縁部にキザミを施す鉢、99・100 は外面に縦方向のヘラミガキを施す、甕または壺の底部である。

(2) 古墳時代 (図版 17、写真図版 28～30)

101～105 は、近似した形態を見せる黒色土師器の高坏である。脚部は広がり小さく、脚柱部は細く作る。杯部は椀形に膨らみをもち、口縁端部は外反気味に仕上げている。炭素を吸着させ、全体に丁寧なヘラミガキを施しており、器表面は光沢のある黒色に仕上げられている。101 では脚内面には炭素が吸着されていないが、これを除けば、炭素は脚内面に至るまで吸着されている。

107～109 は、土師質の韓式系土器である。107・108 は、強く外反して短くのびる口縁部を作る鉢ないしは埴である。外面にはやや右下がりの格子タタキを施し、口縁部直下は、その後にヨコナデを施している。109 は急斜度に立ち上がる口縁部で、外面には、右下がりの格子タタキを施したのち、口縁部直下にヨコナデを施す。

110 は S K 135 より出土した須恵器の小片である。片側の縁辺は、透かし部分に相当している。

(3) 奈良時代前後 (図版 17、写真図版 30)

111 は強く屈折する須恵器で、鉢、壺、ないしは金属器模倣の特異な脚かとも思われるが、断じ難い。112 は須恵器杯 B の底部である。いずれも古土壌層より出土した。

(4) 平安時代～鎌倉時代 (図版 17～19、写真図版 31～36・39・41)

いずれも古土壌層より出土した遺物である。

113～116 は第1群、117～119 は第2群に属する土師器皿である。いずれもユビオサエによる整形の後、ナデ調整を施す。出土位置は S X 1 周辺であるが、これに伴うことを調査時点で確認できなかったため、古土壌層出土とした。S X 1 に伴う可能性がある。120 は厚い平高台をもつ土師器碗である。底部に回転糸切り痕をとどめる。

121 は土師器埴である。上述の土師器皿同様、S X 1 に伴う可能性がある。122～125 は土師器羽釜である。123・125 については、やはり S X 1 に伴う可能性がある。いずれも内外面にハケ調整を施している。

126 は瓦質、127 は土師器の三足埴または羽釜の脚である。

128・129 は須恵器碗である。128 は見込み部が一段下がる形態を呈し、底部は回転ヘラ切りである。129 は見込み部に段をもたず、底部は回転糸切りとなっている。130～135 は須恵器鉢 (捏鉢) である。口縁端部が肥厚するのみで拡張しないもの (133)、口縁端部を下方へやや拡張するもの (130)、上方へ拡張するもの (132)、上下へ拡張するもの (131) が認められる。132・133 は片口部分をとどめる。135 の内面は使用による摩耗が顕著であり、また、二次的な被熱が認められる。130・131・135 については、上述の土師器皿 (113～116) 同様、S X 1 に伴う可能性がある。

136 は須恵器壺である。外反気味に開く短い口縁部を見せ、口縁端部は肥厚して丸みをおびる。137 は大型の須恵器壺の肩部である。内外面ともにナデ調整を施しており、タタキ目をすり消している。138 は須恵器鉢であろうか。直線的に立ち上がる口縁部で、外面に櫛の刺突による斜位の列点文を施す。

139 は断面方形の高台を見せる青磁碗である。高台外面まで施釉され、畳付部から高台内底面は露胎となっている。見込み部には草花文を施文しているようであるが、彫りが浅いためか、釉薬に被覆されて文様は判然としない。140 はやや高さのある逆台形状の高台を見せる、青磁碗である。外面には蓮弁を彫り、見込み部には圈線を施す。高台畳付部は露胎であるが、高台内底面には施釉している。大宰府分類（太宰府市教育委員会 2000）による、龍泉窯系青磁碗Ⅲ類であろうか。141 は、全面に施釉する白磁の底部である。平底から丸みをもって立ち上がる体部を見せる。大宰府分類（前掲）による、白磁Ⅸ類に分類されよう。142 は青白磁梅瓶である。本来は同一個体であったもので、1点は底部に近い破片、他の1点は肩部付近の破片であろう。内外面は透明感のある淡い青白色の施釉がなされているが、内面では釉薬に濃淡が認められ、また肩部内面では、一部に釉が及んでいない。外面には渦文ないしは唐草文が全面に彫られており、底部のやや上位にあたる部分には圈線が施される。底部から体部への立ち上がりは直線的で、体部への膨らみは認められない。

S 1 は円礫を用いた磨石である。平面は円形、断面も均整のとれた楕円形を呈し、表面は使用による摩耗で、平滑となっている。古土壤層より出土している。S 5 は、二次加工のある剥片である。主要剥離面の末端側に背腹両面から、打面側に腹面側から細かな二次加工を施している。あるいは石鏝の未成品であろうか。肉眼観察により、讃岐産サヌカイトと考えられる。古土壤層より出土している。S 1・S 5 については、弥生時代の所産と思われる。

S 7・S 8 は、板状に切り出された粘板岩である。いずれも上面の平坦面に、研磨によって弱い凹面をなす溝を形成しているが、本資料の機能については、判断し難い。玉砥石のように、立体的な研磨を必要とする製品ののための砥石の可能性も留保される。

S 6 は滑石製の石鍋底部である。底面は平坦に作り、内外面に研磨痕をとどめている。143 は棒状を呈する土錘である。

M 9～M13 は、いずれも古土壤層より出土した鉄製品である。M 9 は断面が四辺形を呈する釘である。M10 は、S X 1 付近の検出作業時に出土したものであるが、S X 1 に伴うか否かは決定できなかった。図上端部を茶杓状に屈折させた鉄製品であるが、器種は判然としない。M11 は把手ないしは釣手状の鉄製品である。基端部は折損している。M12 は、先端近くに1孔を設けた鉄製品である。孔に接する位置で折り曲げられているが、これが本来の形態か否かは不明である。M13 は断面が楔形を呈する、板状の鉄製品である。図下縁は、薄く砥ぎ出されたように見えるが、研磨痕は判然としない。

(5) 江戸時代（図版 15、写真図版 26）

65 は S X 240 より出土した、肥前系磁器皿である。内外面に暗藍色の秋草あるいは蔓草、他の絵付けを施す。S X 240 は他にも江戸時代末の磁器、瓦等を出土した攪乱部である。

第4章 城山遺跡 平成28年度調査

第1節 遺構

城山遺跡の平成28(2016)年度調査区は鶴北ノ町交差点から北西部分で、城山遺跡範囲の南部にあたる(図版1、写真図版1・2)。検出した主な遺構には、竪穴住居(竪穴建物)跡(SH)4棟、土壌(SK)5基、溝(SD)5条、掘立柱建物跡(SB)5棟のほか、121基の柱穴・ピット(SP)や埋土に土器を包含する自然流路(NR1)があり、各遺構は60cmから約1mの厚さの盛土直下および、南部では盛土下層にある厚さ20cm弱の旧耕土直下で検出した(図版2)。

遺構(図版3)の所属時期は、埋土に縄文時代後期～弥生時代中期の遺物を包含するNR1、弥生時代後期の土器を多量に包含するSK8、弥生後期と推定されるSH3・SH4の2棟と溝2条がある。古墳時代中期～後期ではSH1・SH2の2棟、古墳時代と推定されるSB3・SB5の2棟やSK4・SK5・SD3がある。平安時代後期～中世の遺構にはSB1のほか、同時期と推定されるSB2・SB4があり、SK6・SK7・SD1・SD2も同時期と推定している。また、SPについては大半が平安時代後期～中世と思われるが、個別の時期認定が困難なことから時期不明としてまとめることとし、以下、時代順に述べる。

1. 縄文時代後期～弥生時代中期

(1) NR1 (図版4、写真図版2～6・8)

調査区北端から調査区南部にかけて検出した、北西から南西方向に流れていたと思われる自然流路跡である。流路の西側肩は調査区外にあり、最大幅4.5mを検出したが、調査区北部は他の遺構と重複していたことから、掘削はしなかった。調査は検出面から1.5mの深さまで掘削し、土器を包含する層の下端まで実施したが、流路そのものはさらに幅広く深いものである。埋土は黄褐色系の上層と、褐灰色系の下部に大きく分けられるが、上部はさらに中層にあたる黄灰褐色系の粗粒シルトと、中粒砂を含む極細粒砂の上層に分けることができた。また、下層には極粗粒砂や細礫を含み、細粒砂～中粒砂の砂層も認められた。

流路北部の東肩に近い部分で中層～下層に縄文土器片が含まれ、流路中央部の上層部から中層上面にかけて弥生時代前期末～中期前葉の土器が出土し、最上層の第1層からは弥生時代後期の土器が少量出土した。弥生時代後期には流路は完全に埋まっていたものと思われる。また、224の瓦器または黒色土器の小皿も出土したが、流路埋没後に構築された柱穴内に残っていた土器の可能性がある。

2. 弥生時代後期

調査区北部のSK8から弥生時代後期の土器が多量に出土したが、その北側のSH3・SH4も少量であるが土器が出土していることから、弥生時代後期と捉えた。また、SH4下層のSD4、調査区中央北部のSD5も弥生時代後期の範疇で捉えておきたい。

(1) SK8 (図版5、写真図版6～8)

SK8はNR1が完全に埋没した後に掘削された土壌で、平面形は東西に長い隅丸の長方形を呈している。当初SK2として調査を開始したが、西側に広がることが確認されたため、検出面を約10cm掘

り下げて平面検出を行った。SK8の検出面での長さは約2.25 m、幅約1.3 mで、検出面からの最大深は約55 cm、底は平坦であるが、南側がやや浅く深さ45 cmである。底の平面形は検出面の形と相似形で、長さ約1.8 m、幅約0.9 mである。

埋土は短軸方向で水平堆積を示し、大きく4層に分けられた。最下層の第7層は黒褐色を呈し、地山ブロックが含まれていた。その上層の第5層は灰黄褐色を呈し、少量の土器を含んでいた。第1層・第2層には多量の土器を含んでおり、壺・甕・鉢・高坏・器台など52点を報告した。第1層・第2層はほぼ同色で土質も近いが、土器堆積の状況から分層することができた。

土器は土壌の中央部分に約1 m×約0.7 mの範囲に集中していた。中央の壺が目立つものの、甕や鉢のほか、製塩土器も認められたことから、墓とは考えにくい。形態や埋土の状況から墓とすれば、土壌墓であろうか。

(2) SH3 (図版9、写真図版13)

検出状況 調査区北端部で検出した竪穴住居(竪穴建物)跡で、南東側のSH4の多くの部分を切り込んでやや深く掘削されている。また、西部には店舗看板のコンクリート基礎があり、破壊されていた。

形態・規模 平面隅丸方形を呈し、検出面での規模は北東-南西4.6 m以上、北西-南東4.8 m以上で、推定では北東-南西4.8 m、北西-南東5.0 mであろう。検出面からの深さは南部の深い所で10 cm弱、北部では深い部分でも5 cm程度と遺存状況は悪い。

構造 周壁溝が多くの部分で認められ、北部での周壁溝幅は10 cm～25 cm、東部では約50 cm～約70 cm幅の部分があるが、幅広い部分の機能および意味は不明である。東隅部分には木炭と思われる炭化物の集中箇所があり、幅約28 cm、長さ約1 mの細長い範囲であるが、埋土上面部分にあたり、周壁溝を超えていることから、廃絶後のものであろう。主柱穴は不確定であるが、SP34・SP51を想定している。いずれも柱痕から土器小片が出土している。

出土遺物 SH3埋土中からは遺物は出土しなかったが、主柱穴と想定したSP34の柱痕から弥生時代後期後半～古墳時代初頭の高ケを加えたタタキ甕の小片と土師器細片が出土し、SP51の柱痕からは弥生時代後期後半頃の壺か鉢の小片が出土している。主柱穴とするには疑問が残る柱穴であるうえに、柱痕出土の小片であることから確実性には乏しいが、SH3の時期を示すものと推定している。

(3) SH4 (図版9、写真図版13)

検出状況 SH3に切り込まれるかたちで多くの部分が重複した竪穴住居(竪穴建物)跡で、確認調査により床面が掘り込まれていた。方向はSH3に近いが、北東側の壁は調査区内では確認できなかった。

形態・規模 南東側の隅をみると平面隅丸方形と判断できる。検出面での規模は北東-南西3.5 m以上、北西-南東1.3 m以上である。規模の推定は難しい。検出面からの深さは南東部の深い所でも約5 cm程度と遺存状況は悪い。

構造 南東側の一部で周壁溝を検出した。周壁溝幅は26 cm～38 cm、床面からの深さは4 cm程度である。主柱穴と判断できるものは検出していない。

出土遺物 埋土中からは遺物は出土しなかったが、周壁溝の内側法面で弥生時代後期中頃と思われる底部(282)が出土しており、SH4の時期を示すものと捉えている。

(4) SD4 (図版9・12、写真図版13・15)

SH4内の確認調査グリッド底面で検出した幅22 cm～25 cm、検出面からの深さ約8 cmの溝である。長さ約1 mの部分しか調査しなかった。

埋土は2層に分かれていたが、埋土から遺物は出土しなかった。人工か否かも含めて検討を要する溝である。時期を推定するとすれば、検出層位から弥生時代後期のものとしておきたい。

(5) S D 5 (図版3・12、写真図版4・5・15)

調査区中央北部でNR1埋没後の上面で検出した。北東端から南西方向へ約1.6m長を検出したが、さらに南西側の調査区外に続いている。検出面から徐々に深くなり、中央部がさらに深くなるようにみえるが、本来の溝は中央の幅約70cm部分に限られる。いくつかの柱穴と重複しているが、本溝が古い。

検出面から中央の底までの深さは16cmである。埋土は2層に分けられ、どちらも黄褐色系を呈し、マンガング粒・鉄分を含む。埋土から弥生時代前期末～中期初頭の逆L形口縁部の甕小片と、弥生時代後期後半頃の甕体部小片が出土している。弥生時代後期後半の溝と推定している。

3. 古墳時代中期～後期

時期が判明しているSH2が最も古く古墳時代中期後半～後期初頭、SH1は出土須恵器から後期末頃で、SB3・SB5・SD3は後期の可能性がある。SK4・SK5は確証がないが、当該時期の範疇で捉えておきたい。

(1) S H 1 (図版6～8、写真図版9～11)

検出状況 調査区南部で検出した竪穴住居(竪穴建物)跡で、南東側のSH2を切り込んでやや深く掘削されている。また、南西部は調査区外にのびている。

形態・規模 平面方形を呈し、検出面での規模は北西-南東方向の一边が約5.8m、北東-南西方向は4.6m以上で、推定では6.4mになるものと思われる。検出面からの深さは南東部や西部の深い所で10cm程度、北東部では深い部分でも6cm程度、と遺存状況は悪い。なお、床面の標高は15.13m～15.22mである。

構造 北東辺を中心に周壁溝が認められ、幅は25cm～30cmである。南東辺では自然消滅のように途切れているが、竈がある北西辺では検出されなかったものの、周壁溝を設けていたか否かについては不明である。

主柱穴はSP37・SP57の2基が確実と思われるが、南西側の主柱穴は確認できないことから、調査区外に存在していると判断される。SP57は掘形平面が楕円形で、検出面での長径84cm、短径60cmを測り、検出面から底までの深さは63cmである。柱痕は南東側のもので、径約18cmである。SP37は2基が重複しているが、北西側のものがSH1に伴うもので、掘形平面は長径45cm、短径36cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは47cmを測る。柱痕は径16cm程度の円形である。主柱穴2基の芯々間距離は約2.4mで、南西側でも同じ距離に主柱穴が存在すれば調査範囲内に存在するはずであるが、検出できなかったことから、北東-南西方向の梁桁間は北西-南東方向の梁桁間に比べて長かったと判断できよう。仮に竈が北西側壁の中央に位置していたと仮定すれば、北東-南西方向の梁桁間は3.4m程度になり、SH1の北東-南西方向の規模は6.4m程度と推定される。

床面には焼土部分が2箇所認められた。焼土1は住居跡中央部の東寄りの位置にあり、長径56cm×短径46cmの楕円形の範囲に焼土が認められた。焼土2は北東側壁に近い部分にあり、長径60cm×短径50cmの楕円形の範囲である。どちらも地床炉としていたものと思われるが、同時に使用していたか否かについては不明である。なお、中世のSB1や他に多くの柱穴と重複しているが、主柱穴以外は後世のものとして判断している。

竈 北西辺に存在していた造り付け竈は、袖部下端を含めた幅が約65cm、住居壁から袖端までの長さ

72 cmの規模で、燃焼部は幅約33 cm、長さ約50 cmである。やや偏った位置ではあるが、燃焼部で棒状の礫が横になった状態で検出された。支脚石の可能性がある。竈の北東側裾に須恵器高坏下半部（277）が天地逆の状態検出された。煙道部は竈の中軸線からまっすぐ外側にのびており、長さ約1.3 mまで確認でき、幅は竈側が広く約38 cm、先端に近い部分では幅20 cmである。煙道部には褐灰色で炭化物を含む層が堆積しており、竈本体に近い部分では検出面からの深さは約6.5 cmであった。なお、煙道部では粘土や筒状になっていた痕跡を確認することができなかったが、埋土中の灰黄褐色シルトブロックが煙道の天井部を構成していたものにあたるかもしれない。

出土遺物 SH1の竈脇から出土した須恵器高坏は7世紀前半と考えられ、SH1の時期を示していると判断できよう。また、竈埋土からは丸底系の製塩土器（278・279）、南東隅の周壁溝内から土師器甕口縁部（280）が出土した。竈内からは製塩土器のほかにTK217型式期頃の須恵器坏口縁部と土師器甕体部片も出土しており、住居跡埋土から鉄釘（M18）や弥生時代後期の底部片も出土している。支柱穴のSP37の掘形からは弥生時代後期の高坏小片と壺口縁部片、SP57の掘形から土師器高坏と思われる口縁部小片と壺と思われる須恵器小片、SP57埋土からは須恵器甕片と土師器片が出土している。

（2）SH2（図版6・8、写真図版9・12）

検出状況 調査区南部で南東隅のごく一部分を検出した竪穴住居（竪穴建物）跡で、北西側はSH1に大半が重複し、切られている。SH1と同一方向であるが、南西部の大半は調査区外にのびている。

形態・規模 平面方形と判断され、検出面での規模は北西－南東方向の一边が約1.7 m残存し、北東－南西方向は1.8 m検出したが、さらに南西側に続いている。検出面からの深さは、竈焚口付近で検出面から7 cm程度で、竈上端と検出面は同一面となる。なお、床面の標高は15.19 mである。

構造 竈部分が遺存しており、その南東側に周壁溝が認められた。周壁溝は長さ50 cmまで確認し、住居跡の南東辺にも続いている。周壁溝の幅は約40 cmである。

竈 北東辺の隅に近い部分に存在していた造り付け竈は、袖部下端を含めた幅が約1.0 m、住居壁から袖端までの長さ約85 cmの規模で、燃焼部は幅約30 cm、長さ約50 cmである。焚口部の袖端に近い部分で土師器甕を検出した。

出土遺物 SH2の竈焚口部から出土した土師器甕（281）は古墳時代中期後半～後期初頭の頃のものと考えられ、SH2の時期を示していると判断できよう。また、竈ぎわでも外面ハケ、内面ヘラケズリの土師器片が出土しており、甕と同一個体の可能性がある。

（3）SB3（図版3・11、写真図版14）

調査区中央南部で検出した柱列で、NR1埋没後に構築されている。柱穴3基の柱列であるが、南西側に展開する建物跡と推定した。柱列方向はN48°Wである。

柱痕芯々間での規模は3.9 m、柱間は芯々間で、SP7～SP6が2.08 m、SP6～SP56は1.82 mの規模である。SP7の掘形平面は長径44 cm、短径40 cmの楕円形で、検出面からの深さは40 cmである。柱痕はほぼ円形を呈し、直径約20 cmで、柱痕底の地山は灰白色に変色していた。SP6は掘形平面がほぼ円形で、検出面での直径は36 cmで、検出面からの深さは18 cmである。柱痕は平面円形で、下部での直径は約14 cmである。SP56の掘形平面は直径約38 cmの円形で、検出面からの深さは23 cmである。柱痕は円形を呈し、底付近での直径は約12 cmで、柱痕底の地山は灰白色に変色していた。

SP7の上面および柱痕から土師器小片が出土し、掘形からは弥生時代後期の甕口縁部小片が出土した。SP6では上面から土師器小片、掘形から土師器小片と須恵器小片が出土している。SP56の掘

形からは土師器小片が出土し、埋土からは不明小片が出土している。いずれも図示等はしていない。

S B 3の所属時期を示す遺物は出土しなかったが、正方位から大きく外れていることと、S H 1・S H 2と同じ方向であることから、古墳時代後期頃の可能性がある。

(4) S B 5 (図版9・11、写真図版13)

調査区北部でS H 3と重複して存在する柱列で、直交方向の柱穴は検出できなかったことから、塀や柵などの柱列とすべきであるが、掘立柱建物跡と推定している。

方向はN13° Wで、柱芯での規模は約3.65 m、同様にS P 50～S P 65の距離は1.69 m、S P 65～S K 1の距離は1.96 mである。S P 50の掘形平面は長径65 cm、短径55 cmの楕円形で、検出面からの深さは57 cmである。柱痕は平面円形で、直径は上部では約25 cm、下部では約11 cmである。掘形は細かい単位で丁寧に埋められている。S P 65は掘形平面がほぼ円形で、直径は48 cm、検出面からの深さは41 cmである。柱痕は平面円形で、直径約14 cmである。掘形は比較的丁寧に埋められている。S K 1は長径68 cm、短径58 cmの平面楕円形で、検出面からの深さは41 cmである。柱痕は南西に偏った位置で検出しており、上面径約21 cmの円形で、底部でも径約22 cmの柱痕の窪みが認められたが、単独の断面図には明記されていない。

S P 50の柱痕からは弥生時代後期の底部(285)、掘形埋土から石鏃(S 10)や弥生時代後期頃の壺体部小片と高坏か器台で透孔がある脚部片が出土している。S P 65の掘形からは弥生時代前期末～中期初頭の壺肩部小片が出土し、S K 1埋土からは弥生時代のもと思われる小片が出土している。

S B 5はS H 3埋没後に構築されたもので、弥生時代後期以降であるが、柱痕直径が大きいことから、古墳時代後期に属する可能性があると思われる。

(5) S K 4 (図版3・4、写真図版5)

調査区中央部に位置し、S B 2と重複している。検出面での平面は丸みのある三角形を呈し、東西約1.0 m、南北約0.9 mの規模で、検出面からの深さは約8 cmである。埋土から弥生時代後期土器または土師器の小片が出土しているが、時期は不明である。平安時代後期～中世よりも古い遺構と想定している。

(6) S K 5 (図版3・12、写真図版14・15)

調査区中央部の南西壁下で一部を検出したもので、調査区外に続いており、N R 1の埋没後に掘削されている。長さ74 cm部分のみ調査区内に存在しており、検出面からの深さは32 cmまで調査した。埋土は3層に分けられ、炭化物を含んでいた。埋土から弥生時代後期のタタキ甕の肩部小片が出土した。

(7) S D 3 (図版3・12、写真図版14・15)

調査区中央部の南西壁寄りでS K 5の北隣に存在した溝で、南方向にのびており、長さ1.4 mを調査したが、調査区を超えて南に続いている。北部は幅約40 cmであるが、途中で幅約60 cmにまでひろがっている。検出面からの深さは北部で15 cm、南部で12 cmである。埋土は3層に分けられ、第1層は黒褐色を呈していた。埋土上面から弥生時代後期後半の甕体部と底部の小片が出土し、埋土からは弥生時代中期の底部片と庄内期と思われる甕体部片のほか、外面にタタキ目とカキ目、内面に青海波が残る古墳時代後期の須恵器甕体部片も出土している。

N R 1の埋没後のもので、古墳時代後期と推定しており、S K 5と重複し、S K 5よりも古い。

4. 平安時代後期以降

S B 4は柱穴出土土器から平安時代後期、S B 1も柱穴出土土器から平安時代末～鎌倉時代初頭と判

断され、SB2やSD1・SD2もその時期であろう。SK6は中世末～近世の可能性があり、SK7は不明であるが、この時期に含めた。

(1) SB4 (図版3・11、写真図版13・15)

調査区北部でSH3・SH4・SK8と重複して検出した、柱穴4基が並ぶ3間の柱列である。直交方向の柱穴が検出されなかったことから、塀や柵とするべきであるが、掘立柱建物跡と推定している。方向はN10°Wで、西方位に近い。

北端の柱穴はSP66と判断したが、北に隣接する柱穴の可能性もある。SP66中心からSP14の柱痕芯までの規模は5.51mで、各柱間は中心および芯々距離で、北から1.83m、1.87m、1.81mである。

SP66の掘形平面は楕円形で、長径25cm、短径22cmで小ぶりである。検出面からの深さは14cmで、柱痕は検出できなかった。その南側の柱穴は掘形平面がほぼ円形で直径24cm、検出面からの深さは約35cmである。柱痕平面は直径約12cmの円形である。SP12も掘形は直径23cmの平面円形で、検出面からの深さは21cmである。柱痕は直径約12cmの平面円形で、埋土上部から土師器皿が出土した。南端のSP14は掘形平面が楕円形で、長径26cm、短径23cmで、検出面からの深さは11cmを測る。柱痕は平面円形で、径約15cmである。

SP柱痕から出土した土師器皿(288)は平安時代後期のものと思われ、建物跡の廃絶時期を示すものと捉えている。ほかに、SP66埋土から出土した弥生時代後期のタタキ甕体部小片や、SP14上面で出土した縄文土器と思われる小片がある。

(2) SB1 (図版10、写真図版9)

調査区南部のSH1と重複した位置で検出したものである。南北方向ではN2°Eで、ほぼ西方位である。総柱建物と判断したもので、南北桁間2間以上、東西梁間2間以上のものである。その規模は柱痕の芯々距離で南北3.72m以上、東西4.8m以上である。北側は調査区外にひろがっている。梁方向柱間はSP39とその西側の柱穴間でやや短い2.24m、桁間はSP58からその南側の柱穴まで1.8m、そこからSP2までが1.92mである。

SP2の掘形平面は径28cm程度で円形に近く、検出面からの深さは32cmである。柱痕は径約14cmの円形で、柱痕埋土から白磁碗口縁部片(286)と須恵器埴口縁部片(287)が出土しており、建物跡が平安時代末～鎌倉時代初頭の時期と判断している。SP39・SP58・SP61の掘形も平面円形あるいはそれに近いもので、径28cm程度で、深さは15cm～22cmである。それらの柱痕は平面円形で、直径は14cm～16cmである。

SP2からは弥生時代後期土器小片も出土し、SP39の柱痕からは土師器・須恵器の小片、SP58の上面および柱痕から土師器小片、SP61の掘形からは古墳時代後期の可能性がある須恵器小片がそれぞれ出土している。

(3) SB2 (図版10、写真図版14)

調査区中央南部で検出したもので、南北2間以上、東西2間以上の総柱建物跡である。南北方向ではN6°Wで、ほぼ正方位である。南北規模は4.1m以上、東西規模は4.22m以上である。柱痕芯々の柱間は南北方向で1.7m・2.4m、東西方向では2.27m・1.95mで、不揃いである。

柱穴の掘形平面は円形で、最も大きいSP44で径33cm、その南にある小さいものは径21cmである。検出面からの掘形の深さは、判明しているもので30cm程度である。柱痕平面はいずれも円形で、直径が大きい東端のもので径約17cm、小さいSP28では径11cmである。

S P 28 の柱痕から中世と推定される土師器皿片が出土しており、S P 44 の柱痕からは土師器小片が出土している。柱穴規模が小さく、総柱建物跡であることや、ほぼ正方位であることから、S B 1 と同じ時期と推定している。

(4) S K 6 (図版 12、写真図版 15)

調査区北部で検出した土壌で、平面はかなり丸みを帯びた長方形に近いが、北端はひろがっているようにみえる。主軸は南北方向に近い。検出面での規模は、長さ約 1.94 m、幅 1.08 m 程度で、底面は丸みを帯びている。法面の傾斜は比較的緩く、底面は長さ 1.40 m、幅 56 cm の規模である。南半部には角礫～垂円礫の集積がみられた。埋土は 3 層に分けられ、第 2 層・第 3 層には土器片や炭化物を含んでおり、第 3 層でも灰黄褐色を呈していた。埋土から土鍋片や、古墳時代後期から中世後期までの土器小片が出土しており、中世末～近世の遺構と判断している。

(5) S K 7 (図版 3、写真図版 4)

調査区中央北部で検出した S K 7 は近世以降の攪乱の可能性はある。東西約 1.7 m、南北約 1.8 m の矩形に近い平面形を呈し、検出面からの深さは 13 cm である。底面は平坦で、柱穴がいくつか存在しているが、S K 7 に伴うものではないと判断している。埋土から弥生時代前期末～中期初頭の甕の口縁下部分の破片 (283) が出土しているが、N R 1 埋土に含まれていたものが混入した可能性が高い。

(6) S D 1 (図版 3・6、写真図版 9・14)

S H 1 の北隅で重複して検出した長さ 1.6 m、最大幅 30 cm で、検出面からの深さ 4 cm 程度の溝である。S H 1 の埋没後のもので、南側の溝も一連のものかもしれない。灰色を呈する埋土から土師器の皿片が出土している。埋土の色調と出土土器から中世以降のものと判断している。

(7) S D 2 (図版 2・3・6、写真図版 9)

S H 1 の南端部分で検出したが、溝か否かは不明である。S H 1 の埋土上面から切り込んでおり、北西～南東方向での幅は 70 cm、長さは 40 cm まで検出したが、調査区外にのびている。検出面からの深さは 10 cm で、灰色を呈する埋土から土師器羽釜や皿などの土師器小片が出土しており、埋土の色調や出土土器から中世溝と想定している。

5. 時期不明

(1) S P (柱穴) (図版 3・6・9・10・12、写真図版 16)

掘立柱建物跡として組み合わなかった柱穴については、それらの多くが平安時代後期～中世と思われるが、個別の時期認定が困難なことから時期不明としてまとめるが、柱穴からは遺物も出土しているものが多くあることから、柱穴の所属時期に関係なく、遺物が出土した柱穴について最後に述べておく。

縄文土器片は、調査区中央南部の S B 2 と重複する S P 60 の掘形から深鉢口縁部片 (289) が出土し、調査区南部北寄りの S P 30 の掘形から小片が土師器小片とともに出土している。

弥生時代中期土器片は、調査区中央の S P 23 の上面から煤が付着した甕と思われる体部破片が出土し、調査区中央北部の S P 42 の柱痕からは大型壺か甕の小片が出土しており、弥生中期と思われる。S P 42 出土土器は N R 1 埋土に含まれていたものの混入であろう。

弥生時代後期から古墳時代初頭および所属詳細時期不明の弥生土器片が出土した柱穴のうち、調査区南部の S H 1 と重複位置にあるものでは、S P 3 および S P 4 の上面および S P 4 の掘形埋土から弥生土器と思われる小片が出土し、S P 3 からは鉄器も出土している。S P 40 の掘形埋土からは後期中頃の

甕口縁部片、柱痕から後期の高坏か壺の口縁部片や土師器多数が出土した。なお、棒状の礫が出土した S P 32 の上面や柱痕から弥生土器・土師器の小片多数と断面セピア色の須恵器小片2点が出土している。

S B 2 と重複位置にある S P 27 の掘形埋土からは後期の甕底部片が出土している。

NR 1 埋没後の調査区中央北部では、S P 16 の柱痕から後期頃の細片、S P 18 の柱痕から庄内新段階頃の甕小片、掘形埋土から庄内期の壺小片が出土した。S P 22 の柱痕からは庄内期頃の壺小片、S P 26 の柱痕からは後期末頃の甕口縁部小片が、S P 33 の掘形からは石製品とともに赤色スリップを塗布した高坏口縁部や弥生時代末頃の細片が出土し、S P 55 の掘形埋土からは後期末頃の壺小片が出土した。

調査区中央部にある礎板石が検出された S P 62 では、掘形埋土から後期末頃の甕体部小片が出土した。

調査区北部の S K 8 や NR 1 と重複位置にある柱穴では、S P 11 の埋土から弥生時代後期土器片、S P 15 の掘形埋土から弥生時代末頃の甕口縁部細片が出土している。

調査区北部の S H 4 や NR 1 と重複位置にある S P 13 の柱痕からは後期～庄内期の土器小片、S P 59 の柱痕からは後期末頃の器台か壺の小片が須恵器とともに出土し、S P 68 の掘形埋土からは弥生末頃の高坏小片が須恵器細片とともに出土している。S H 3 や NR 1 と重複位置にある S P 69 の柱痕からは後期弥生土器か土師器の小片が出土している。

土師器では、時期が判明するものが少ないが、出土した柱穴のうち、調査区南端にある S P 5 の柱痕から小片・細片、S B 1 と重複位置にある S P 43 の柱痕から小片がそれぞれ出土している。また、S H 1 や S B 1 と重複位置にある S P 36 の柱痕および掘形から小片、S P 38 の柱痕から中世の可能性がある皿小片が出土し、S H 1 と重複位置にある S P 35 の上面および柱痕から小片が出土している。

調査区南部では、S P 30 の柱痕から小片が須恵器小片とともに出土し、S P 31 の柱痕から小片、S P 46 の上面および柱痕から細片がそれぞれ出土している。また、NR 1 埋没後の調査区南部にある S P 53 の掘形埋土からは中世末～近世と思われる塙の口縁部片(291)が出土している。

S B 2 と重複位置にある柱穴では、S P 27 の柱痕からは異形口縁部の破片(292)のほか柱痕から土師器小片が出土し、S P 29 の柱痕からは中世の可能性のある土師器皿の小片が出土した。

NR 1 埋没後の調査区中央部にある S P 8 の上面からは小片、NR 1 埋没後の調査区中央北部にある柱穴では、S P 17 の上面および柱痕から平安時代末頃と思われる土師器皿片が須恵器塙の破片とともに出土し、S P 20 の上面および柱痕、S P 21 の上面および柱痕、S P 52 の掘形から小片がそれぞれ出土し、S P 33 の上面および柱痕から小片とササ入り焼粘土塊が出土している。

NR 1 埋没後の調査区北部では、S P 45 の上面および柱痕から中世の可能性のある皿片のほか小片が出土し、S K 8 や NR 1 と重複位置にある S P 15 の上面および柱痕から細片、S H 4 や NR 1 と重複位置にある S P 10 の埋土から小片が出土している。S H 3 や NR 1 と重複位置にある柱穴では、S P 9 と S P 48 の上面および柱痕から小片がそれぞれ出土している。

須恵器が出土した柱穴のうち、調査区南東部に存在する柱穴では、S P 1 の上面からは古墳時代の蓋のつまみ部分(290)と、外面に格子風タタキ、内面当て具痕を磨り消した甕小片が出土し、S P 5 の上面からは古墳時代の小片が出土し、S P 63 の掘形埋土から古墳時代後期の可能性のある壺と思われる小片が出土した。また、S B 1 と重複する位置に存在する S P 43 の柱痕からは壺・瓶類の小片が出土した。

S H 1 や S B 1 と重複する位置に存在する S P 36 の掘形埋土からは壺か甕の小片が出土し、S H 1 と重複位置に存在するものでは、S P 3 の柱痕から糸切りと思われる平安後期～中世初期の塙底部片が

出土し、S P 4の柱痕からも同時期と思われる埴口縁部片が出土し、S P 64の掘形埋土からは外面タタキで内面青海波の古墳時代後期以降の甕体部片と焼成があまい坏と思われる破片や、土師器片が出土した。

S B 2と重複位置に存在するS P 27の柱痕からは破片が出土している。

NR 1埋没後の調査区中央北部では、S P 17の上面および柱痕から平安時代末頃と思われる埴口縁部片、S P 19の上面からは外面ヘラケズリの坏底部で焼成があまい小片が出土している。

S H 4やNR 1と重複する位置では、S P 59の柱痕から外面にタタキ・カキ目があり、内面青海波で古墳時代後期と思われる甕体部片が出土し、S P 68の掘形埋土からは坏の口縁部か、たちあがり部の細片が出土している。

S H 3やNR 1と重複する位置では、S P 47埋土とS P 67の掘形埋土から6世紀末～7世紀頃の甕口縁部小片が出土し、S P 49の柱痕からは坏か埴の小片が出土している。

金属器では、S H 1と重複するS P 3の上面(M19)と、S B 2と重複するS P 25の柱痕部分から鉄製の角釘(M20)が出土している。

石製品については、調査区中央部のS P 24の柱痕から石鏃(S 11)が出土したが、NR 1埋土に含まれていたものの混入であろう。調査区中央北部のS P 33の柱痕脇の掘形からは柱押さえ石として再利用されたと思われる石皿・台石(S 14)が出土した。調査区北部のS P 41上面からは目的不明であるが、再利用されたと推定されるS 15の磨石・敲石が出土した。また、石製品ではないが、S H 1と重複するS P 32の上面で棒状の礫が出土した。なお、調査区中央部のS P 62の掘形底には礎板石が置かれており、礎板石のずれ防止と思われる礫も添えられていた。

第2節 遺物

出土した遺物には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・磁器といった土器類94点、石器・石製品7点、鉄器4点があり、報告した総数は105点である。以下、遺構別に出土遺物を述べる。

1. NR1

(1) 土器

NR1から出土した土器には、縄文土器・弥生土器・土師器などがあり、縄文時代・弥生時代前期末～中期・弥生時代末～古墳時代初頭・中世に大きく分けられる。

① 縄文土器 (図版27、写真図版31)

自然流路NR1から出土した縄文土器には201～207がある。いずれも後期後半と思われる。

201は大きな2破片で、同一個体と判断した。縁帯文系の深鉢口縁部で、外面に2条の沈線を施す。元住吉山Ⅱ式と思われる。器表は平滑になっており、内外面調整はナデであろう。推定口径は28.4cmを測る。

202は粗製の深鉢で、口縁部内外面に各1条の沈線をめぐらす。推定口径は26.8cmで、内外面は横方向の条痕で仕上げている。口縁部外面の1箇所へラのようなものでおさえた部分が認められ、沈線が口縁部上端に向かって消失していることから、波状口縁を意識した波頭部の可能性が高い。

203も粗製深鉢で口縁部の小片である。沈線は施さずに巻貝条痕で仕上げている。

204は縁帯文系深鉢の口縁部小片で、口縁部は欠失している。横方向の沈線を施し、縁部直下の沈線は太い。外面はナデ仕上げのようである。元住吉山式であろうか。

205は沈線を施した部分が残存する口縁部付近の小片で、縁帯文系であろう。上端の欠失部にも沈線の痕跡が認められる。外面はヨコナデのようである。

206は凹線のような沈線が残存する小片で、口縁部付近と思われる。内外面調整は条痕のようである。

207は深鉢体上部の破片で、外面下半に細かな縄文、上半には条痕を施している。

② 弥生土器・土師器 (図版27・28、写真図版31～33)

a. 弥生時代前期末～中期

NR1から出土した弥生時代前期末～中期の土器のうち、中期後半の鉢217の1点以外は前期末～中期前葉のものである。器種には壺・甕・底部・高坏がある。

壺 壺には208～210の前期末～中期初頭のもの、211の中期前葉と思われるものがある。

208は壺体部の破片で、同一個体と思われる6点を報告する。SK6の埋土中やSK7の下端からも破片が出土している。体部最大径は推定50.0cmで、肩部と体部中央に断面三角形の突帯を密にそれぞれ3条貼付し、体部上半にあたる突帯間には弧状の突帯が貼付されていた剥離痕跡が残り、突帯外端にあたる位置に突帯貼付のためのケガキ線がへラ描きされている。外面には肩部と体部下半にへラミガキが残り、内面はナデのようである。肩部内面にはユビオサエ痕も残る。

209は3条の突帯を貼付する体部破片で、突帯には押圧文を加えている。3条の突帯のうち、下端の1条のみやや離れた位置に貼付されている。体部外面調整はナデかミガキのようであり、内面は器表が剥離しているが、ナデのようである。

210も押圧文突帯を貼付した壺肩部の破片で、209と同一個体かもしれない。突帯数は2条で、上下

はヨコナデ調整である。内面にはユビオサエ痕跡が顕著に残る。

211は壺頸部の可能性のある破片で、外面には4条の沈線のような太条の櫛描直線文を上下に間隔を空けて施している。内面には2条の突帯状のものが認められ、その上部にも膨らみの一部が認められる。中期前葉の可能性が高い。

甕 甕には212～216の5点があり、いずれも前期末～中期初頭のものである。

212は2点の破片である。端部に刻目を施した如意形の口縁部で、外面口縁部下に2条の沈線で直線文を描いている。内外面はナデ調整で、外面には焦げ状になった部分が多く認められ、一部煤も残存している。推定口径は23.7cmである。

213は如意形口縁部の小片で、口縁端部は面をもつ。外面口縁部直下に4条の櫛描直線文を施す。外面はヨコナデ、内面には一部タテハケ痕跡が残る。

214は端部を欠失するが、逆L形口縁部の破片である。口縁端部の刻目の有無は不明であるが、外面口縁部下に6条以上の櫛描直線文を施す。外面ヨコナデ、内面はナデ調整で、色調は淡く煤などの痕跡は認められない。

215は無文の逆L形口縁部小片である。内外面はナデ調整。

216は、流路検出面から深さ約60cmの部分から出土した逆L形口縁部の甕または鉢で、大きな破片2点である。口縁端部には刻目を施しているが、口縁部下は無文である。内外面ナデ調整で、口径は推定20.5cmである。外面には薄く煤が付着している。

底部 底部には218～220の3点があり、いずれも前期末～中期前葉の範疇でとらえられるものである。

218は中期初頭頃の甕と思われる底部で、底面は焦げたようになっている。体部外面はタテハケ調整のようであるが極めて不明瞭である。内面はナデ調整。底径は推定8.4cmで、胎土に大粒砂粒を含む。

219は中期前葉の甕の可能性のある底部で、外面が焦げたようになっている。胎土には大粒の砂粒を含んでいる。体部内外面はヨコナデ調整である。底径は推定8.6cmである。

220は甕または壺の底部で、体部外面はタテハケ調整で、内面はナデのようである。胎土に大粒の砂粒を含んでいる。推定底径は6.0cmである。中期前葉と思われる。

高坏 高坏は脚端部片の221で、1点のみである。

221は高坏と思われる脚端部片で、胎土に大粒の砂粒を含んでいる。外面ヨコナデ、内面ナデ調整で器壁は厚い。端部は焼け焦げたようになっている。脚端径は推定25.7cmである。前期末～中期初頭と推定している。

鉢 鉢は中期後葉と思われる217の1点のみである。

217は鉢と思われる口縁部小片で、外反気味の口縁部で端部は大きく拡張し、端面には2条の凹線文を施す。内外面ナデ仕上げである。

b. 弥生時代後期～古墳時代前期

NR1の埋土上層部から出土した土器がこの時期であり、甕口縁部と底部の2点がある。

222は甕口縁部で、埋土最上層からの出土である。口縁端部は若干上方につまみ上げ、端面に凹線を施している。体部と口縁部境の屈曲部内面はやや鈍い。口縁部は内外面ともヨコナデで、口径は推定14.3cmである。庄内期の所産である。

223は後期と推定される甕または壺の底部で、内面および外面の一部が焦げたようになっている。底面には靱圧痕が認められる。体部外面はタテハケ調整、内面は円を描くようにナデを施している。底径

は8.7 cmで、NR1埋土上層から出土している。

③ 中世土器 (図版28、写真図版32)

中世土器には出土層位不明で224の小皿1点が認められた。柱穴内に残っていた土器の可能性はある。

224は瓦器または黒色土器の小皿小片で、推定口径は9.4 cmである。器表には黒燻が残る。西播磨地域で見られる瓦器と思われる。平安時代末～鎌倉時代初頭頃と推定している。

(2) 石器

NR1から出土した石器は、S9の石鏃1点である。流路検出面から約30 cm下面で出土した。

① 石 鏃 (図版33、写真図版40)

S9は逆刺部分の片方が短い、折損ではないようである。長さ20.0 mm、幅14.5 mm、厚さ3.5 mmで重量は0.7 gを測る。讃岐産のサヌカイトを素材にしている。

2. SK8

SK8出土の土器は52点を報告する。ほかに石製品1点がある。

(1) 土 器

SK8出土土器はすべて弥生時代後期のもので、壺・甕・鉢類・高坏・器台・脚部・製塩土器がある。

① 弥生土器 (図版29～31、写真図版33～37)

a. 弥生時代後期

壺 壺には16点のうち、長頸壺4点・細頸壺2点・広口壺5点があり、ほかに体部2点と底部2点がある。また、ミニチュアのものも1点認められた。

225は長頸壺の口頸部で、口縁部は受口状になり、外面に細い凹線4条とその直下に弱い凹線1条を施している。口縁端部は尖り気味で推定口径は10.9 cmである。頸部外面は縦方向のヘラミガキで、頸基部には肩部ヘラミガキ原体の当たり痕が認められる。頸部内面はハケ状の箇所があるものの、ナデやヨコナデ仕上げである。口縁部はヨコナデ調整で内面はやや強くハケ目状にみえる。

226は口縁部が外反気味に外上方に開く長頸壺の口頸部で、口縁部はヨコナデ調整である。頸部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヨコハケ仕上げである。一部残存する肩部外面はヘラミガキ調整、内面にはユビオサエ痕が多く認められる。推定口径11.4 cmである。

227は細頸壺と判断される形状の口頸部で、口径は11.3 cmを測る。頸部内面下半には粘土紐巻き上げ痕跡とユビオサエが明瞭に残り、上半はハケ調整である。頸部外面は縦ヘラミガキを密に施す。口縁部はヨコナデ調整である。色調などから226とともに237や238が体部になる可能性がある。

228は口縁部が外反して開く口頸部で細頸壺であろう。口縁端部外面直下に凹線を施す。頸部内外面はヨコナデ後ヘラミガキを縦方向に施している。口径は10.5 cmを測る。

229は端部にほぼ水平な面をもつ長頸壺の口縁部から肩部までの破片で、推定口径は10.8 cmである。タタキ成形で、外面には太筋のヘラミガキを縦方向に施し、内面はヘラケズリである。口縁部内面にはハケを施しているが、口縁部にヨコナデは施さない。

230は推定口径9.0 cmの長頸壺の口頸部片である。外上方に少し開く口縁部で、端部は丸く仕上げている。内面にはヨコハケを施し、下部に粘土接合痕跡を残す。外面はナデ仕上げである。

231は頸部が短い広口壺の口頸部で、口縁端部を下方に拡張して、端部に3条の凹線文を施す。口径は推定16.0 cmである。頸部外面は16条～20条/cmの細かいタテハケ、内面はヨコナデである。

232は推定口径12.6cmとやや小型の広口壺口頸部で、口縁部は外反しながら横に近い外上方に開く。口縁端部は上下に拡張するが、端面には1条の細い凹線を上部に施すのみである。内外面はヨコナデ仕上げである。

233は口径16.0cm、体部最大径は推定32.3cmの広口壺である。口縁端部は少し拡張するのみであるが、端面に2条の細い擬凹線を施す。頸部内外面はヨコナデのようである。体部外面上半にはハケ痕跡、下半は縦方向のヘラミガキのようであるが、凶化できなかった。体部内面は斜め方向のハケ後ナデを加えている。肩部内面にはユビオサエ痕が多く残る。

234は外上方に直線的に開く広口壺の口頸部で、推定口径は18.9cmである。口縁端部は下方に少し拡張するのみであるが、2～3条の擬凹線を施している。頸部外面にはタタキ目が一部残るが、器表は磨滅している。内面はヨコハケ仕上げである。

235は234と胎土・色調・つくりが酷似するが、口縁部長が短いことから別個体としたものの、同一個体の可能性が高いものである。口縁端部には2条の擬凹線を施し、口縁部内外面はヨコナデである。推定口径は20.3cmである。

236は口縁部を欠失するミニチュアの壺で、残存高6.6cm、体部最大径5.2cm、底部は平底で底径3.2cmを測る。タタキ成形と思われる痕跡が体部に認められるが、器表が磨滅している。頸部にはU字形と想定される切り欠きに似た窪みがあり、注口部分であった可能性がある。

237は平底の壺体部で、扁球形を呈し、器厚は薄い。外面調整は体部上半が不明であるが、下半はハケ後細筋のヘラミガキを施している。内面はハケ調整である。体部最大径は推定20.2cmである。

238は底部を欠失する壺体部下半の破片で、器厚は薄い。外面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。

239は壺と思われる底部である。体部はタタキ成形で、内面はイタナデを施している。突出した底部の周囲にはユビオサエが認められ、底面はヘラケズリ後ナデを施している。底径は5.6cmである。

240の底部は甕の可能性もあるが、外面調整がタテハケ後ヘラミガキであることから壺と想定した。内面はイタナデ調整で、底部には粘土継ぎ目部分の剥離痕跡が認められ、底部輪台技法のようである。底径は推定4.9cmである。

甕 甕は底部も含めて241～255の15点を報告する。口縁部は端部に面をもつもので、底部は平底のものである。また、体部はタタキ成形と判明しているものが大半を占める。

241は完形に復元できた甕である。口径14.2cm、器高20.2cm、体部最大径17.9cm、底径4.9cmを測る。外上方に直線的にのびる口縁部はヨコナデ調整で、端面は凹面をなす。体部はタタキ成形で、外面上半にタテハケを加えているが、下半は被熱により器表が荒れているため調整痕は不明である。体部内面下半はヘラケズリ、ナデ、ユビオサエを施している。内面上半はナデであろう。底面にはヘラケズリを加えている。体部外面下部は二次被熱により紫色に変色している。

242は推定口径15.3cm、体部最大径は推定21.0cmである。タタキ成形で外面の一部にタテハケを加える。体部内面下半は縦方向のヘラケズリ、上半はハケ調整である。口縁部内面はヨコハケで、上半と外面はヨコナデを加えている。口縁端部は下方に拡張しているが、無文である。

243は推定口径12.8cm、体部最大径は推定14.7cmで少し小ぶりの甕の破片である。下方に少し拡張した口縁端部には面をもち、1～2条の凹線を施している。体部はタタキ成形でやや疎らにタテハケを加えている。体部内面は荒掻きに近いヘラケズリである。胎土に微細な角閃石を含み茶褐色を呈することから、讃岐系の胎土であると思われる。

244は口縁端部を上下に少し拡張して端面を際立たせたものである。体部から口縁部への屈曲は鈍い。体部はやや細筋のタタキ成形で、外面はハケをやや密に重ねている。内面はヨコハケ仕上げである。推定口径は17.6cm、体部最大径は推定19.6cmで、体部外面には煤のようなものが薄く付着している。

245は口縁部と体部の接合ができなかったものである。口縁端部には面をもつが、上端が尖って庄内形の甕を彷彿とさせる。丸みを帯びた体部の器壁は薄く、やや細筋のタタキ成形後、外面はタテハケを密に施してタタキ目を消している。内面はユビオサエ後ヨコハケで仕上げている。推定口径14.0cm、体部最大径は推定で18.0cmである。

246は推定口径16.9cmの口縁部小片で、口縁端部は下方に若干拡張し、端面に擬凹線を4条ほど施す。口縁部内外面から肩部外面はヨコナデ調整、肩部内面はヘラケズリ後ヨコナデ仕上げである。

247は体部から鋭く外折して横外上方に直線的にのびる口縁部小片である。口縁端部は上下に少し拡張し、端部には面をもつ。調整不明の肩部内面以外はヨコナデ調整である。口径は推定で12.6cmである。

248は太筋タタキ成形の破片で、推定口径15.3cmの口縁端部は少し拡張し、端面には凹面部分がある。肩部の器厚は厚く、内面はヘラケズリか荒掻きである。

249は壺に似た形態の破片で、2片がある。推定口径は16.8cmである。口縁端部は上下に少し拡張し、端面は凹面をなす。端面には4条の細い擬凹線を施している。口縁部内外面はヨコナデで、内面はヨコハケ後に施す。体部外面はタテハケ、内面は左方向のヘラケズリである。

250は体部下半で、底部は突出しない平底である。底径は4.9cmを測る。タタキ成形後体部外面にタテハケをやや密に施し、内面は縦方向のヘラケズリである。器厚はやや薄い。外面のほぼ全面に薄く煤が付着し、底から10cmほど上側には焦げ跡が帯状に遺存している。

251はタタキ成形後、外面細目ハケ調整を密に施した甕底部で、底面にも細目のハケを施している。内面はヘラケズリである。底径は4.4cmを測る。

252の底部は押しつぶされたドーナツ状上げ底で、木葉痕が残る。底径は4.1cmである。やや細筋のタタキ成形で、体部器厚は薄く、内面は細かいハケで仕上げている。

253は底径4.7cmで突出気味の平底底部である。タタキ成形で内面はヘラケズリ後ハケを施している。

254の底部は外周に粘土を貼り付けて突出した平底としているようである。底径は4.7cmで底面に強いナデを施すが、一部ハケが残存している。体部はタタキ成形であるが、密に施したハケによりタタキ目を消している。体部内面は調整不明である。体部外面には煤が薄く残存している。

255は甕と推定される底部で、底径は3.2cmと小さく、ドーナツ状上げ底になっている。底面のドーナツ部分には幅2mmの茎状圧痕が残る。体部外面はハケ調整、内面はヘラミガキのようである。

鉢類 鉢類には有孔鉢256のほか、脚台が付くものや平底に近いもの、口縁部が外反するものなど多種があり、鉢の可能性が高い263がある。

256は有孔鉢で、完形に復元できた。口径22.7cm、器高14.6cm、底径2.3cmで、孔径は0.9cm前後である。タタキ成形で、外面には少し疎らにハケを施す。内面はハケ調整で、下半は螺旋放射状に施す。口縁部はヨコナデで仕上げている。

257は脚台が付く小型の鉢で、完形に復元できた。推定口径9.6cm、推定器高5.6cm、脚台径は推定で4.5cmである。タタキ成形で、外面にはナデ、内面は横後縦方向のナデを施している。脚台部内外面にはユビオサエ痕が残る。底部中央に径1cm程度と推定される穿孔があり、焼成前穿孔のようであることから有孔鉢としておきたい。

258 は外反する口縁部の鉢破片である。口縁端部は上下に拡張し面をもつ。口縁部内外面はヨコナデ調整である。タタキ成形と思われ、体部外面はナデ、内面は横方向のイタナデもしくはヘラケズリで、ヘラミガキを加えている。推定口径は 18.9 cm である。

259 は台付鉢と判断した。塊形高坏に似た形状を呈する破片で、推定口径は 10.2 cm である。口縁部はヨコナデ調整であるが、外面の口縁端部直下にはユビオサエ痕多数が明瞭に残る。外面下半はナデで、下端にはヘラケズリが認められる。内面は縦方向のヘラミガキを密に施している。

260 は鉢で、口縁部を欠失する。突出した底部であるが底面は上げ底状になっており、底面に不明原体の圧痕が認められる。体部はタタキ成形後外面にヨコナデを施し、内面はイタナデ調整である。体部の器厚は薄い。底部外周にも縦方向のイタナデを施している。底径は 3.6 cm である。

261 は底径 3.7 cm のやや突出した底部で、タタキ成形後体部外面はタタキ目をナデ消している。内面はイタナデ調整である。器厚は薄い。

262 の底部は貼付けの脚台になっており、外側に大きくひろがる。脚端径は 6.3 cm である。脚台上部にはユビオサエ痕が多く残る。体部内外面はナデ調整である。

263 は鉢の可能性が高い底部の破片で、底部は脚台に近い形状である。貼付けの脚台径は 4.4 cm である。体部内面はハケ後ヘラミガキで、外面にはナデが多く残る。

高坏 高坏の坏部は 264 の 1 点のみである。ほかに高坏と思われる脚部があるが、脚部として後述する。

264 は坏部の半分強の有稜高杯の破片で、口径は 29.8 cm、残存高は 6.2 cm である。坏上部は外反しながら大きく外上方に開き、口縁部付近の器厚は徐々に減じている。坏上部がヨコナデである以外は内外面ヘラミガキ仕上げである。形態的には西播磨地域編年（長友朋子・田中元浩 2007）の V-4（V 期 4 段階）にあたり、V 期後半古相に位置づけられている。

器台 器台の受部には 265～267 の 3 点があり、ほかに器台と思われる脚部もあるが、後述する。

265 は口縁端部を上下に大きく拡張するとともに器壁を厚くするもので、口縁端部には 3 条の凹線を施しているが、下端のものは不明瞭である。推定口径は 30.9 cm で、口縁部内外面はヨコナデ、受部内面はヘラミガキ、受部外面は粗いハケ後ナデを施している。外面口縁部直下に 3 箇所の深い刺突痕があり、直径約 8 mm の竹管状のものや半截竹管状のものなどで、深さは 5 mm 前後である。おそらく、土器製作時や乾燥時に変形するのを防ぐための支え棒を刺した痕跡と思われる。

266 は口縁端部を主として上方に肥厚させ拡張したもので、端部外面には 2 条の鈍い凹線を施している。受部内外面はヘラミガキ仕上げで、口縁端部のみヨコナデである。推定口径は 24.2 cm である。

267 は口縁端部の破片で、推定口径は 19.0 cm である。壺口縁部の可能性も残る。口縁端部を下方に拡張して垂下させたような形状で、端部外面と端部に近い内面に櫛描波状文を施し、端部上端に刻目を加えている。

脚部 脚部には、高坏脚部と思われる 268～272 の 5 点と、器台の裾部と思われる 274 のほか、器種不明脚部の 273 がある。

268 はほぼ完形に接合できた中実の脚部で、脚端径は 15.0 cm である。直径 1.1 cm 程度の円形透孔を 3 方向に穿つ。脚柱部にヘラミガキ痕が残る以外は調整不明である。外面全体に赤褐色のスリップを塗布していたようである。

269 も中実の脚部で、裾部は半分弱遺存している。脚端径は推定で 12.3 cm、直径 1.1 cm 程度の円形透孔を 4 方向に穿つ。外面には赤褐色のスリップを塗布していたようである。

270 は中空の脚柱部で裾部を欠失する。脚柱下部に直径 1.3 cm 程度の円形透孔を 3 方向に穿つ。外面はハケ調整で一部ヘラミガキが認められる。内面下部はナデのようであり、内面上部にはシボリ目が残る。内面上端充填部には下方からの刺突痕が残る。

271 の脚端部は同一個体であるが、接合できなかつた。推定脚端径は 13.8 cm である。中実の脚柱部で、外面はヘラミガキ、内面はヨコナデで上部にシボリ目が残る。透孔は認められない。外面に赤褐色のスリップを塗布していた可能性がある。

272 は裾部を欠失する中実の脚である。外面はハケ調整のようである。3 方向に円形透孔を穿つ。外面および坏部内面に橙色～赤褐色～赤紫色のスリップが所々残存している。

273 は推定脚端径 15.3 cm の破片である。高坏の可能性はあるが不明である。外面ヘラミガキ、内面ハケ後ヨコナデを施している。円形透孔が一部に残り、3 方向の可能性はある。

274 は器台と思われる裾部である。推定脚端径 24.2 cm で、端部を少し拡張して端面に 2 状の凹線を施す。外面ヘラミガキ、内面ハケ調整でナデを加えている。

製塩土器 275・276 は脚台式と推定される製塩土器の口縁部小片である。

275 は土層観察用畔内から出土したもので、外面に粘土接合痕と指頭圧痕が残り、内面はユビオサエ後ハケを施している。推定口径は 6.5 cm である。明瞭な二次受熱痕は認められない。

276 は推定口径 12.2 cm の口縁部片で、端部は不整形である。内外面に指頭圧痕、内面には縦方向のナデを施している。外面口縁端部直下に凹線状の窪みがあるが、タタキ成形の痕跡かもしれない。二次受熱痕は認められない。

(2) 石製品

S K 8 の上部土器群中に石製品が 1 点認められた。

① 石皿・台石 (図版 33、写真図版 40)

S 13 は台石または石皿で、一部が折損している。上面の中央部が若干窪み、表面は平滑になっている。長さ 107.0 mm、残存幅 135.5 mm、厚さ 29.3 mm で、残存重量は 702.2 g である。石材は流紋岩のようである。

3. S H 1

S H 1 出土の土器は 4 点を報告する。ほかに鉄製品 1 点がある。

(1) 土器

S H 1 出土の土器は須恵器・土師器があり、すべて飛鳥時代を含む古墳時代後期のものである。

① 須恵器 (図版 32、写真図版 38)

a. 古墳時代後期

須恵器には竈脇で出土した高坏 277 のほか、竈埋土から出土した坏口縁部小片がある。

高坏 277 の脚部はほぼ完形であるが、坏部は坏底部の一部が残存するのみである。脚部は外反し、端部は水平にのびたのち、脚端部は上下に少し拡張する。脚端径は 8.3 cm を測る。坏底部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデを施している。坏部口径は 12 cm を超えると思われ、T K 217 型式期古段階あるいは T K 209 型式期の 7 世紀前半の所産と考えられる。また、竈埋土出土の坏口縁部は T K 217 型式期頃と思われる。

② 土師器 (図版 32、写真図版 38)

a. 古墳時代後期

土師器には竈埋土から出土した製塩土器 278・279、S H 1 南東隅溝状落込み出土の甕口縁部 280 の

ほか、竈埋土から出土した土師器甕体部片やSH1埋土出土の弥生後期底部片がある。

製塩土器 278・279ともに丸底式製塩土器の破片である。278は2点あり、推定口径は12.6cmである。口縁端部は歪みが大きく、体部内面にはユビオサエが認められる。内面が黒く焦げたようになっている破片が1点ある。279は3点の破片があり、内面には指頭圧痕が所々残る。口縁端部は歪である。口径は不明であるが、20cm程度になるかもしれない。顕著な二次被熱は観察できなかった。

甕 280は甕口縁部小片で、口径は不明である。

(2) 鉄製品

SH1北西隅の埋土下方で出土した鉄角釘がある。

① 鉄釘 (図版33、写真図版39)

鉄釘 M18は鉄製角釘である。頭部および先端を欠失し、残存長は4.3cmである。頭部に近い部分で幅8.5mm、厚さ6.0mmとやや太いものである。出土層位などから混入の可能性は低い。

4. SH2

SH2出土の遺物では土師器1点を報告する。

(1) 土器

SH2出土の土器には土師器があり、古墳時代中期後半～後期初頭の頃のものと思われる。

① 土師器 (図版32、写真図版38)

a. 古墳時代中期後半～後期初頭

土師器には焚口に近い竈袖先端部分で出土した甗281のほか、竈ぎわから出土した土師器甕小片がある。
甗 推定口径31.0cm、器高26.0cmの281は、3分の1程度の破片である。体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリで上部にはハケ目が残る。外面に把手の剥離痕が残るが、把手は欠失している。底部は小さな破片が遺存するのみであるが、蒸気孔の形状は中央が丸く周囲のものは楕円形であることがわかる。

5. SH4

SH4出土の遺物では弥生土器1点を報告する。

(1) 土器

SH4出土の土器には弥生土器があり、弥生時代後期中頃のものと思われる。

① 弥生土器 (図版32、写真図版38)

a. 弥生時代後期中頃

SH4南端の埋土あるいは周壁溝埋土から出土した甕と思われる底部片がある。
底部 推定底径7.4cmの底部片282は、甕と思われる。タタキ成形で内面にはヘラケズリを加えている。底面はユビで周囲をつまんで少し上げ底状になっている。二次受熱により外面は赤紫色に変色しており、内面にはコゲ状のものも薄く付着している。

6. SK7

SK7出土の遺物では弥生土器1点を報告する。

(1) 土器

SK7出土の土器には弥生土器があり、弥生時代前期末～中期初頭のものと思われる。

① 弥生土器 (図版32、写真図版39)

a. 弥生時代前期末～中期初頭

S K 7の埋土から出土した甕の破片がある。NR 1埋土の土器がS K 7埋土に混入したものであろう。甕 283は口縁部を欠失するが、推定体部径22 cm程度の甕破片である。外面口縁部下に3条の篋描沈線文をめぐらす。内面には縦方向のナデ痕が顕著に遺存し、外面はナデ調整である。如意形口縁と思われる。

7. S B 5

S B 5を構成する柱穴出土の遺物では弥生土器2点と石器1点を報告する。

(1) 土器

S B 5出土の土器には弥生土器があり、弥生時代前期末～中期初頭と弥生時代後期のものがある。

① 弥生土器 (図版32、写真図版39)

a. 弥生時代前期末～中期初頭

S B 5のS P 65の掘形から出土した壺の小片がある。

壺 284は壺肩部の破片で、外面に3条以上の篋描沈線文を施す。外面調整はヘラミガキのようである。NR 1埋土中の土器が混入したものであろう。

b. 弥生時代後期

S B 5のS P 50の柱痕から出土した底部の小片がある。

底部 285は甕と思われる底部片で、底径は推定2.9 cmの平底である。外面に平行タタキが残るが、内面は調整不明である。後期でも中葉以降のもので、NR 1やS H 3の埋土中に含まれていた土器が混入したものであろう。

(2) 石器

石器はS P 50の掘形から1点出土した。

① 石鎌 (図版33、写真図版40)

S 10は浅い凹基式の石鎌で、一部を欠失する。残存長は21.6 mm、残存幅14.2 mm、厚さ3.5 mmで、残存重量は0.9 gである。サヌカイト製で金山産と思われる。NR 1の埋土中に含まれていたものであろう。

8. S B 1

S B 1を構成する柱穴S P 2出土遺物のうち、磁器と須恵器の各1点を報告する。

(1) 土器類

S B 1出土の土器類には白磁と須恵器があり、ともに平安時代末～鎌倉時代初頭のものであろう。

① 白磁 (図版32、写真図版39)

a. 平安時代末～鎌倉時代初頭

S B 1のS P 2の柱痕から出土した白磁碗の口縁部小片がある。

白磁碗 286は推定口径16.5 cmの白磁碗IV類(横田賢次郎・森田 勉 1978)で、口縁部を玉縁にしたものである。残存表面全体に施釉されている。内面には使用による磨滅が認められる。

② 須恵器 (図版32、写真図版39)

a. 平安時代末～鎌倉時代初頭

S B 1のS P 2の柱痕から出土した須恵器碗の口縁部小片がある。

埴 287 の須恵器埴口縁部片は推定口径 14.2 cm で、口縁端部は少し厚くなって丸くおさめている。この特徴から平安時代末～鎌倉時代初頭の時期のものと思われる。内外面ロクロナデで、明瞭な重ね焼きの痕跡は認められない。286 と同様に S B 1 の時期を示すものと考えている。

9. S B 4

S B 4 を構成する柱穴出土土器のうち、S P 12 出土の土師器 1 点を報告する。

(1) 土器

報告する S B 4 出土の土器には土師器があり、ともに平安時代後期のものと推定している。

① 土師器 (図版 32、写真図版 38)

a. 平安時代後期

S B 4 の S P 12 の柱痕から出土した土師器皿がある。

皿 288 は約 3 分の 1 の破片で、推定口径は 10.7 cm、器高は 3.0 cm である。口縁部はやや歪で、底部外面も凹凸が目立ち、掌痕跡のようにもみえる。内外面ヨコナデ調整である。S B 4 の時期を示すものと判断している。

10. 柱穴

掘立柱建物跡と認識できなかった柱穴から出土した遺物のうち、土器 4 点と鉄製品 2 点、石器・石製品 3 点を報告する。

(1) 土器

柱穴出土の土器には縄文土器・須恵器・土師器があり、いずれも小片である。

① 縄文土器 (図版 32、写真図版 39)

a. 縄文時代後期

調査区中央南部の S P 60 の掘形から出土した縄文土器深鉢小片がある。

深鉢 289 は口縁部小片で、外面は条痕のようにみえる。時期不明であるが、後期としておきたい。

② 須恵器 (図版 32、写真図版 39)

a. 古墳時代中期末～後期前半

調査区南東端の S P 1 上面から出土した須恵器坏類蓋がある。

蓋 290 は蓋のつまみ部分の破片で、側面の外傾度は低く、上面中央は少し盛り上がっている。回転ナデ調整で、外径は 3.2 cm である。

③ 土師器 (図版 32、写真図版 39)

a. 中世末～近世・時期不明

調査区南東部西端の S P 53 掘形から出土した埴と調査区中央南部の S P 27 から出土した異形土師器がある。

埴 291 は口縁部の小破片で、推定口径は 25.0 cm である。鉄鉢形の土鍋で、体部はタタキ成形、外面には煤が付着している。S P 53 の時期を示すものと判断している。

不明土師器 292 は口縁部の破片で、歪みが大きいものである。口縁端部は上方に少しひきのばし、端部付近の内面には煤が付着している。甕のようにみえるが、他の形態のもの可能性がある。弥生時代後期後半から古墳時代の所産のようにも思えるが、判断できない。

(2) 鉄製品

鉄製品には角釘があり、調査区南部のSH1と重複したSP3の上面から出土したM19と、調査区中央南部のSP25の柱痕から出土したM20がある。

① 鉄釘 (図版33、写真図版39)

鉄釘 M19は鉄製角釘で、先端部を大きく欠失する。残存長2.6cmで、断面は矩形を呈し、長辺0.5cm、短辺0.4cmである。釘頭部は折り曲げられるが、巻き込みは認められない。釘頭部上面は丸みをもった矩形を呈し、長辺1.1cm、短辺1.0cmである。表面には木質が残存し、木目が横方向に走る。M20は細い角釘で、釘頭部および先端を欠失する。残存長は2.7cmで、幅・厚さはともに0.3cmである。

(3) 石器・石製品

石器・石製品には、調査区中央南部のSP24の柱痕から出土した石鏃と、調査区中央部北端のSP33掘形から出土した石皿・台石および調査区北部のSH3と重複するSP41の上面から出土した敲石・磨石がある。

① 石鏃 (図版33、写真図版40)

S11はサヌカイト製の凹基式石鏃で、片方の逆刺部分を欠失する。残存長は20.0mm、残存幅12.0mm、厚さ3.0mmで、残存重量は0.5gである。金山産と思われる。NR1の埋土中に含まれていたものであろう。

② 石皿・台石 (図版33、写真図版40)

S14は石皿・台石で、半分弱が折損しているが、円形に近い形であったと思われる。片面の中央部が平滑になっており、その部分を使用していたものと判断される。残存長18.6cm、残存幅12.3cm、残存厚6.5cmで、残存重量は1650gである。出土状況では、柱痕脇であったことから、柱の押さえ石として再利用されていたものと思われる。なお、部分的に紫灰色を呈し、受熱しているようにみえる。

③ 敲石・磨石 (図版33、写真図版40)

S15は折損しているため原形は窺い得ないが、長楕円形であったと想定される。先端部分に敲打痕および小さな平坦面も認められ、表面全体はやや平滑になっている。側面の傷は後世のものと推測される。柱穴上面で出土したが、その理由は不明である。

11. 包含層

遺構検出時出土遺物も含め包含層出土遺物として扱う。土器2点と鉄製品1点、石器1点を報告する。

(1) 土器

包含層出土の土器には縄文土器・土師器がある。

① 縄文土器 (図版32、写真図版39)

a. 縄文時代後期

調査区南部の遺構検出時に出土したものである。

深鉢 293は深鉢の体部から口縁部にかけての破片で、口縁部外面は巻貝条痕、体部外面と内面は二枚貝条痕と思われる。後期後半の所産であろう。

② 土師器 (図版32、写真図版39)

a. 中世

調査区南部で出土したものである。

小皿 294 は3分の1強の破片である。底部は回転ヘラキリで、内外面はロクロナデのようである。中世の所産と思われ、柱穴埋土に含まれていたものかもしれない。

(2) 鉄製品

鉄製品は角釘1点を報告する。調査区北部の遺構検出時に出土した。

① 鉄釘 (図版 33、写真図版 39)

鉄釘 M21 は鉄製角釘で、先端部を大きく欠失し、釘頭部も折り曲げ端を欠損する。残存長 4.7 cmで、断面は矩形を呈し、長辺 5 mm、短辺 4.5 mmである。頭部は 6 mm×5 mmが残存している。

(3) 石器

石器では、調査区中央南部の遺構検出時に出土した楔形石器1点を報告する。

① 楔形石器 (図版 33、写真図版 40)

S12 はサヌカイト製で楔形石器とした。上下端には自然面を残し、下端に僅かな折損が認められる。長さ 44.7 mm、幅 15.0 mm、厚さ 9.2 mm、重量は 5.2 gである。一側縁にのみ加工が認められる。金山産と思われる。NR1の埋土中に含まれていた可能性がある。

参考文献

長友朋子・田中元浩 2007「西播磨地域の編年」『弥生土器集成と編年—播磨編—』大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告 第5号 大手前大学史学研究所

横田賢次郎・森田 勉 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『研究論集』4 九州歴史資料館

第5章 城山遺跡 令和元年度調査

第1節 遺構

令和元（2019）年度調査区は平成28年度調査区の北西に位置する。

調査区内における層序は、複数の単層を同時性や堆積間隙、構造を基準とする堆積単位としてまとめて捉え、上から第1層～第5層に区分して把握できた。そして、第1層～第5層については、特別に細分化する場合は、第3-1層のように枝番を付し、土壌化層と母材となる自然堆積層に細分化する場合、前者をa層、母材となる後者をb層と区別し、それぞれ数字の後ろに付して、第5a層、第5b層、第5-1a層、第5-1b層のように呼称する。

第1層は、現代の表土以下、碎石や盛土、耕土等で構成される。第2層は、灰色砂質土を主とする旧耕土とみられる土壌層で、第2-0層～第2-3層に区分できる。特に下方の第2-3層では、全体的に酸化鉄が薄く沈着する。第2層は、D-4区の西端断面で確認できる畦畔状の高まりを境としてC～D-1・2・3区にかけて厚く堆積し、層数も多くなる。遺物は土器微細片をごく僅かに含む。第3層は、鈍い黄灰色シルト質土を主とする土壌層で、第3-1層～第3-3層に区別できる。層全体を通して酸化鉄が濃く沈着する特徴をもつ。第3層についても第2層と同様にD-4区西端～C区、D-1・2・3区にかけて厚く堆積し、特にD-1・2・3区では層数も増える。遺物は、中世とみられる土器破片を僅かに含む。第5層については、オリーブ灰色シルト混じり土～砂を主とし、マンガンが濃く沈着する特徴的な層で、上面で遺構が検出できる基盤層となる。第5-1～2層区分できるが、第5-1層の上部層は上面からの影響でやや土壌化しているとみられるが、基本的には自然堆積層が母材であり、D-4区東側で旧河道の堆積層の一部とみられる第5-1b層となる砂礫が部分的に認められる他、D-1・2・3区では下層に砂層が一部認められ、第5b層として把握できた。全体を通して、概ね平坦な旧地形が復元可能である。

遺構の検出は、マンガン沈着の顕著な第5層の上面で行ない、遺構面とした。ただし、D-4区の一部の遺構については、切り合い関係から、上下に区別することができたため、部分的に上層遺構、下層遺構として調査を実施した。

検出した主な遺構は、堅穴建物跡（SH）3棟、土坑（SK）4基、溝（SD）8条、掘立柱建物跡（SB）1棟のほか、柱穴・ピット（SP）がある。遺構の所属時期は、弥生時代後期、古墳時代中期～飛鳥時代、平安時代後期～鎌倉時代に属する。また、柱穴群については、時期認定が困難なことから時期不明としてまとめることとし、以下、時代順に述べる。

1. 弥生時代後期

堅穴建物2棟、土坑2基、溝1条を確認した。そのうち、堅穴建物2棟と土坑1基は重複しており、SH160→SH57→SK161の順で切り合っており、SK161が新しい。

(1) SK161（図版17～19、写真図版23・24・26）

D-4区の東側で検出した。平面形態は楕円形を呈し、長軸2.7m、短軸2.2m、深さ50cmを測り、埋土は2層からなる。埋土からは、炭化物とともに、多数の弥生時代後期の土器の破片や人頭大の石が出土している。土器の破片は、中央に向かって傾斜して出土している。この土坑は、建物の中心から東

にずれることから、焼失建物埋没後の窪みとするより、人為的に掘り込まれた可能性もある。そのため、ここでは、土坑とした。なお、調査途中で被熱により赤橙色に変色し、焼結する部分を確認している。検出できなかったが、SK161を切る、別の被熱土坑があった可能性がある。

(2) SH57 (巻頭図版4～7、図版17～19、写真図版23～27、附図1)

検出状況 D-4区の東側で検出した。床面には焼失した柱や垂木等の炭化材をはじめ、粘土塊や弥生土器などが多数の遺物が見つかっており、遺存状況は良好であった。以下にその状況について述べる。

〈炭化材の出土状況〉炭化材が良好な状態で見つかっており、炭化材の加工形態や位置などから4つのまとまりに整理できる。

1つ目は、丸材が多く、材の端を竪穴建物中央部に向かって放射状に配置されている。垂木と考えられる。炭化材4は壁側端が二股になっている。炭化材5のみ板材であり、少し床面から浮いた状態で出土した。炭化材16は小口側端を穿孔している(巻頭写真図版7 2段目右)。炭化材17は、2つの炭化材が重なっている。

2つ目は、壁に平行または、垂木に対し直角に見つかることから桁梁と考えられる。ただし、残存状況は良くない。炭化材32・44・48が該当する。炭化材32は丸材である。炭化材44・48は板材のため、梁桁でない可能性もある。

3つ目は、壁の構築材と考えられるものである。形態や出土位置から2種類ある。1種類目は他の部材と比べ、やや細い。周壁溝や壁際に炭化材が直立した状態で出土していることから壁の構築材と考えられる。巻頭写真図版6(1段目の左)にあるように、炭化材23～25、31は周壁溝上に並んでいた。炭化材24・25は床面から深さ10cm程度を測り、周壁溝の底まで達していない。炭化材間は、狭いもので8cm程度である。炭化材は全周にめぐっておらず、竪穴建物の南西部に集中している。なお、炭化材21は、壁より離れた位置より出土していることから、壁構築材ではない可能性もある。

2種類目は、板材が多く、主に周壁溝上にある。出土状況から壁材の横板である可能性がある。炭化材13・14・19が該当する。炭化材14・19ともに、周壁溝上で出土し、炭化材13は周壁溝より、離れた位置で出土した。炭化材19は、片方の端に穿孔が施されている。炭化材13も穿孔された板材であることから壁材の横板である可能性もあるが、断片のため断言できない(巻頭写真図版7 2段目の左)。

4つ目は、3つ目と同様、やや細い。出土状況や木目方向から、建築材もしくは、編物等の道具に関するものと考えられる。該当する炭化材は7・8・10である。炭化材7は、T字状に炭化材が出土し、木目方向が違うものがいくつも重なるような状態で出土した。炭化材10も木目方向が違うものがいくつも重なるような状態で出土した(巻頭写真7 3段目)。炭化材8は、細い炭化材をT字に配し、周りに細かい炭化材が見られるものである(巻頭写真図版7 4段目)。樹種同定の結果、イネ科と同定され、稲を使用した編物、敷物、壁の構築材であると考えられる。

〈土器の出土状況〉床面からは、甕の破片や壺の底部片、器台片等が出土しており、周壁溝上には完形の小型甕が1点出土している。全体的に破片が多い。床面での出土位置の傾向として、一定の場所に偏ることなく、全体に出土している。なかには、炭化材や粘土塊の下から土器が出土しているものあり、土器の上に粘土が置かれている状態で見つかるものもある。

〈粘土の出土状況〉粘土は建物の南側の床面で見つかる。4～6kg程度の粘土塊3点と、1kg以下の粘土片7点が出土している。粘土塊1は、幅19.2cm、奥行20.4cm、高さ13cm、粘土塊2は、幅20.8cm、奥行20.4cm、高さ12cm、粘土塊3は幅24cm、奥行26.4cm、高さ15cmを測る。粘土塊は焼

けていないが、粘土片の4点は焼けて赤橙色を呈していた。

形態・規模 平面形は円形を呈し、規模は南北3.5 m、東西3.32 mを測る。検出面からの深さは、26 cmを測る。

埋土 焼土や炭化物を含む層と含まない層に分かれている。

屋内施設 周壁溝を確認した。幅0.1 m前後、深さ10 cm前後あり、全周している。埋土には、炭化物や焼土が多く含まれる。建物跡南西側の周壁溝には炭化材が立っている状態で見つかっている。壁の構築物の一部と考えられる。建物跡南・東側では、粘土塊や土器が周壁溝上で見つかっている。支柱穴や中央土坑等は認められなかった。中央土坑については、本来存在していたものが、前述したように建物埋没後に土坑が掘りこまれたことにより、消失した可能性もある。なお、調査途中で被熱により赤橙色に変色し、焼結する部分を確認している。調査当時は、SH57に伴うものと判断したが、被熱部が壁際にあること、火災程度で焼結するとは考えにくいため、SH57とは関連しないと判断した。

年代 出土した土器はおおよそ弥生時代後期のものである。また、SK161より出土した土器との時期差が認められない。

(3) SH160 (図版17～19、写真図版23・24)

検出状況 D-4区の東側で検出した。

形態・規模 形態は円形を呈し、規模は遺存状況が悪いため、不明である。なお、検出面からの深さは、23 cmを測る。

埋土 オリーブ褐色のシルト混じり極細砂～細砂の1層である。焼土や炭化物は含まれない。

屋内施設 周壁溝、柱穴、中央土坑は見つかっていない。

時期 埋土からは、弥生時代後期の土器が出土している。

(4) SK33 (図版26、写真図版27)

D-4区の南東隅で検出した。平面不整形な楕円形を呈し、その規模は、長軸約1.6 m、短軸幅約1 mを測る。埋土の様相が、SD36埋土や、SH57の埋土と類似している。甕の口縁部が出土している。

(5) SD36 (図版26、写真図版27)

D-4区の東側で検出した。南東-北西方向の溝で、幅0.5 m、深さ11 cmを測る。埋土の様相がSH57の埋土、SK33の埋土と類似している。短い脚部をもつ直口鉢が出土している。

2. 古墳時代中期～飛鳥時代

(1) SH156 (図版20、写真図版28)

検出状況 D-2・3区で検出した。南半分を検出し、北半分は、調査区外へと続いている。東端は攪乱を受けている。

形態・規模 形態は隅丸方形を呈し、規模は南北0.84 m、東西3.6 m以上を測る。検出面からの深さは、15 cmを測る。

埋土 埋土が2層であり、整地層と埋没層に分別できる。

屋内施設 屋内床部は基盤層を一旦掘削した後に盛土を行なって成形されている。周壁溝は、幅0.13 m、深さ10 cmを測る。柱穴、中央土坑は見つかっていない。

時期 埋土からは、弥生時代前期の土器片と古墳時代中期の土器が出土しており、時期は古墳時代中期ごろに埋没したと考えられる。

(2) S D149 (図版 14・20、写真図版 27)

D-1区西側で検出した。幅 0.6 m、深さ 20 cmを測り、北東-南西に延びて、西端は調査区外へと続いている。埋土からは古墳時代後期の須恵器坏身、飛鳥時代の坏が出土している。

(3) S X142 (図版 14・20、写真図版 27)

D-1区の南隅で検出した。管理設箇所を挟んだ東側のD-2・3区西隅ではS X142が検出されており、これらは同一の遺構と考えられる。平面は、楕円形を呈すと推定され、規模は、東西 5.4 m、南北 0.8 m以上、最深部で 40cmを測る。この落ち込みはさらに南東側の調査区外へと続いており、規模はさらに大きくなる可能性が高い。埋土からは、古墳時代後期～飛鳥時代の土器が出土している。

3. 平安時代後期～鎌倉時代

(1) S K49 (図版 21、写真図版 29)

D-4区で検出した。平面は円形を呈し、直径 0.8 m、深さ 36 cmを測る。埋土から土師器皿が出土している。

(2) S D19 (図版 21、写真図版 29)

C区で検出した。幅 1.26～0.53 m、深さ 40～60 cmを測り、南北に延びて、両端は調査区外へと続いている。

(3) S P (柱穴) 94、122、138 (図版 14、写真図版 29)

D-4区で検出した。土器が出土した柱穴のみ取り上げている。埋土からは、土師器や須恵器が出土しており、平安時代後期～鎌倉時代のものと考えられる。

4. 時期不明

(1) S B 1 (掘立柱建物跡) (図版 22、写真図版 30)

D-4区西側に位置している。南北2間以上×東西2間の総柱建物跡を復元した。建物の南側は調査区外へと続いている。東西南北の方位にあった主軸をもち、条里地割に沿う。柱穴(S P106)から、土師器片が出土しているが、詳細な時期は不明である。建物方位や埋土の様相から、中世に位置付けられる。

(2) S K27 (図版 26、写真図版 27)

D-4区南東隅で検出した。平面は不整形な楕円形を呈し、その規模は、長軸約 1 m以上、短軸幅約 0.8mを測る。時期を特定できる遺物の出土は認められなかった。ただし、いずれの埋土も、S D36埋土や、S H57の埋土と類似しており、それらと近い時期に埋没したと推測される。

(3) S D (溝) (図版 26、写真図版 18・20)

D-4区で6条の溝を検出している。S D126、119、86は南北方向、S D92は東西方向に延びており、S D34は、南北方向に延びたのち、調査区中程で概ね直角に曲がって西側へ方向を変える。おおむね、幅 0.3～0.6 m、深さ 2～10 cmを測り、調査区外へと延びている。埋土は単層である。これらの溝からは時期を明確に特定できる遺物は認められない。

層序関係や切り合い関係、埋土の様相からみると、S D119と類似する埋土のS D92はほぼ同時期に埋没したとみられ、S B 1の柱穴に切られることから、これより古く位置付けられる。また、S D119と平行するS D86、126についても同様の可能性が高い。S D86を切るS D34が最も新しく、埋土の様相から近世以降に位置付けられる可能性が高い。

(4) S P (柱穴) (図版 24・25、写真図版 29)

D-4区で柱穴を複数検出したが、建物跡を復元できなかった。

(5) S X137 (図版 14、写真図版 18・20)

D-4区で検出した。方形もしくは長方形を呈し、長軸5 m、短軸2.5 mを測る。時期を特定できないが、土器が1点出土している。

第2節 遺物

出土した遺物には、弥生土器・土師器・須恵器といった土器類 62 点、石器・石製品 1 点があり、報告した総数は 63 点である。341～356 は写真のみ掲載しており、357～362 は胎土分析対象の土器である。以下、遺構別に出土遺物を述べる。

1. SK161 (図版 34・35、写真図版 41～44・50・51)

SK161 出土の土器を 23 点報告する。すべて弥生時代後期のものである。器種には、壺・甕・高坏・鉢・蓋・器台がある。

301 と 302 は小片のため、器種は不明だが、器台と壺だと思われる。301 は、外面に竹管文、302 は、外面に列点文を施している。

303 は、蓋である。口縁部は欠いているため、口径は不明である。外面はナデが施されており、内面はしぼり痕跡を残す。頂部の平坦面には、木の葉の葉脈痕が見られる。

304 は、器台の脚部である。外面は縦方向のハケ、内面はタテハケ後、下端部をヨコハケしている。円孔を 1 か所穿っている。

305、306、344 は、高坏である。305 は、口縁が外反する有稜高坏である。推定口径は、31.8 cm、残存高は 5.4 cm を測る。外面上半はヨコナデ、下半は横方向のミガキ、内面上半はヨコナデ、下半はタテハケのち斜め方向のミガキを施している。306 は、脚部片である。外面には 3 条の凹線がある。全体的に摩滅して調整は不明瞭である。344 は、脚部の破片である。外面はタテハケを、内面はナデを施している。1 か所、円孔を穿っている。

307～309、347 は、甕もしくは、壺の底部である。307 は、外面タテハケ後、ナデを施しており、底部付近ではユビオサエをしている。内面は、摩滅して不明瞭である。308 は、摩滅により不明瞭であるが、外面の部分的にタテハケのち縦方向のミガキが見られる。内面はユビオサエのち、タテハケを施しており、黒斑が確認できる。309 は、外面に縦方向のミガキを施している。底部付近では、ミガキの前にタテハケを施している。内面は、タテ・ナナメハケ後、ナデを施している。外面に黒斑が見られる。底部には、工具痕のような痕跡が 3 条ほどある。347 は、タテハケを、内面はケズリを施している。外面には、煤が付着している。

310、315、316 は、壺である。310 は、広口壺の口縁部と底部片である。復元口径は 19.4 cm、器高は 11.3 cm を測る。外面頸部にはタテハケを、体部にはミガキを施しており、内面は摩滅しており、不明瞭である。315 は、頸部から口縁にかけて直線的の短く伸びる壺である。推定口径は 13.0 cm、器高は 5.9 cm を測る。316 は、口縁部片である。推定口径は 15.1 cm、残存高は 4.2 cm を測る。外面は、タテハケを内面はナデを施している。

311、341、349 は、鉢である。311 は、口縁部片である。復元口径は、24.1 cm、残存高は 3.9 cm を測る。外面は、タテハケを施し、口縁部では、ヨコナデをしている。内面は、ヨコナデを施している。341 は、口縁部の破片である。内外面とも、ハケ目を施したのち、ナデ調整をしている。349 の底部は、焼成前に穿孔されている。外面はナデを、内面はタテハケを施している。外面には、黒斑がある。

312～314、342 は、甕である。312 は、口縁部片である。推定口径は 14.4 cm、残存高は 3.1 cm を測る。全体が摩滅し、不明瞭である。313 は、口縁端部に面をもつ甕である。推定口径は 14.3 cm、残存高は 5.8 cm を測る。外面はわずかにタテハケを残すが、おおよそナデを施している。内面は、横方向のケズ

リを施している。314は、複合口縁をもつ甕である。推定口径は、16.4 cm、残存高は5.1 cmを測る。内外面とも、摩滅が著しく、調整等が見えない。なお口縁部には、靱殻のような圧痕が残されている（写真図版43）。342は、口縁部の破片である。内外面ともヨコナデを施している。胎土は暗褐色～茶褐色を呈している。

359、360は、体部の細片である。359は、甕の体部片である。外面はタタキを、内面はナデを施している。360は、内外とも調整が不明瞭である。

S16は、台石である。長さ21.9 cm、幅13.3 cm、厚さ9.1 cm、重量4100 gを測る。上面は平坦面をもち、敲打痕が見られる。

2. S H57・160

S H57、160出土の土器19点を報告する。埋土と床面より出土したものに分ける。調査当初、両遺構は同一のものとして調査していたが、整理過程で別遺構とした。そのため、埋土から出土した土器は、S H57・160のものとして報告する。床面から出土した土器は、S H57のものである。

① S H57・160埋土（図版35、写真図版43～46・51）

317は、蓋である。つまみをもつ。口径は11.3 cm、器高3.7 cm、つまみ幅は、3 cmを測る。大部分は摩滅しており、調整は不明である。つまみの接合部にユビオサエを施している。底面には靱圧痕が認められる。

318～320は、器種が不明な細片である。318は、口縁部片である。口縁端部は上下に拡張し、波状文を施す。319の外面は、ヨコハケ後タテハケ、そして偽凹線を施している。内面は、ヨコハケを施している。320は、口縁部片である。外面はユビオサエ、内面はミガキ、端部に2条の凹線を施している。

321は、甕の口縁部片である。複合口縁を有し、外面に偽凹線を3条施す。推定口径は17.1 cm、残存高は5.5 cmを測る。外面は摩滅で調整が不明であるが、内面は横方向のケズリ後に、ナデを施す。

322は、鉢の口縁部片である。推定口径は27 cm、残存高5.2 cmを測る。外面はタテハケ、内面はヨコハケを施している。

323、345は、高坏である。323は、坏部と脚部片である。口縁は外反している。推定口径は26 cm、坏部の残存高4.6 cmを測る。坏部外面はナデ後ミガキを、内面は横方向のミガキを施している。345は、脚部の破片である。円孔を2か所穿っている。外面はタテハケした後ナデを、内面は、ヨコナデを施している。

324、325、348は、甕もしくは、壺の底部である。324の外面にタテハケ後にユビオサエが施されている。内面底部にわずかに求心状にハケを施している。外面に黒斑がある。底部にくぼみがある。325の外面はタテハケ後、部分的にミガキを施している。内面は、ナデを施している。内面には黒斑がある。348の外面はタタキを施し、内面は摩滅して不明瞭である。

326は、器台である。口縁は大きく外反する。端部は上下に拡張し、2～3条の偽凹線が見られ、2個で1セットの円形浮文が等間隔で配されている。推定口径は31.1 cm、残存高は6.8 cmを測る。内外面とも摩滅で調整が不明瞭である。内面にスリットが施されている。

343は、口縁部の破片である。口縁はつまみあげられ、刻み目を施している。外面はミガキを、内面はナデを施している。器種は不明である。

346は、体部の破片である。外面には2条の沈線を施している。外面はミガキを、内面はナデを施している。器種は不明である。

358は、体部の破片である。外面にハケを、内面にはナデを施している。

② S H57 床面 (図版 36、写真図版 44・47・48)

327～329は、甕である。

327は、甕の口縁部片である。口縁端部は面を持ち、2～3条の偽凹線を施している。内外面とも、ヨコナデを施している。328の推定口径は15.8cm、残存高は6.0cmを測る。口縁端部は面を持つ。外面は縦方向のハケを、内面は横方向のケズリを施す。長石や石英などを多く含み、やや胎土が粗い。

329は、底部片である。外面はナナメ方向のミガキを施し、底部付近ではタタキ後ナデを施している。内面はナナメ、ヨコハケの後、一部ナデを施している。

330は、小壺である。完形である。口径は6.6cm、器高は8.7cmを測る。口縁部外面はヨコナデ、体部は縦方向のハケを施したのち、ナデを施している。内面はユビオサエしたのち、縦方向のハケを施している。内面中位に粘土紐接合痕がある。内外面に黒斑がある。

331は、壺の底部片である。外面は縦方向のハケを施したのち、縦方向のミガキを施している。内面には粘土が置かれており、そのうえに土器片が被さっている。出土状況時には、さらに炭化材がそれらの上へ被さっていた。

361は、甕の体部片である。外面にハケを、内面にケズリを施している。

362は、器台の脚部片だと思われる。外面にミガキを、内面にナデを施している。

3. S K33 (写真図版 52)

350は、土師器甕の口縁の破片である。復元口径は25cmを測る。外面は摩滅し、内面はヨコハケのちナデが施されている。

4. S D36 (図版 36、写真図版 49)

333は、脚部をもつ直口鉢の底部である。底径は3.4cm、残存高は4.2cmを測る。外面はタテハケ後にナデを施しており、底部付近ではユビオサエを施している。内面はヨコハケ後にナデを施している。外面に黒斑が見られる。

5. S H156 (写真図版 49)

338は、甕もしくは壺の体部片である。外面に4条の沈線文が見られる。胎土も長石など多く含み、やや粗い。

339は、赤～灰褐色を呈す、韓式系軟質土器片である。外面は、灰褐色を呈し、格子状のタタキが見られる。内面は赤～灰褐色を呈し、ナデを施している。

6. S D149 (図版 36、写真図版 49)

334は、須恵器の坏身である。推定口径が12.8cm、残存高2.8cmを測る。口縁端部は丸く、立ち上がりは、やや内傾している。受け部には降灰が見られる。底部外面には回転ヘラケズリを、内面には回転ナデを施している。

335は、須恵器の坏である。復元口径は12.4cm、器高は4.3cmを測る。体部の内外面には回転ナデが施され、底部内面には、回転ナデのち、一方向によるナデを施している。底部外面には、ヘラ切りが施している。

7. S X142 (写真図版 49・52)

337は、須恵器の坏身片である。立ち上がりを欠いており、口径を復元することはできない。内外面とも回転ナデを施している。

354は、須恵器の甕の体部片である。外面には、格子文が、内面には青海波文が見られる。

8. S K 49 (写真図版 52)

353 は、土師器の皿である。細片のため、正確な口径は不明である。口縁部外面には、ヨコナデが施され、内面は摩滅して不明瞭である。

9. S P 94 (写真図版 52)

351 は、須恵器壺の口縁部片である。細片のため、口径は不明である。内外面ともロクロナデが施されている。

10. S P 122 (図版 36、写真図版 49)

336 は、土師器底部片である。内外面ともナデが施されている。内面に暗文やケズリが施されていない。

11. S P 138 (写真図版 52)

355 は、須恵器壺の体部片である。内外面とも回転ナデが施されている。破片の下部に、底部が一部残存しており、高台は見られない。

12. S B 1 (S P 106) (写真図版 52)

352 は、土師器の皿である。細片のため、正確な口径は不明であるが、小皿だと推定される。

13. S X 137 (写真図版 53)

356 は、体部片である。長石や石英等を多く含み、胎土が荒い。内面にはコゲが付着している。器種等は不明である。

14. その他 (図版 36、写真図版 49)

機械掘削より出土した土器を 1 点報告する。

332 は、弥生土器の鉢である。おおよそ完形である。口径は 14.7 cm、器高は 4.4 cm を測る。外面は、ケズリのち、ミガキを施している。ミガキは、口縁部では横方向、体部は縦方向に施している。内面はナデを施している。

第6章 自然科学的分析・鑑定

第1節 貝類同定

三谷智広（パレオ・ラボ）

1 はじめに

兵庫県の鶴北遺跡から出土した貝類の同定結果を報告する。

2 試料と方法

試料は、鶴北遺跡の no 1～2 東半区の包含層下部から出土した貝類である。時期は、中世と考えられている。肉眼で試料を観察し、現生標本との比較により、部位と分類群の同定を行った。

3 結果

同定結果を表4に示す。包含層下部から出土したのは、バイ (*Babylonia japonica*) であった。殻頂から殻軸が残存する試料である。バイは、水深約 10 m の砂底に生息する。食用となる貝類のため、食用として利用された後に廃棄されたと考えられる。

表4 鶴北遺跡出土の貝類

試料番号	地区	遺構	層位等	分類群	左右	部分	状態	点数
1	no 1～2 東半	—	包含層下部	バイ	—	殻頂～殻軸	破片	1

参考文献

奥谷喬司編（2000）日本近海産貝類図鑑．1173p，東海大学出版会．

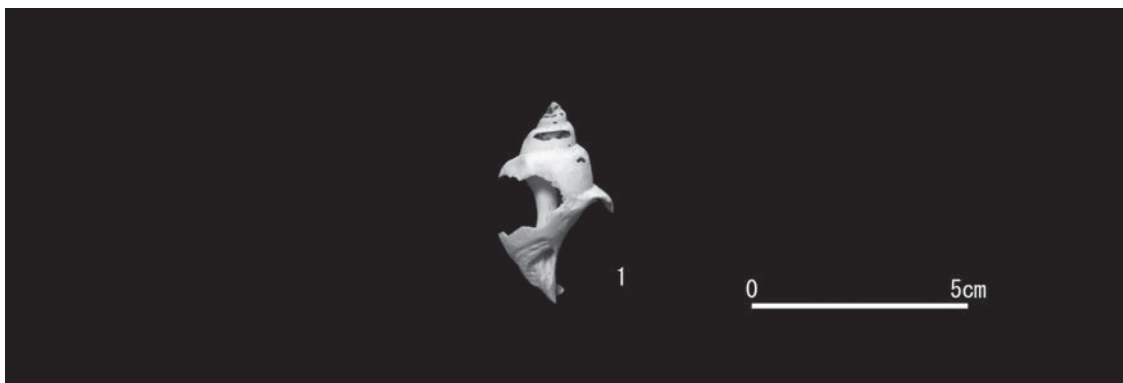


図4 鶴北遺跡出土の貝類 1. バイ (no 1～2 東半区包含層下部)

第2節 樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社 田中 義文・松元 美由紀

はじめに

本分析調査では、城山遺跡（太子町鳩に所在）の発掘調査で出土した炭化材について樹種同定を実施し、用材選択や古植生に関する資料を作成する。

1 試料

試料は、出土した炭化材 48 点（炭化材 1～48）である。

2 分析方法

炭化材を自然乾燥させた後、木口（横断面）、柁目（放射断面）、板目（接線断面）の3断面について割断面を作製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。炭化材の周囲を樹脂でコーティングして補強する。走査型電子顕微鏡（低真空）で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）を参考にする。

また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

3 結果

樹種同定結果を表5に示す。炭化材47には2種類が確認された。これらの炭化材は、広葉樹6分類群（コナラ属クヌギ節、コナラ属コナラ節、コナラ属アカガシ亜属、シイ属近似種、ブナ科、イボタノキ属）とイネ科に同定された。なお、炭化材22, 38の2点は、保存状態が悪く、木材組織が全く観察できないため、種類不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Cerris* ブナ科
環孔材。早材部には大型の道管が1～2列配列する。道管は、晩材部で急激に径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道

表5 城山遺跡の樹種同定結果

番号	形状	樹種	備考
炭化材1	板材?丸材	コナラ属クヌギ節	
炭化材2	木舞か	コナラ属コナラ節	
炭化材3	丸材	コナラ属クヌギ節	
炭化材4	丸材	コナラ属クヌギ節	
炭化材5	板材	コナラ属アカガシ亜属	
炭化材6	丸材?	コナラ属コナラ節	
炭化材7	木舞か	シイ属近似種	
炭化材8	木舞か	イネ科	
炭化材9	丸材?	コナラ属クヌギ節	
炭化材10	道具か	コナラ属クヌギ節	
炭化材11	丸材?	コナラ属コナラ節	
炭化材12	板材	コナラ属コナラ節	
炭化材13	丸材?	コナラ属クヌギ節	
炭化材14	板材	コナラ属クヌギ節	
炭化材15	丸材	コナラ属コナラ節	
炭化材16	丸材?板材?	ブナ科	
炭化材17	丸材	コナラ属クヌギ節	
炭化材18	板材?丸材	コナラ属コナラ節	
炭化材19		コナラ属コナラ節	小径材
炭化材20	丸材	コナラ属コナラ節	
炭化材21	板材?丸材	ブナ科	
炭化材22	不明	不明	
炭化材23	丸材	コナラ属クヌギ節	
炭化材24	丸材	コナラ属コナラ節	
炭化材25	不明	ブナ科	
炭化材26	丸材	コナラ属コナラ節	
炭化材27	丸材	コナラ属コナラ節	
炭化材28	丸材	コナラ属クヌギ節	
炭化材29	丸材?板材?	ブナ科	
炭化材30	不明	コナラ属クヌギ節	
炭化材31	丸材?板材?	コナラ属コナラ節	
炭化材32	丸材	コナラ属コナラ節	
炭化材33	不明	ブナ科	
炭化材34	不明	コナラ属コナラ節	
炭化材35	丸材	コナラ属クヌギ節	
炭化材36	丸材	コナラ属クヌギ節	
炭化材37	丸材	コナラ属コナラ節	
炭化材38	丸材	不明	
炭化材39	丸材?板材?	コナラ属コナラ節	
炭化材40	丸材?	コナラ属コナラ節	
炭化材41	丸材?板材?	コナラ属クヌギ節	
炭化材42	丸材?板材?	コナラ属クヌギ節	
炭化材43	丸材	コナラ属クヌギ節	
炭化材44	板材	コナラ属クヌギ節	
炭化材45	板材	コナラ属コナラ節	
炭化材46	不明	コナラ属アカガシ亜属	
炭化材47	不明	コナラ属クヌギ節 イボタノキ属	
炭化材48	丸材	コナラ属クヌギ節	

管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科

環孔材。早材部には大型の道管が1～2列配列する。道管は、晩材部で急激に径を減じたのち、小径の道管が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科

放射孔材。道管は単独で放射方向に配列する。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・シイ属近似種 cf. *Castanopsis* ブナ科

試料は小片で保存状態が極めて悪い。早材部には大型の道管が単独で放射方向に配列する。晩材部では、小型の道管が散在している。道管の穿孔板および壁孔は破損しており観察できない。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。

以上の特徴から、環孔性放射孔材であるシイ属の可能性が高いが、小片で観察範囲が狭いこと、保存状態が悪く穿孔板や放射組織の観察が十分ではないことから、近似種とした。

・ブナ科 Fagaceae

いずれも微細な破片である。道管配列をみると、早材部側にやや大型の道管の断片が認められるが、大部分は小径の道管が集まって火炎状あるいは散在状に配列する。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。

以上の特徴から、コナラ属コナラ節、クリ、シイ属の晩材部分の破片と考えられる。観察範囲が狭いたために3分類群を区別することができず、ブナ科とした。

・イボタノキ属 *Ligustrum* モクセイ科

散孔材。道管は単独または2～3個が複合して散在する。年輪界に向かって径を漸減させ、年輪界を挟んだ道管径の変化が大きい。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。道管内壁にはらせん壁厚が認められる。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～20細胞高。

・イネ科 Gramineae

試料は細かく割れたている。横断面では、2対4個の道管の外側に師部細胞があり、これらを厚壁の繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成する。維管束は、維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

4 考察

炭化材は、クヌギ節を中心とした広葉樹6分類群とイネ科に同定された。各分類群の材質等についてみると、アカガシ亜属とシイ属（近似種）は暖温帯性常緑広葉樹林（照葉樹林）の主要な構成種となる常緑高木、クヌギ節とコナラ節は二次林等に生育する落葉高木である。木材はいずれも重硬で強度が高い。ブナ科については、組織の状況からシイ属、コナラ節、クリのいずれかと考えられる。クリは、二次林等に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。山野に生育する常緑または落葉の低木～小高木である。木材は比較的軽硬な部類に入る。タケ亜科は、いわゆるタケ・ササ類である。林床等に生育する大型の草本類で茎（桿）が木質化し、強度、靱性、耐水性が比較的高い。

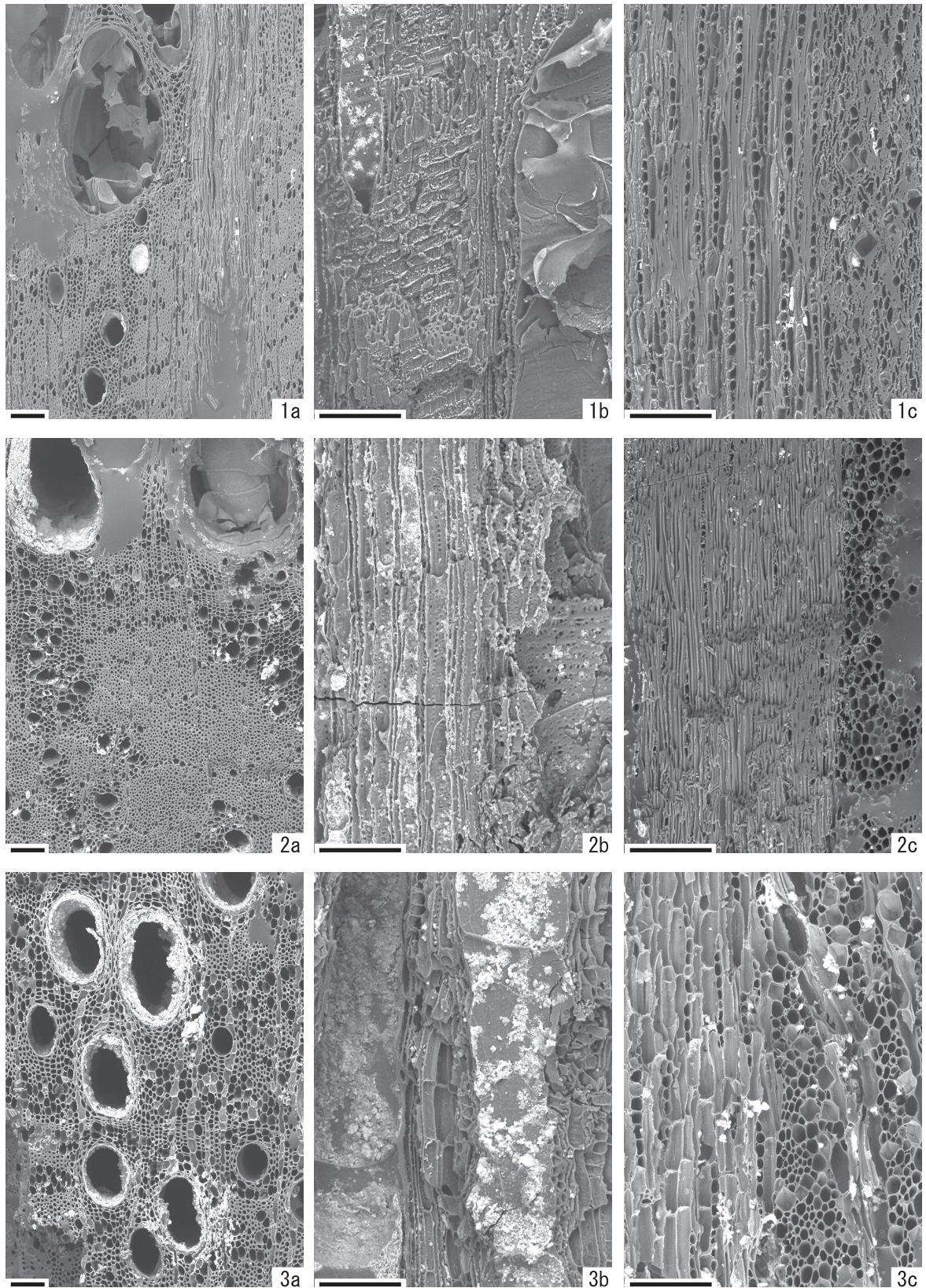
炭化材は、板材や丸材を主体としており、建築部材の一部に由来する可能性がある。試料の形状や用途に関わらず、クヌギ節やコナラ節を主体とした組成であり、アカガシ亜属、シイ属（近似種）、イボタノキ属が僅かに混じる。なお、2種類が混在していた炭化材47は、大部分の炭化材片がクヌギ節であり、その中に僅かに微細片のイボタノキ属が混じる状況であった。

これらの結果から、クヌギ節やコナラ節等を中心に強度の高い木材を利用したことが推定される。これらの樹種構成が周辺植生を反映しているとすれば、遺跡周辺にはクヌギ節やコナラ節を中心とした落葉広葉樹を中心としており、アカガシ亜属やシイ属等の常緑広葉樹が僅かに混じる植生であったことが推定される。

伊東・山田（2012）のデータベースによれば、兵庫県内では地域に関わらず、建築部材にクヌギ節やコナラ節を主体とする結果は報告されていない。なお、播磨地域におけるクヌギ節やコナラ節の利用例をみると、玉津田中遺跡の有頭棒や加工材、出合遺跡の畦畔材とされる杭材等に比較的多く確認されている。このうち、出合遺跡では、流木にもクヌギ節やコナラ節が確認されており、杭材が周辺に生育している樹木を利用したことが推定される。本遺跡とは距離が離れているが、自然木と利用状況を考える上で興味深い結果である。

引用文献

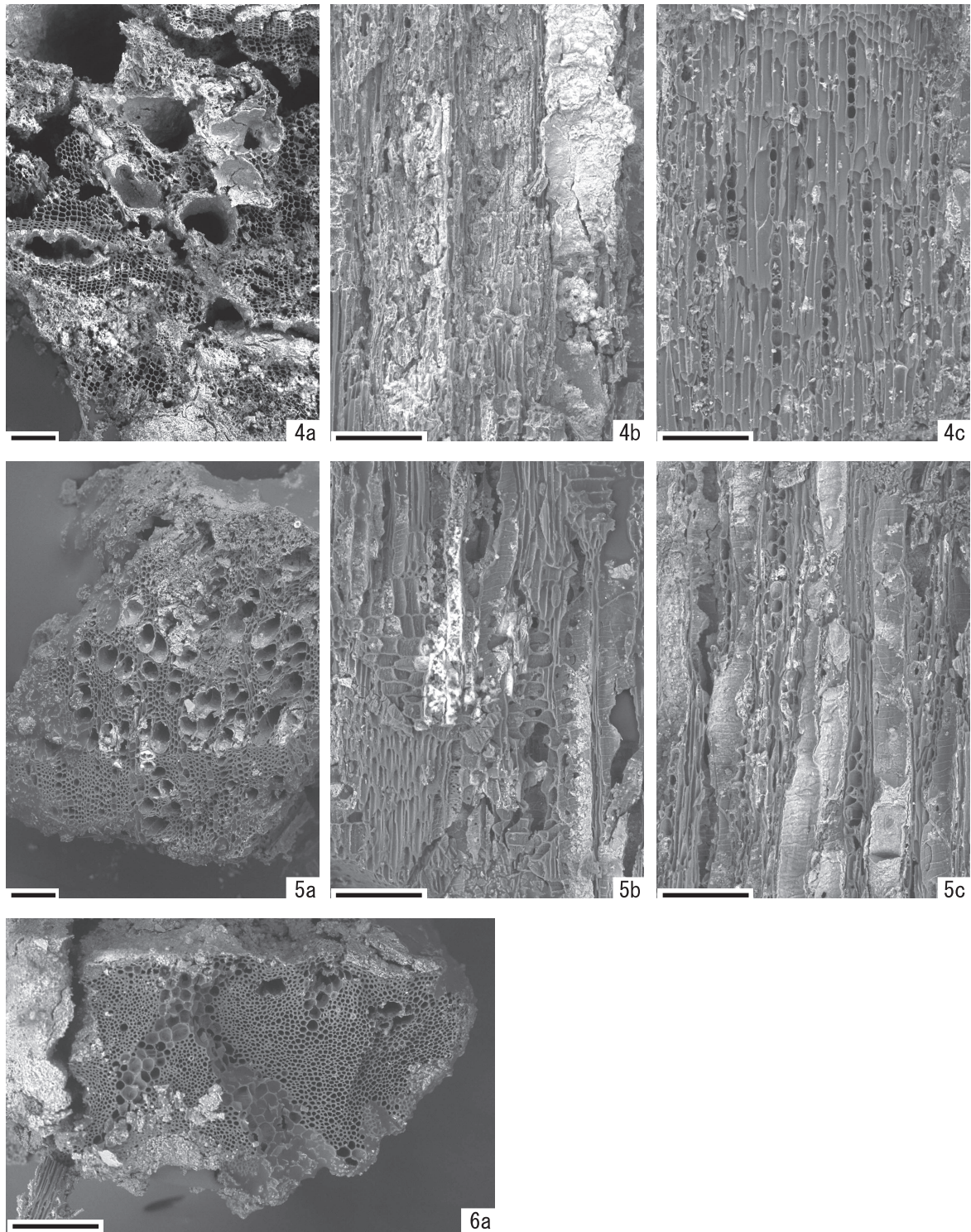
- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久 (編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 444p.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p.



1. コナラ属クヌギ節 (炭化材44)
 2. コナラ属コナラ節 (炭化材40)
 3. コナラ属アカガシ亜属 (炭化材46)
- a : 木口, b : 柱目, c : 板目

各写真のスケールは200 μ m

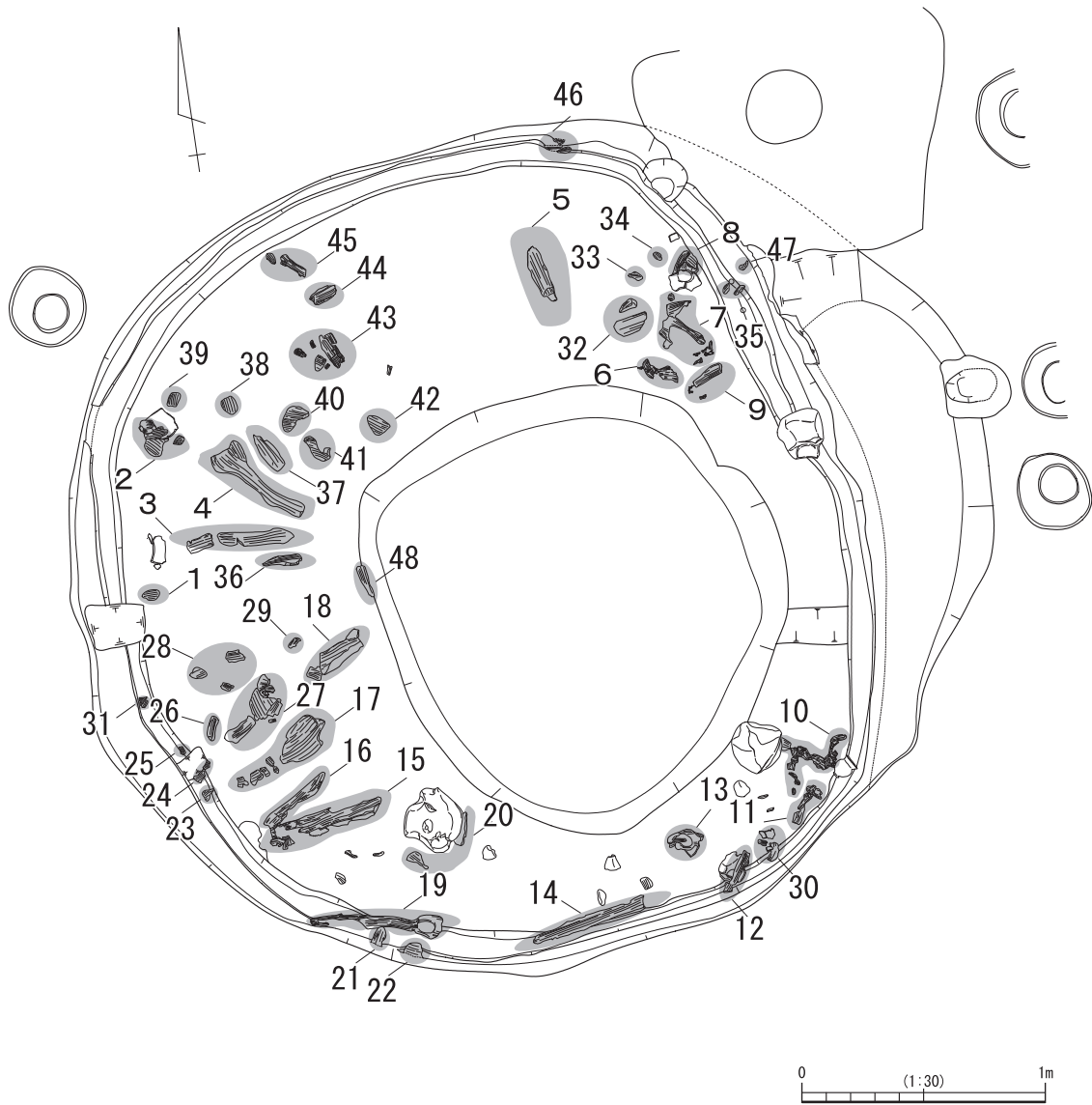
図5 城山遺跡の炭化材 (1)



- 4. シイ属近似種(炭化材7)
 - 5. イボタノキ属(炭化材47)
 - 6. タケ垂科(炭化材8)
- a:木口(横断面), b:柁目, c:板目

各写真のスケールは0.1mm

図6 城山遺跡の炭化材(2)



附圖1 SH57 炭化材出土位置

第3節 胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

坂元 秀平・矢作 健二

はじめに

太子町鶴に所在する城山遺跡は、播磨平野西部の沖積低地上に位置する。

本分析調査では、城山遺跡の発掘調査で出土した弥生土器について胎土の薄片観察を実施し、同時に同遺跡内から採取した土壌や出土した粘土塊の分析も行い、土器製作に関する資料を作成する。

1 試料

試料は、城山遺跡から出土した弥生時代後期とされる土器片7点と、同遺跡内から採取された土壌2点、同遺跡内から出土した粘土塊3点、粘土小片1点の、合計13点である。土器片7点のうち、4点まではSH57とされた竪穴建物跡内から出土しており、粘土塊3点と粘土小片1点も同建物跡から出土している。これらの出土状況や建

表6 試料一覧

試料番号 試料名	種別	器種	調査番号	出土地区	出土遺構	層位	時期
329	弥生土器	甕	2019042	D-4区	SH57	床面(土器d)	弥生時代後期
357	弥生土器	小片	2019042	D-4区	SD34北半	北半床面より上層	弥生時代後期
358	弥生土器	小片	2019042	D-4区	SH57南北アゼ北半	北半床面より上層	弥生時代後期
359	弥生土器	甕	2019042	D-4区	SK161		弥生時代後期
360	弥生土器	小片	2019042	D-4区	SK161		弥生時代後期
361	弥生土器	甕	2019042	D-4区	SH57	床面(土器7)	弥生時代後期
362	弥生土器	器台か	2019042	D-4区	SH57	床面(土器17)	弥生時代後期
土壌1			2019042	D-4区	SH57	基盤層	
土壌2			2019042	D-4区	SH57	基盤層	
粘土塊1			2019042	D-4区	SH57	床面	
粘土塊2			2019042	D-4区	SH57	床面	
粘土塊3			2019042	D-4区	SH57	床面	
粘土5			2019042	D-4区	SH57	床面	

物跡の構造などから、SH57は土器製作等の作業用の建物であった可能性があると考えられている。また、

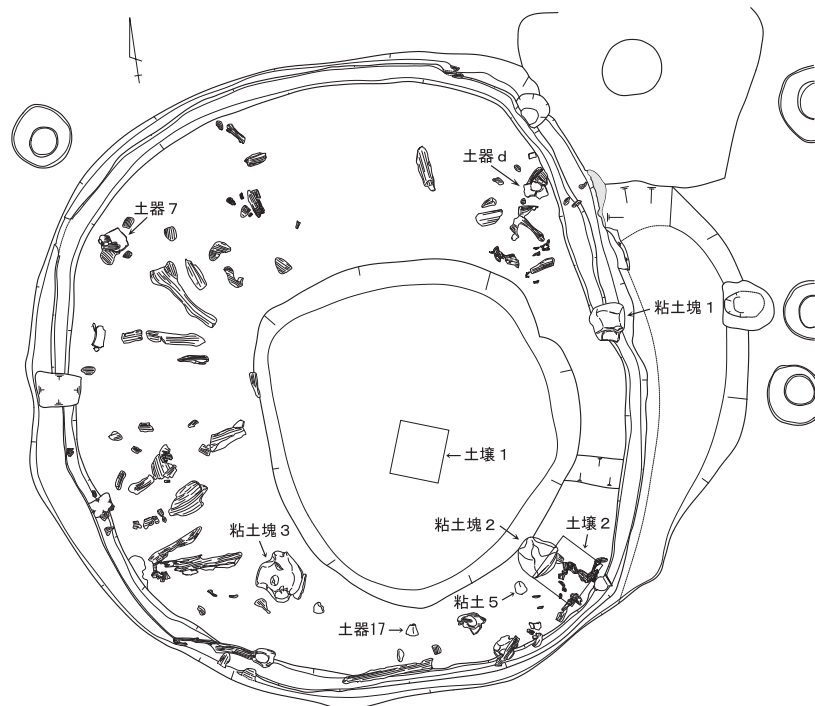


図7 試料位置 (SH57)

土壌試料2点はS H57の掘られている基盤の土壌から採取されたものである。各試料の試料番号や試料名および出土遺構などを表6、図7に示す。

2 分析方法

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成等を明らかにした。

なお、土器胎土および赤玉の薄片のデータの呈示は、松田ほか(1999)が示した仕様に従う。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3 結果

結果を表7～10、図8～13に示す。以下に鉱物・岩石組成と粒径組成、碎屑物・基質・孔隙の割合の順に述べる。

1) 鉱物・岩石組成

土器試料では全体的に計数された碎屑物の数が少ないため、元々微量しか含まれていない鉱物片や岩石片は計数されなかった可能性がある。そのような結果の中での土器胎土の特徴としては、バブルウォール型火山ガラスを多く含むということがあげられる。そして火山ガラス以外に含まれる碎屑物として石英の鉱物片と凝灰岩および流紋岩・デイサイトの岩石片を伴い、試料によっては微量の角閃石の鉱物片が含まれることも特徴となる。なお、試料番号329の土器片は、計数された碎屑物の数が少ないために、上記の特徴は明瞭ではないが、他の土器片の組成も考慮すれば、同様の組成である可能性が高いことが推定できる。

土壌試料では、2点ともにほぼ同様の組成が読み取れる。鉱物片では石英がやや多く、他にカリ長石や斜長石および白雲母と黒雲母を少量伴い、岩石片では凝灰岩、流紋岩・デイサイト、多結晶石英、花崗岩類を少量ずつ含む、他に微量のチャートや頁岩などの堆積岩類を含むという組成である。

粘土塊試料では、3点のうち、粘土塊1は多量のバブルウォール型火山ガラスを含むことが第一の特徴であり、火山ガラス以外にはそれぞれ少量ずつ石英と斜長石および角閃石の鉱物片と凝灰岩と流紋岩・デイサイトおよび多結晶石英の岩石片が含まれることが特徴である。粘土塊2と粘土塊3は、ほぼ同様の組成を示す。すなわち、石英の鉱物片が多く含まれ、他にそれぞれ少量ずつ、カリ長石と斜長石と角閃石および黒雲母の各鉱物片とチャート、頁岩、凝灰岩、流紋岩・デイサイト、多結晶石英、花崗岩類の各岩石片が含まれるという組成である。

粘土片の試料である粘土5は、粘土塊1と同様に多量のバブルウォール型火山ガラスを含むことが第一の特徴である。火山ガラス以外にはそれぞれ少量ずつ石英と斜長石の鉱物片が含まれ、微量の角閃石の鉱物片も含まれる。岩石片では凝灰岩と流紋岩・デイサイトと多結晶石英および花崗岩類の岩石片が含まれる。

2) 粒径組成

土器試料では、計数された碎屑物の数が少ないために組成というほどの結果ではないが、概ねの傾向としては細粒砂の多いことが窺える。

表7 薄片観察結果(1)

試料名	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計						
		鉱物片									岩石片						その他								
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英		花崗岩類	変質岩	火山ガラス	植物片	植物珪酸体	
329	細 礫																								0
	極粗粒砂																	2							2
	粗 粒 砂												2				1								3
	中 粒 砂																								0
	細 粒 砂	2	1											1			1				1				6
	極細粒砂	3	1																						4
	粗粒シルト	1																							1
	中粒シルト																								0
	基質																							196	
	孔隙																							2	
備考	基質は、粘土鉱物、非晶質物質、珪長質鉱物等によって埋められる。角閃石、酸化角閃石あり。火山ガラスはバブルウォール型を示す。孔隙は不定形状で、局所的に弱い定向配列を示す。																								
357	細 礫																								0
	極粗粒砂	1													1										2
	粗 粒 砂												4	3											7
	中 粒 砂												1			2				1					4
	細 粒 砂	2					1														3				6
	極細粒砂	3																			3				6
	粗粒シルト	2																							2
	中粒シルト																								0
	基質																							333	
	孔隙																							4	
備考	基質は、粘土鉱物、非晶質物質、珪長質鉱物等によって埋められる。火山ガラスはバブルウォール型を示す。孔隙は不定形状で、局所的に弱い定向配列を示す。																								
358	細 礫													1											1
	極粗粒砂													1	2							1			4
	粗 粒 砂													2	1		1				4				8
	中 粒 砂	3	1											5			1				18				28
	細 粒 砂	4		2			2							1	3						33				45
	極細粒砂	5		1										1	1						33				41
	粗粒シルト	1																			7				8
	中粒シルト																								0
	基質																							530	
	孔隙																							16	
備考	基質は、粘土鉱物、非晶質物質などによって埋められる。火山ガラスはバブルウォール型を示す。無色透光性を示すものが大部分で、まれに淡褐色を示す。孔隙は不定形状で、局所的に弱い定向配列を示す。																								
359	細 礫																								0
	極粗粒砂														1		2								3
	粗 粒 砂	1												2	3						1				7
	中 粒 砂	1		1												1					5				8
	細 粒 砂	2	1					1						2	2						12				20
	極細粒砂	2												1			1				6				10
	粗粒シルト																	1			3				4
	中粒シルト	1																							1
	基質																							538	
	孔隙																							7	
備考	基質は、粘土鉱物、非晶質物質などによって埋められる。火山ガラスはバブルウォール型を示す。無色透光性を示すものが大部分で、まれに淡褐色を示す。角閃石あり。孔隙は不定形状で、局所的に弱い定向配列を示す。																								

表8 薄片観察結果(2)

試料名	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計							
		鉱物片								岩石片						その他									
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩		多結晶石英	花崗岩類	変質岩	火山ガラス	植物片	植物珪酸体	
360	細 礫																								0
	極粗粒砂												2	1						1					4
	粗粒砂	4											4	2							1				11
	中粒砂	3					1						2	1							2				9
	細粒砂	5					1						2	1			2				6				17
	極細粒砂	4												1		1					3				9
	粗粒シルト	1																			1		3		5
	中粒シルト																						1		1
	基質																							568	
	孔隙																							10	
備考	基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、非晶質物質などで埋められる。火山ガラスはバブルウォール型を示す。無色透光性を示すものが大部分で、まれに淡褐色を示す。孔隙は不定形状で、局所的に弱い定向配列を示す。																								
361	細 礫																								0
	極粗粒砂																								0
	粗粒砂	4										1		2		1									8
	中粒砂	1												2							5				8
	細粒砂	1												2	1						6				10
	極細粒砂																				7				7
	粗粒シルト																				3		1		4
	中粒シルト																						1		1
	基質																							392	
	孔隙																							10	
備考	基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、非晶質物質などで埋められる。火山ガラスはバブルウォール型を示す。無色透光性を示すものが大部分で、まれに淡褐色を示す。角閃石あり。土器の両側とも暗褐色を示し、内部は褐色を示す。孔隙は不定形状で、定向性を示さない。																								
362	細 礫																								0
	極粗粒砂																					1			1
	粗粒砂	2											5	1							2				10
	中粒砂	3	1				1						3	1							7				16
	細粒砂	10					1						3	1		1					12				28
	極細粒砂	4	1	1									1	1							4				12
	粗粒シルト																				3		2		5
	中粒シルト	1																							1
	基質																							1281	
	孔隙																							31	
備考	基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、非晶質物質などで埋められる。火山ガラスはバブルウォール型を示す。無色透光性を示すものが大部分で、まれに淡褐色を示す。角閃石あり。土器の片側は暗褐色を示し、内部は褐色を示す。孔隙は不定形状で、局所的に弱い定向配列を示す。クラックによって孔隙が連結することがある。																								
土壌1	細 礫																								0
	極粗粒砂												1							1					2
	粗粒砂	8	1									3	7	8		9	8	1							45
	中粒砂	8	3	2	1		2		1			2	1	7	7		11	5							50
	細粒砂	12	2	6					1		1	2	2	3		6	4								39
	極細粒砂	19	5	3	3		1		2	1				2		3									40
	粗粒シルト	12	3	1			1																		17
	中粒シルト	7																							7
	基質																							480	
	孔隙																							53	
備考	基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、非晶質物質などで埋められる。植物珪酸体あり。																								

表9 薄片観察結果(3)

試料名	砂粒区分	砂粒の種類構成																		合計					
		鉱物片									岩石片						その他								
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類		変質岩	火山ガラス	植物片	植物珪酸体	
土壌2	細 礫																								0
	極粗粒砂																								0
	粗粒砂	2	1	2			1					2	1		6	7		11	6		1			40	
	中粒砂	7		4	1											3		3	4			1		23	
	細粒砂	18	2	10	2		1		2	5		4	1		1	1		3	1		1			52	
	極細粒砂	28	4	2		1	2		3	7	1				1		1							50	
	粗粒シルト	14	2	3					3	4														26	
	中粒シルト	4	1						1	3														9	
	基質																							463	
	孔隙																							42	
備考	基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、非晶質物質などで埋められる。火山ガラスはバブルウォール型を示す。無色透光性を示す。安山岩、植物珪酸体あり。																								
粘土塊1	細 礫																							0	
	極粗粒砂																							0	
	粗粒砂	1		1										4			3				3			12	
	中粒砂	1		1											1		1				21			25	
	細粒砂	11		5			3							1	1		3				50			74	
	極細粒砂	9		4			7	1									1				35			57	
	粗粒シルト	8	1	2			2														8		5	26	
	中粒シルト	3																			1		2	6	
	基質																							1199	
	孔隙																							70	
備考	基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、非晶質物質、水酸化鉄などで埋められる。火山ガラスはバブルウォール型を示す。無色透光性を示す。植物片あり																								
粘土塊2	細 礫																							0	
	極粗粒砂																					1		1	
	粗粒砂	1		2								1		2	4	1	3	1				1		16	
	中粒砂	8	2	2					1		2			5	6		11	5		1	1			44	
	細粒砂	16		3	1	1	1		1	6		3		4	5		14	2			7			64	
	極細粒砂	24	2	5		3	2		2	2					1		3				8			52	
	粗粒シルト	10		1			1	1													4		4	21	
	中粒シルト	1																					1	2	
	基質																							644	
	孔隙																							44	
備考	基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、非晶質物質、水酸化鉄などで埋められる。火山ガラスはバブルウォール型を示す。無色透光性を示す。																								
粘土塊3	細 礫																							0	
	極粗粒砂													1			1							2	
	粗粒砂	3	1						1			1		4	6	1		1						18	
	中粒砂	8	2	2		1		1			2	2		5	7	1	6	2			3			42	
	細粒砂	25	5	5			2		3		3	1	1	2	4		6	1			2			60	
	極細粒砂	22	5	6	1	3	2		2	6		1			2		2				1			53	
	粗粒シルト	11	1	1			1			2													1	17	
	中粒シルト	5	1	1						1														8	
	基質																							693	
	孔隙																							77	
備考	基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、非晶質物質、水酸化鉄などで埋められる。火山ガラスはバブルウォール型を示す。無色透光性を示す。																								

表 10 薄片観察結果（4）

試料名	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計						
		鉱物片								岩石片						その他									
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英		花崗岩類	変質岩	火山ガラス	植物片	植物珪酸体	
粘土5	細 礫																								0
	極粗粒砂																								0
	粗 粒 砂		2											1	1				1	1					6
	中 粒 砂	2		4										1	2		1	3			14				27
	細 粒 砂	11		3			2			1						1	4				43				65
	極細粒砂	11	1	4			4										1				46				67
	粗粒シルト	6		2	1																13		6		28
	中粒シルト	3		1																				3	7
	基質																							1021	
	孔隙																							40	
備考	基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、非晶質物質、水酸化鉄などで埋められる。火山ガラスはバブルウォール型を示す。無色透光性を示す。																								

土壌 1 では粗粒砂から極細粒砂までの広い範囲で全体的に多い傾向が窺がえるが、土壌 2 では細粒砂と極細粒砂の多い傾向が窺がえる。

粘土塊試料では、3点ともに細粒砂が多く、次いで極細粒砂が多い。粘土片の粘土 5 では、細粒砂と極細粒砂が同程度に多い組成である。

3) 碎屑物・基質・孔隙の割合

土器試料のうち、試料番号 358 を除く 6 点は、いずれも碎屑物の割合が 5～10% 程度であり、試料番号 358 は碎屑物の割合が 20% を示す。

土壌試料は、2点ともに碎屑物の割合が 30% 弱である。粘土塊および粘土片の試料では、粘土塊 1 と粘土 5 は、碎屑物の割合が 15% 前後、粘土塊 2 と粘土塊 3 は碎屑物の割合が 20% 程度を示す。

4 考察

土器胎土中の砂粒における鉱物片および岩石片の種類構成は、土器の材料となった砂や粘土などの堆積物が採取された場所の地質学的背景を示唆していると考えられる。しかし、今回の土器試料の場合には、胎土中に多量のバブルウォール型火山ガラスの含まれることが特徴であった。この火山ガラスは、その形態と褐色を帯びたものが含まれることと城山遺跡の地理的位置および土器が弥生土器であることなどから、7,300 年前に九州南方の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤテフラ (K-Ah: 町田・新井, 1978) に由来する可能性があると考えられる。K-Ah の分布域は九州から東北地方南部まで含まれる (町田・新井, 2003) から、その火山ガラスの含有自体は地域的な指標にはならない。ただし、胎土中におけるその含有量の多さは、K-Ah が人間の認識できる程度の厚さ (最低でも数 cm 程度) を持って堆積している地域に由来することを示唆している。すなわち、火山ガラスの含まれていることを知らずに採取した堆積物が土器の材料となっているのではなく、火山ガラスを意図的に土器の材料の一部として混ぜた可能性があると考えられるのである。播磨平野付近であれば、K-Ah の降下堆積後の保存条件が良い場所 (泥炭層や湖成層あるいは山麓斜面堆積物など) では十分な厚さを持って堆積していることが推定される。

ここで土器胎土中の火山ガラス以外の碎屑物に注目すると、岩石片では凝灰岩と流紋岩・デイサイト

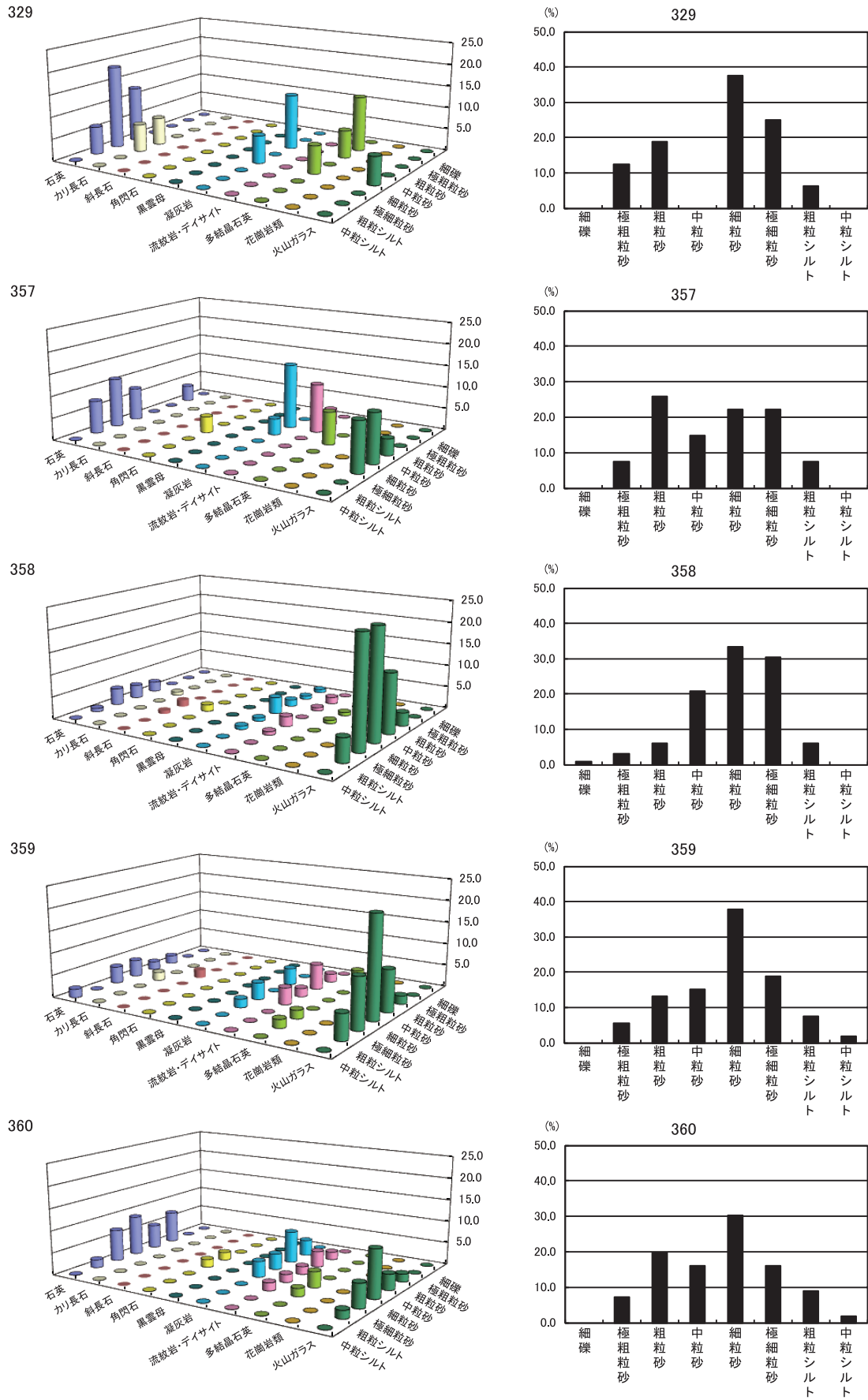


図8 碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成 (1)

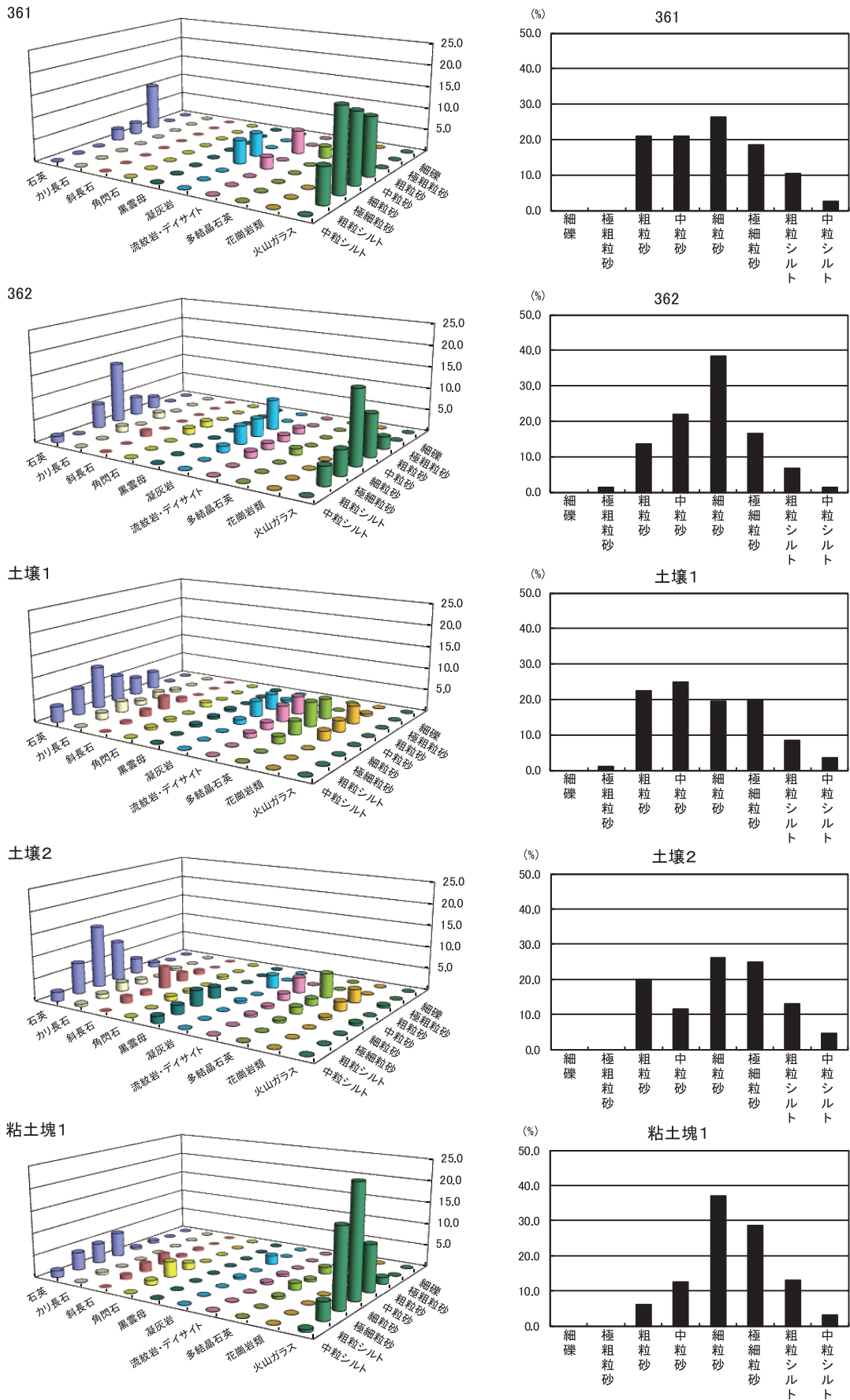


図9 碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成 (2)

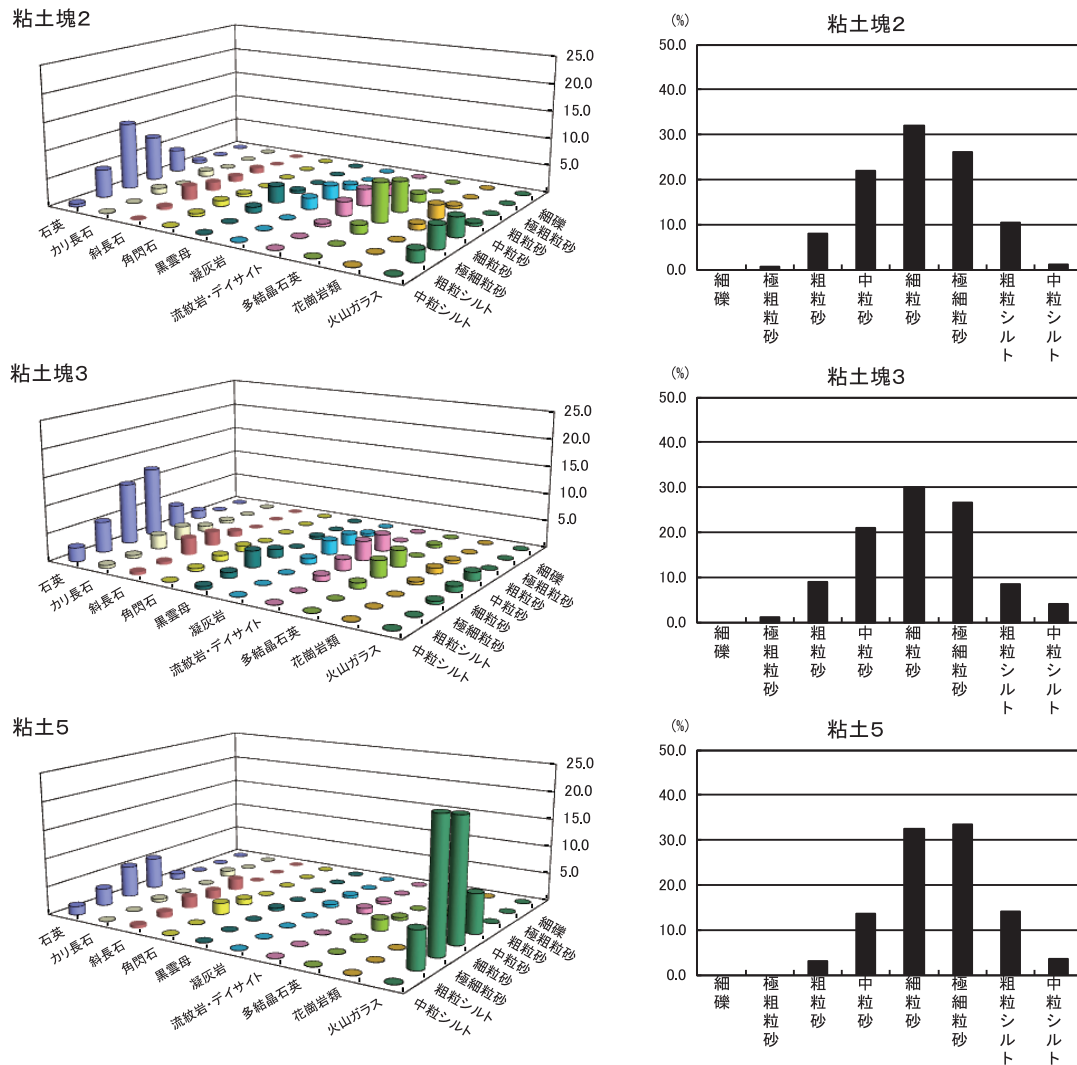


図10 碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成（3）

が主体を占めている。これらの岩石片は、遺跡の立地する沖積低地の堆積物の試料である土壌1と土壌2においても主体を占めているが、土壌1と土壌2で得られた鉱物・岩石組成は、城山遺跡の立地する沖積低地の地質学的背景を反映している。この沖積低地の形成は、揖保川と林田川および大津茂川など、中国山地から吉備高原を南下して播磨平野に至る河川によるものであるから、その地質学的背景はこれらの河川流域に分布する地質ということになる。山元ほか（2000）などを参照すれば、その概要は、凝灰岩と流紋岩・デイサイトからなる後期白亜紀の火砕岩や火山岩の分布が主体であり、またこれらの地質に貫入する主に花崗閃緑岩からなる貫入岩類も分布する。さらに揖保川や林田川の上流域には古生代末～中生代にかけてのチャートや頁岩などの堆積岩類からなる地質も分布している。土壌1や土壌2に認められる岩石片の種類構成は、このような地質学的背景をよく示しているといえる。なお、山元ほか（2000）には、城山遺跡から至近にある桜山貯水池周囲の丘陵内の谷に山麓緩斜面堆積物の分布が記載されている。これなどは、前述したK-Ahの降下堆積層が保存されている可能性のある堆積物に相当する。

以上のことから、土器試料の材料に使用された堆積物は、遺跡周辺の沖積低地堆積物に由来する可能性があると考えられる。おそらく、遺跡周辺で採取された粘土に周辺のどこかに所在するK-Ahの堆積層から採取したシルト状の火山灰を混ぜて土器の素地土を調整したということが想定される。今回の粘

土塊とされた試料3点では、火山ガラスの量比だけが異なる組成が確認されている。粘土塊1は、土器試料とほぼ同様の量比の火山ガラスを含み、他の2点の粘土塊は土器試料とは有意に異なる火山ガラスの量比である。粘土塊1は火山ガラスを混ぜる調整の仕上がった素地土、他の2点は火山ガラスを混ぜて調整中の素地土と考えることができる。さらに粘土5の小片は、土器と同様の火山ガラス量比であることから、土器成形中に生じた粘土層のようなものかもしれない。今回の分析結果は、SH57が土器製作等の作業用の建物であったとする発掘調査所見を支持するものといえる。

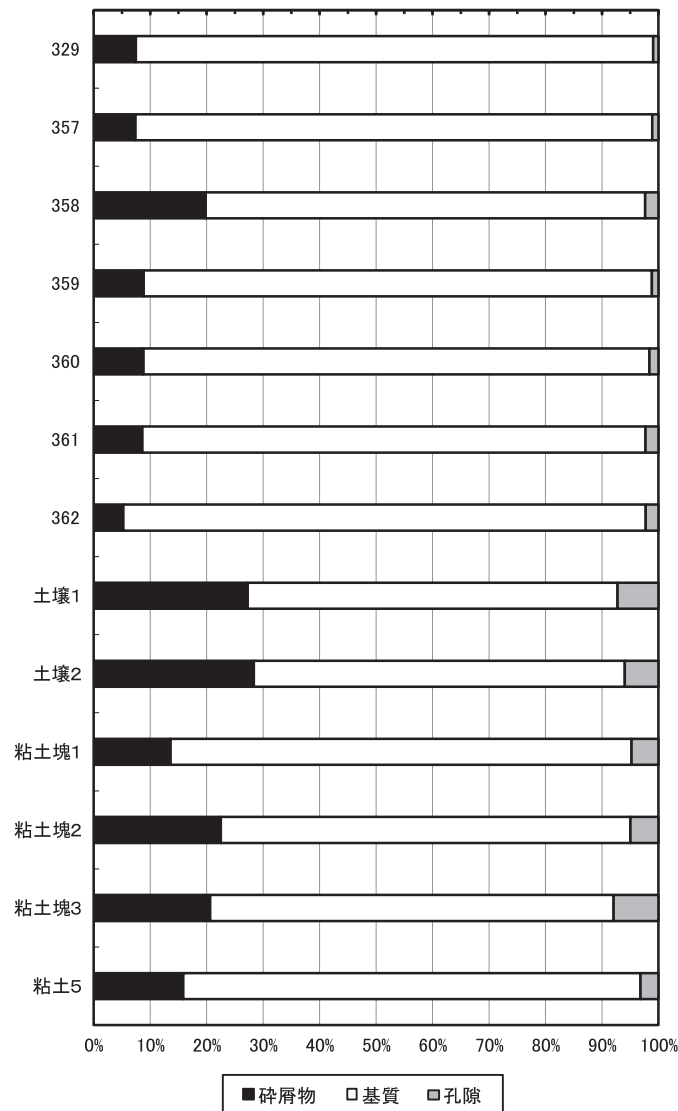


図11 碎屑物・基質・孔隙の割合

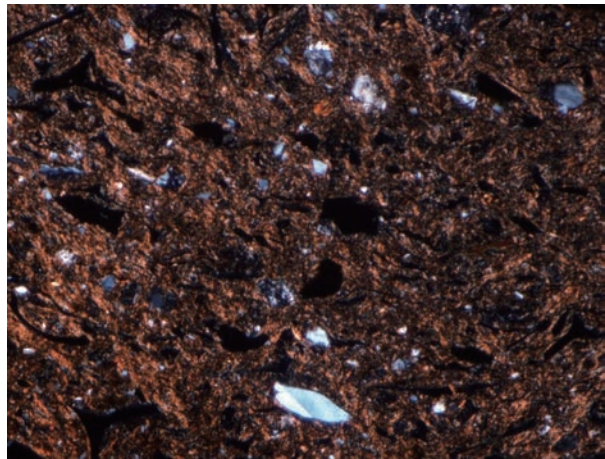
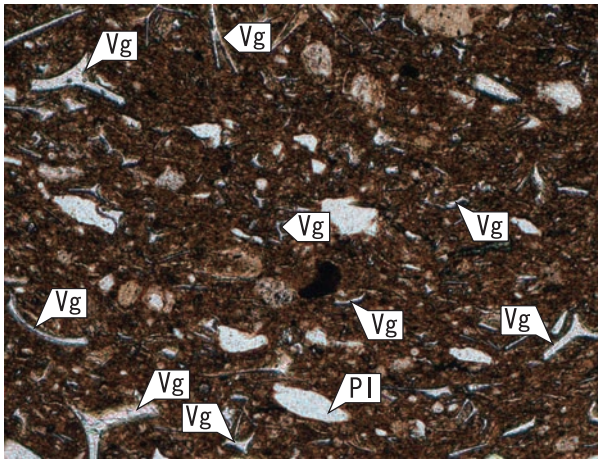
引用文献

町田 洋・新井房夫, 1978, 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ-アカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, 143-163.

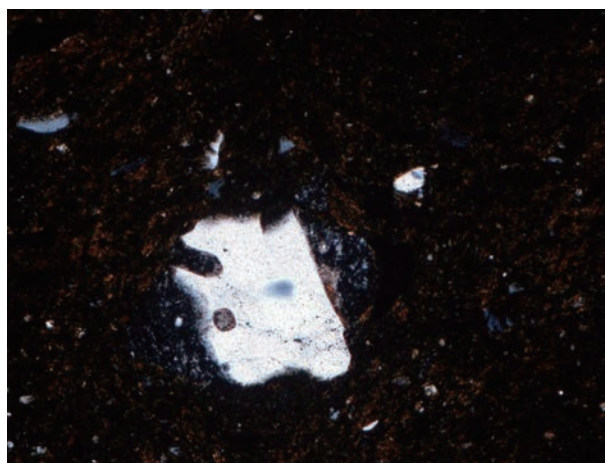
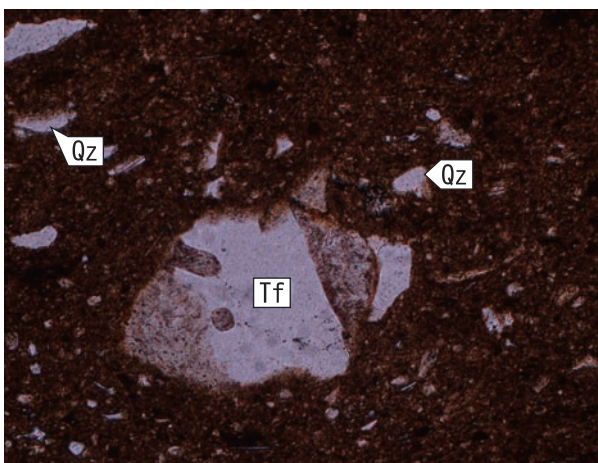
町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察-岩石学的・堆積学的による-. 日本文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121.

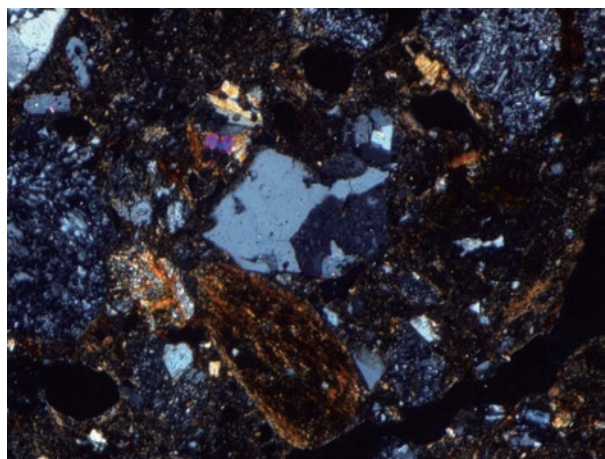
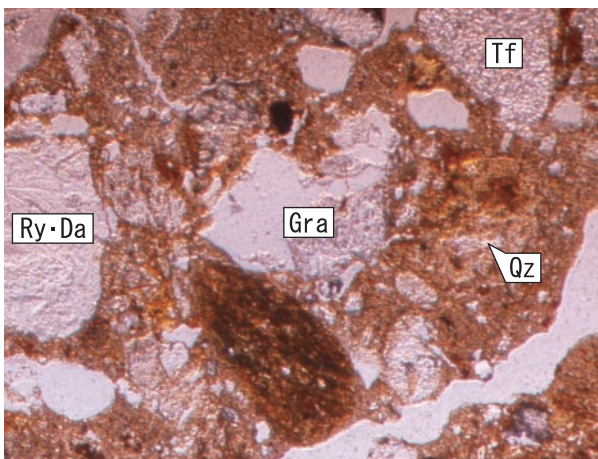
山元孝広・栗本史雄・吉岡敏和, 2000, 龍野地域の地質. 地域地質研究報告 (5万分の1図幅), 地質調査所, 66p



1. 358 (甕 2019042 D-4 SH57南北アゼ北半)



2. 362 (器台か 2019042 D-4)



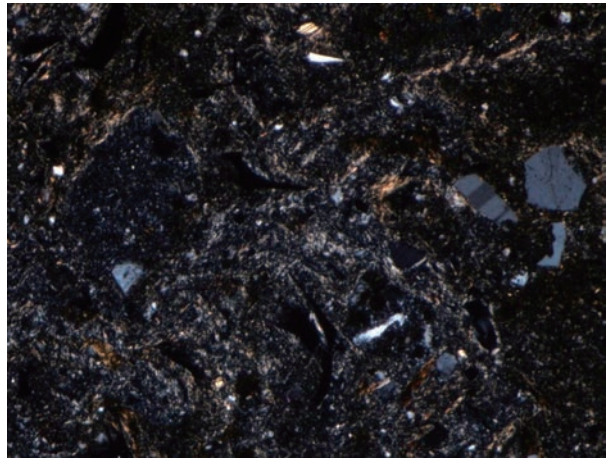
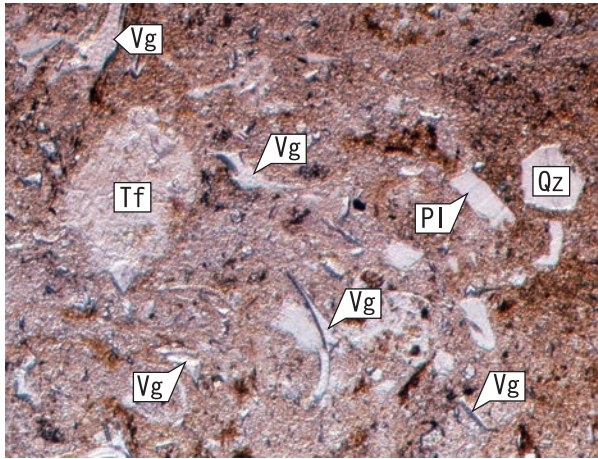
3. 土壤 1 (2019042 D-4 SH57)

Qz: 石英, Pl: 斜長石, Tf: 凝灰岩, Ry・Da: 流紋岩・デイサイト, Gra: 花崗岩, Vg: 火山ガラス.

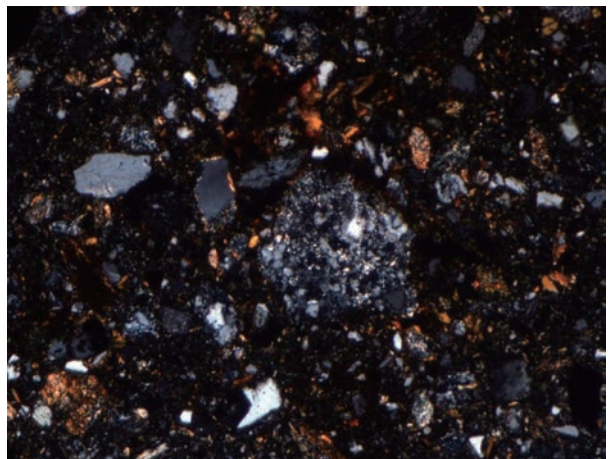
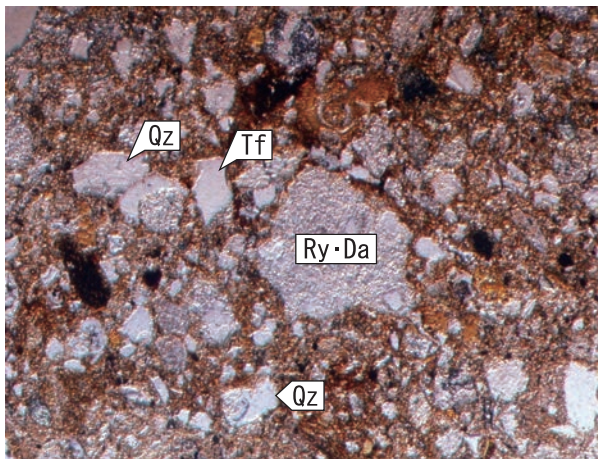
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

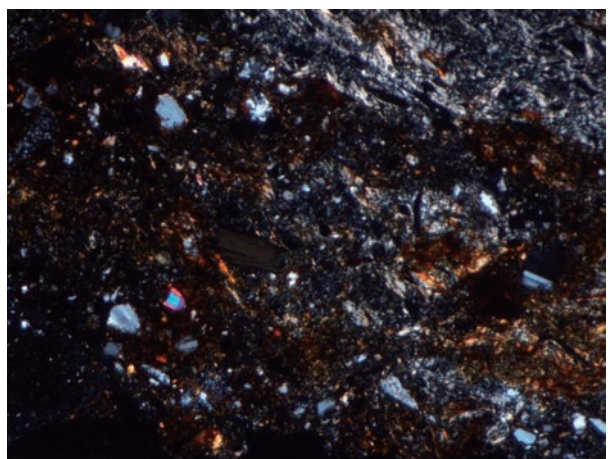
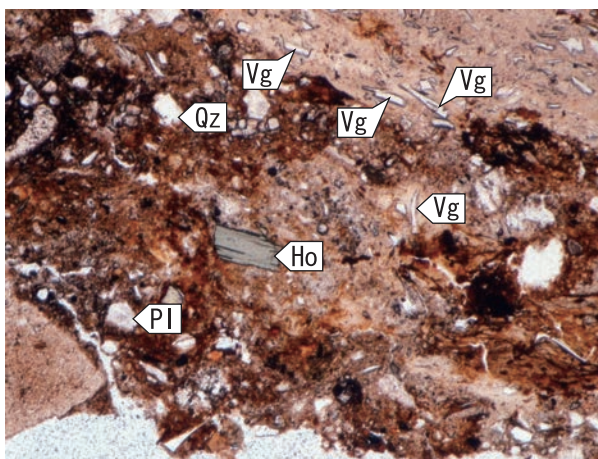
図 12 胎土薄片・土壤薄片



1. 粘土塊 1 (2019042 D-4 SH57)



2. 粘土塊 3 (2019042 D-4 SH57)



3. 粘土 5 (2019042 D-4 SH57)

Qz: 石英. PI: 斜長石. Ho: 角閃石. Tf: 凝灰岩. Ry·Da: 流紋岩・デイサイト.
Vg: 火山ガラス.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

図13 粘土塊薄片・粘土薄片

第7章 まとめ

第1節 城山遺跡で検出した焼失建物跡について

(1) 建物構造

炭化材や土器などの出土状況から構造を復元する。

炭化材の樹種同定の結果、イネ科の1点を除き、すべて広葉樹であった。そのなかでも、コナラ属コナラ節が17点、コナラ属クヌギ節が19点となっており、大部分を占める。第5章第1節で検討した、炭化建築材とこれらの樹種を比較すると、垂木や壁構築材といった部材によって異なるということはない。ただし、出土した炭化材はいずれも重硬で強度が高い樹種であることから、建物をつくるにあたり、樹種を選択していると思われる。同様な例は、加古川市溝之口遺跡、加東市下三草訪ノ下遺跡、神戸市西区吉田南遺跡、同市生田遺跡、姫路市飯田遺跡、播磨町大中遺跡などの竪穴建物跡で確認されている。

S H57では、支柱穴は確認できておらず、竪穴建物の周辺には、それと関連する柱穴も見つかっていない。そのため、屋根を支える構造は不明である。土層断面観察から、土塊や焼土塊は見つかっていないため、土壁でなかったことがわかる。炭化材8（道具である可能性もある）、21～25、31の出土位置や、樹種から壁構造は杭と稲を使用した草壁である可能性がある。竪穴壁の崩落を防ぐために設けられていたと考えられる。ただし、稲と同定された炭化材は、編物あるいは敷物である可能性もある。周壁溝上に、粘土塊や土器が出土している場所もあるため、全周に草壁は及んでいない。周壁溝上にかかる、粘土塊や土器の存在から、出入口と推定することも可能であるが、断定はできない。仮に出入口とした場合、東側が出入口となる。

垂木は壁から建物中心に向かって放射状に出土しており、垂木の厚さなどに違いはない。垂木間は約30 cmほどである。建物中央が土坑に切られており、残された竪穴建物跡の堆積層の断面観察から、土屋根であったかの判断はつかなかった。

(2) 建物の性格

S H57からは、炭化材や土器だけでなく、粘土塊・片が出土しており、建物の性格の一端を表している可能性がある。その性格を明らかにするため、胎土分析を実施した。詳細な分析内容は、第6章第3節を参照し、ここでは分析対象の概要とその意図、そして結果について述べる。以下、遺物の出土状況、胎土分析の結果、建物の性格復元といった順で述べる。

遺物の出土状況からみていく。S H57の床面南側から、粘土塊が3点出土しており、重いもので6 kgを量り、白色を呈し、胎土はきめ細かい。被熱はしていない。粘土塊周辺からは粘土片が7点出土しており、4点は被熱している。重さは1 kg以下である。被熱の有無は、大きさの違いによるものと考えられるが、粘土塊は乾燥を防ぐため、何か覆われていたことにより、被熱していないとも解釈できる。

粘土片は粘土塊と同様に、白色を呈し、胎土がきめ細かいことから、粘土片は粘土塊の一部であると想定される。粘土片が置かれた土器331の底部は、接合する体部の破片もなく、炭化材が覆いかぶさっていたことから、完形の甕もしくは壺のなかに粘土が貯蔵されていたというよりも、焼失する直前まで、底部片を粘土調整する道具として転用していたと想定される。以上、遺物の出土状況から、S H57は土器製作に関する建物であり、建物内南側の空間は、土器を製作する場であると推定ができる。

つぎに胎土分析について述べる。

分析対象は粘土塊3点、粘土片1点、土器7点、土壌2点である。それぞれの対象物の位置は附図1(62頁参照)に示している。土器7点のうち、3点はSH57の床面より出土したもの、1点はSH57・160の埋土、3点は他の遺構より出土したものである。

上記の分析対象を選出した意図は、SH57より出土した土器と粘土塊・片の関係性、および粘土塊・片の採取地を明らかにすることである。粘土塊の採取地は、本調査区内で粘土採掘坑として見つかっていないため、不明とせざるを得ない。ここでは、調査区周辺で採取したと仮定して、本調査区の基盤層を「土壌」として2点採取した。

分析結果から2点が明らかになった。

1点目は、砂粒における鉱物片および岩石片の種類構成から、土壌、粘土塊・片、土器は同様な種類構成をもつことである。また、粒径組成および碎屑物・基質・孔隙の割合の検討では、明瞭な違いが見られないことも明らかになった。

2点目は、粘土塊1、粘土片5、土器の一部に大量のバブルウォール型火山ガラスを検出したことである(以下、火山ガラスとする)。火山ガラスは、鬼界アカホヤテフラと推定とされた。なお、土壌や粘土塊2・3からは大量の火山ガラスは検出されていない。

胎土分析の結果は、遺物出土状況から導き出した見解と調和的である。1点目の分析結果から、粘土塊・片は、土器製作用のものといえる。つまり、粘土塊・片は調査区周辺で採取され、それをもとに、素地として調整し、土器を製作していた可能性があるといえる。2点目の結果から、土器製作にあたり、火山灰を混和剤として混入させている可能性があるといえる。

よって、SH57は、遺物出土状況および、胎土分析の結果から、土器工房としての性格を有するといえよう。また、土器工房としての性格が明らかになっただけでなく、土器製作工程についても言及できる。つぎに、土器製作の作業工程について述べる。

(3) 土器製作の作業工程

粘土塊に含まれる、火山ガラスの量比のありかたから、土器製作の作業工程を明らかにする。まずは、胎土分析で明らかになった2点について整理する。

胎土分析の対象物である、土壌、粘土塊・片、土器は、鉱物片・岩石片の検討から、同様の種類構成をもつことが明らかになった。つまり、土壌(あるいは、遺跡周辺から採取した粘土)をもとに、粘土として調整し、土器製作をおこなったと解釈できる。さらに、土壌では少量しか検出されなかった、火山ガラスが粘土塊・片、土器からは大量の火山ガラスが検出された。よって、SH57内で遺跡周辺から持ち込まれた粘土に、火山ガラスを混入させて土器を製作していたことが推定される。

つぎに、火山ガラスの量比から、粘土の調整工程を復元する。粘土塊は火山ガラス量比が多いもの(粘土塊1)、少ないもの(粘土塊2・3)に分けられる。前者は、碎屑物における火山ガラスの含有率は約59%を占め、後者は10%と3%を占める。土器は、試料329以外、20～70%を占める。なお、試料329は6%を占める。

以上のことから、火山ガラスの量比の違いは粘土調整の過程を示している可能性がある。つまり、粘土塊2・3は、火山ガラスを混ぜた調整中の素地土、粘土塊1は調整が仕上がった素地土と想定するのである。仮に粘土塊1が調整済みの素地土だった場合、同様の火山ガラスの量比を示す、粘土5(粘土片)は素地土から削り取ったと想定ができる。自然科学分析から導出された解釈を採用している。なお、火山ガラスを混和する意図や意味等は不明である。

(4) 小結

以上、明らかになったことを箇条書きでまとめる。

- ・ S H57 に使用された建築材の樹種は、広葉樹のコナラ属のものが大部分を占め、重硬で強度なものであった。そのため、建物を建てるにあたり樹種を選択しているといえる。
- ・ S H57 の壁構造は杭と稲を使用した草壁である可能性がある。ただし、イネ科と同定された炭化材は、編物・敷物である可能性もある。検出状況から出入口は東側と予想される。
- ・ 建物内へ入ると、左側に土器の破片を転用した粘土調整具や土器製作用と思われる粘土等が置かれており、建物内の南側が土器製作作業場空間である可能性がある。
- ・ 胎土分析の結果、粘土塊・片、土器・土壌ともに、同様の鉱物片・岩石片組成をもつこと、大量の火山ガラスが見られることが明らかになった。
- ・ 出土状況と胎土分析の結果から、S H57 は土器工房としての性格を有するといえ、火山ガラスの量の様相から、粘土調整の過程を推測することができた。

第2節 鶺鴒北遺跡より出土した平安時代後期～鎌倉時代の土器・陶磁器

鶺鴒北遺跡から出土した平安時代以降の土器には、供膳具である埴や皿が、調理具の鉢（捏鉢）、煮炊具としては埴、羽釜、足埴、貯蔵具の甕などが見られ、掘立柱建物跡と S X 1 などを中心に、日常生活空間が存在したことを示している。

(1) 食膳具

2群に大別しうる皿が組成の主体を占めており、中でも相対的に小型の第1群が多数を占める。土師器皿には、回転成形されたものは含まれておらず、いわゆる京都系と呼ばれるものである。土師器および須恵器埴の組成率は低く、土師器皿の組成とは対極の状況にある。瓦器埴は小片化したものがごくわずかに出土したのみで、須恵器埴同様、今回の調査区内では主たる供膳具たりえていない。土器の埴類がこのようにわずかししか出土しない状況から見れば、食膳具として木製品が主要な位置を占めていた可能性も想起される。

(2) 調理具

須恵器鉢がこれにあたる。いわゆる東播系の片口鉢で、口縁端部を拡張しないもの、上方ないしは上下方に拡張するもの等、数段階の型式差が認められる。

(3) 煮炊具

土師器および瓦質の埴、羽釜で構成される。口縁部が屈曲して直線的に開く埴と、内傾する口縁部を見せ、やや幅広の鏝を付けた羽釜を主体としており、他に足埴脚部の破片が2点出土している。埴の口縁部は典型的な受け口状のものではなく、口縁部が内方にやや強く湾曲するもの(59)を見るのみである。

(4) 輸入磁器類

組成率は低いが、青磁、白磁および青白磁が出土している。青磁碗は大宰府分類による龍泉窯系青磁碗Ⅲ類、白磁皿は同じくⅨ類と考えられるものが認められる。注目されるのは青白磁梅瓶である。全面に渦文ないしは唐草文を彫り、釉薬の厚み、発色も安定した優品であり、兵庫県下でも出土数の多くない遺物である。

黄釉鉄絵陶器も、県下での出土例が少ない遺物である。この種の陶器は、福建省磁窰窯の生産とされ

ており、鶺鴒北遺跡出土例のような玉縁の製品の確実な出現は、12世紀中葉以降とされている（五十川伸矢ほか 1992）

第3節 遺跡の形成過程

（1）鶺鴒北遺跡

今回の調査により、鶺鴒北遺跡は、遺構内および古土壌層（遺物包含層）の出土遺物によって、概ね4つの段階にわたって形成されたことが明らかとなった。

【第1段階：弥生時代前期末～中期初頭】

今回の調査では、当該時期の遺構は検出されなかったが、古土壌層中出土の遺物、原位置遊離遺物から、この段階までに調査区付近には沖積微高地が形成され、人の居住が始まった可能性が高いだろう。原位置を遊離して出土した土器は、ほとんど転磨を受けておらず、至近距離に遺構が存在するものと考えられる。

【第2段階：弥生時代中期】

調査区内では、当該期の遺物を出土する土坑が散漫な分布を見せ、また、平安時代以降の遺構内からも当該期の遺物が出土している。したがって、弥生時代中期段階において、調査区付近に集落が成立していたことは疑いないだろう。

【第3段階：古墳時代】

今回の調査では、明確に当該期に属する遺構は検出されなかったが、古土壌（遺物包含層）中より古墳時代に属する遺物が出土している。これらはほとんど転磨を受けていないことから、やはり至近の位置に当該期の遺構が存在したのと考えてよからう。特徴的な黒色土師器、韓式系土器等は古墳時代中期の所産と思われる。

【第4段階：平安時代後期～鎌倉時代】

今回の調査区において、検出された遺構の多数を占める時期である。調査区北半を中心に検出された掘立柱建物跡、柵、石組遺構、および調査区全域に分布する柱穴・溝等が、この段階に属している。S X 1の状況をみると、特に火を用いた生活の場、即ち炊爨施設であった可能性は高い。調査区南半は遺構密度が低いことから、当該時期の集落1単位の南縁を示している可能性も考慮される。当該期には、鶺鴒北遺跡周辺は法隆寺領鶺鴒荘に属しており、今回検出された建物跡を中心とした遺構群も、鶺鴒荘に属する集落の一部と考えてよからう。

なお調査区周辺に広く分布する条里型地割の方位と、今回検出した掘立柱建物跡群の方位はよく一致しており、鶺鴒北遺跡における集落が、条里型地割との関係性の中で成立したことが理解される。

【小結】

今回の調査により、弥生時代前期末～中期初頭・弥生時代中期・古墳時代中期・平安時代後期～鎌倉時代の、大別4時期にわたって遺跡が形成されたことが明らかとなった。平安時代後期～鎌倉時代にかけては、法隆寺領鶺鴒荘に包摂されていた可能性が高く、当該期の集落の一端を明らかにできたことは、重要な成果と言えよう。出土した土器の編年観から、鶺鴒北遺跡の集落は、12世紀前半～13世紀代に営まれていたと考えられるが、これ以降は継続しておらず、鎌倉時代後半期以降には荘園内の集落のあり方に変化が生じた可能性が想起される。

(2) 城山遺跡

今回の調査により、城山遺跡は、概ね4つの段階にわたって遺跡が形成されていたことが明らかとなった。

【縄文時代後期～弥生時代中期】

NR（自然流路）1は、北西方向から南東方向に流れていたと思われ、層位別の土器様相から、縄文時代後期から弥生時代中期中葉にかけて徐々に埋まっていき、弥生時代後期には完全に埋没したと思われる。

【弥生時代後期】

竪穴建物跡3棟のほか、土坑や溝などを検出した。竪穴建物跡3棟のうち、1棟は焼失しており、炭化した建築材等が良好な状態で出土した。建物内からは、粘土塊や粘土片などが出土しており、胎土分析の結果等から土器製作に関する性格を有すると考えられる。また、竪穴建物跡は、令和2年度調査区の南東側、および平成28年度調査区に集中している。

【古墳時代中期～飛鳥時代】

竪穴建物跡が3棟、掘立柱建物跡2棟のほか、土坑、溝、不明遺構を検出した。竪穴建物跡の3棟のうち2棟は、竈を有している。掘立柱建物跡の主軸方位は、正方位を示さない。遺構分布は弥生時代後期と同様、令和2年度調査区の南東側、および平成28年度調査区に集中している。

【平安時代後期～中世】

掘立柱建物跡4棟、土坑・溝等が複数確認されており、本調査で最も遺構数が多い時期である。掘立柱建物跡は、おおよそ正方位を示す。溝も正方位を示すものもあるが、そうでない溝もある。遺跡周辺に見られる条里型地割も、おおよそ正方位を示していることから、正方位を示す遺構群は、鵜荘との関係を示すものと考えられる。

【小結】

城山遺跡は、東西540m、南北500mに及ぶ範囲が埋蔵文化財包蔵地として周知されており、これまでいくつか調査がなされてきた。包蔵地内の北西部では、太子町教育委員会が調査を実施し、縄文時代から中世・近代にいたるまでの遺物が見つかったほか、北東部では弥生時代中期末～古墳時代後期の住居跡が7棟見つかった。本調査区は包蔵地内の南側にあたる。

今回の調査では、縄文時代後期～弥生時代中期、弥生時代後期、古墳時代中期～飛鳥時代、平安時代後期～中世の、大別4時期にわたって遺跡が形成されたことが明らかとなった。

【参考文献】

太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集

五十川伸矢ほか 1992 「第2章 京都大学本部構内AW27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』1988年度

遺物觀察表

表 11 鶺鴒北遺跡 出土遺物観察表（土器・陶磁器）

報告番号	図版番号	写真番号	種別	器種	出土遺構	出土層位	法量 (cm)				残存		
							口径	器高	底径	その他	口縁	底	他
1	13	18	土師器	皿	SP 234		(8.9)	(1.3)	(8.2)		1/7	1/7 (中心は欠損)	
2	13	18	土師器	皿	SP 234	一段下げ時	(7.3)	1.2	(6.6)		1/6	1/6 (中心は欠損)	
3	13	18	須恵器	鉢 (捏鉢)	SP 234	一段下げ時		(3.4)	(8.0)			周の1/4 (中心は欠損)	体部下半 1/5
4	13	18	土師器	皿	SP 255		(12.1)	(2.0)			1/4		
5	13	18	白磁	碗	SP 268		(10.0)	(2.9)			1/6		体部 1/6
6	13	18	須恵器	鉢鉢 (捏鉢)	SP 295		(28.6)	(4.9)			1/10		体部わずか
7	13	18	須恵器	鉢 (捏鉢)	SP 17		(31.2)	(7.9)			1/12		体部わずか
8	13	18	土師器	羽釜	SP 294		(23)	(7.7)		腹径 (24.4)	1/4 弱 (端部はわずか)		体部 上半 1/4 弱、鏝 1/11 程度
9	13	19	瓦質	甕	SP 293			(11.7)					頸部～肩部 1/6 弱、体部（接 合しない） 1/6 ～ 1/5
10	13	20	土師器	皿	SX 1		7.8	1.2	7.13		端部 1/3	残存	体部残存
11	13	21	土師器	皿	SX 1		(7.3)	(1.1)	(6.2)		1/2 弱	1/2 (中心は欠損)	
12	13	—	土師器	皿	SX 1		(7.9)	(0.9)	(7.8)		1/2	1/2	
13	13	21	土師器	皿	SX 1		(8.3)	(1.1)	(3.8)		1/4	1/4 (中心は欠損)	
14	13	21	土師器	皿	SX 1		(8.5)	(1.2)	(6.9)		1/4	1/4 (中心は欠損)	
15	13	21	土師器	皿	SD 41		(9.0)	(1.2)	(7.8)		1/6	1/5 弱 (中心は欠損)	
16	13	20	土師器	皿	SX 1		8.5	1.3	7.5		端部は所々摩 滅と欠損		ほぼ完形
17	13	21	土師器	皿	SX 1		(7.4)	1.1	(5.9)		1/4 強	1/4 強	
18	13	20	土師器	皿	SX 1		7.9	1.2	6.5				ほぼ完形 若干の剥離あり
19	13	20	土師器	皿	SX 1		8.2	1.7	7.4		4/5 (端部はほぼ摩 滅と欠損)	9/10	
20	13	20	土師器	皿	SX 1		(7.8)	1.4	(6.7)		1/2 弱	4/5	
21	13	20	土師器	皿	SX 1		8.1	1.4	6.8		5/6	残存	
22	13	20	土師器	皿	SX 1	精査中	8.2	1.5	7.8		1/4 弱	6/7	
23	13	20	土師器	皿	SX 1		8.3	1.5	7.3		端部 1/2 弱	残存	
24	13	20	土師器	皿	SD 41 アゼ1北側	面精査	(7.8)	(1.7)	(7.2)		1/2 弱 (端部は摩滅の ためほとんど残 存しない)	1/2 (中心は欠損)	
25	13	20	土師器	皿	SX 1		7.7	1.5	7.5		5/8	3/4	
26	13	20	土師器	皿	SX 1		7.5	1.7	7.2		ほぼ残存	13/14	
27	13	20	土師器	皿	SX 1		(7.8)	(1.7)	(6.0)		1/2 (端部はほとん ど欠損)	わずか (中心は欠損)	
28	13	21	土師器	皿	SX 1		(7.4)	(1.3)	(6.4)		1/6	1/4 強	体部 1/4 強
29	13	21	土師器	皿	SX 1		(10.3)	(2.2)	(8.5)		1/6	1/4 (中心は欠損)	
30	13	21	土師器	皿	SX 1		(11.0)	(2.3)	(10.0)		1/6	1/6 (中心は欠損)	
31	13	21	土師器	皿	SX 1		(10.2)	(2.7)	(8.7)		1/4	わずか	
32	13	21	土師器	皿	SX 1		(10.1)	(2.3)	(7.8)		1/6	1/6 (中心は欠損)	体部 1/6
33	13	21	土師器	皿	SX 1		(11.2)	(2.3)	(9.1)		1/4	1/4 (中心は欠損)	

表 11 鶺北遺跡 出土遺物観察表（土器・陶磁器）

報告番号	図版番号	写真番号	種別	器種	出土遺構	出土層位	法量 (cm)				残存		
							口径	器高	底径	その他	口縁	底	他
34	13	22	土師器	皿	SX 1		(9.2)	(2.6)	(6.86)		1/4	1/4 (中心は欠損)	
35	13	22	土師器	皿	SX 1		(9.6)	(2.3)	(8.0)		1/5 弱	1/5 弱 (中心は欠損)	
36	13	22	土師器	皿	SD 41 アゼ2北側	土器溜まり	(10.8)	(2.7)	(7.7)		1/4 弱	わずか	
37	13	22	土師器	皿	SD 41 アゼ1北側	面精査	(11.1)	(2.6)	(8.5)		1/3	1/3 弱 (中心は欠損)	
38	13	22	土師器	皿	SX 1		(11.9)	(2.8)	(10.3)		1/6 弱	1/6 弱 (中心は欠損)	
39	13	22	土師器	皿	SX 1		(11.7)	(2.6)			1/4	わずか	体部 1/4
40	13	22	土師器	皿	SX 1		(11.8)	(2.1)	(10.2)		1/4 弱	わずか	
41	14	22	土師器	皿	SX 1		(12.3)	(2.5)			1/4	1/4	
42	14	23	土師器	皿	SX 1		(11.4)	(2.7)			1/3 弱		体部 1/3 弱
43	14	20	土師器	皿	SX 1		(11.4)	(2.8)	(9.3)		1/3 弱	1/3 弱 (中心は欠損)	
44	14	20	土師器	皿	SX 1		11.7	2.6	10.5		1/3	ほぼ残存	体部ほぼ残存
45	14	23	土師器	皿	SX 1	精査中	(12.2)	(2.6)	(10.3)		1/7 強	1/5 強 (中心は欠損)	体部 1/7 強
46	14	20	土師器	皿	SX 1		12.2	(2.7)	9.8		ほぼ残存 (端部は若干の 欠損あり)	1/5 (中心は欠損)	
47	14	23	土師器	皿	SX 1		(12.5)	(2.5)	(10.2)		1/4 弱	2/5 (中心は欠損)	体部 1/4 弱
48	14	20	土師器	皿	SX 1		(12.2)	(2.7)	(10.6)		2/3	1/4 弱 (中心は欠損)	
49	14	23	土師器	皿	SX 1		(13.4)	(2.7)	(11.2)		1/5 強	わずか	体部 1/5 強
50	14	23	土師器	皿	SX 1		(15.2)	(2.5)	(12.8)		1/6 弱	1/6 (中心は欠損)	
51	14	20	須恵器	播鉢	SX 1			(7.3)	(10.4)			周の 1/4 (中心は欠損)	体部下 わずか
52	14	21	須恵器	鉢 (捏鉢)	SX 1		(23.9)	8.5	9.0		7/16 (片口部わずかに 残存)	残存	体部 7/16
53	14	23	須恵器	鉢 (捏鉢)	SX 1			(10.1)			片口の一部を含 む小片		体部上半の小 片
54	14	23	土師器	甕	SD 41 アゼ2より南		(18.6)	(7.5)			1/12		体部上半 わずか
55	14	23	土師器	埴	SX 1		(28.6)	(11.3)		腹径 (24.6)	1/6 弱		体部上半 1/7
56	14	24	土師器	埴	SX 1		(30.5)	(9.4)			1/9		体部上半 1/9
57	14	24	土師器	埴	SX 1		(30.9)	(5.6)			1/11		体部上半 わずか
58	14	24	土師器	埴	SX 1		(27.6)	(5.0)			1/7 弱		体部上半 わずか
59	14	24	土師器	埴	SX 1		(28.9)	(4.8)			1/11		体部わずか
60	14	24	土師器	埴	SX 1			(4.8)	(23.4)				体部と底部の 境付近 周の 1/10 程度
61	14	24	土師器	埴	SX 1		(35.1)	(6.2)			7/16		体部上半 わずか
62	14	24	土師器	羽釜	SX 1		(22.8)	(5.6)	(28.0)		1/4		鏝 1/6 体部わ ずか
63	14	24	土師器	羽釜	SX 1		(22.8)	(6.0)			1/3		鏝部 1/3 体部 わずか
64	15	巻頭 2 25	黄釉陶器	盤	SX 1		(35.9)	(11.0)	(29.9)		1/16	1/8 弱	体部わずか
65	15	26	染付磁器	皿	SX 240		(12.7)	3.7	(7.6)		1/4 弱	1/4 弱	高台 1/11
66	15	26	土師器	羽釜	SK 62	半裁	(21.8)	(6.9)			1/8 端部はわずか		鏝 1/14 体部上 半わずか
67	15	26	土師器	皿	SK 94		(11.7)	(2.2)			1/5	わずか	体部 1/5

表 11 鶺北遺跡 出土遺物観察表（土器・陶磁器）

報告番号	図版番号	写真番号	種別	器種	出土遺構	出土層位	法量 (cm)				残存		
							口径	器高	底径	その他	口縁	底	他
68	15	26	土師器	皿	SK 95		(9.8)	(2.5)	(7.6)		1/4 強	1/3 強 (中心は欠損)	体部 1/3 強
69	15	26	土師器	皿	SK 133	埋土 半裁	(7.7)	1.5	(5.8)		2/7	3/4	体部 1/2
70	15	26	土師器	皿	SK 133		11.5	(2.9)	9.4		ほぼ残存	1/2 程度 (中心は欠損)	体部若干 欠損
71	15	26	土師器	皿	SK 133		11.3	2.5	9.3		残 (端部 1/5 欠損)	残	
72	15	26	須恵器	捏鉢	SK 188・190			(4.2)			小片		
73	15	26	瓦器	埴	SK 250	上面		(1.0)	(4.9)			小片	高台 1/4
74	15	26	青磁	碗	SD 21・ SD 41		小片の ため不明	(2.9)			わずか		
75	15	26	須恵器	壺	SD 41 アゼ 2以南	埋土		(4.4)	(6.9)			1/4 弱 (中心は欠損)	体部 下半 1/4 弱
76	15	27	土師器	羽釜	SD 21・ SD 41		(34.7)	(14.1)		鏝径 (45.6)	1/8 強 (端部はわずか)		体部 上半 1/8、 鏝部 1/4 弱
77	15	26	土師器	羽釜	SD 41		(22.5)	(3.7)		鏝径 (27.6)	1/10		鏝部 1/12
78	15	27	土師器	羽釜	SD 41 アゼ 2北側	土器溜まり	(18.1)	(10.9)		鏝径 (22.2)	1/2	周の 1/3 弱 (中心は欠損)	体部 1/4、 鏝部 1/2 弱
79	15	27	瓦質土器	鉢	SD 41 アゼ 2北側	土器溜まり	(33.3)	(9.7)			1/10 弱		体部 上半 わず か
80	16	38	弥生土器	壺	SK 22			(9.2)					頸部～体部 上 半 1/6 弱
81	16	38	弥生土器	壺	SK 22			(7.1)	(8.0)			周の 1/3 (中心は欠損)	体部 下半 若干
82	16	38	弥生 土器?	甕	SK 22		(14.7)	(4.9)			1/12		肩部 1/12
83	16	37	弥生土器	甕	SK 22			(3.6)	6.6			残存	体部 下半 わずか
84	16	37	弥生土器	甕	SK 22			(3.5)	(7.3)			中心は残存、周 の 1/4 弱欠損	体部 下半 わずか
85	16	37	弥生土器	甕	SK 24 西半	上層		(9.9)	(6.0)			残存 (一部の角欠損)	体部 下半 若干
86	16	38	弥生土器	甕	SK 24 西半	上層	(17.1)	(11.9)		腹径 (18.4)	1/10 強		体部 上半 1/4
87	16	37	弥生土器	壺	SK 39			(11.2)	(6.0)	腹径 (14.3)		1/2	肩部 1/4 強、体 部 下半 1/2 弱
88	16	37	弥生土器	広口壺	SK 39		(14.1)	(25.1)	7.2	腹径 21.8	2/9	残存	体部 上半 2/11、 体部 下半 ほぼ 残存
89	16	37	弥生土器	甕	SK 30		(19.9)	(28.1)	(6.0)	腹径 (19.8)	1/5	1/2 (中心は欠損)	肩部 1/4、体部 1/4 程度
90	16	37	弥生土器	壺	SP 80			(29.5)		腹径 (40.7)			体部 1/4
91	16	38	弥生土器	壺	SX 1		(14.3)	(7.9)			1/3 弱		頸部 1/2 (同一 個体と思われる 不接片を合わ せた率)
92	16	38	弥生土器	甕	SP 208		(18.8)	(8.7)			1/5 弱		体部 上半 1/5 弱
93	16	38	弥生土器	甕	SP 151		(19.9)	(5.4)			1/8 弱		体部 上半 1/8 弱
94	16	38	弥生土器	甕 または壺	SP 245	下底		(9.1)	(13.8)			1/4 (中心は欠損)	体部 下半 わずか
95	16	38	弥生土器	甕 または壺	SP 199			(4.2)	(7.9)			1/2 強	
96	17	28	弥生土器	壺		包含層		(6.1)					肩部 わずか
97	17	28	弥生土器	甕 または鉢		包含層		(7.1)					体部 (口縁部直 下) わずか
98	17	28	弥生土器	鉢		包含層	(25.4)	(8.7)			1/8		
99	17	28	弥生土器	甕 または壺		包含層		(5.9)	(6.3)			周の 3/5 (中心は欠損)	体部 下半 わずか
100	17	28	弥生土器	甕 または壺		包含層		(3.3)	(6.2)			7/8	

表 11 鶺鴒北遺跡 出土遺物観察表（土器・陶磁器）

報告番号	図版番号	写真番号	種別	器種	出土遺構	出土層位	法量 (cm)				残存		
							口径	器高	底径	その他	口縁	底	他
101	17	巻頭 1 28	土師器	高坏		包含層	15.8	10.7	(9.8)		1/2 強		坏底部ほぼ残存、脚柱部残存、脚部 1/2
102	17	巻頭 1 28	土師器	高坏		包含層	(14.8)	(9.5)			1/3		坏部 2/3、脚柱部 1/2
103	17	30	土師器	高坏		包含層		(2.0)	(10.2)				脚部裾 1/4
104	17	巻頭 1 28	土師器	高坏		包含層	(16.4)	(3.3)			5/12		
105	17	巻頭 1 29	土師器	高坏		包含層		(6.3)				わずか	脚部上半残、脚部下半わずか
106	17	巻頭 1 29	土師器	壺?		包含層		(6.5)		腹径 14.5 程度			肩部わずか 体部最大径付近 周の 2/5 程度
107	17	巻頭 1 30	韓式系土器	鉢 または埴		包含層	(27.6)	(9.2)			1/4		体部上半 1/4
108	17	巻頭 1 30	韓式系土器	鉢 または埴		包含層	(33.8)	(7.7)			1/5		体部上半 1/8 弱
109	17	30	軟質 韓式系土器	不明		包含層	復元は 困難	(7.3)			わずか		口縁部
110	17	30	須恵器	不明	SK 135	半裁		(3.0)					脚部ごくわずか
111	17	30	須恵器	鉢 または壺		包含層		(5.0)			小片		
112	17	30	須恵器	坏 B		包含層		(2.5)	(9.3)			わずか	高台 1/10、体部下半
113	17	31	土師器	皿		包含層上層	(7.7)	(1.5)	(7.7)		1/3	1/3 弱 (中心は欠損)	
114	17	31	土師器	皿		包含層上層	(8.0)	(1.3)	(7.7)		1/2	1/2 弱 (中心は欠損)	
115	17	31	土師器	皿		包含層	(7.8)	(1.3)	(7.5)		1/3	1/3 (中心は欠損)	
116	17	31	土師器	皿		包含層上層	(7.7)	(1.5)	(6.94)		1/7	1/2 弱	
117	17	31	土師器	皿		包含層上層	(11.4)	(1.9)	(9.7)		2/11	わずか	
118	17	31	土師器	皿		包含層	(12.2)	(2.2)	(10.0)		1/5	わずか	
119	17	31	土師器	皿		包含層	(12.4)	(2.6)	(10.5)		1/4 強	周の 1/4 強 (中心は欠損)	
120	17	31	土師器	埴		包含層上部		(2.3)	(6.8)			周の 1/4 弱 (中心は欠損)	体部下半 わずか
121	17	32	土師器	埴		包含層上層	(33.6)	(5.6)			1/8 弱		体部上半 わずか
122	17	32	土師器	羽釜		包含層	(23.7)	(6.0)		鏝径 (27.8)	1/6		鏝部 1/10 体部わずか
123	17	32	土師器	羽釜		包含層上層	(25.8)	(4.6)		鏝径 (29.1)	1/12		鏝部 1/10 体部わずか
124	17	32	土師器	羽釜		包含層		(4.3)		鏝径 (30.5)			鏝部 1/8、 体部わずか
125	17	32	土師器	羽釜		包含層上層		(5.8)		鏝径 (41.7)			鏝部 1/12 体部わずか
126	17	32	瓦質土器	三足埴または羽釜の脚		包含層上層		(9.9)		脚断面 2.9 脚断面 2.7			1本の脚部と体部との接着部分 わずか
127	17	32	土師器	三足埴または羽釜の脚		包含層				(12.8) (4.3) 断 (2.9) 断 (2.5)			1本の脚 2/3 強 体部ごくわずか
128	18	33	須恵器	埴		包含層		(2.0)	(6.8)			1/2	
129	18	33	須恵器	埴		包含層上層		(2.3)	(8.1)			1/5 (中心は欠損)	体部下半 わずか
130	18	34	須恵器	鉢 (捏鉢)		包含層上層	(29.4)	(7.1)			1/10		体部上半 1/10

表 11 鶺鴒北遺跡 出土遺物観察表（土器・陶磁器）

報告番号	図版番号	写真番号	種別	器種	出土遺構	出土層位	法量 (cm)				残存		
							口径	器高	底径	その他	口縁	底	他
131	18	34	須恵器	鉢 (捏鉢)		包含層上層	(31.4)	(12.2)			1/9	ごくごくわずか	体部 1/8
132	18	34	須恵器	鉢 (捏鉢)		包含層上層	復元は困難	(3.6)			わずか		片口部 わずか
133	18	34	須恵器	鉢 (捏鉢)		包含層上層	復元は困難	(6.2)			わずか		片口部 わずか
134	18	33	須恵器	鉢 (捏鉢)		包含層		(3.6)	(8.0)			1/4 弱 (中心は欠損)	体部下半 わずか
135	18	33	須恵器	鉢 (捏鉢)		包含層上層		(6.5)	(9.4)			1/2 弱 (中心は欠損)	体部下半 1/5
136	18	33	須恵器	壺		包含層 遺構面直上	(17.4)	(3.9)			1/10 弱		頸部わずか
137	18	35	須恵器	壺		包含層		(8.0)					肩部 1/8、体部 1/3 程度?
138	18	36	須恵器	鉢か		包含層上部		(3.9)			わずか		
139	18	36	青磁	碗		包含層上層		(2.0)	(5.4)			3/4	高台 2/3 弱
140	18	36	青磁	碗		包含層上層		(2.9)	(5.0)				体部 下半 1/7、 高台 1/3 弱
141	18	36	白磁	不明		包含層 遺構面直上		(2.2)	(6.1)			周の 1/3 (中心は欠損)	体部下半 わずか 底部片
142	18	巻頭 2	青白磁	梅瓶		包含層上層		(2.5) + (4.0)					体部下半 わずか 肩部わずか (不 接)
143	18	36	土製品	土鏝		包含層	長さ (3.4)	幅 (1.0)	厚 (1.0)	孔径 (0.5)			ほぼ残存 端部 は摩滅とわず かに欠損
144	—	29	土師器	高坏		包含層							
145	—	36	瓦	平瓦 (軒平の可 能性も)		包含層							側面 (側端部) を含むごくわず か

表 12 鶺鴒北遺跡 出土遺物観察表（石器・石製品）

報告番号	図版番号	写真番号	種別	器種	出土遺構	出土層位	法量			
							長さ	幅	厚み	重量
S 1	19	39	磨製石器	磨石		包含層遺構面直上	56.5mm	53.0mm	43.0mm	184.8g
S 2	19	39	磨製石器	砥石	SD 41 アゼ1北側	面精査	(82.8) mm	36.5mm	7.0mm	(37.3) g
S 3	19	39	磨製石器	硯	SD 41 アゼ1北側	面精査	(123.0) mm	43.0mm	8.0mm	(74.5) g
S 4	19	39	打製石器	剥片	SK 168	炭層より下位	37.0mm	25.6mm	4.5mm	4.10g
S 5	19	39	打製石器	二次加工のある剥片		確認調査5G埋土	20.5mm	15.0mm	3.40mm	1.20g
S 6	18	36	石製品	石鍋		確認調査5G埋土	器高 (2.40)	底径 (8.30)		66.8g
S 7	—	39		不明		包含層上層	75.0mm	30.0mm	11.0mm	43.4g
S 8	—	39		不明		包含層上層	43.0mm	23.0mm	6.0mm	8.8g

表 13 鶺鴒北遺跡 出土遺物観察表（金属器）

報告番号	図版番号	写真番号	種別	器種	出土遺構	出土層位	法量 (cm)			残存
							残存長	残存幅	残存厚	
M1	19	40	鉄器	不明	SP 4		7.4	2.1	0.6	
M2	19	40	鉄器	釘	SP 248	段下げ	2.4	0.4	0.4	先端欠損
M3	19	40	鉄器	不明	SX 1		2.9	0.4	0.1	
M4	19	40	鉄器	釘	SD 41 アゼ北側	面精査精査	8.2	0.5	0.6	先端欠損
M5	19	40	鉄器	不明	SD 41 アゼ2 北側土器溜り	SD41 下層 (溝底直上)	14.2	断 0.4 断 1.2	断 1.1 断 0.5	
M6	19	40	鉄器	釘	SK 133		2.6	0.4	0.4	先端欠損
M7	19	40	鉄器	釘	SK 133		4.8	0.4 最大 0.6	0.4	先端欠損
M8	19	40	鉄器	釘	SD 10		4.7	0.5	0.4	頭部・先端欠損
M9	19	41	鉄器	釘		包含層	5.3	0.5	0.6	先端欠損?
M10	19	41	鉄器	不明		包含層	2.3	0.5	0.2	
M11	19	41	鉄器	把手か		包含層	2.2	0.5	0.3	
M12	19	41	鉄器	不明		包含層遺構面直上	1.8	1.4	0.3	
M13	19	41	鉄器	不明		包含層	2.5	1.8	0.3	
M14	19	41	銅製品	銭	SP 101		2.6	2.8	0.5	完形
M15	—	41	鉄器	釘		包含層上層				
M16	—	41	鉄器	釘		包含層				
M17	—	41	鉄器	鉄滓	SD 41 アゼ2 の北西	埋土 (SDの底)				

表 14 城山遺跡 平成28年度調査 出土遺物観察表（土器）

報告番号	図版番号	写真番号	種別	器種	出土遺構	出土層位	法量 (cm)				残存		
							口径	器高	底径	その他	口縁	底	他
201	27	31	縄文土器	深鉢	NR1	灰色粘質土 まじり	(28.4)	(4.7)	—		わずか		
202	27	31	縄文土器	深鉢	NR1	灰色粘質土 まじり	(26.8)	(9.6)	—		1/8		
203	27	31	縄文土器	深鉢	NR1	灰色粘質土 まじり	—	(4.0)	—		わずか		
204	27	31	縄文土器	深鉢	NR1 東肩の東	NR1埋土	—	(3.2)	—				体部わずか
205	27	31	縄文土器	小片	NR1	灰色粘質土 まじり	—	(2.1)	—				わずか
206	27	31	縄文土器	小片	NR1 東肩の東	NR1埋土	—	(1.85)	—				わずか
207	27	31	縄文土器	深鉢	NR1	下層(細砂～ シルト)	—	(5.2)	—				体部わずか
208	27	31	弥生土器	壺	NR1内 上層部		—	(29.3)	—	腹径 (50.0)			体部1/10?
209	27	32	弥生土器	壺	NR1		—	(6.0)	—		わずか		体部わずか
210	27	32	弥生土器	壺	NR1		—	(4.0)	—				体部わずか
211	27	33	弥生土器	壺	NR1	埋土	—	(5.4)	—				わずか
212	28	32	弥生土器	甕	NR1	埋土	(23.7)	(14.0)	—		わずか		
213	28	32	弥生土器	甕	NR1		—	(4.6)	—		わずか		
214	28	32	弥生土器	甕	NR1	埋土	—	(4.8)	—		わずか		
215	28	32	弥生土器	甕	NR1	埋土	—	(4.0)	—		わずか		
216	28	32	弥生土器	甕 または鉢	NR1内	検出面 -60cm	(20.5)	(9.3)	—		1/2		
217	28	32	弥生土器	鉢	NR1	埋土	—	(4.3)	—		わずか		
218	28	32	弥生土器	底部(甕)	NR1	埋土	—	(6.5)	(8.4)			1/3	
219	28	32	弥生土器	底部(甕)	NR1		—	(5.3)	(8.6)			1/4	
220	28	32	弥生土器	底部(壺 または甕)	NR1内 上層部		—	(7.5)	(6.0)			1/4	体部若干
221	28	32	弥生土器	高坏	NR1	埋土	—	(4.6)	(25.7)				裾部1/8
222	28	32	弥生土器	甕	NR1	最上層堆積	(14.3)	(3.1)	—		1/5		
223	28	32 33	弥生土器	底部(壺 または甕)	NR1内 上層部		—	(3.3)	8.7			4/5	
224	28	32	瓦器 または 黒色土器	皿	NR1	埋土	(9.4)	(1.0)	—		わずか		
225	29	33	弥生土器	長頸壺	SK8	埋土	(10.9)	(13.9)	—		3/4		頸部残存
226	29	33	弥生土器	長頸壺	SK8	埋土	(11.4)	(13.7)	—		端部3/4		頸部ほぼ残存 体部上半わずか
227	29	33	弥生土器	細頸壺	SK8	埋土	11.3	(17.0)	—		ほぼ残存 (一部欠損)		
228	29	33	弥生土器	細頸壺	SK8	埋土	10.5	(8.0)	—		1/4		
229	29	33	弥生土器	長頸壺	SK8	埋土	(10.8)	(15.1)	—	腹径 (14.6)			体部1/4
230	29	34	弥生土器	長頸壺	SK8	埋土	(9.0)	(7.7)	—		1/5		
231	29	34	弥生土器	広口壺	SK8	埋土	(16.0)	(5.3)	—		1/4		
232	29	34	弥生土器	広口壺	SK8	埋土	(12.6)	(3.4)	—		1/6強		頸部1/6強
233	29	34	弥生土器	広口壺	SK8	埋土	(16.0)	(19.4)	—	腹径 (32.3)	1/2		頸部ほぼ残存 体部上半1/2
234	29	34	弥生土器	広口壺	SK8	埋土	(18.9)	(6.1)	—		1/3		
235	29	34	弥生土器	広口壺	SK8	埋土	(20.3)	(3.2)	—		1/4		
236	29	34	弥生土器	ミニチュア 土器(壺)	SK8	埋土	(2.8)	(6.6)	(3.2)	腹径 (5.2)	端部1/4	残存	頸部ほぼ残存 体部残存

表 14 城山遺跡 平成28年度調査 出土遺物観察表（土器）

報告番号	図版番号	写真番号	種別	器種	出土遺構	出土層位	法量 (cm)				残存		
							口径	器高	底径	その他	口縁	底	他
237	29	34	弥生土器	壺	SK8	埋土	—	(10.8)	4.8	腹径 (20.2)		残存	体部上半 1/2 体部下半 1/2
238	29	34	弥生土器	壺	SK8	埋土	—	(7.4)	—	腹径 (23.2)			体部若干 残存
239	29	34	弥生土器	底部(壺)	SK8		—	(2.8)	5.6			完存	
240	29	34	弥生土器	底部(壺)	SK8	埋土	—	(5.4)	(4.9)			3/4	体部若干 残存
241	30	34	弥生土器	甕	SK8	埋土	14.2	20.2	4.9	腹径 17.9	11/12		体部 3/4
242	30	35	弥生土器	甕	SK8	埋土	(15.3)	(15.5)	—	腹径 (21.0)	1/4		体部 1/8
243	30	35	弥生土器	甕	SK8	埋土	(12.8)	(13.5)	—	腹径 (14.7)	1/4		体部 1/8
244	30	35	弥生土器	甕	SK8	埋土	(17.6)	(15.5)	—	腹径 (19.6)	1/4		体部 1/7
245	30	35	弥生土器	甕	SK8		(14.0)	(13.0)	—	腹径 (18.0)	1/4弱		体部 1/8
246	30	35	弥生土器	甕	SK8	埋土	(16.9)	(4.2)	—		1/6		
247	30	35	弥生土器	甕	SK8	埋土	(12.6)	(3.2)	—		1/12		
248	30	35	弥生土器	甕	SK8	埋土	(15.3)	(6.9)	—		1/4		
249	30	35	弥生土器	甕	SK8	埋土	(16.8)	(8.0)	—		1/2		体部上半 3/8
250	30	36	弥生土器	甕	SK8	埋土	—	(16.1)	4.9	腹径 (21.2)		完存	体部 1/2
251	30	36	弥生土器	底部(甕)	SK8	埋土	—	(6.4)	4.4			4/5	
252	30	35	弥生土器	底部(甕)	SK8	埋土	—	(5.15)	4.1			3/4	
253	30	35	弥生土器	底部(甕)	SK8	埋土	—	(3.3)	4.7			ほぼ完存	
254	30	36	弥生土器	底部(甕)	SK8	埋土	—	(4.6)	4.7			2/3	
255	30	35	弥生土器	底部(甕)	SK8	埋土	—	(4.5)	3.2			3/4	
256	31	36	弥生土器	有孔鉢	SK8	埋土	22.7	14.6	2.3		2/3	完存	
257	31	36	弥生土器	台付 有孔鉢	SK8	埋土	(9.6)	5.6	(4.5)		1/8強	1/2台(脚) 1/2	体部 3/4 穿孔部分 1/2
258	31	35	弥生土器	鉢	SK8	埋土	(18.9)	(5.8)	—	腹径 (17.5)	1/6		
259	31	35	弥生土器	台付鉢	SK8	埋土	(10.2)	(5.8)	—		1/6強		体部 1/6強
260	31	36	弥生土器	鉢	SK8	埋土	—	(5.0)	3.6			完存	
261	31	36	弥生土器	鉢	SK8	埋土	—	(4.0)	3.7			完存	
262	31	36	弥生土器	台付鉢	SK8	埋土	—	(3.9)	6.3				高台 7/8
263	31	35	弥生土器	底部(鉢か)	SK8	埋土	—	(2.8)	(4.4)				高台 3/5
264	31	36	弥生土器	高坏	SK8	埋土	29.8	(6.2)	—		1/2	3/4	
265	31	37	弥生土器	器台	SK8	埋土	(30.9)	(5.5)	—		1/12強		頸部わずか
266	31	37	弥生土器	器台	SK8	埋土	(24.2)	(2.7)	—		1/7		
267	31	37	弥生土器	器台	SK8		(19.0)	(1.6)	—		1/12		
268	31	37	弥生土器	脚部(高坏)	SK8	埋土	—	(9.1)	15.0				脚部残 (一部欠)
269	31	37	弥生土器	脚部(高坏)	SK8	埋土	—	(8.4)	(12.3)				脚柱部残 裾部 1/6 透かし 4か所 残
270	31	37	弥生土器	脚部(高坏)	SK8	埋土	—	(10.95)	—				脚部 3/5
271	31	37	弥生土器	脚部(高坏)	SK8	埋土	—	(8.3)	(13.8)			坏部中心 のみ	脚柱部残 裾部 1/8程度
272	31	37	弥生土器	脚部(高坏)	SK8	埋土	—	(6.1)	—				脚部 1/2

表 14 城山遺跡 平成28年度調査 出土遺物観察表（土器）

報告番号	図版番号	写真番号	種別	器種	出土遺構	出土層位	法量 (cm)				残存		
							口径	器高	底径	その他	口縁	底	他
273	31	37	弥生土器	脚部(高坏)	SK8	埋土	—	(4.8)	(15.3)				脚柱部下半 1/4弱
274	31	37	弥生土器	脚部(器台)	SK8	埋土	—	(2.8)	(24.2)				裾部 1/10
275	31	37	弥生土器	製塩土器	SK8		(6.5)	(3.5)	—	腹径(7.2)	1/12		
276	31	37	弥生土器	製塩土器	SK8	埋土	(12.2)	(3.6)	—	腹径(12.6)	1/14		
277	32	38	須恵器	高坏	SH1 竈 東脇		—	(4.5)	8.3				脚部ほぼ完存 裾部 7/8
278	32	38	土師器	製塩土器	SH1 竈	埋土	(12.6)	(4.8)	—		わずか		
279	32	38	土師器	製塩土器	SH1 竈	埋土	—	(6.4)	—		1/8以下		
280	32	38	土師器	甕	SH1南東隅溝 状落込	埋土	—	(3.1)	—		わずか		
281	32	38	土師器	甗	SH2 竈	竈西	(31.0)	26.0	(11.1)		1/6	わずか	1/3
282	32	38	弥生土器	底部(甕)	SH4	埋土	—	(4.2)	(7.4)			1/3	
283	32	39	弥生土器	甕	SK7	埋土	—	(6.0)	—				体部若干
284	32	39	弥生土器	壺	SP 65	掘形埋土	—	(2.8)	—				わずか
285	32	39	弥生土器	底部(甕)	SP 50	柱痕	—	(3.7)	(2.9)			1/5	
286	32	39	白磁	碗	SP 2	柱痕	(16.5)	(3.3)	—		1/8以下		
287	32	39	須恵器	埴	SP 2	柱痕	(14.2)	(2.9)	—		1/8		
288	32	38	土師器	皿	SP 12	柱痕	(10.7)	3.0	(6.4)		1/2弱	1/2	
289	32	39	縄文土器	深鉢	SP 60	掘形埋土	—	(2.6)	—		わずか		
290	32	39	須恵器	蓋	SP 1	上面	—	(1.5)	—				つまみ ほぼ完存
291	32	39	土師器	塙	SP 53	掘形埋土	(25.0)	(3.8)	—		わずか		
292	32	39	土師器	不明	SP 27	柱痕	長さ(4.3)	幅(4.2)	厚0.8		一部		
293	32	39	縄文土器	深鉢	包含層		—	(5.8)	—				体部わずか
294	32	39	土師器	小皿	包含層		(8.2)	1.3	(4.8)		1/3	1/3	

表 15 城山遺跡 平成28年度調査 出土遺物観察表（石器・石製品）

報告番号	図版番号	写真番号	種別	器種	出土遺構	出土層位	法量			
							長さ	幅	厚み	重量
S9	33	40	打製石器	石鏃	NR1	検出面から -30cmほど	20.0mm	14.5mm	3.5mm	0.7g
S10	33	40	打製石器	石鏃	SP50	掘形埋土	21.6mm	14.2mm	3.5mm	(0.9) g
S11	33	40	打製石器	石鏃	SP24	柱痕及び 一段下げ	20.0mm	12.0mm	3.0mm	(0.5) g
S12	33	40	打製石器	楔形石器	包含層		44.7mm	15.0mm	9.2mm	5.2g
S13	33	40	石製品	台石 ・石皿	SK8	埋土	107.0mm	(135.5) mm	29.3mm	(702.2) g
S14	33	40	石製品	台石 ・石皿	SP33	掘形埋土	(186.4) mm	(122.6) mm	(65.0) mm	(1650.0) g
S15	33	40	石製品	磨石 ・敲石	SP41	上面	(108.3) mm	(102.2) mm	(80.05) mm	(113.7) g

表 16 城山遺跡 平成28年度調査 出土遺物観察表（金属器）

報告番号	図版番号	写真番号	種別	器種	出土遺構	出土層位	法量 (cm)			残存
							残存長	残存幅	残存厚	
M18	33	39	鉄器	角釘	SH1北西隅	埋土下方	4.3	0.85	0.6	上下欠損
M19	33	39	鉄器	角釘	SP3	上面	2.6	1.1	1.0	上部若干欠損 下部欠損
M20	33	39	鉄器	角釘	SP25	柱痕及び 一段下げ	2.7	0.3	0.3	上下欠損
M21	33	39	鉄器	角釘	包含層		4.7	0.6	0.5	頭部欠損 先端欠損

表 17 城山遺跡 令和元年度調査 出土遺物観察表（土器、石製品）

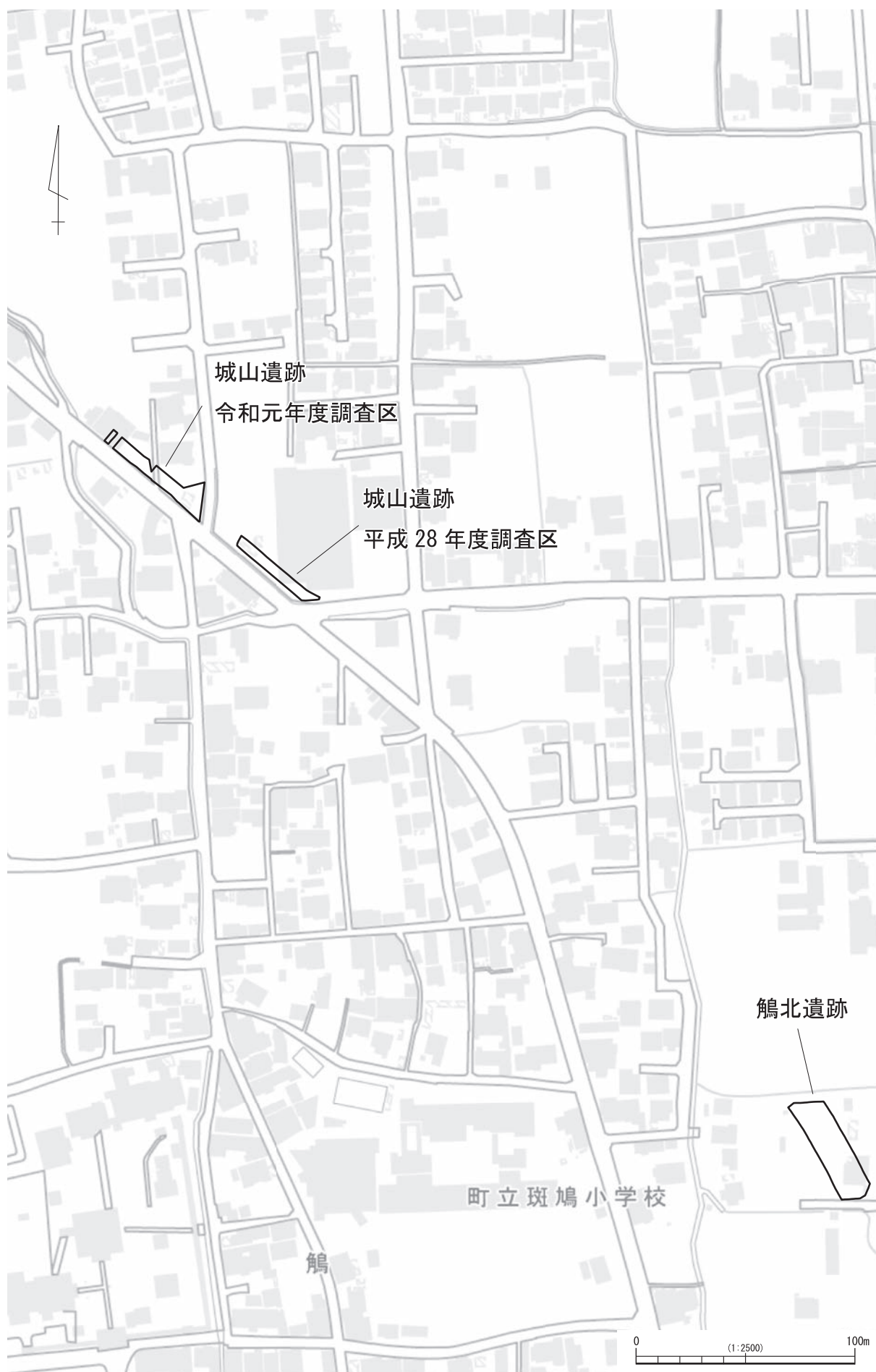
報告番号	図版番号	写真番号	種別	器種	出土遺構	出土層位	法量 (cm)				残存		
							口径	器高	底径	その他	口縁	底	他
301	34	41	弥生土器	器台か	SK 161	埋土	—	(3.4)	—		若干		
302	34	41	弥生土器	壺か	SK 161	埋土	—	(3.9)	—				体部わずか
303	34	41	弥生土器	蓋	SK 161	埋土	—	(7.1)	—				1/6
304	34	41	弥生土器	器台	SK 161	埋土	—	(9.1)	—				脚柱部 1/5
305	34	42	弥生土器	高坏	SK 161	埋土 (肩部)	(31.8)	(5.4)	—		1/6		
306	34	42	弥生土器	高坏	SK 161	埋土	—	(1.9)	(16.2)				裾部 1/8
307	34	41	弥生土器	甕 または壺	SK 161	埋土 (肩部)	—	(3.5)	6.4		完存		
308	34	41	弥生土器	甕 または壺	SK 161	埋土 (肩部)	—	(4.0)	3.2		完存		体部下半 1/4
309	34	41	弥生土器	甕 または壺	SK 161	埋土	—	(6.8)	(5.4)		1/2		体部下半 1/4
310	34	42	弥生土器	壺	SK 161	埋土	—	(11.3) (4.9)	—		1/3	1/3	
311	35	43	弥生土器	鉢	SK 161	埋土	(24.1)	(3.9)	—		1/8 以下		
312	35	44	弥生土器	甕	SK 161	埋土	(14.4)	(3.1)	—		1/8 以下		
313	35	44	弥生土器	甕	SK 161	埋土	(14.3)	(5.8)	—		1/11		肩部 1/6
314	35	43 44	弥生土器	甕	SK 161	埋土	(16.4)	(5.1)	—		1/8		肩部若干
315	35	42	弥生土器	壺	SK 161	埋土	(13.0)	(5.9)	—		若干		肩部 1/10
316	35	43	弥生土器	壺	SK 161	埋土	(15.1)	(4.2)	—		1/3		
317	35	46	弥生土器	蓋	SH 57 SH 160	埋土	11.3	3.7	—	つまみ 幅 3.0	5/6		つまみ 2/3
318	35	45	弥生土器	細片	SH 57 SH 160	埋土	—	(2.1)	—		1/17 程度		
319	35	45	弥生土器	細片	SH 57 SH 160	埋土	—	(3.4)	—				頸部 1/14 程度
320	35	45	弥生土器	細片	SH 57 SH 160	埋土	—	(3.7)	—		1/20 程度		
321	35	44	弥生土器	甕	SH 57 SH 160	埋土	(17.1)	(5.5)	—		1/13		肩部 1/7
322	35	43	弥生土器	鉢	SH 57 SH 160	埋土	(27.0)	(5.2)	—		若干		体部上半 1/6
323	35	43	弥生土器	高坏	SH 57 SH 160	埋土	(26.0)	(13.1)	—		若干		脚柱部残存
324	35	44	弥生土器	甕 または壺	SH 57 SH 160	埋土	—	(4.0)	4.1		完存		体部下半 1/2
325	35	45	弥生土器	甕 または壺	SH 57 SH 160	埋土	—	(5.4)	(2.7)		3/8		体部下半 1/3
326	35	45	弥生土器	器台	SH 57 SH 160	埋土	(31.1)	(6.8)	—		1/8		
327	36	44	弥生土器	甕	SH 57	床面	—	(2.2)	—		1/18 程度		
328	36	47	弥生土器	甕	SH 57	床面	(15.8)	(6.0)	—		1/4		肩部 1/4
329	36	47・ 53	弥生土器	甕	SH 57	床面	—	(7.6)	3.9		完存		体部 1/4
330	36	47	弥生土器	壺	SH 57	床面	6.6	8.7	3.3	腹径 7.4			完形
331	36	48	弥生土器	壺	SH 57	床面	—	(4.3)	4.7		完存		
332	36	49	弥生土器	鉢	機械掘削	マンガン沈着層	(14.7)	4.4	(4.0)		わずか	3/4	
333	36	49	弥生土器	直口鉢	SD 36		—	(4.2)	3.4		完存		
334	36	49	須恵器	坏身	SD 149		(12.1)	(2.8)	—		わずか		
335	36	49	須恵器	坏	SD 149		(12.4)	4.3	7.9		1/8	2/3	
336	36	49	土師器	細片	SP 122	埋土	—	(1.6)	(9.8)		1/4		体部若干
337	—	49	須恵器	坏身	SX 142	埋土	—	(1.8)	—				受部小片

表 17 城山遺跡 令和元年度調査 出土遺物観察表（土器、石製品）

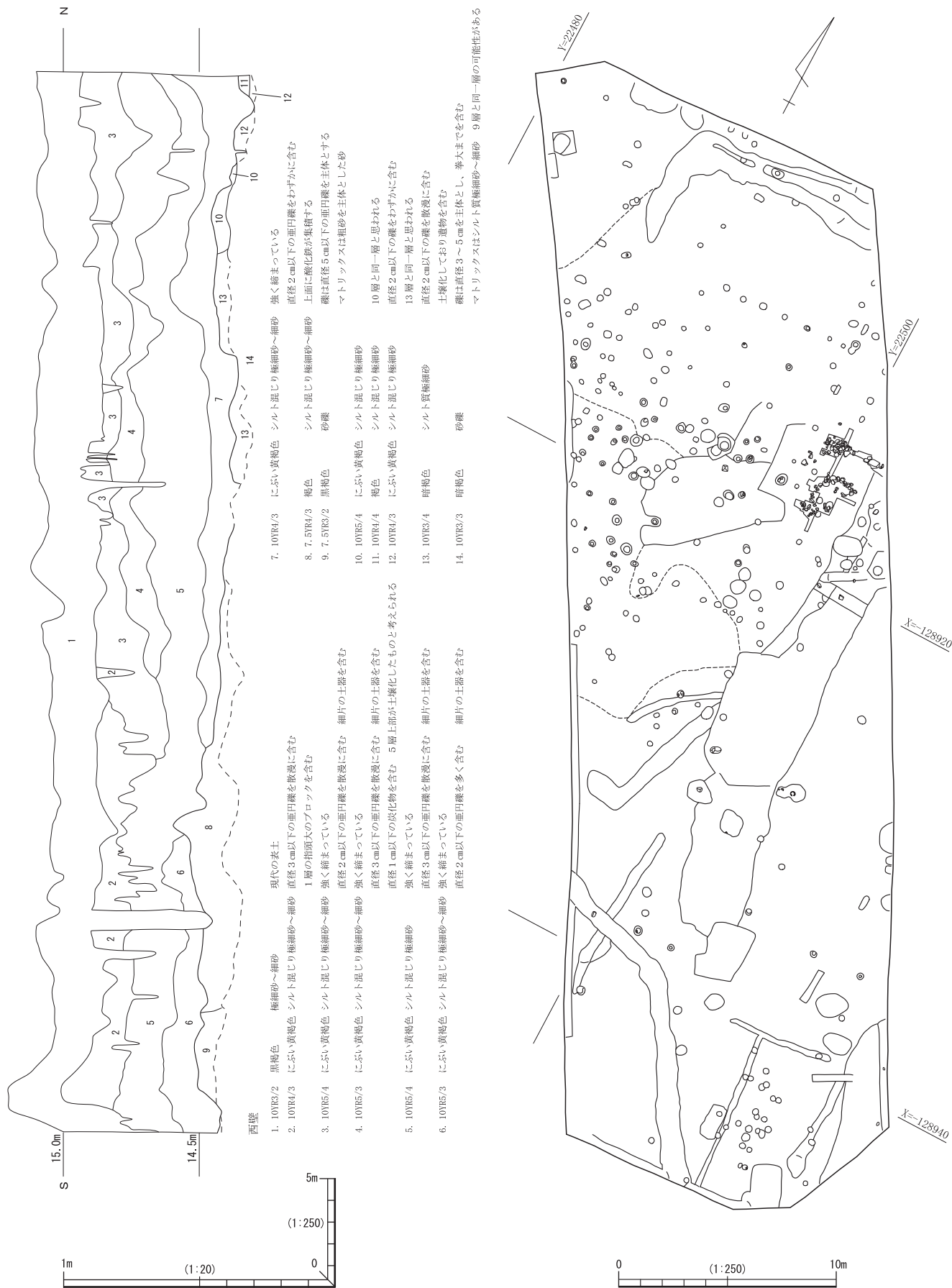
報告番号	図版番号	写真番号	種別	器種	出土遺構	出土層位	法量 (cm)				残存		
							口径	器高	底径	その他	口縁	底	他
338	—	49	弥生土器	甕または壺	SH 156	埋土	—	(3.1)	—				体部上部沈線部分小片
339	—	49	韓式系軟質土器	不明	SH 156	埋土	—	(4.0)	—				体部小片
340	—	49	須恵器	高坏	SD 149		—	(4.4)	—				脚部 1/4
341	—	51	弥生土器	鉢	SK 161	埋土	—	(2.2)	—				
342	—	51	弥生土器	甕	SK 161	埋土	—	(2.7)	—				
343	—	51	弥生土器	不明	SH 57 SH 160	埋土	—	(2.3)	—				
344	—	51	弥生土器	高坏	SK 161	埋土	—	(5.0)	—				
345	—	51	弥生土器	高坏	SH 57 SH 160	埋土	—	(5.7)	—				
346	—	51	弥生土器	不明	SH 57 SH 160	埋土	—	(2.6)	—				
347	—	51	弥生土器	甕または壺	SK 161	埋土 (最下層)	—	(2.5)	(5.0)				
348	—	51	弥生土器	甕または壺	SH 57 SH 160	埋土	—	(2.6)	(5.4)				
349	—	51	弥生土器	鉢	SK 161	埋土	—	(5.7)	—				
350	—	52	土師器	甕	SK 33		—	(3.0)	—				
351	—	52	須恵器	壺	SP 94	一段下げ	—	(2.1)	—				
352	—	52	土師器	皿	SB 1 (SP 106)		—	(0.6)	—				
353	—	52	土師器	皿	SK 49	埋土	—	(3.1)	—				
354	—	52	須恵器	甕	SK 142		—	(8.5)	—				
355	—	52	須恵器	壺	SP 138	芯部埋土	—	(3.1)	—				
356	—	53		不明	SX 137	埋土	—	(8.7)	—				
357	—	53	弥生土器	小片	SD 34 北半		—	—	—				
358	—	53	弥生土器	小片	SH 57 SH 160	埋土	—	(3.9)	—				
359	—	53	弥生土器	甕	SK 161	埋土	—	(6.1)	—				
360	—	53	弥生土器	小片	SK 161	埋土	—	(5.5)	—				
361	—	53	弥生土器	甕	SH 57	床面	—	(11.7)	—				
362	—	53	弥生土器	器台か	SH 57	床面	—	(6.2)	—				
S16	36	50	石製品	台石	SK 161	埋土	長さ 219.0mm	幅 133.0mm	厚み 91.5mm	重さ 4100.0g			

鷓北遺跡

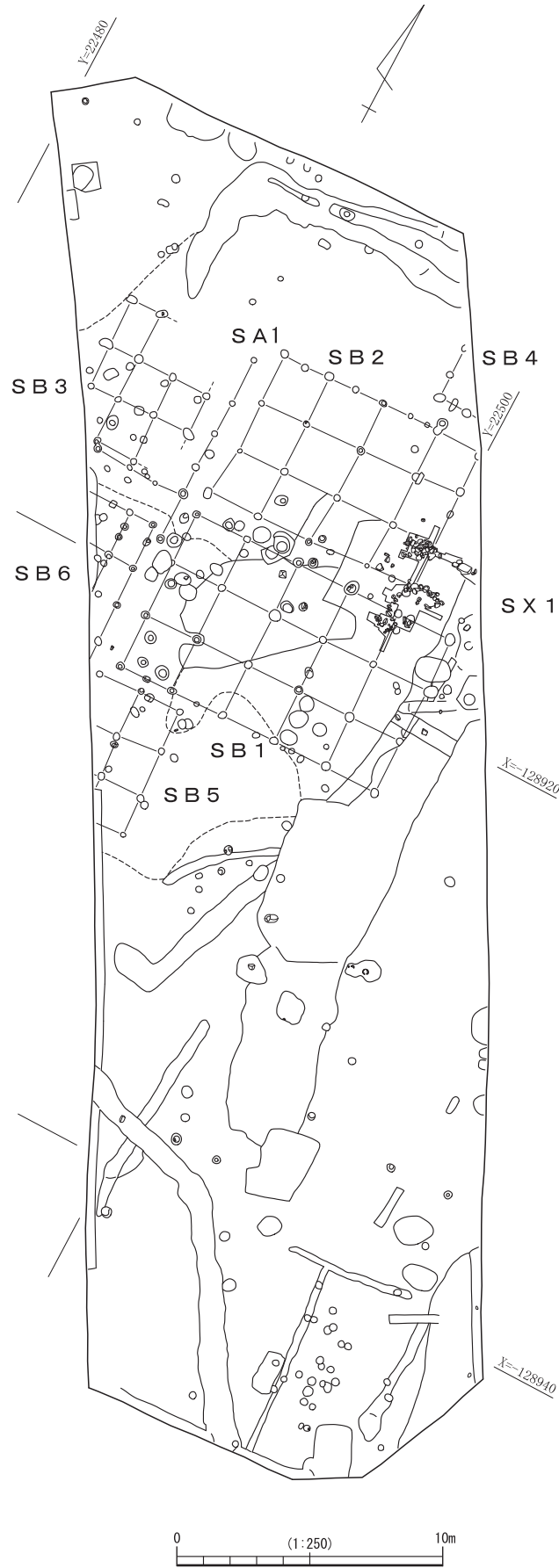
図版



鶺鴒北遺跡・城山遺跡の位置図（地理院タイルを加工して作成）

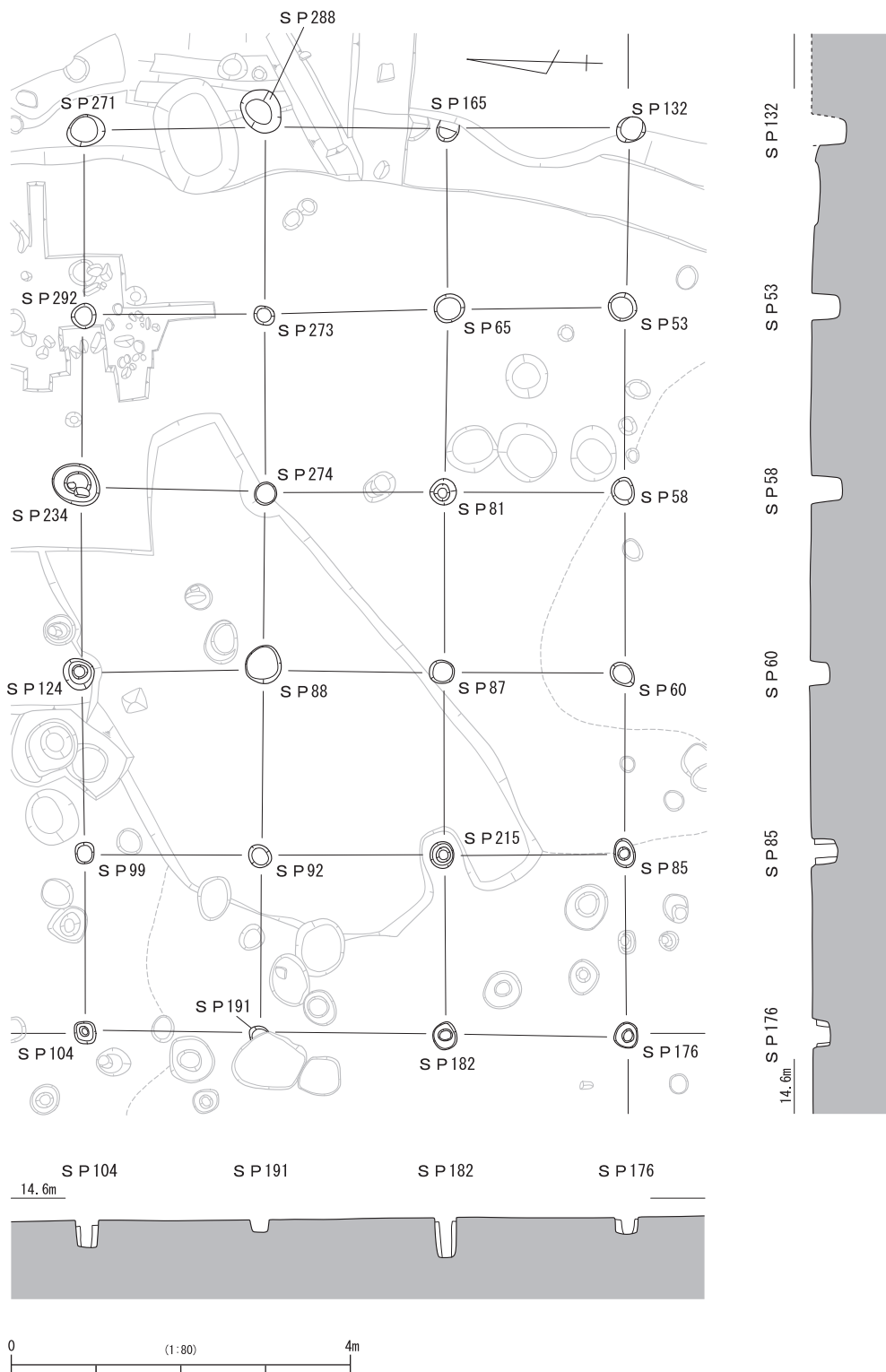


調査区平面図および調査区西壁断面図

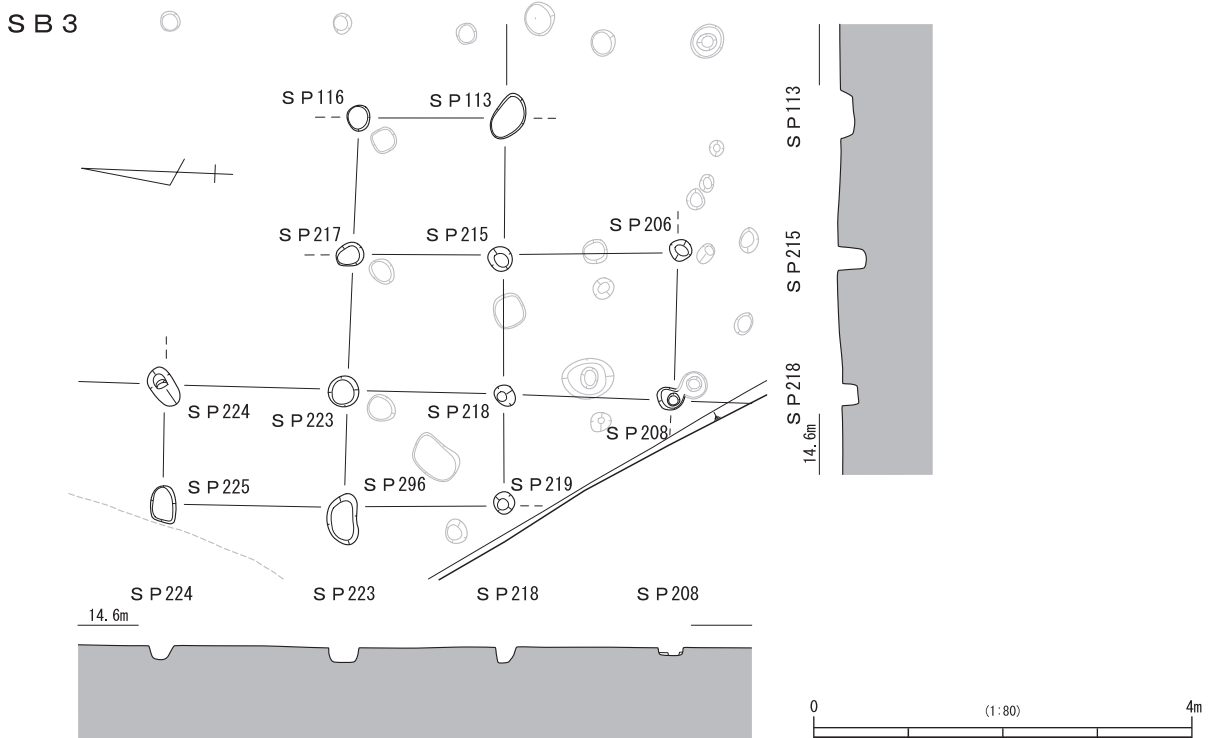
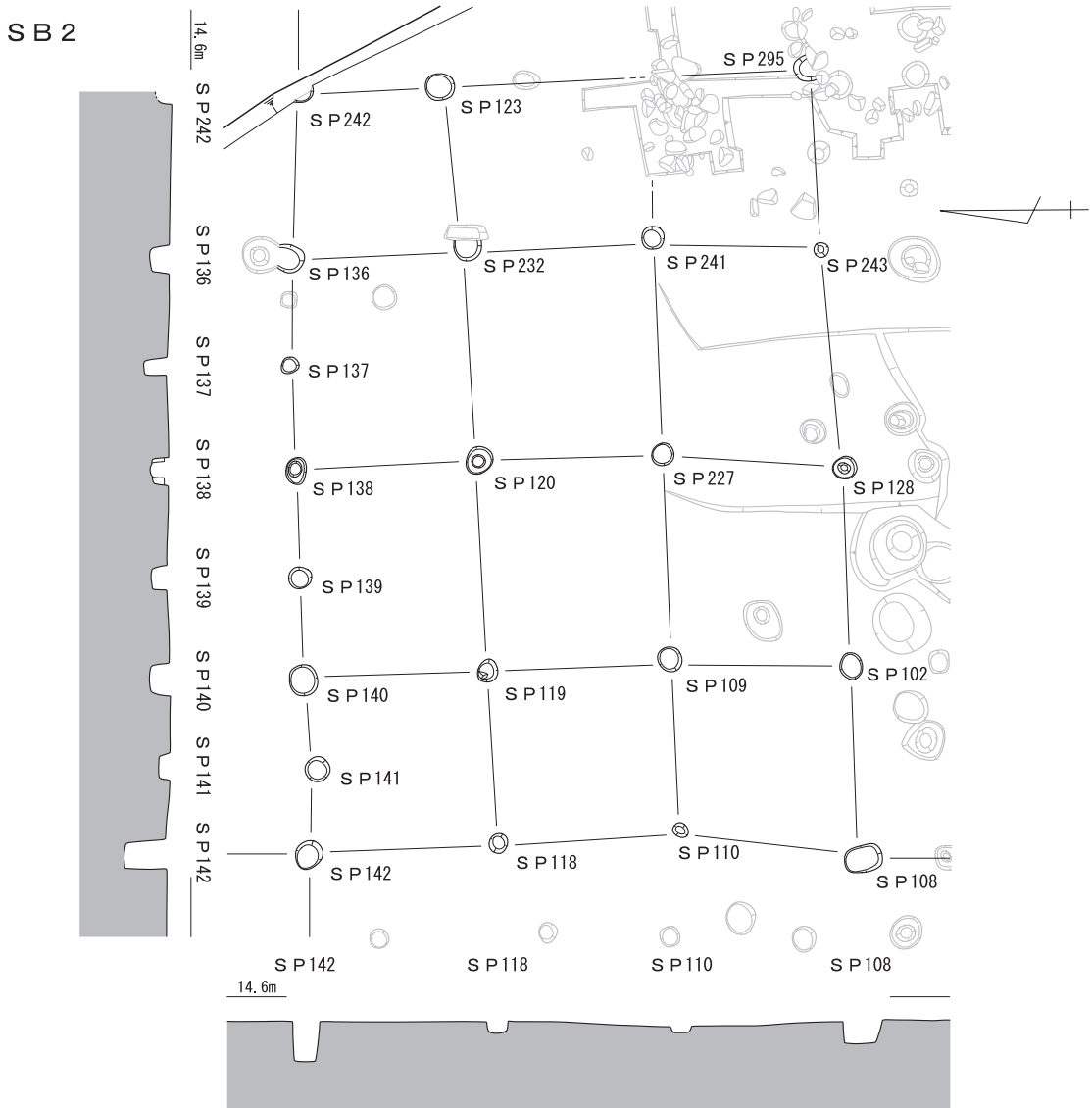


掘立柱建物跡・柵・石組遺構 (SX1) 位置図

SB 1

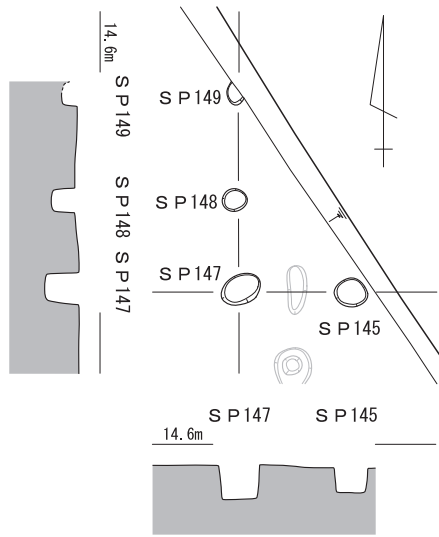


掘立柱建物跡 (1) SB 1

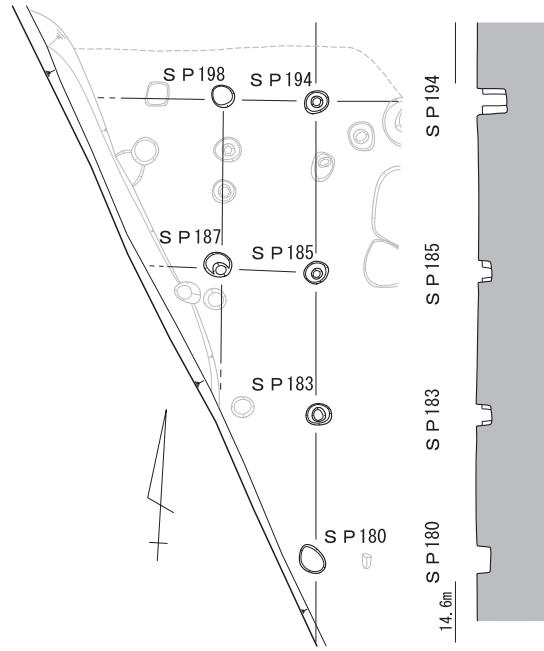


掘立柱建物跡 (2) SB 2・SB 3

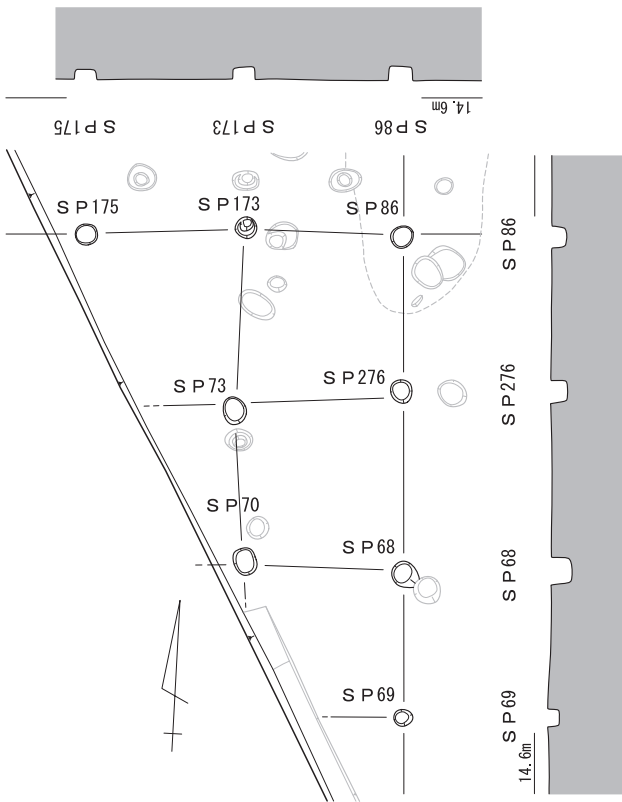
SB 4



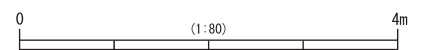
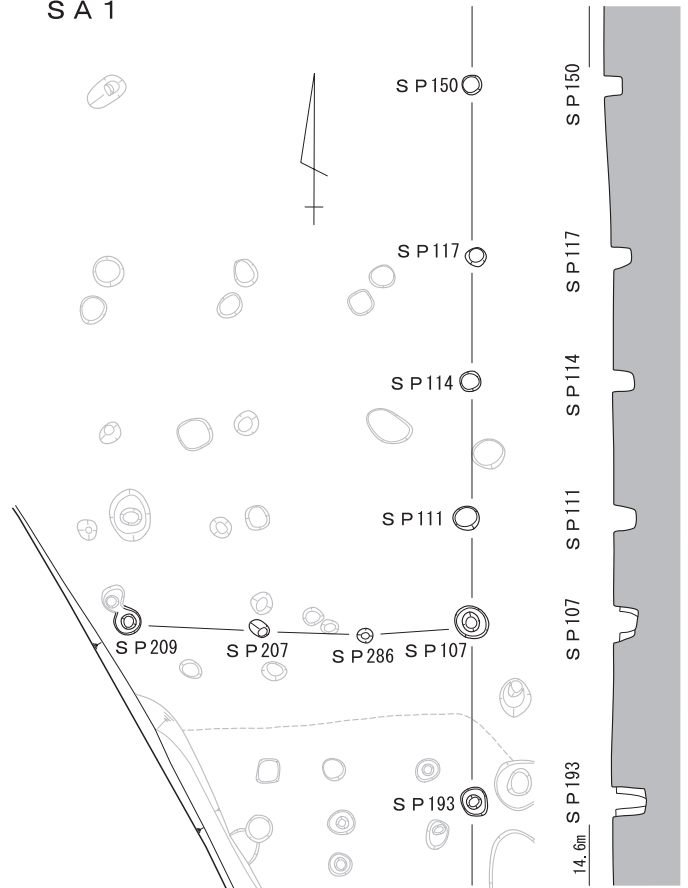
SB 6



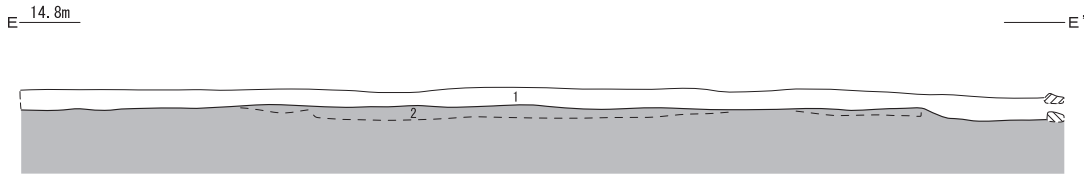
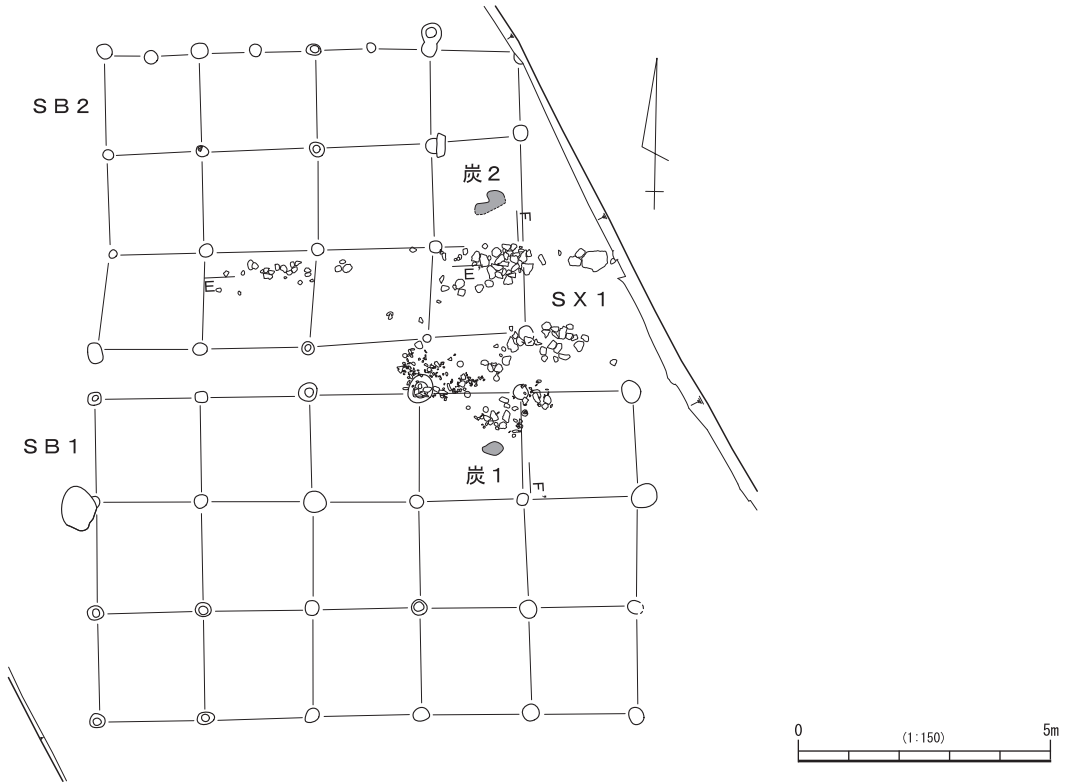
SB 5



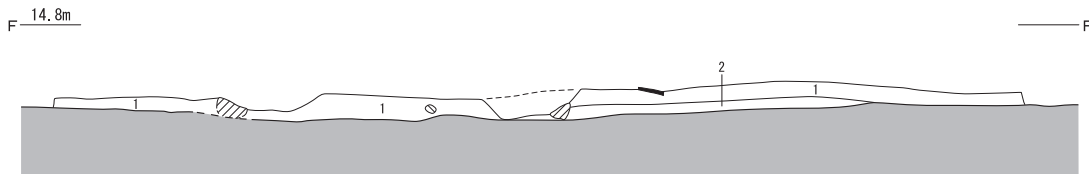
SA 1



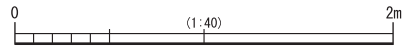
掘立柱建物跡 (3) SB 4・SB 5・SB 6 柵 SA 1



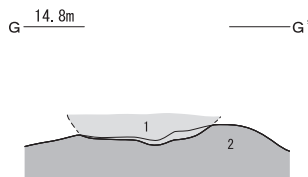
- 1. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 径3cm以下の礫を散漫に含む
- 2. 10YR4/4 褐色 シルト質極細砂～砂質シルト 径2cm以下の礫を散漫に含む



- 1. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 径3cm以下の礫を少量、炭化物・遺物を含む しまり強、粘性弱
- 2. 10YR4/4 褐色 極細砂質シルト極細砂 径3cm以下の礫を少量含む しまり中、粘性中

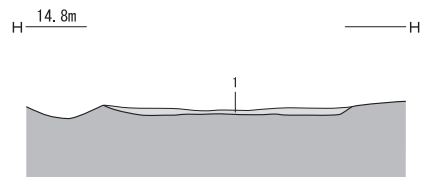


炭 1

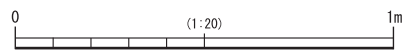


- 1. 炭層 検出(人力掘削)時に上部を誤って掘削してしまったが、本来は点線までの厚みをもっていたものである
- 2. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 径2cm以下の礫をわずかに含む

炭 2



- 1. 炭+灰層 検出時に上部と南半を削取しているため、本来の厚みではない

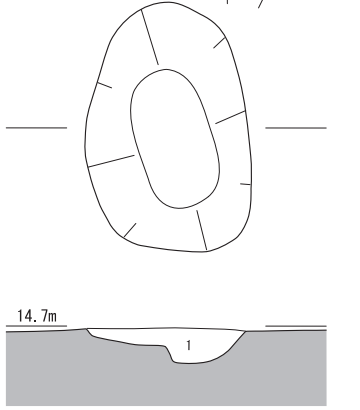


石組遺構 (SX1) (1) 位置図・断面図



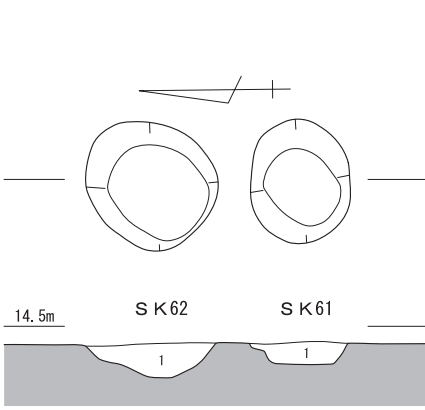
石組遺構 (SX1) (2) 平面図

S K 23



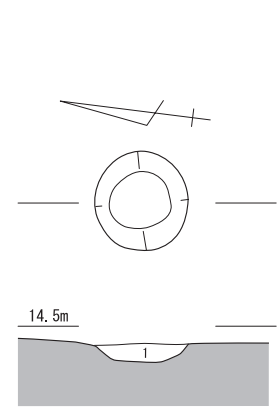
1. 10YR3/3 暗褐色 シルト質極細砂
径3~5cmの礫を含む
細片の土師器が多い

S K 62・S K 61



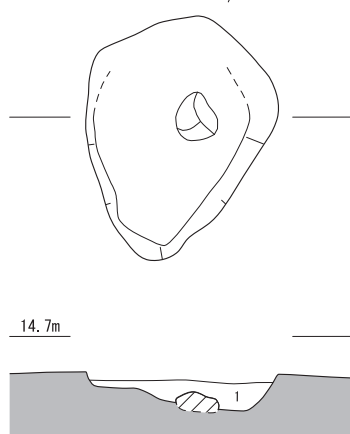
1. 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂
径1cm以下の炭粒をわずかに含む
全体に径1cm以下のブロック状の人為埋土
よくしまる

S K 63



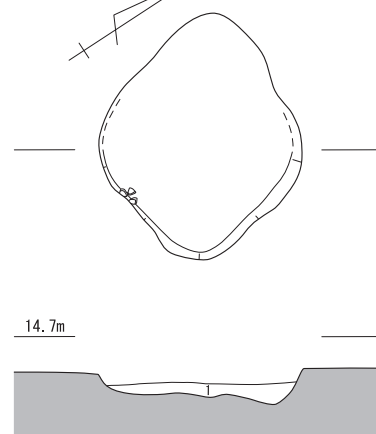
1. 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂
指頭大のマンガン斑を散漫に含む
全体に径1cm以下のブロック状を
なす人為埋土
よくしまる

S K 166



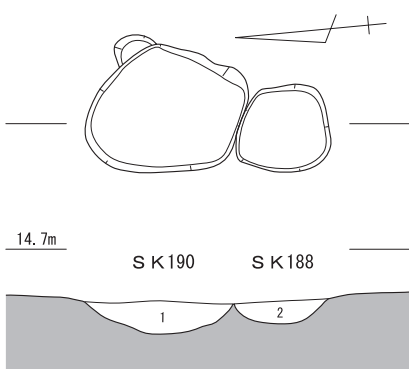
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂~細砂
しまり中 粘性中
径5cm以下の礫を含む
土師器片を含む

S K 167



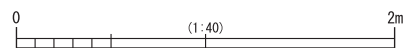
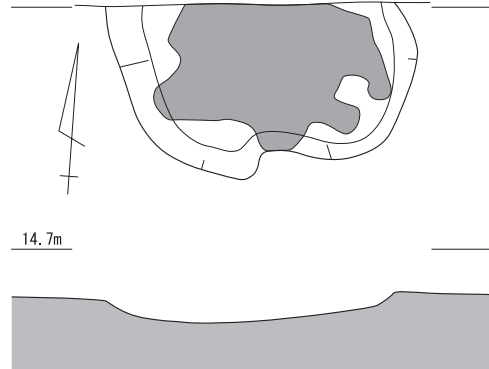
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂 しまり強 粘性弱
径5cm程度の円礫、土師器片を含む

S K 190・S K 188

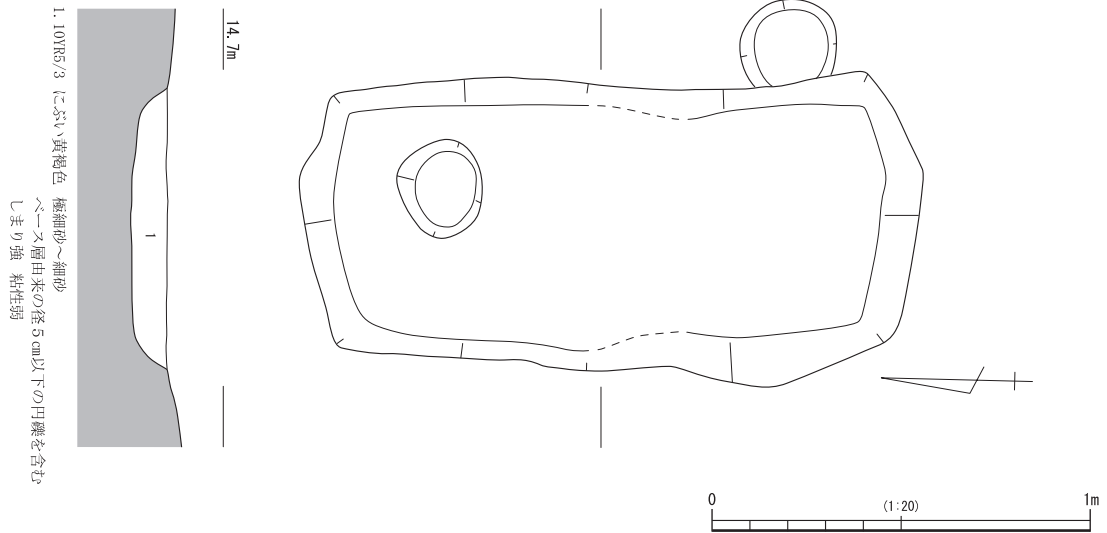


1. 10YR4/6 褐色 シルト質極細砂
径3cm以下の円礫・土師器片
10YR6/1 褐灰色シルトをブロック状に含む
しまり強 粘性弱
2. 10YR4/4 褐色 シルト~極細砂
炭化物・径2cmほどの円礫を含む
しまり強 粘性弱

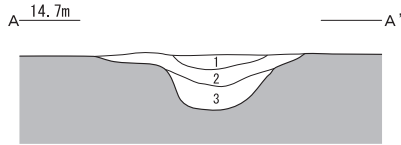
S K 168



S K 250

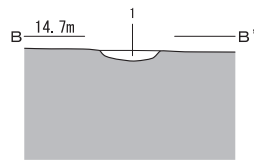


S D 2



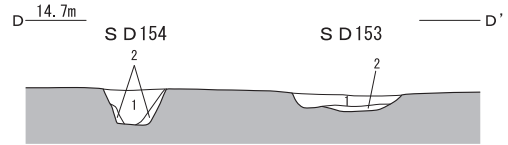
- 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト混じり極細砂～細砂
径2cm以下の礫を含む
強くしまっている
- 2. 10YR3/4 暗褐色 シルト混じり砂礫
礫は径2cm以下主体
マトリックスは淘汰の悪い
シルト混じり砂(～粗砂)
- 3. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 シルト混じり極細砂～細砂
径5mm以下の礫をわずかに含む
比較的均一な砂
自然埋没と思われる

S D 10



- 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂
径3cm以下の礫を含む
特に径5mm～1cmの礫を多く含む
全体によくしまっている

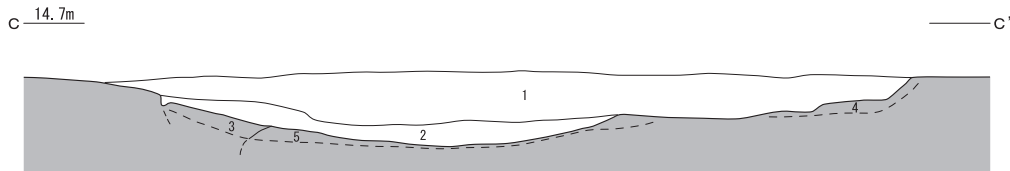
S D 154・S D 153



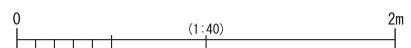
- S D 154**
- 1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト質細砂 粗砂を少量含む
しまり中 粘性弱
 - 2. 10YR3/4 暗褐色 中砂 径1cm以下の小礫を含む
しまり中 粘性弱

- S D 153**
- 1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト質細砂
粗砂～小礫を少量含む
しまり中 粘性弱
 - 2. 10YR3/4 暗褐色 中砂～シルト質中砂
径1cm以下の小礫を含む
しまり中 粘性弱

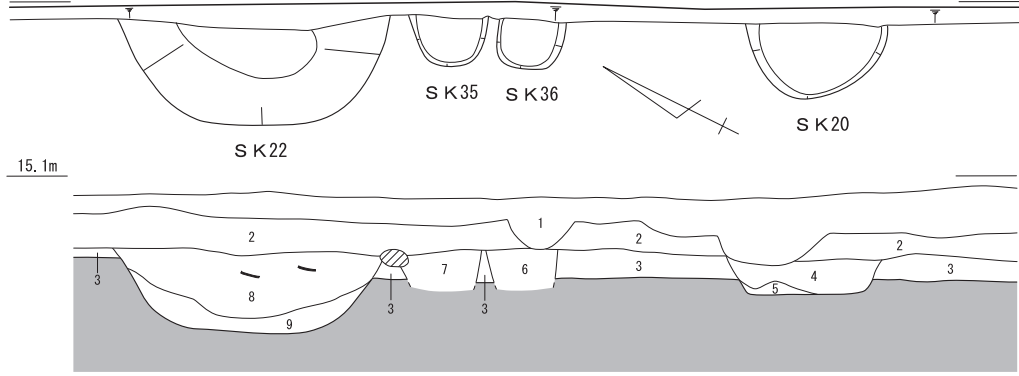
S D 41



- 1. 10YR4/4 褐色 シルト質極細砂～砂質シルト 2層より細粒
径4cm以下の礫をごく散漫に含む 自然堆積層と考えられる
- 2. 10YR4/4 褐色 シルト質極細砂～細砂 均質 自然堆積
- 3. 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂～細砂 S D埋土
- 4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂礫
礫は径2cm以下を主体とする
マトリックスは淘汰の悪い砂(シルト混じり極細砂～粗砂)
- 5. 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細砂～中砂
径1cm以下の礫をわずかに含む
ベース 4層の一部が細粒化したものか

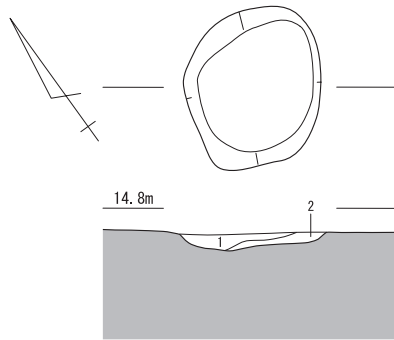


S K 22・S K 20・S K 35・S K 36



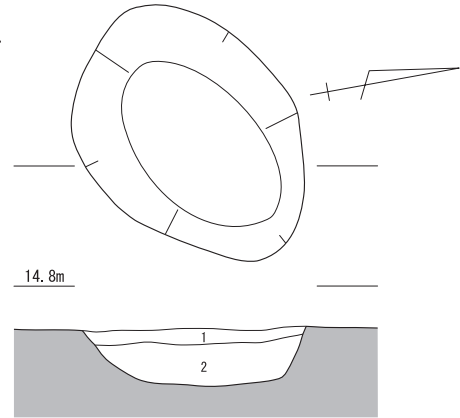
- | | | | | |
|-------------------|-------------------|-------------------|-----------------|-------------|
| 1. 表土(耕土) | | 6. 10YR4/3 にぶい黄褐色 | シルト質極細砂～細砂 | |
| 2. 10YR4/4 褐色 | シルト質極細砂～細砂 | | 径5mm以下の礫を散漫に含む | S K 36 |
| | 径2cm以下の礫を散漫に含む | 中世遺物包含層 | | S K 35 |
| 3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 | シルト混じり細砂～中砂 | 7. 6層とほぼ同じ | | |
| | 径2cm以下の礫を散漫に含む | 8. 10YR3/2 黒褐色 | シルト混じり細砂～中砂 | |
| 4. 10YR3/3 暗褐色 | シルト質極細砂～細砂 | | 径10cm以下の礫を含む | |
| | 径1cm以下の礫を散漫に含む | S K 20 | 特に径1cm～極粗砂を多く含む | 人為埋土 S K 22 |
| 5. 10YR4/4 褐色 | シルト混じり細砂～中砂(掘りすぎ) | S K 20 | | |
| | | 9. 10YR4/3 にぶい黄褐色 | シルト質細砂～中砂 | |
| | | | 径1cm以下の礫を含む | S K 22 |

S K 30

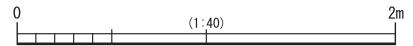


- | | | | |
|-------------------|--------|----------------------|--|
| 1. 10YR3/3 暗褐色 | 砂礫 | 礫は径4cm以下 | |
| | | マトリックスは淘汰の悪い砂(細砂～粗砂) | |
| 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 | シルト質細砂 | 径1cm以下の礫を散漫に含む | |

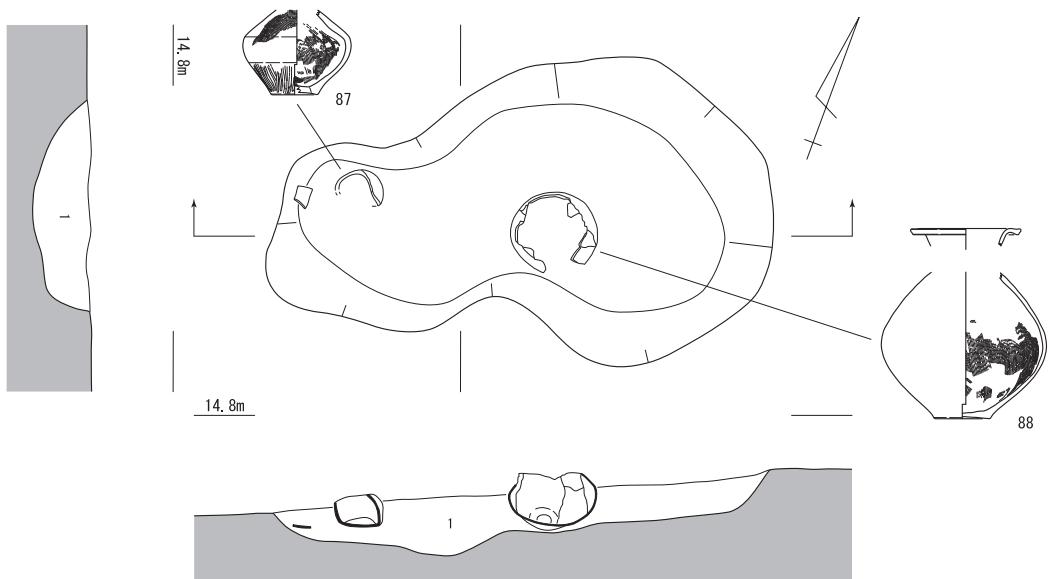
S K 24



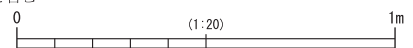
- | | | | |
|-------------------|-----------|---------------|--|
| 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 | シルト質砂礫 | 礫は径3cm以下主体 | |
| 2. 10YR3/4 暗褐色 | 礫混じり細砂～中砂 | 径2cm以下の礫を多く含む | |

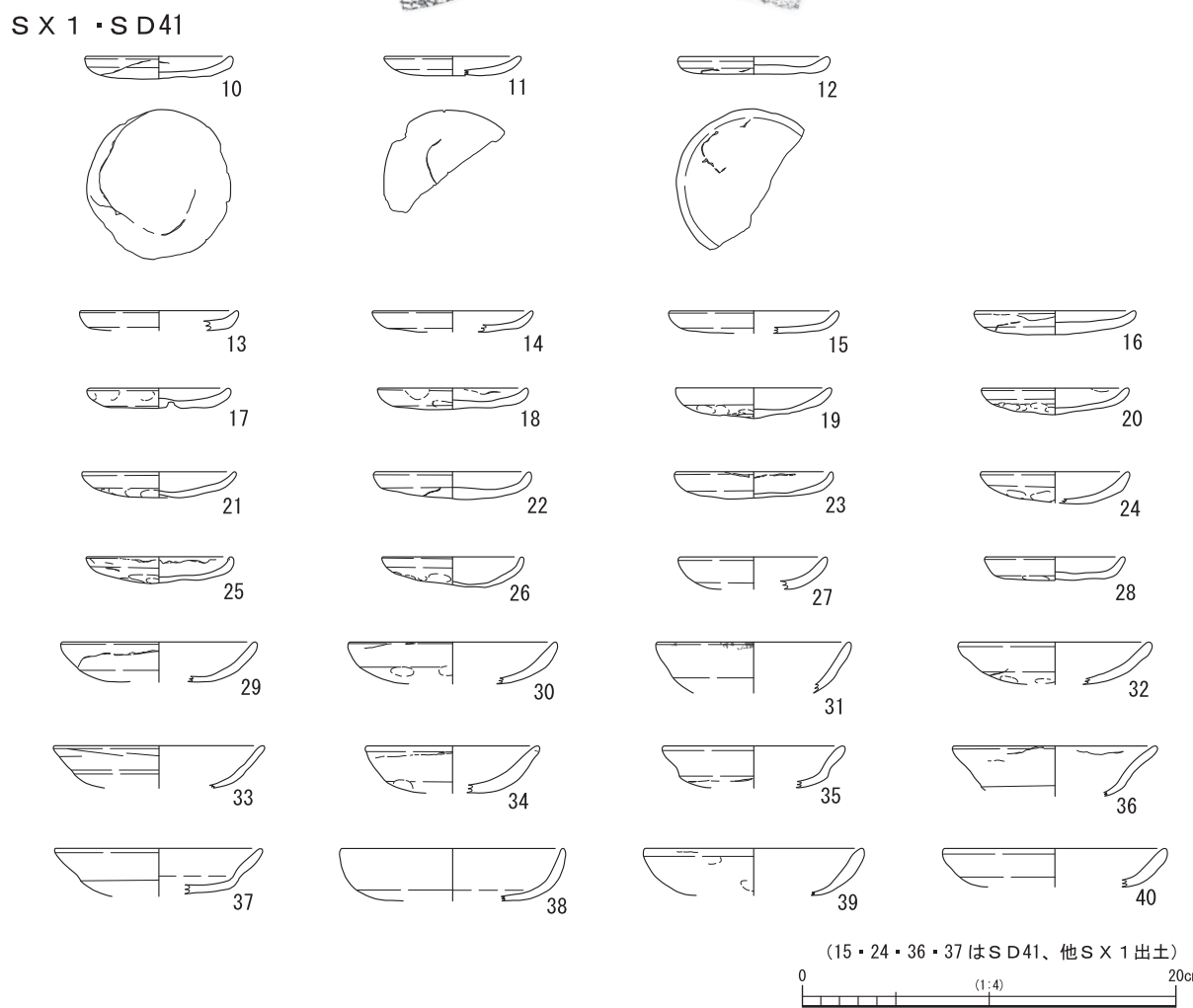
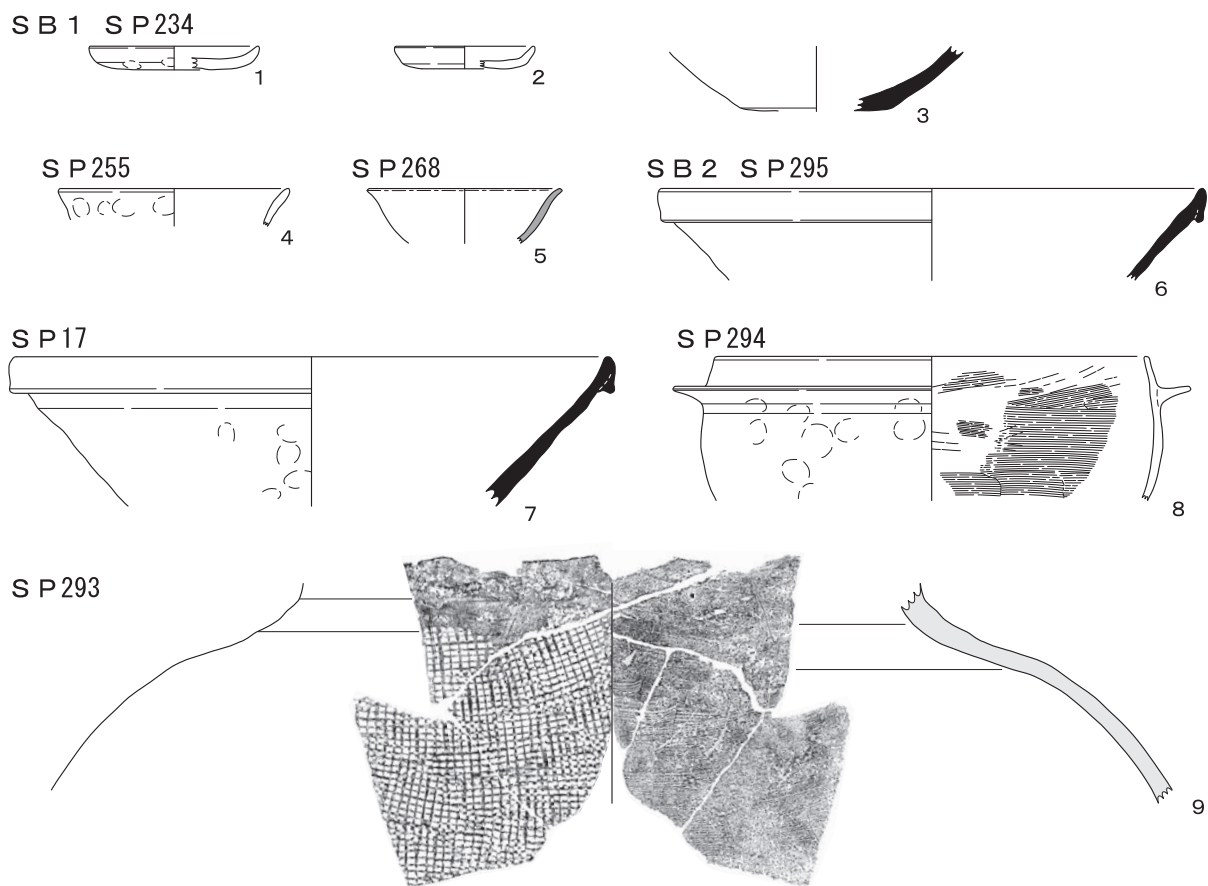


S K 39



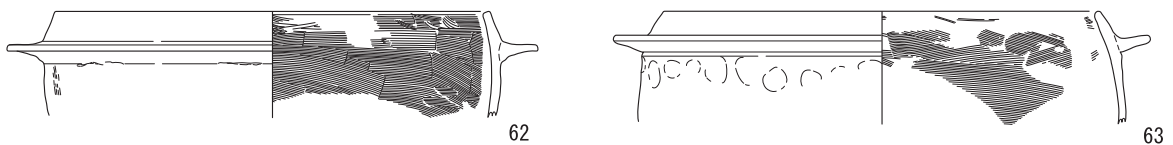
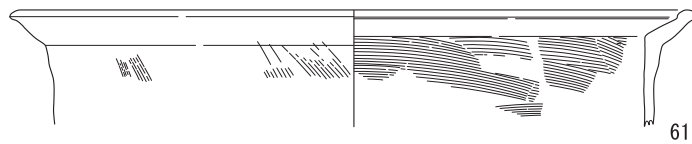
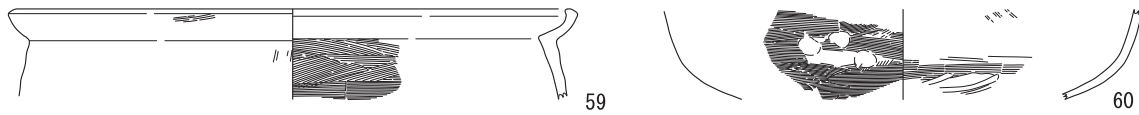
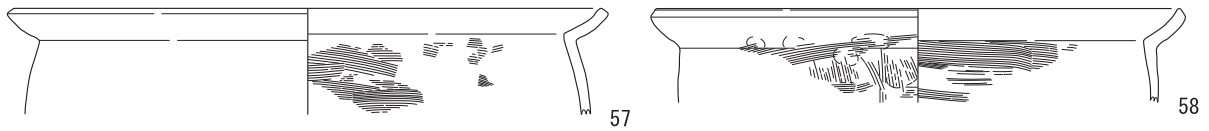
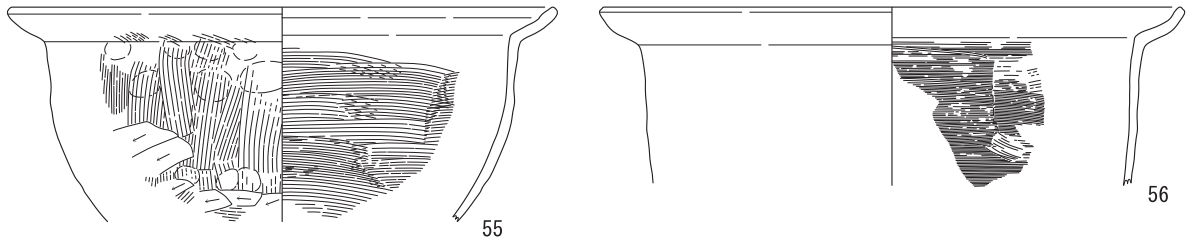
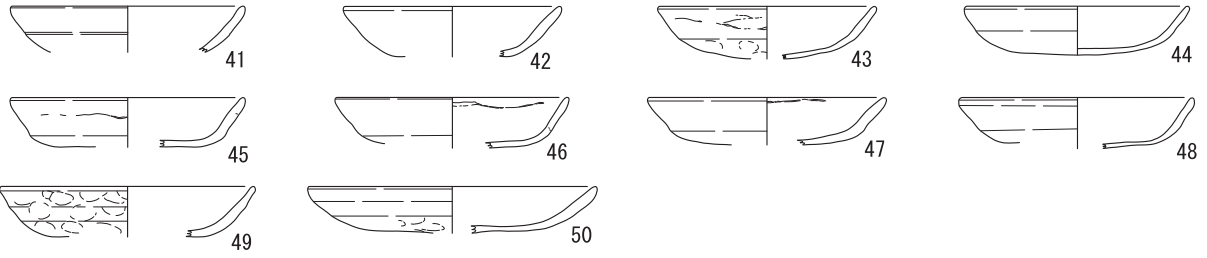
- | | | |
|---------------|---------|-------------|
| 1. 10YR4/4 褐色 | シルト質極細砂 | 径2cm以下の礫を含む |
|---------------|---------|-------------|



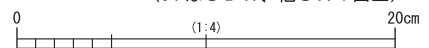


遺構内出土の土器 (1)

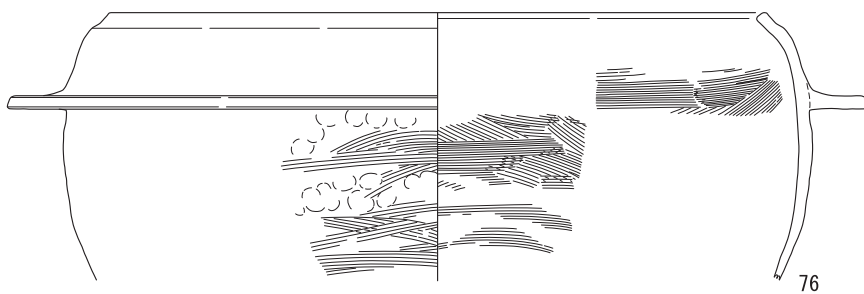
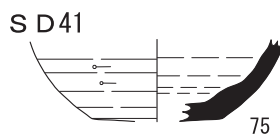
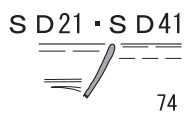
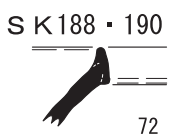
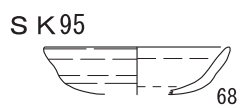
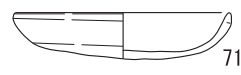
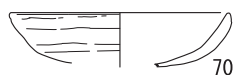
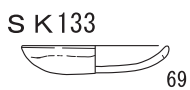
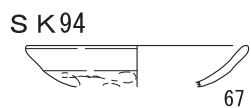
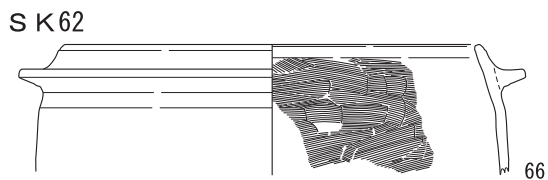
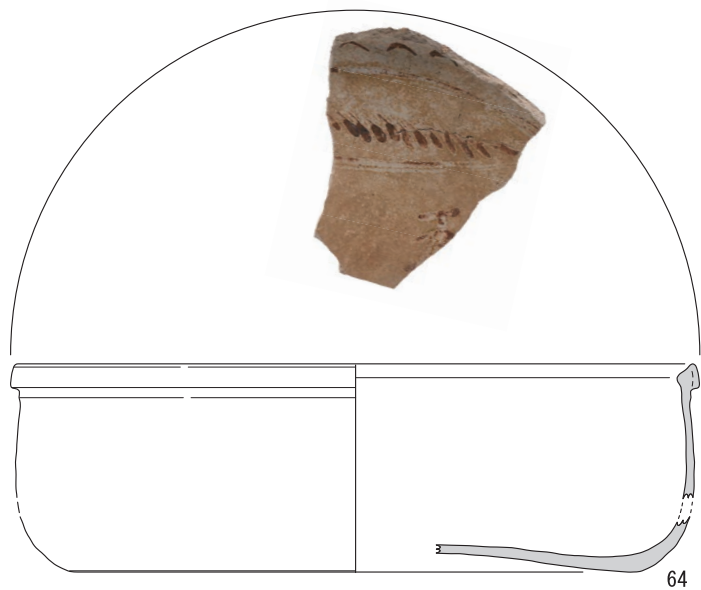
S X 1・SD41



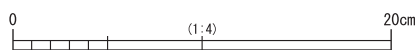
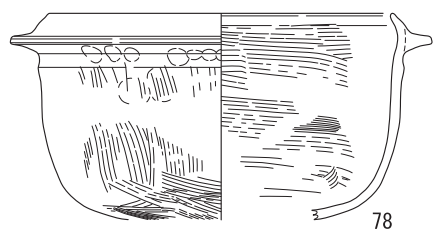
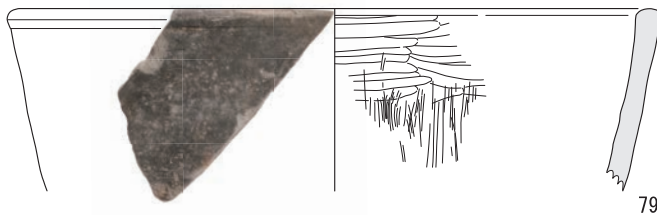
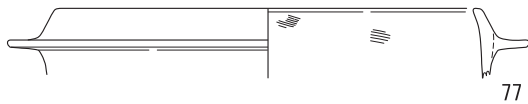
(54はSD41、他SX1出土)



S X 1

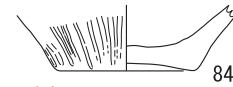
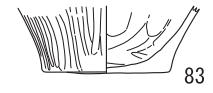
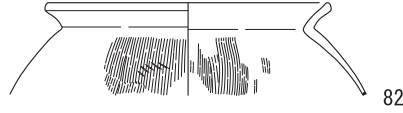
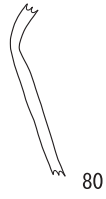
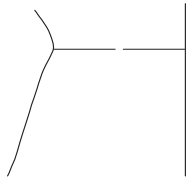


S D 41

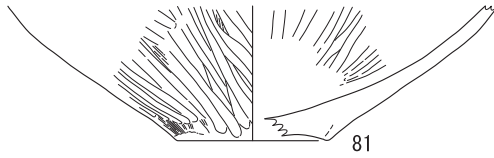
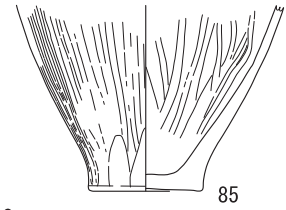


遺構内出土の土器 (3)

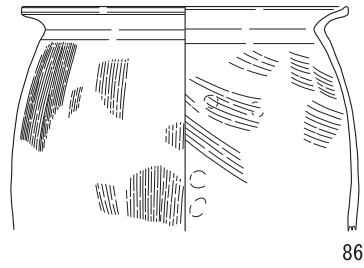
S K 22



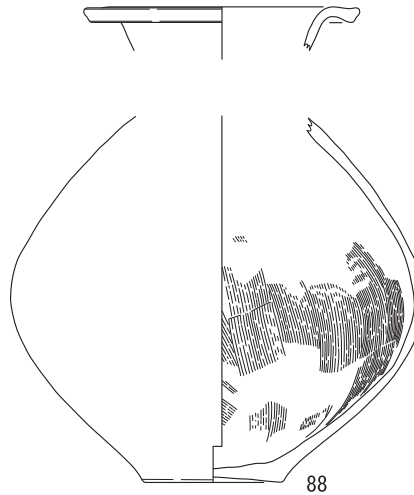
S K 24



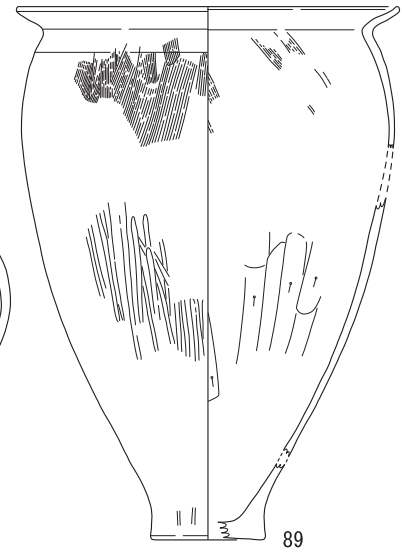
S K 24



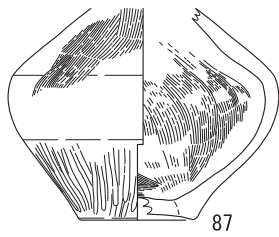
S K 39



S K 30



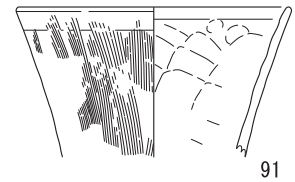
S K 39



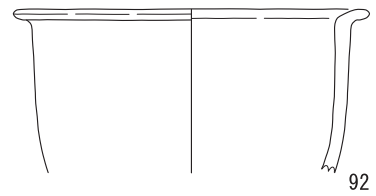
S P 80



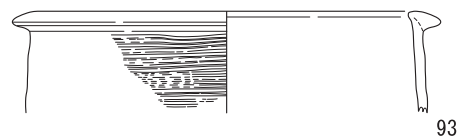
S X 1



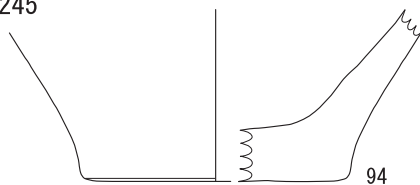
S P 208



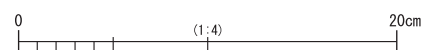
S P 151



S P 245

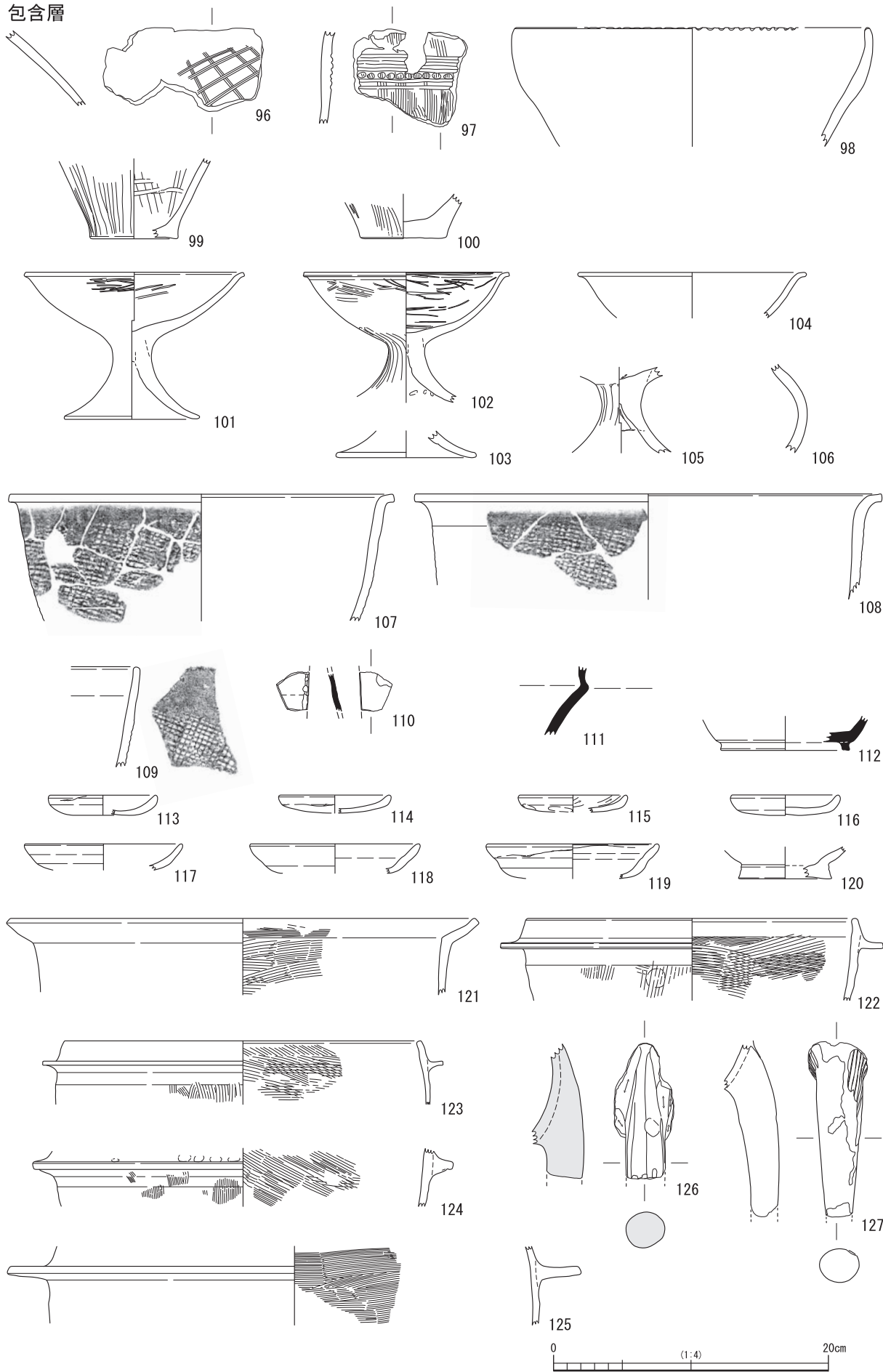


S P 199



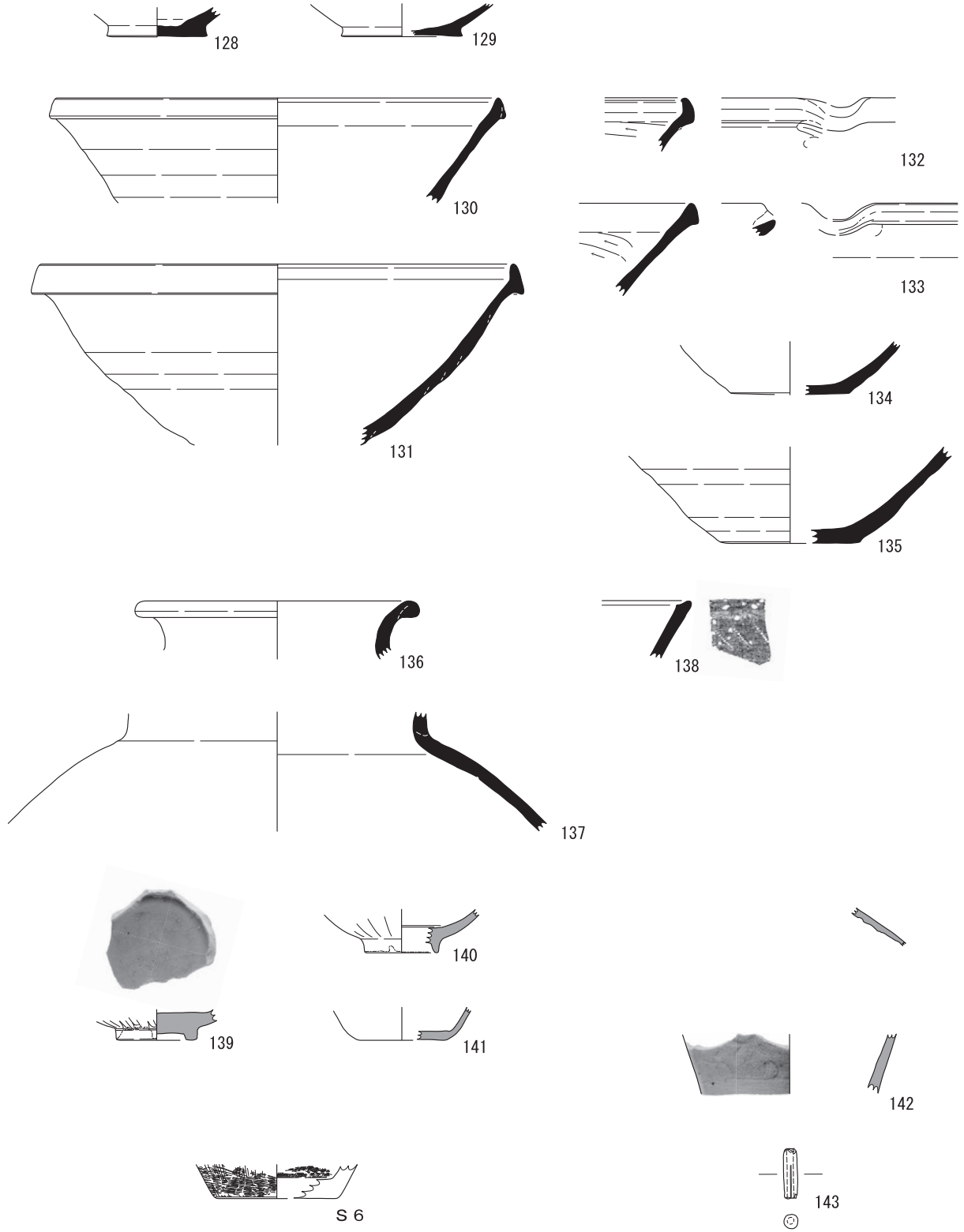
遺構内出土の土器 (4)

包含層



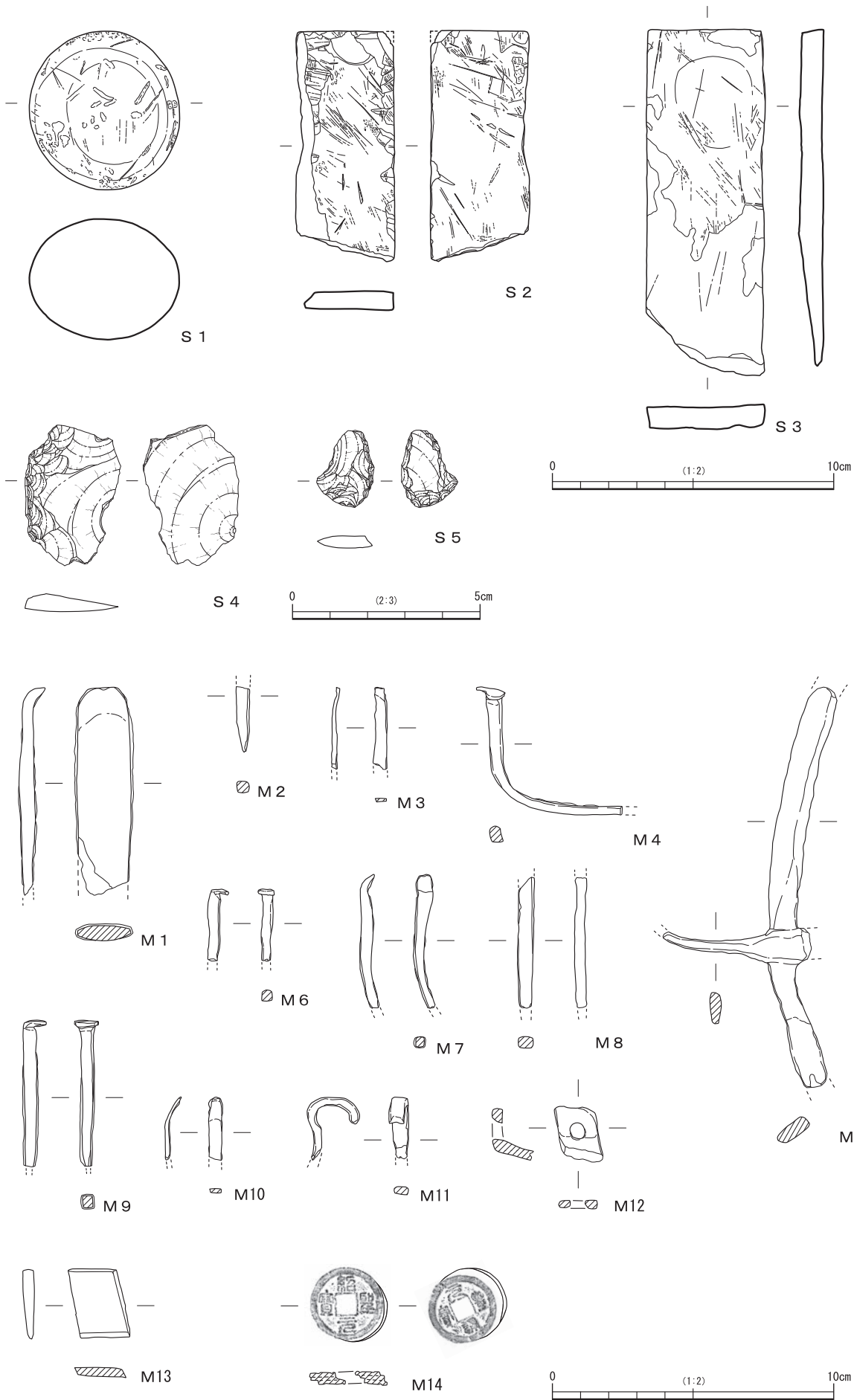
包含層出土の土器 (1)

包含層



0 (1:4) 20cm

包含層出土の土器（2）、石製品



出土石器・金属器

鷗北遺跡

写真図版



調査区遠景（北から）



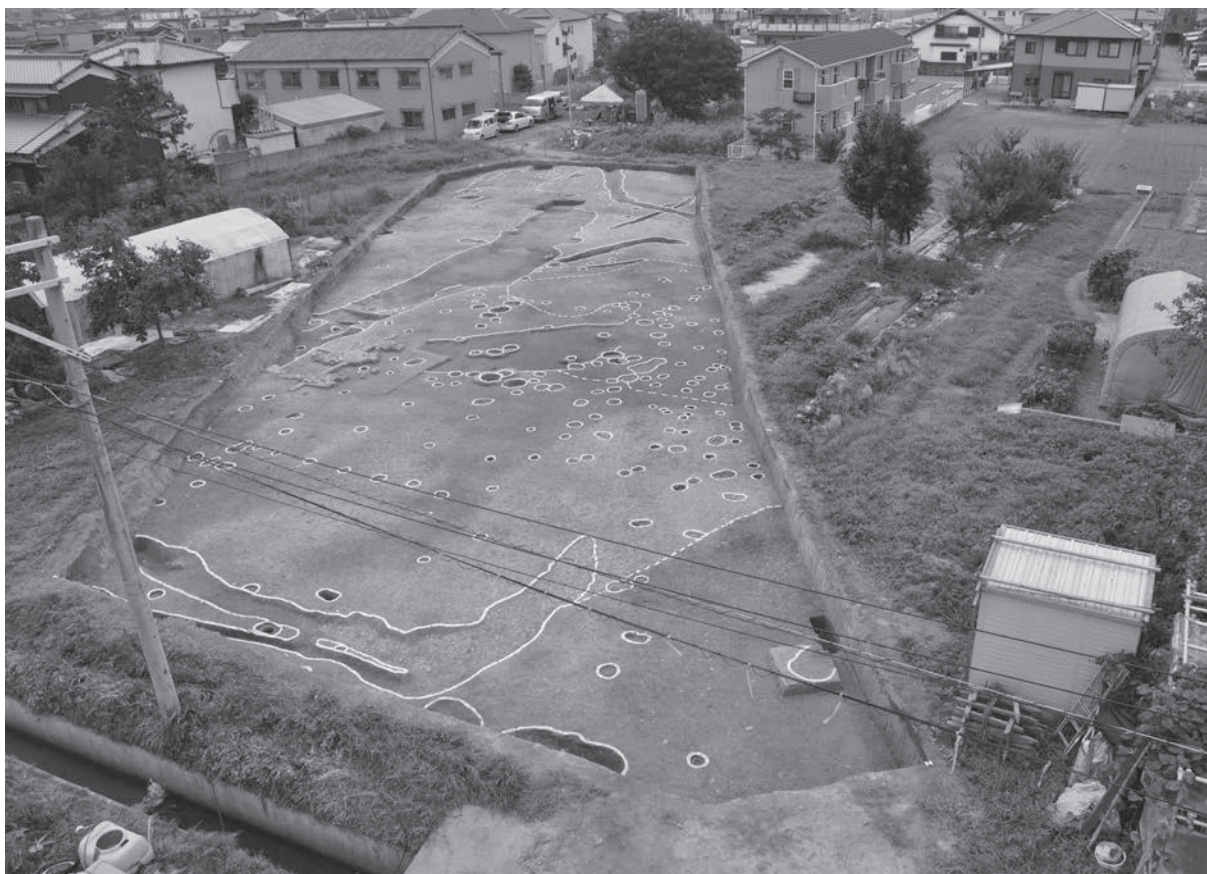
調査区遠景（南から）



調査区全景（東から）



調査区全景（南から）



調査区全景（北から）



調査区全景（南から）



調査区西壁断面（1）（北から）



調査区西壁断面（2）（北から）



調査区西壁断面（3）（北から）



調査区西壁断面(4)(北東から)



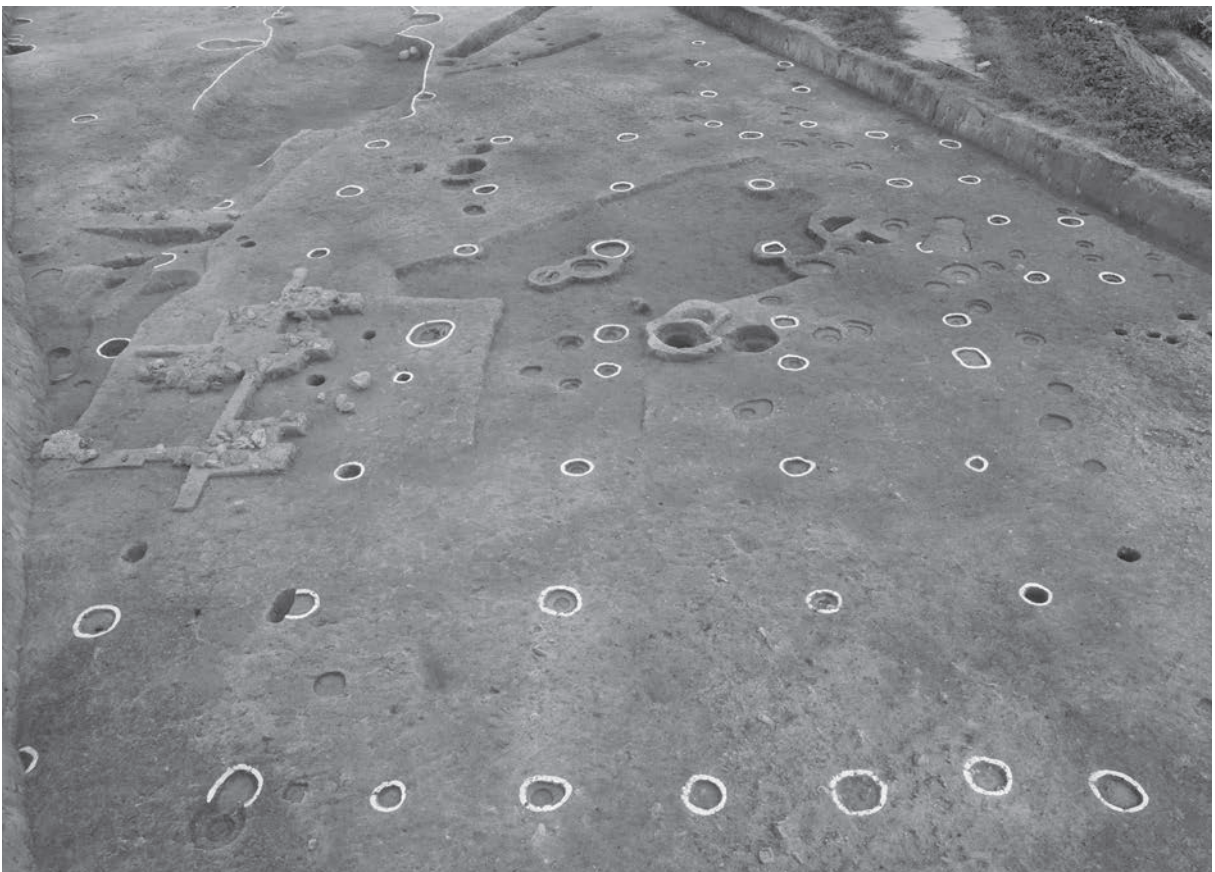
調査区南壁断面(北から)



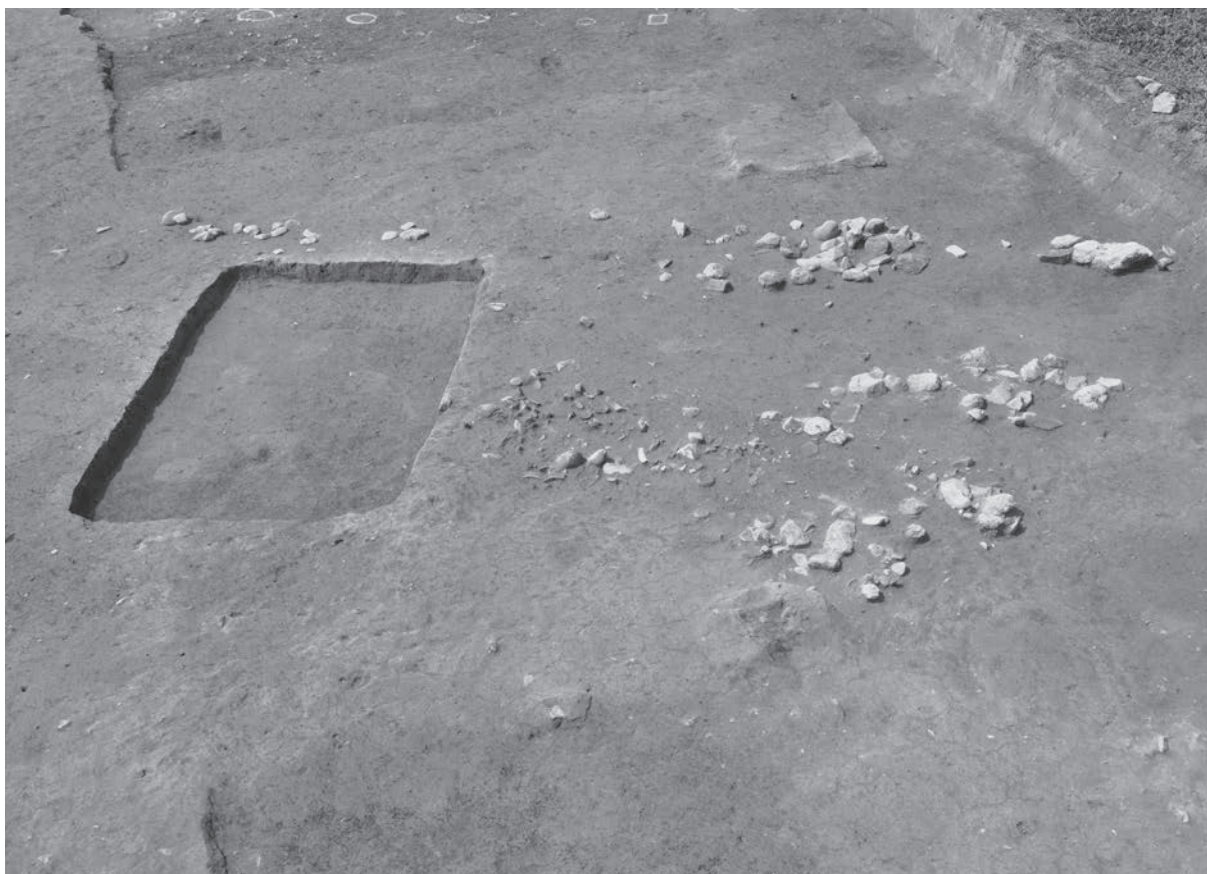
調査区北壁断面(南から)



掘立柱建物跡群（南から）



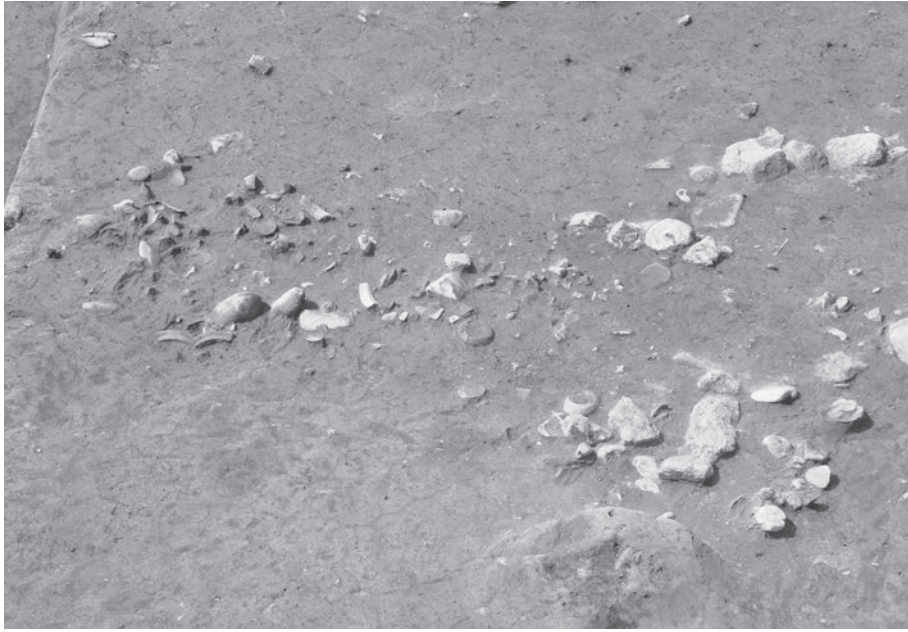
掘立柱建物跡群（北から）



S X 1 検出状況（南から）



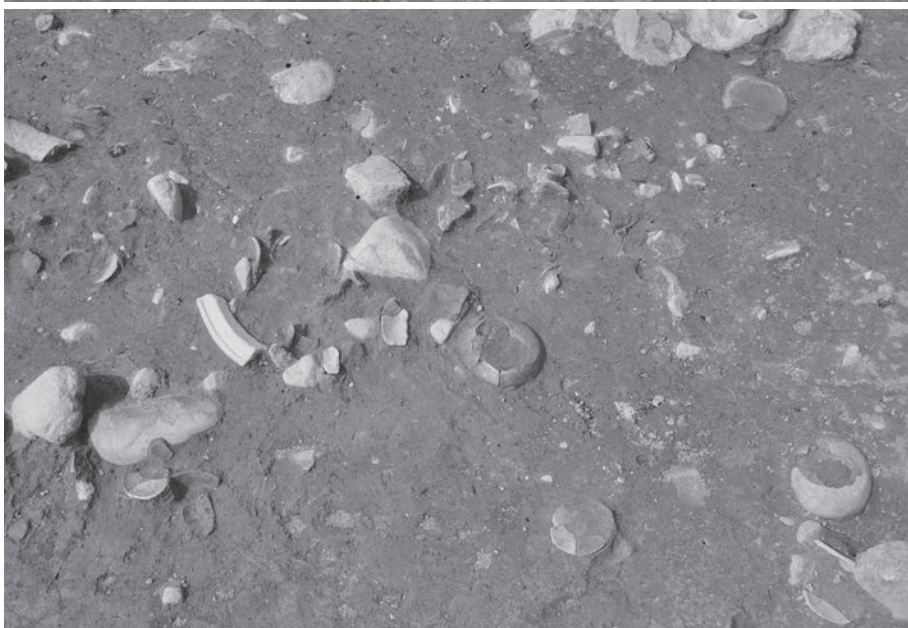
S X 1 検出状況（東から）



S X 1 遺物検出状況（南から）



S X 1 遺物検出状況（西から）



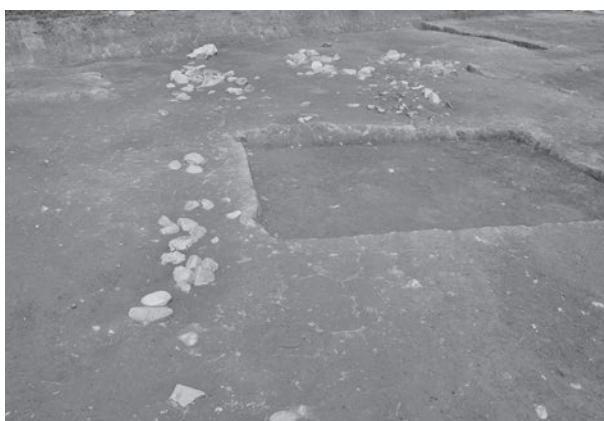
S X 1 遺物検出状況
（部分：南から）



S X 1 礫検出状況 (部分: 南から)



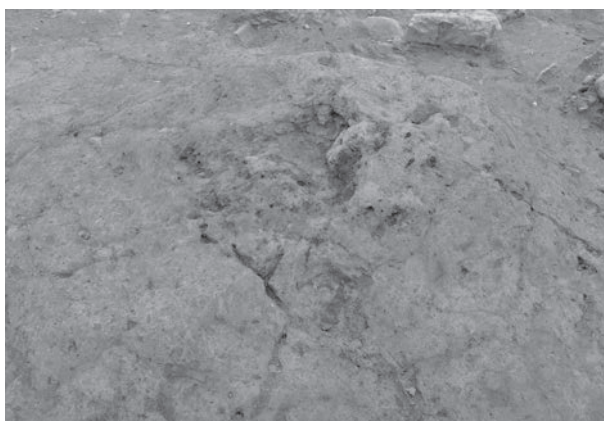
S X 1 礫検出状況 (部分: 南から)



S X 1 礫検出状況 (部分: 西から)



S X 1 断面 (南から)



S X 1 炭化物集中1検出状況 (南から)



S X 1 炭化物集中1断面 (南から)



S X 1 断面 (北西から)



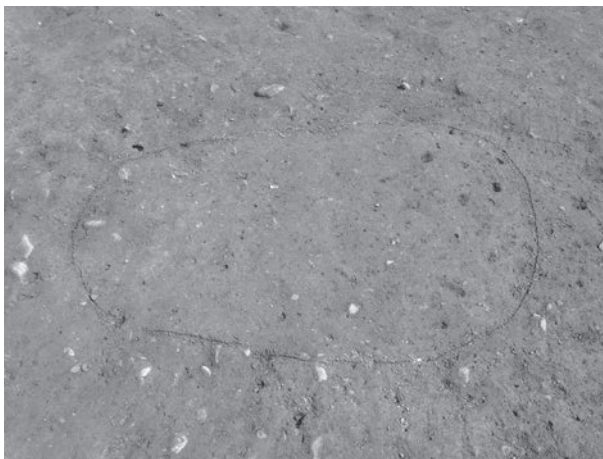
S X 1 断面 (部分: 南から)



調査区南部の柱穴群（北から）



S K20 断面（南西から）



S K23 検出状況（南から）



S K23 断面（東から）



S K35 (左)・S K36 (右) 断面 (南西から)



S K48 断面 (南から)



S K61 断面 (西から)



S K62 断面 (西から)



S K63 断面 (西から)



S K94 断面 (南から)



S K95 断面 (東から)



S K103 断面 (西から)



S K125 断面 (北から)



S K135 断面 (南西から)



S K133 (左)・S K288 (右) 完掘状況 (南西から)



S K133 断面 (南西から)



S K166 断面 (東から)



S K167 断面 (南東から)



S K188・S K190 断面 (北西から)



S K168 炭化物層検出状況 (南から)



S K 250 検出状況 (西から)



S K 250 断面 (北から)



S D 2 断面 (南東から)



S D 10 断面 (南から)



S D 21 断面 (南から)



S D 41 畔 2 断面 (南から)



S D 41 上面遺物出土状況 (西から)



S D 41 遺物出土状況 (東から)



SD 2・SD 78 (北西から)



SD 41・SD 21 (北から)



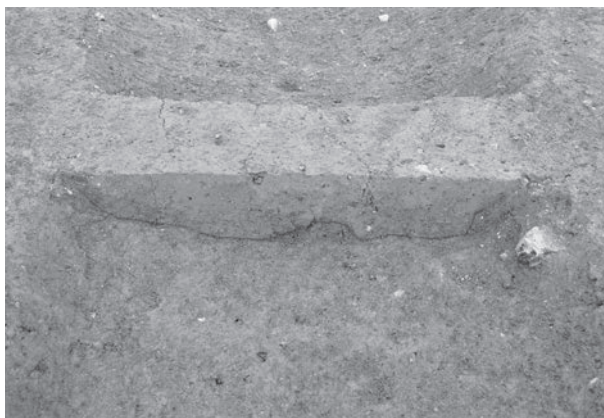
SD 153・SD 154 (東から)



S D78 断面 (南から)



S D90 断面 (西から)



S D153 断面 (西から)



S D154 断面 (西から)



S D246 断面 (北から)



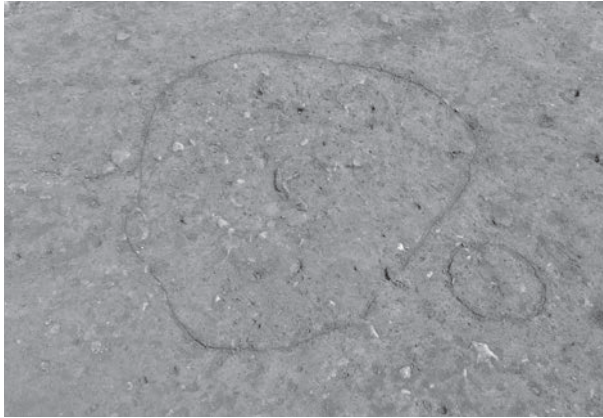
S X229 検出状況 (南から)



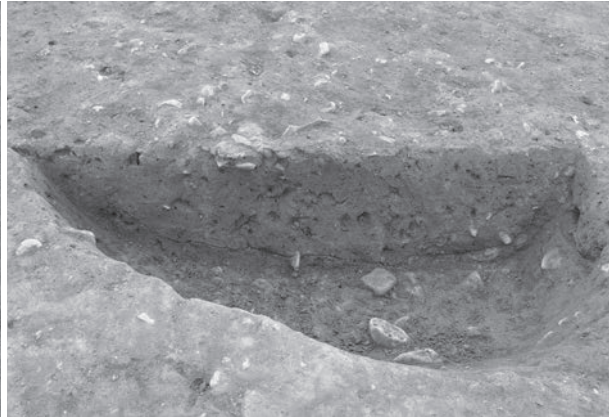
S X229 断面 (南東から)



S K22 断面 (南西から)



S K24 検出状況 (南から)



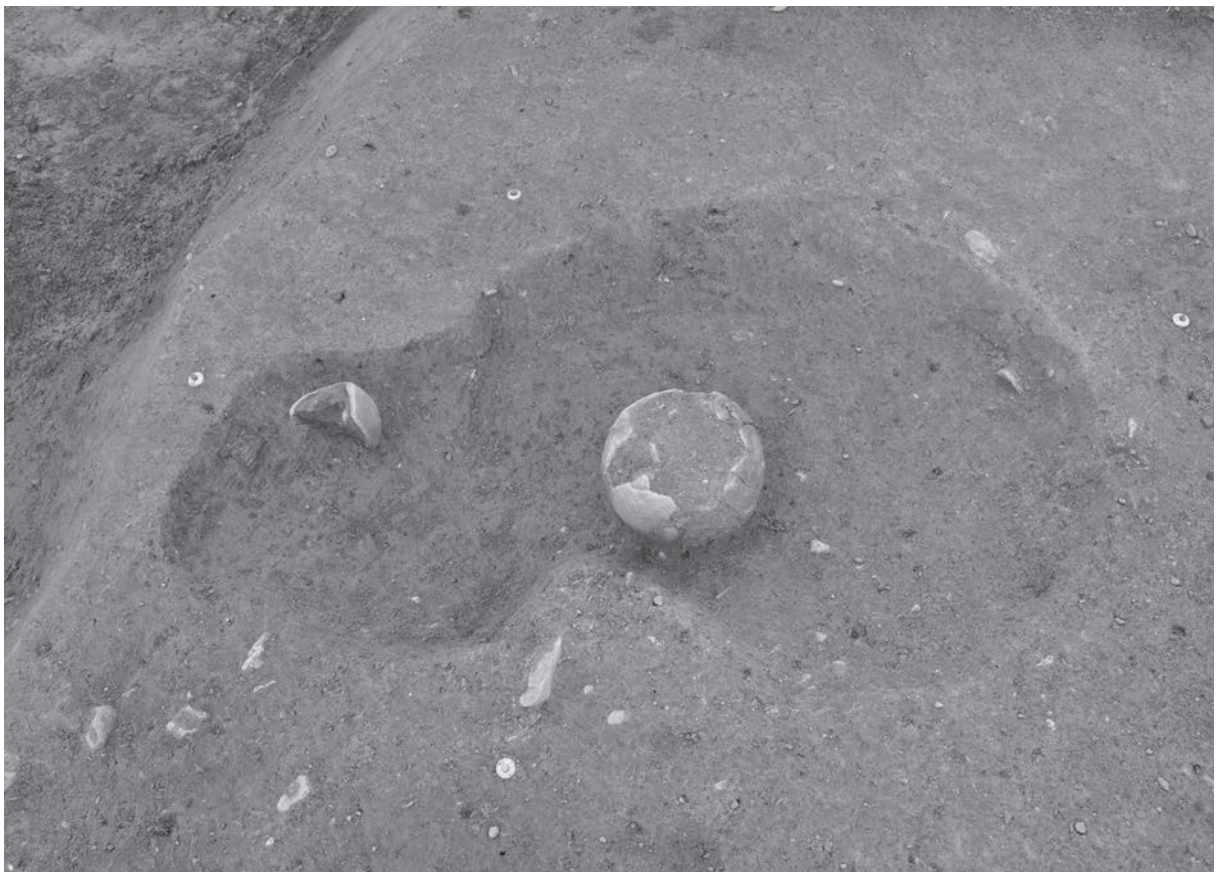
S K24 断面 (東から)



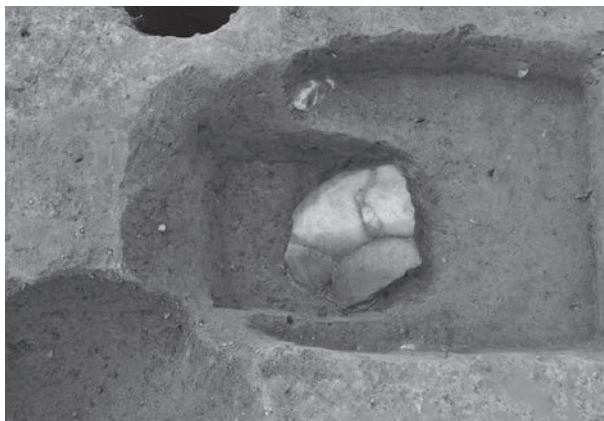
S K30 断面 (南西から)



S K39 断面 (西から)



S K39 遺物出土状況 (南から)



S P 80 遺物出土状況（南から）



S P 208 遺物出土状況（南から）



S P 245 遺物出土状況（南から）



作業風景



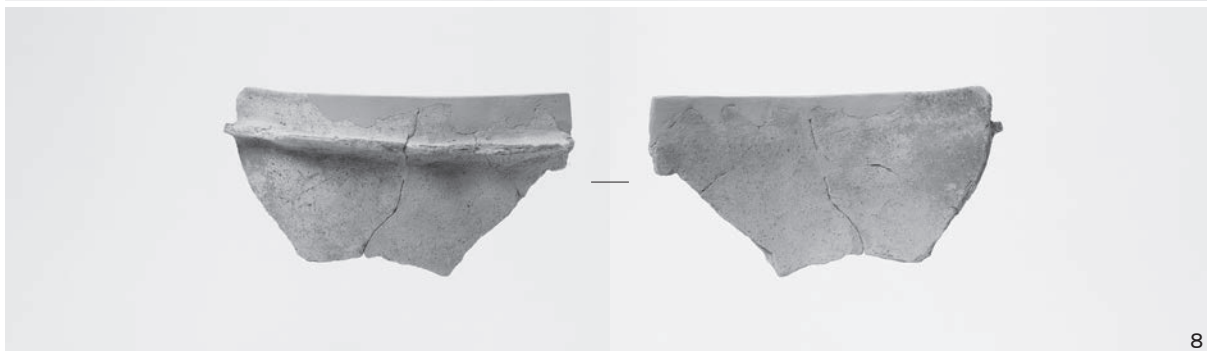
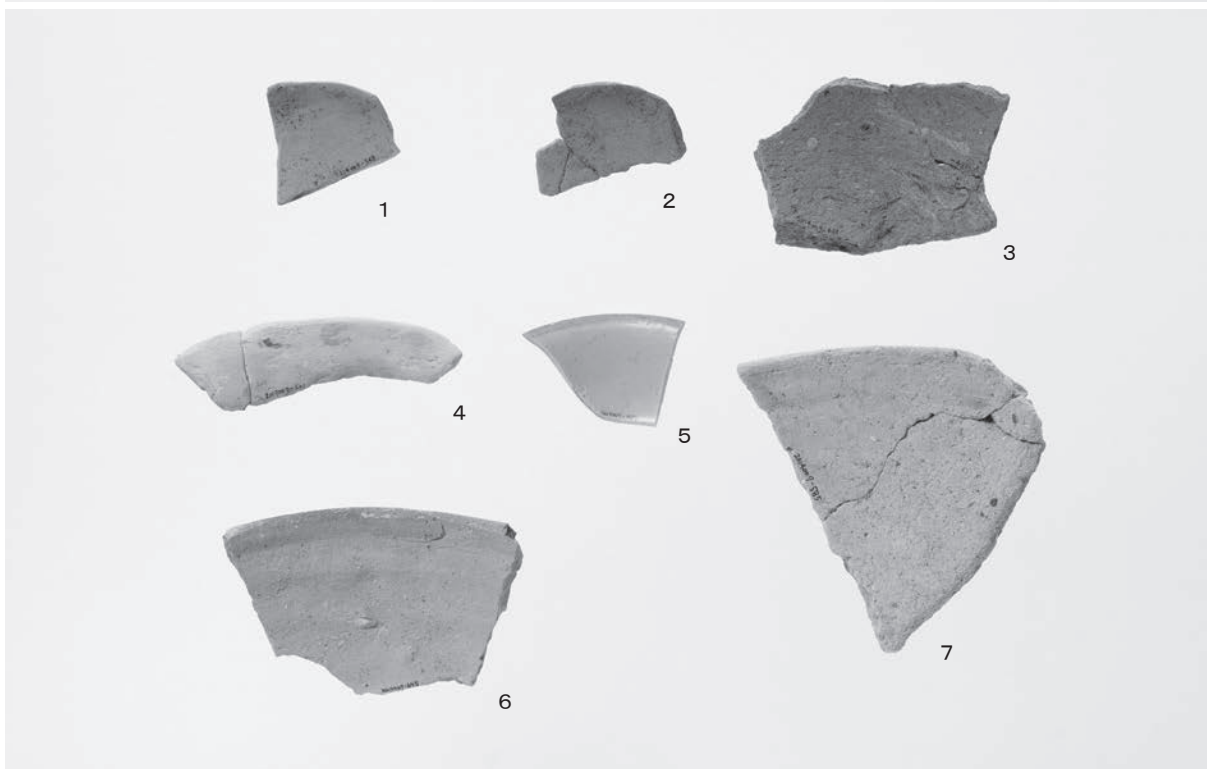
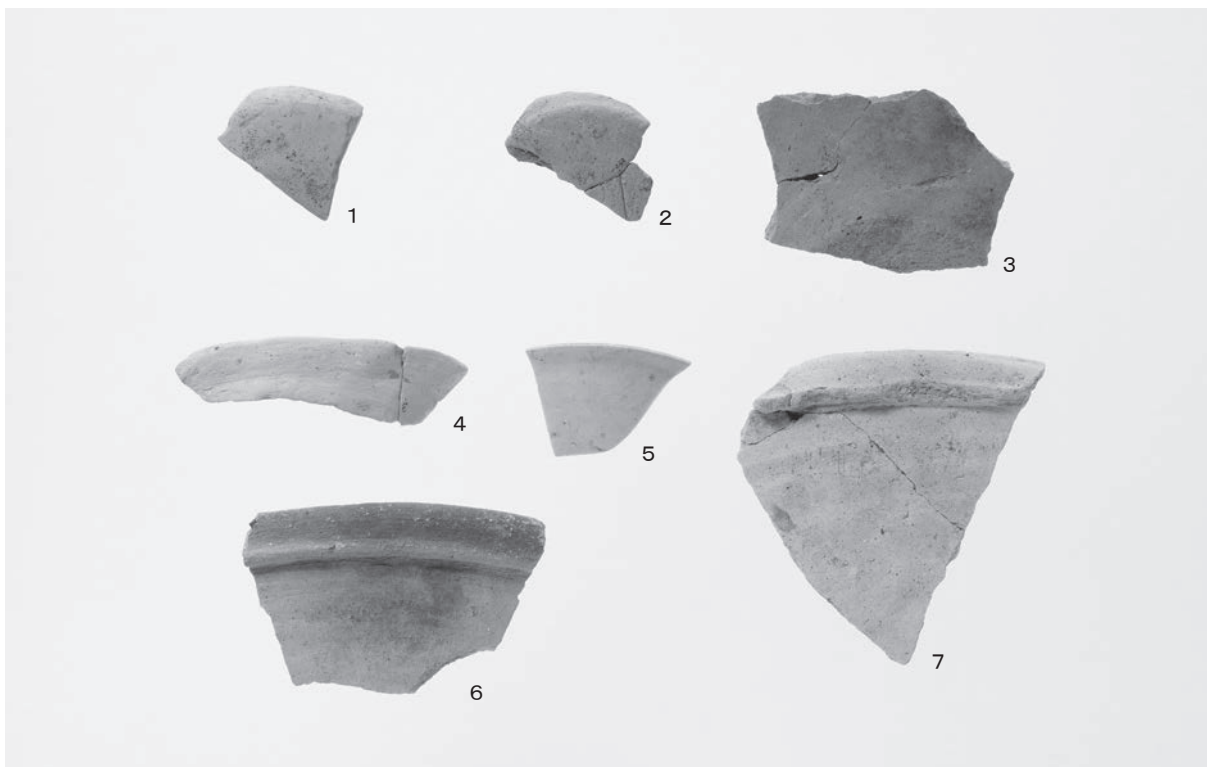
作業風景



作業風景

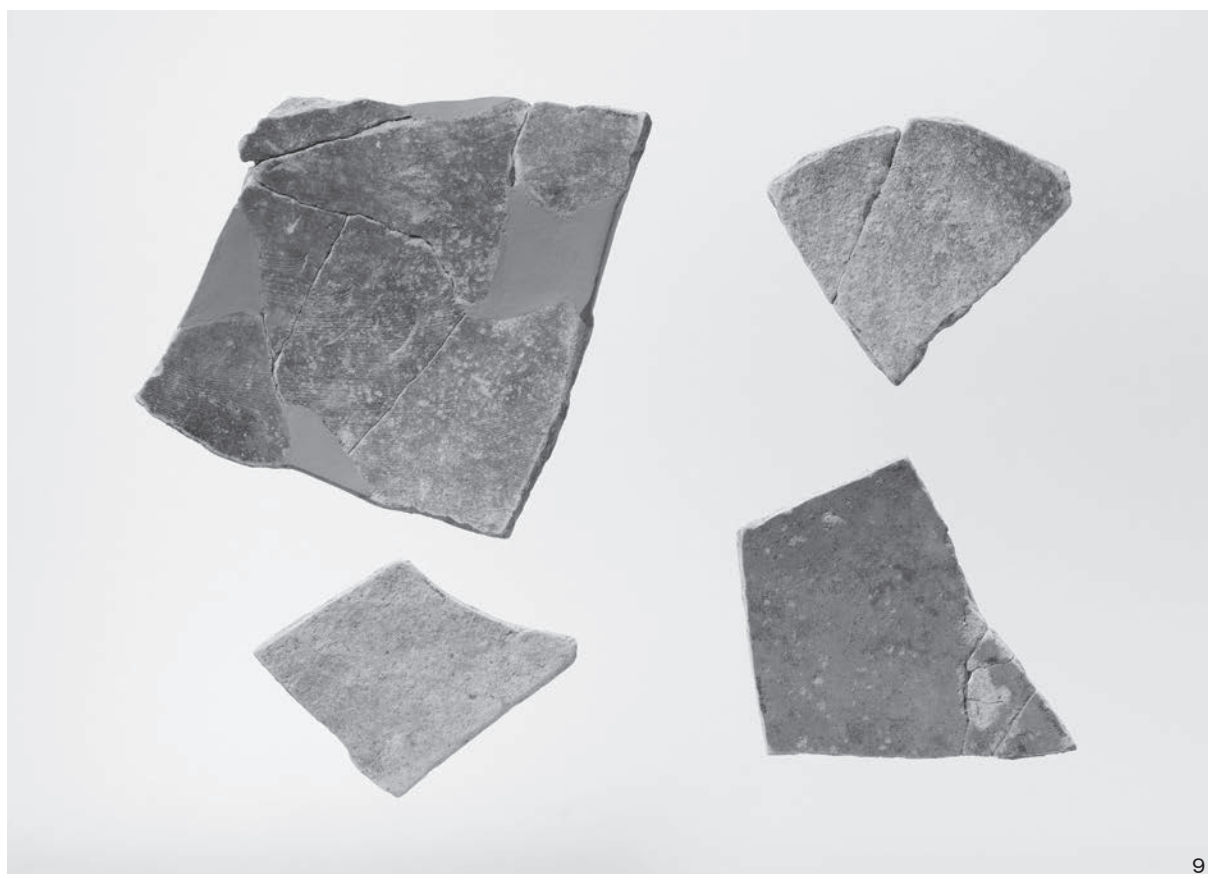


地元説明会



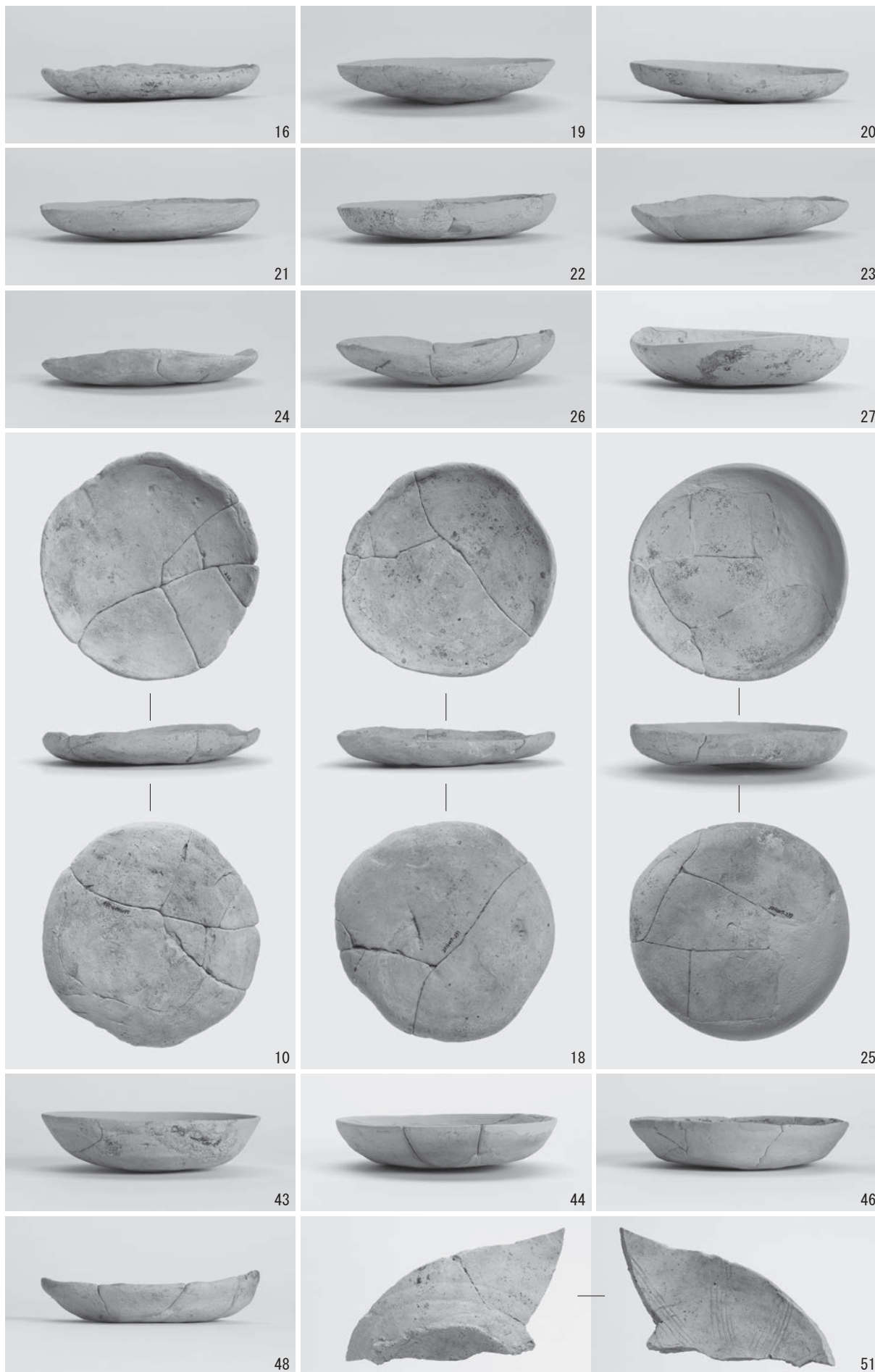


9



9

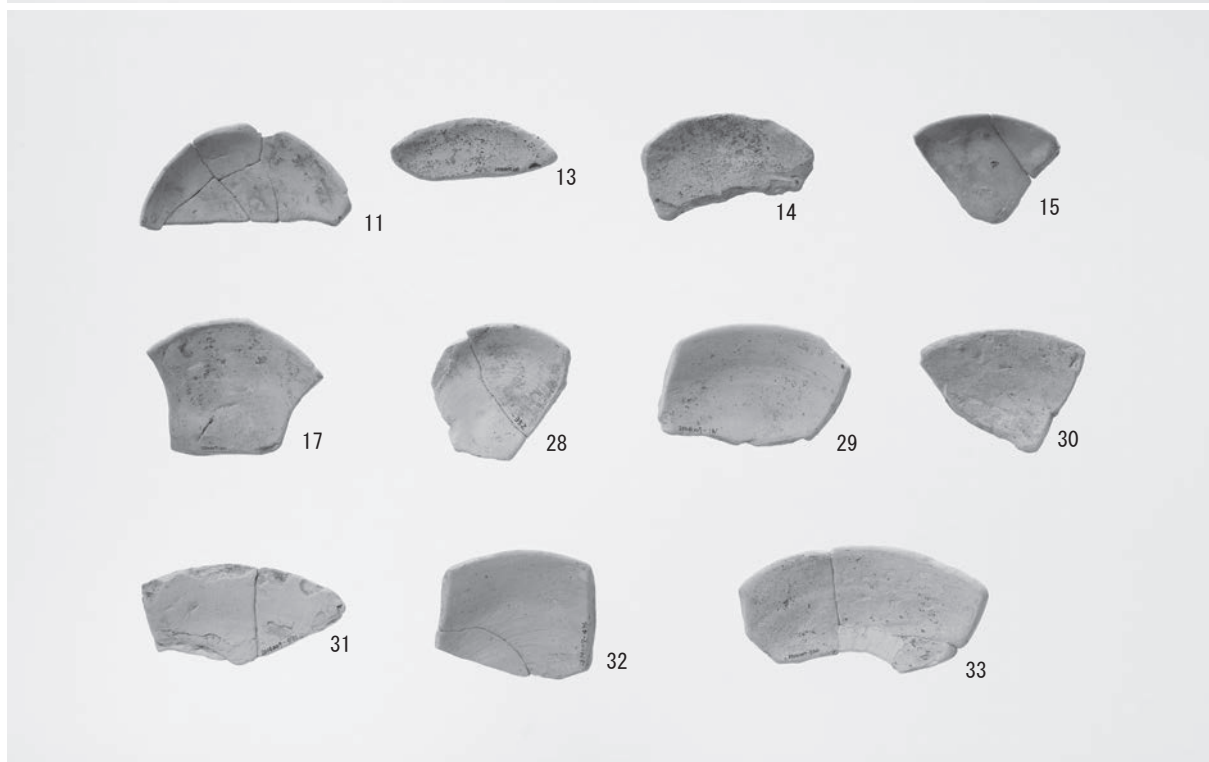
S P293 出土土器



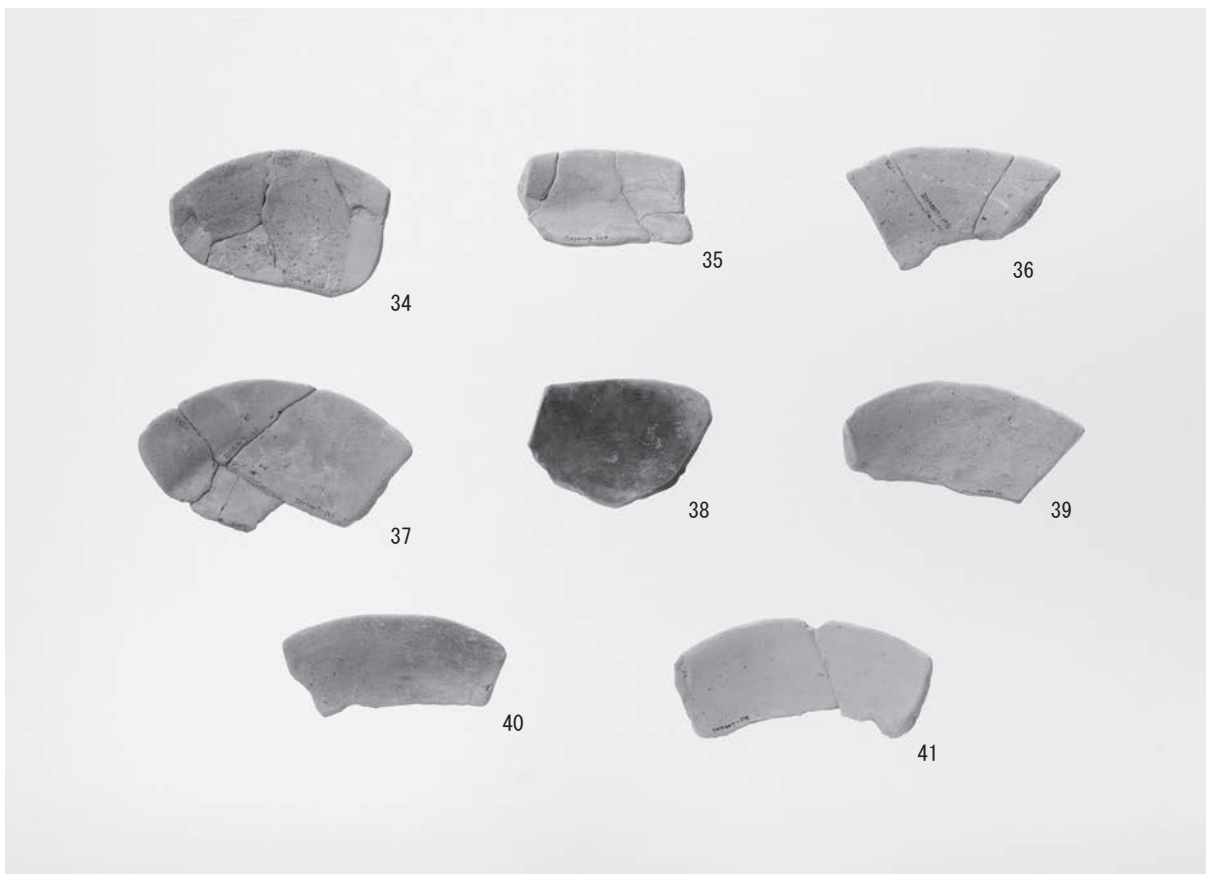
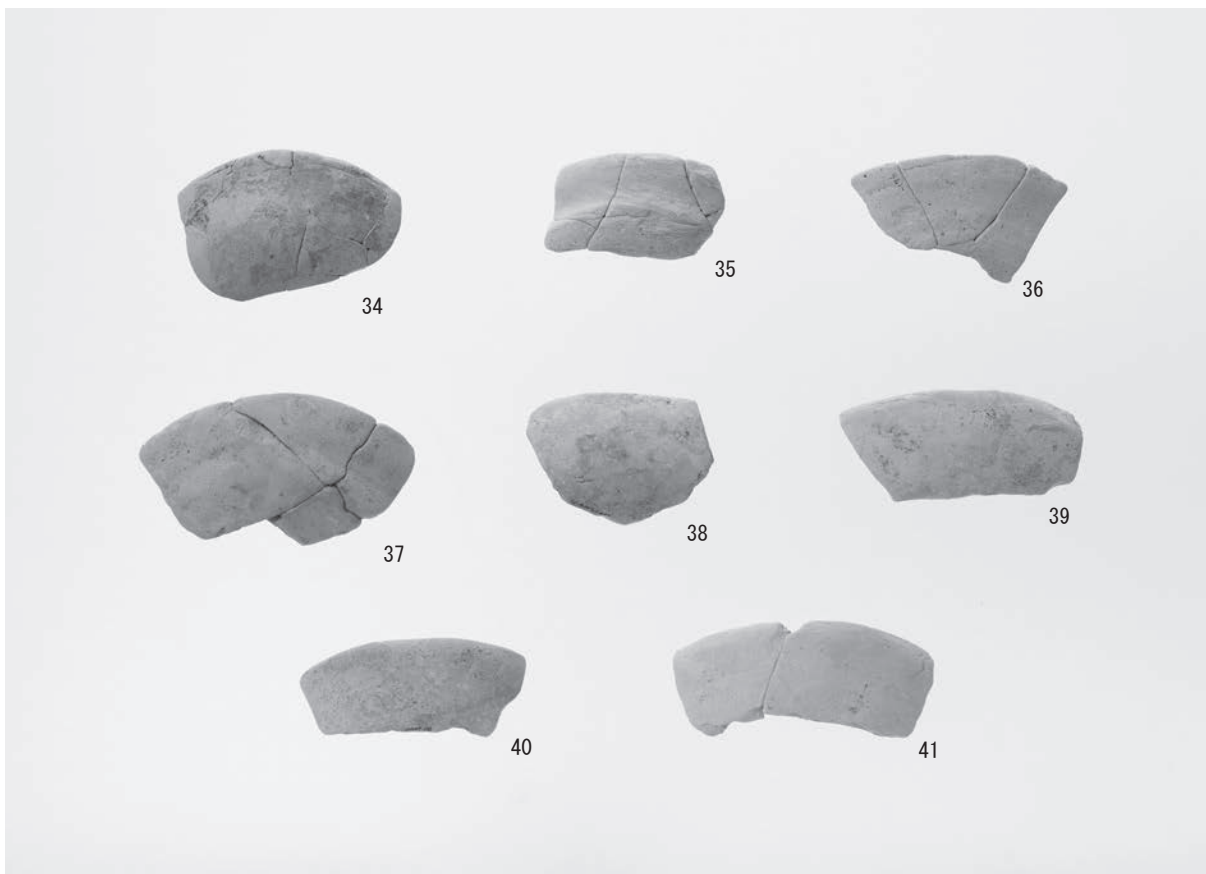
S X 1 出土土器 (1)、S D41 出土土器 (1)



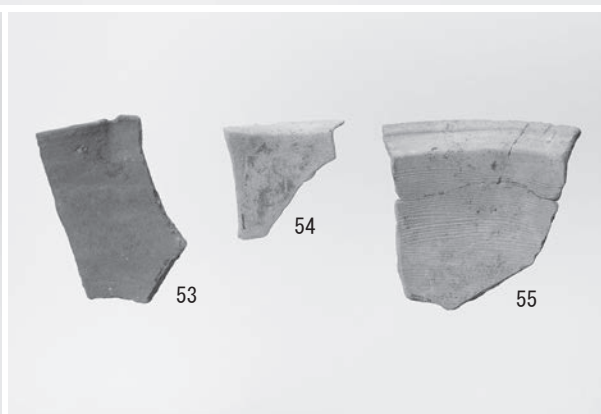
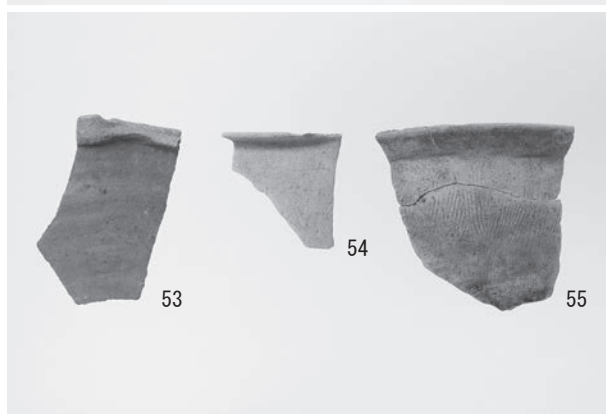
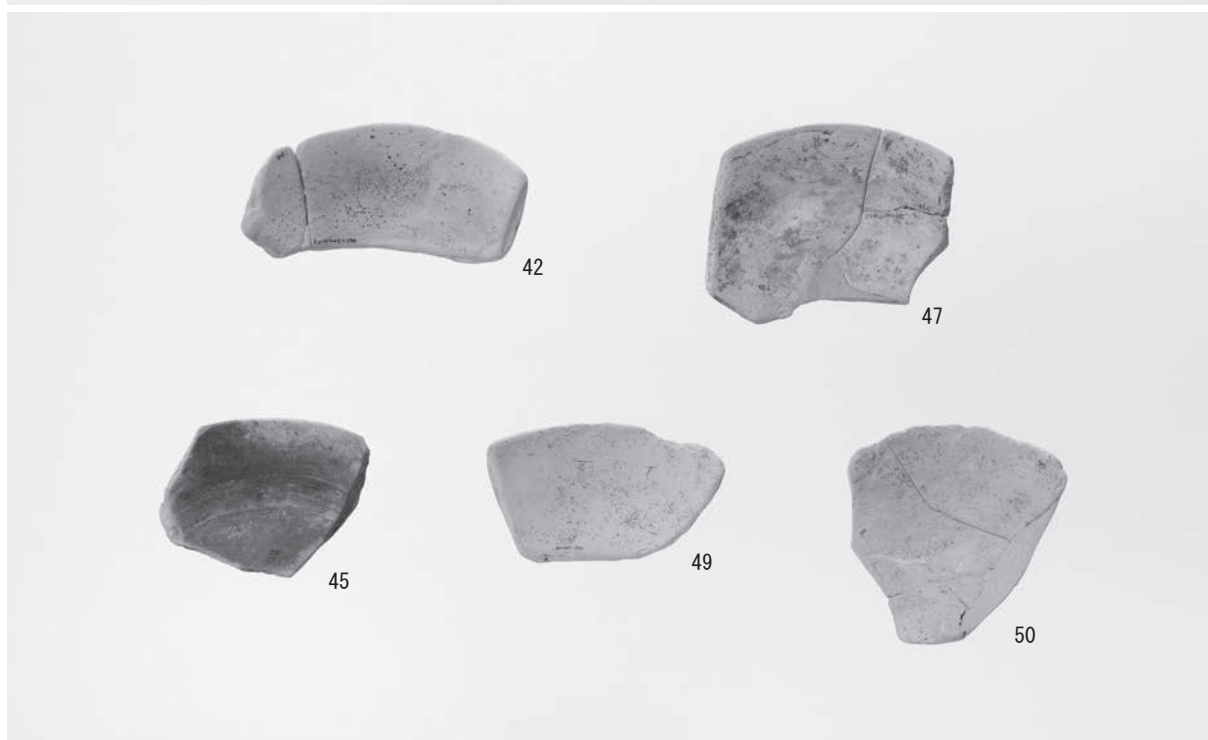
52



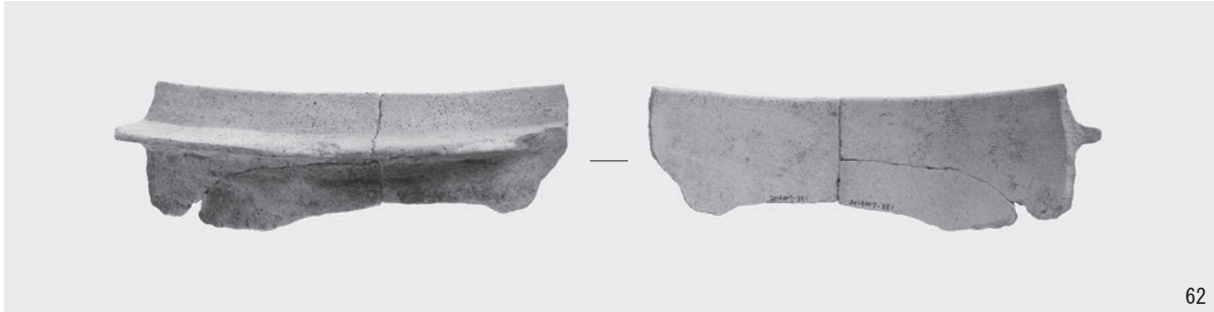
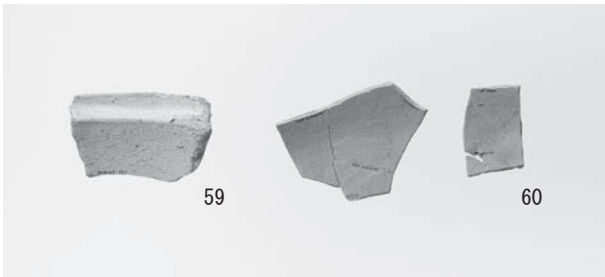
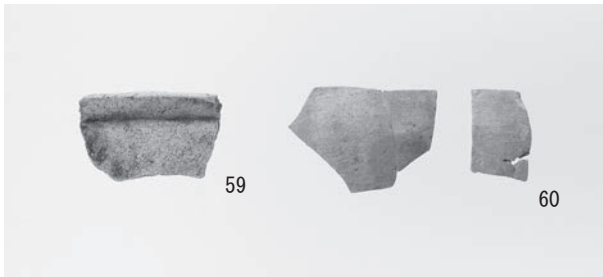
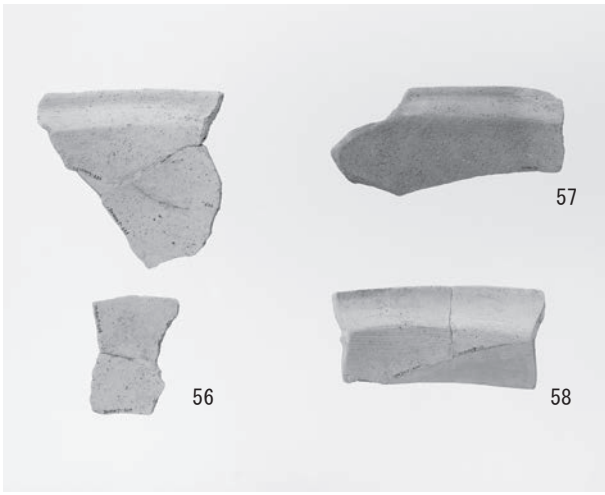
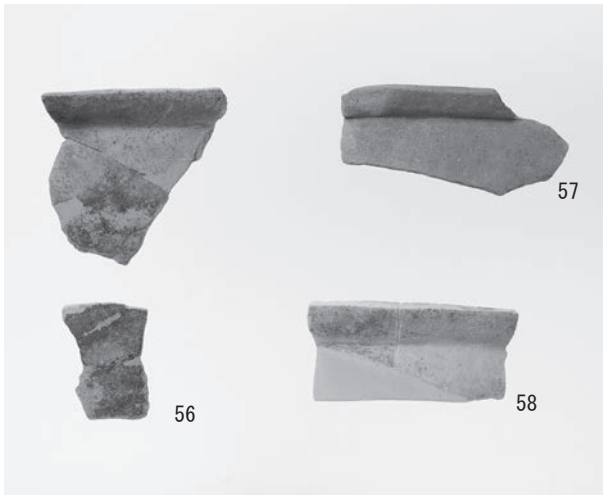
SX 1 出土土器 (2)、SD41 出土土器 (2)



S X 1 出土土器 (3)、S D41 出土土器 (3)



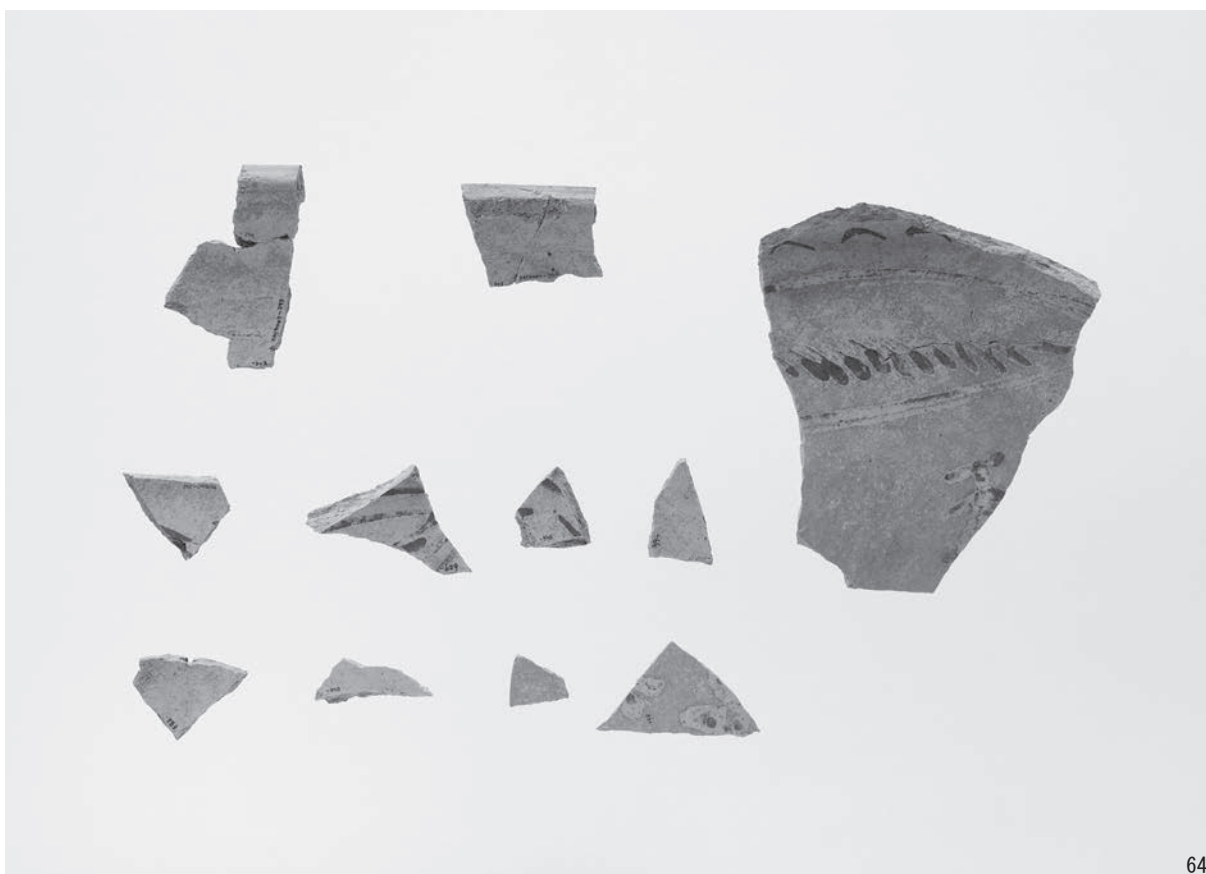
S X 1 出土土器 (4)、S D 41 出土土器 (4)



S X 1 出土土器 (5)

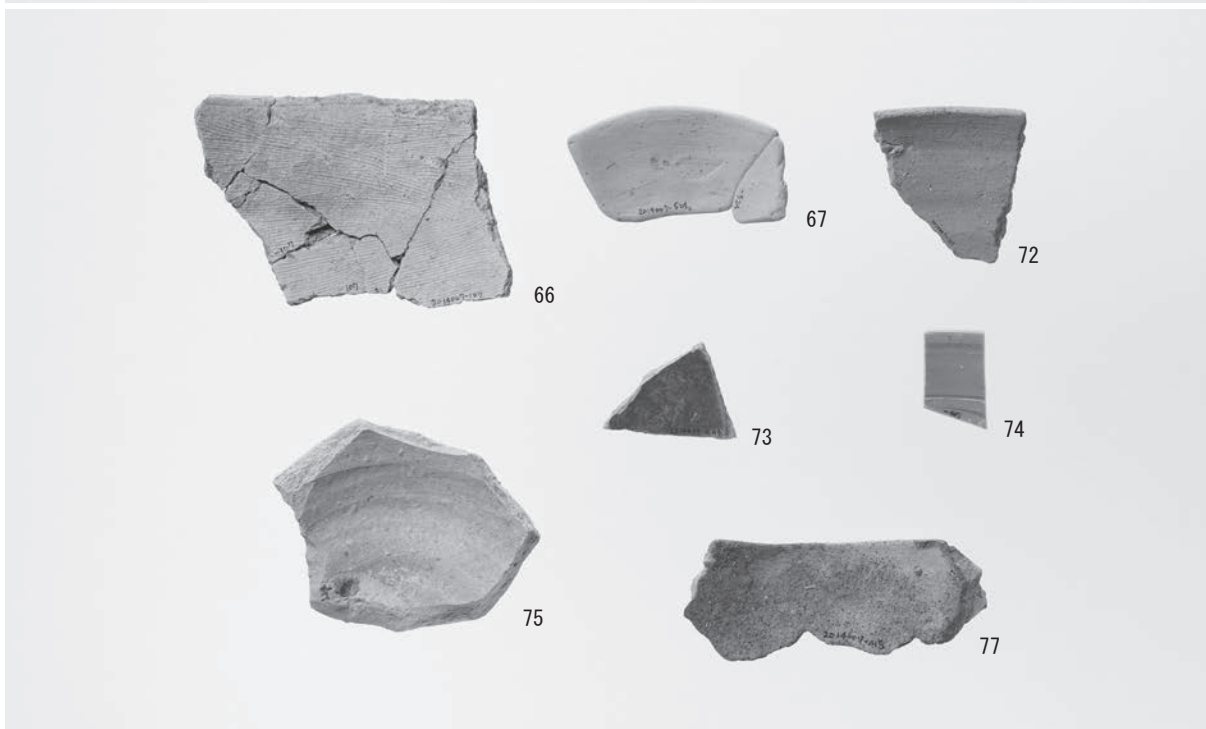
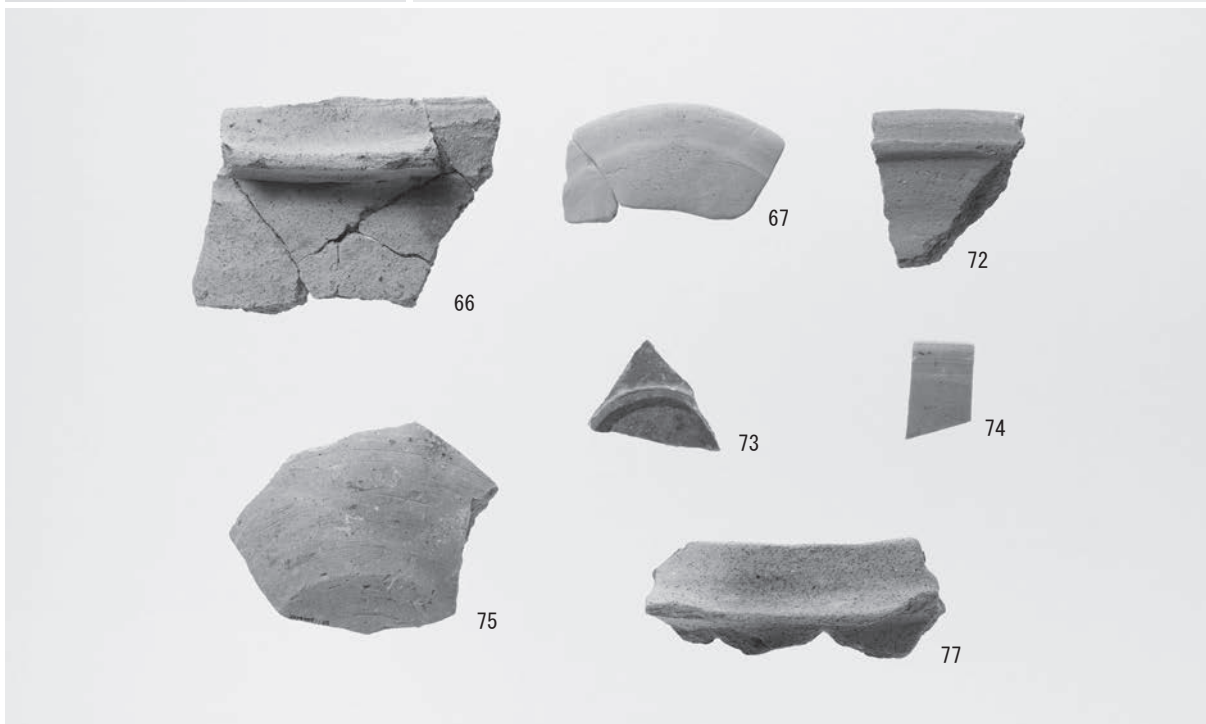


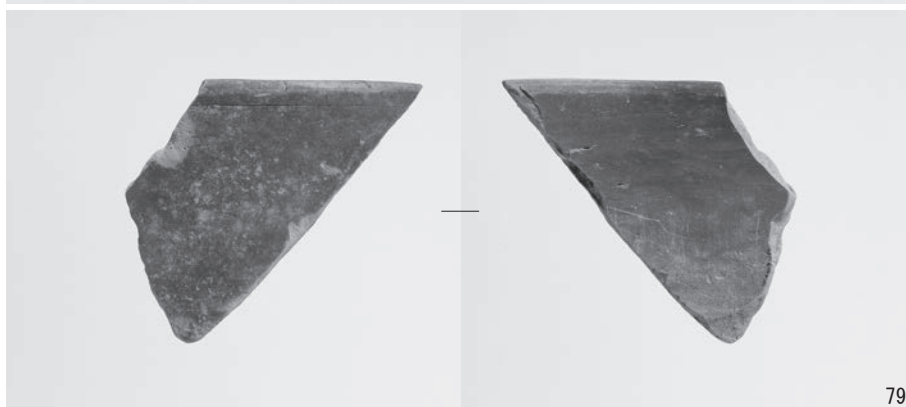
64



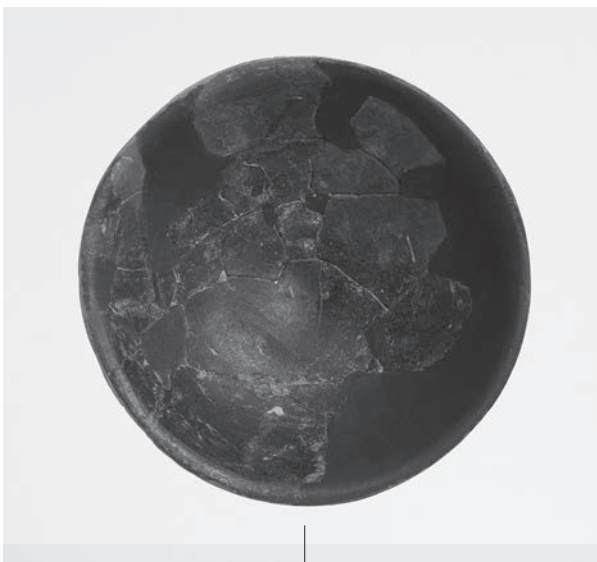
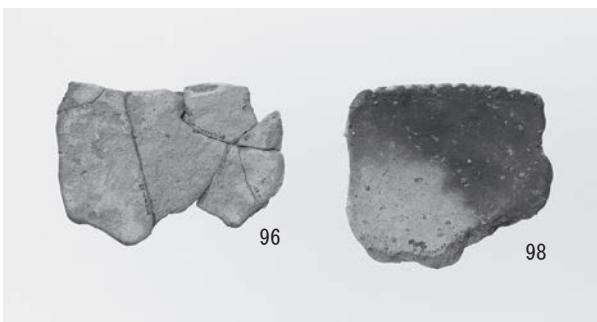
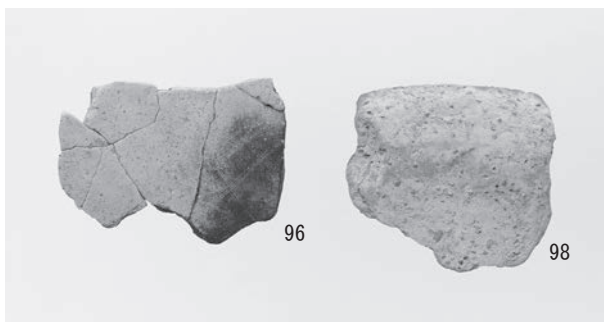
64

S X 1 出土土器 (6)





S D21・S D41 出土土器



包含層出土土器 (1)



105



106

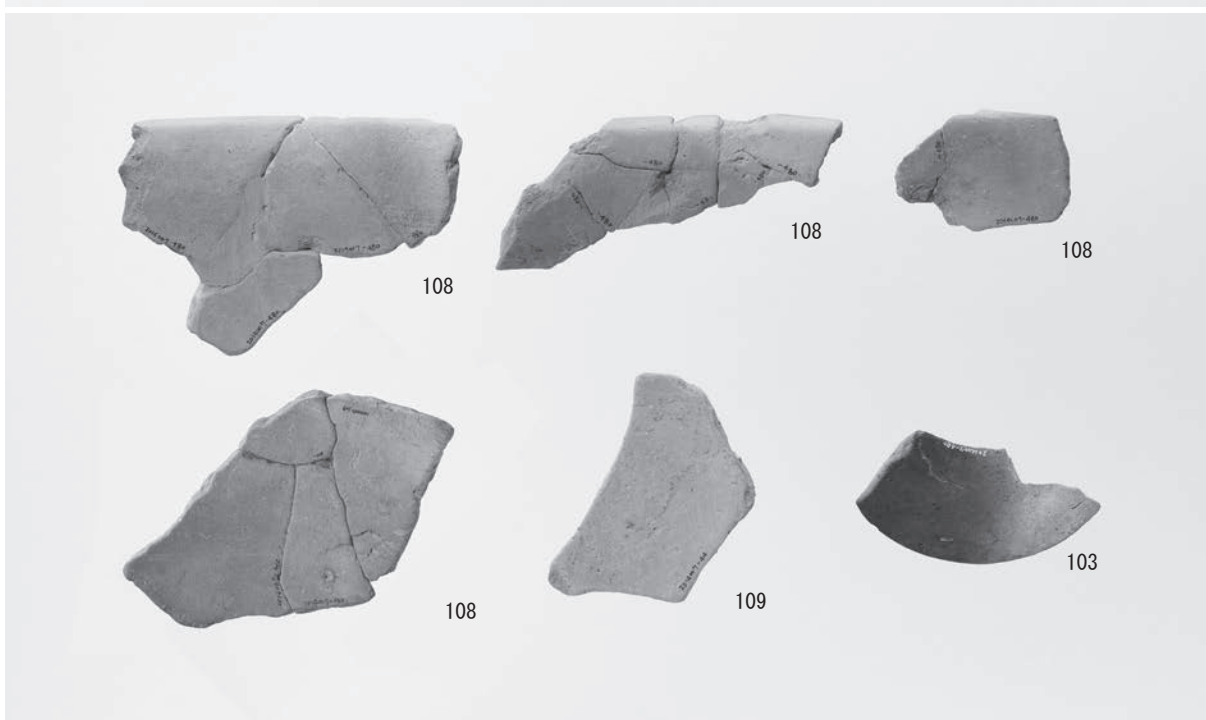
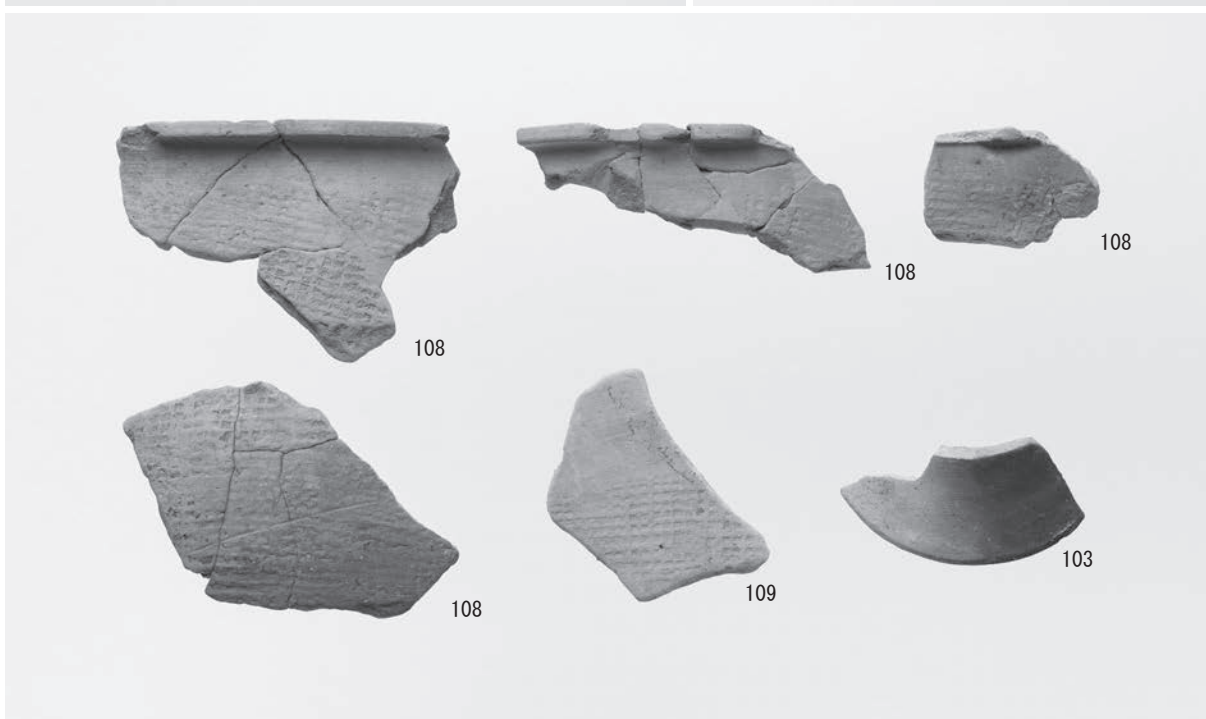


144

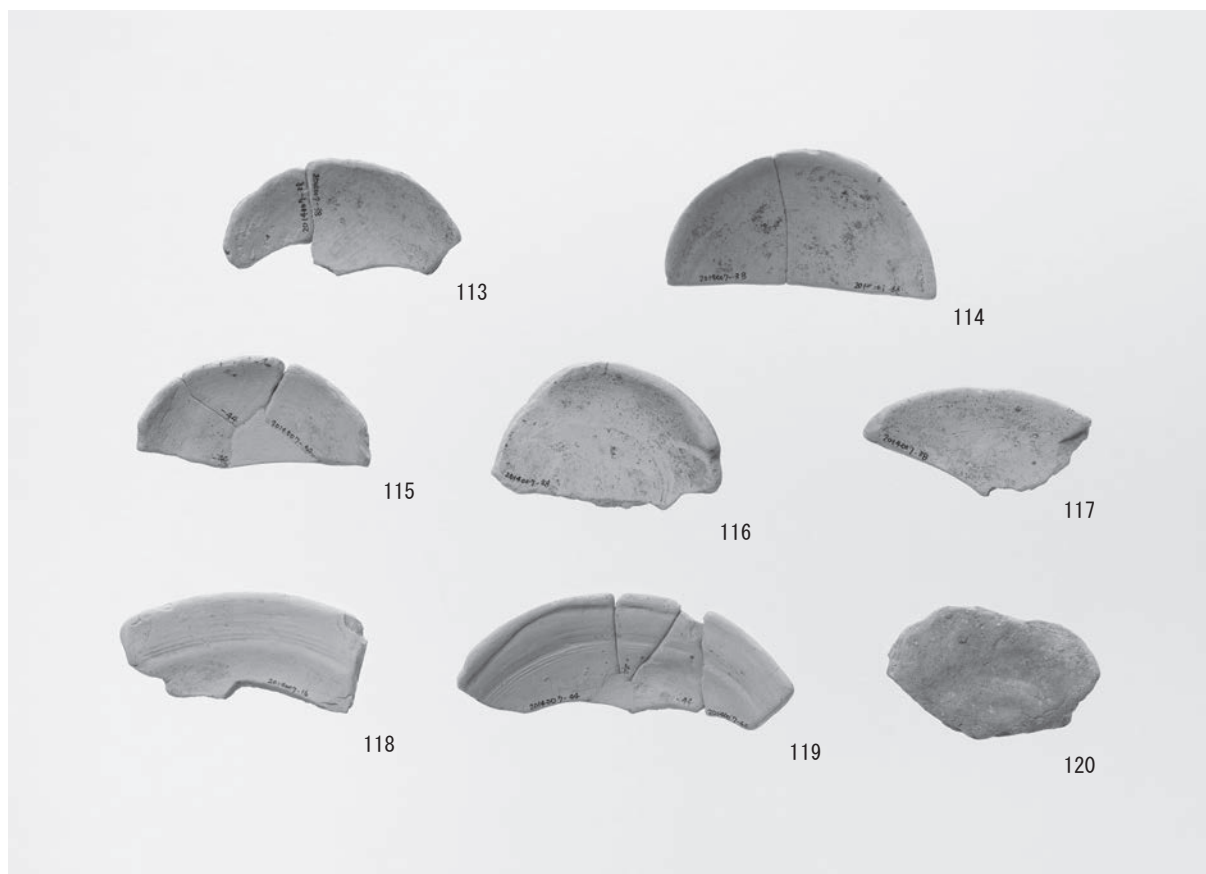
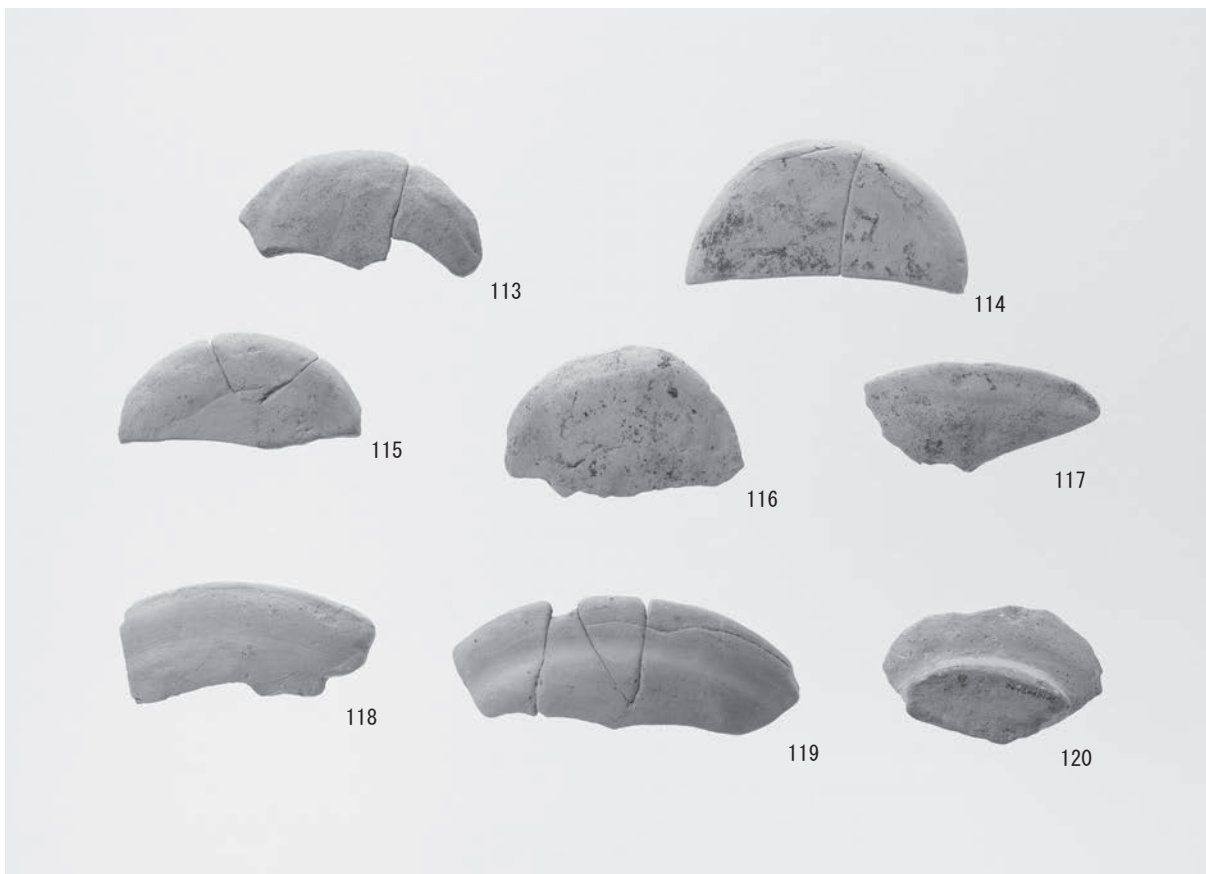


144

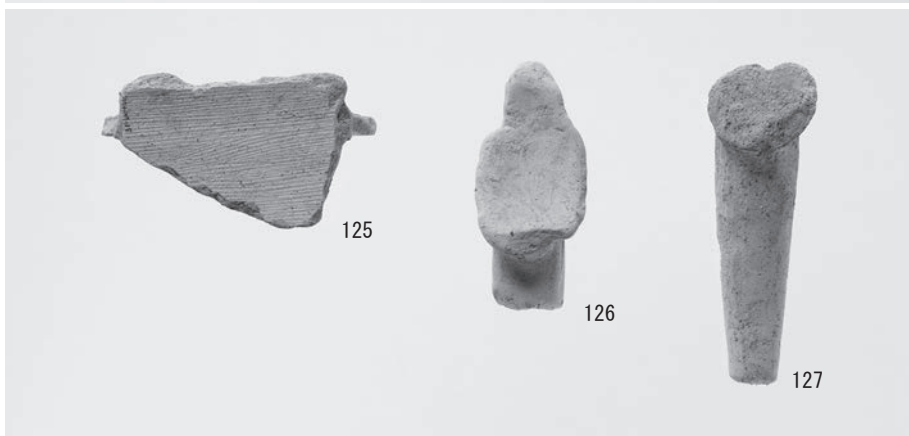
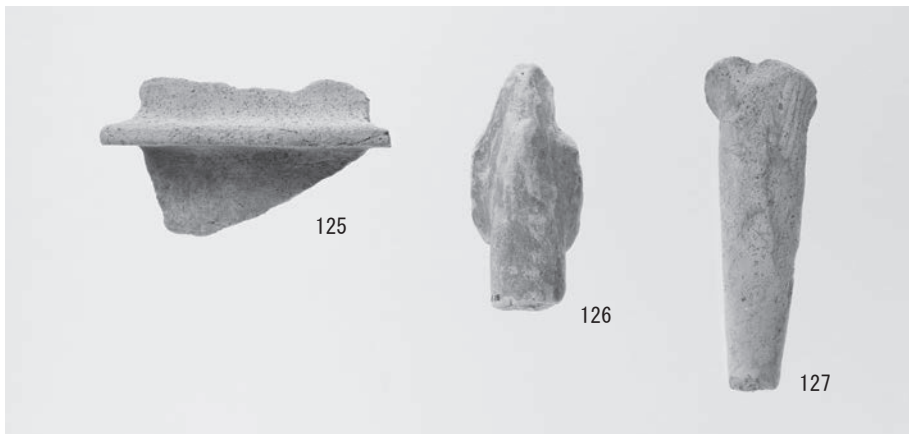
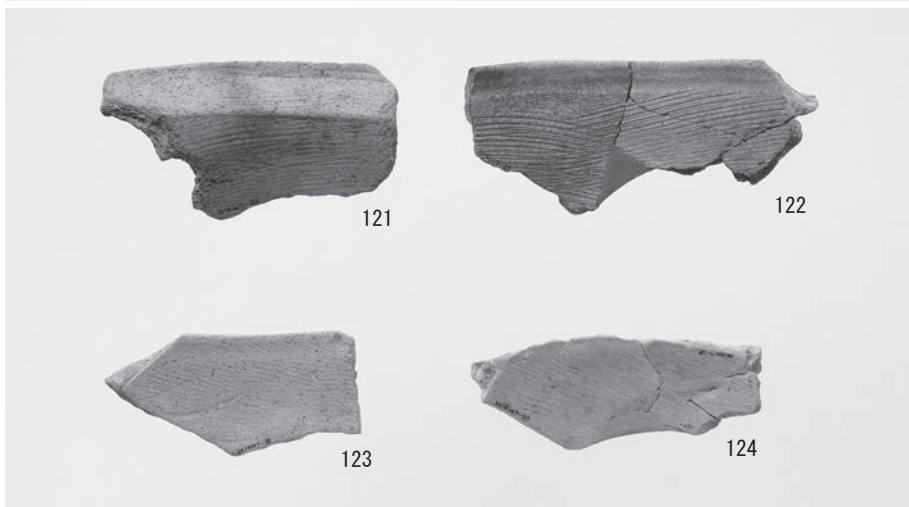
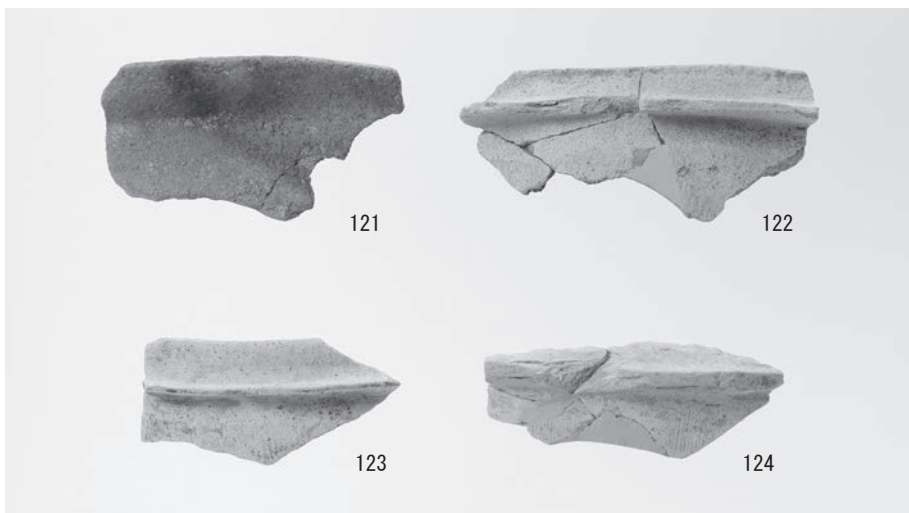
包含層出土土器 (2)



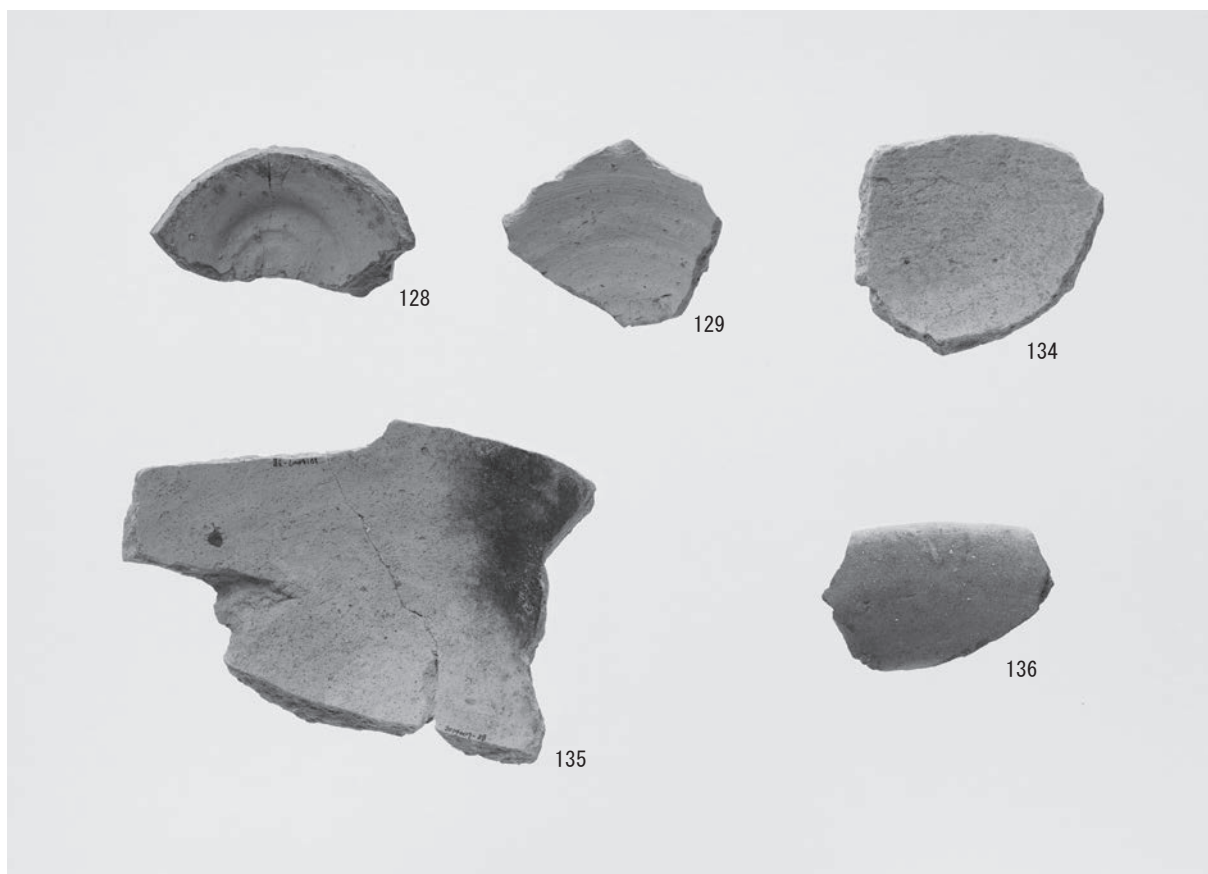
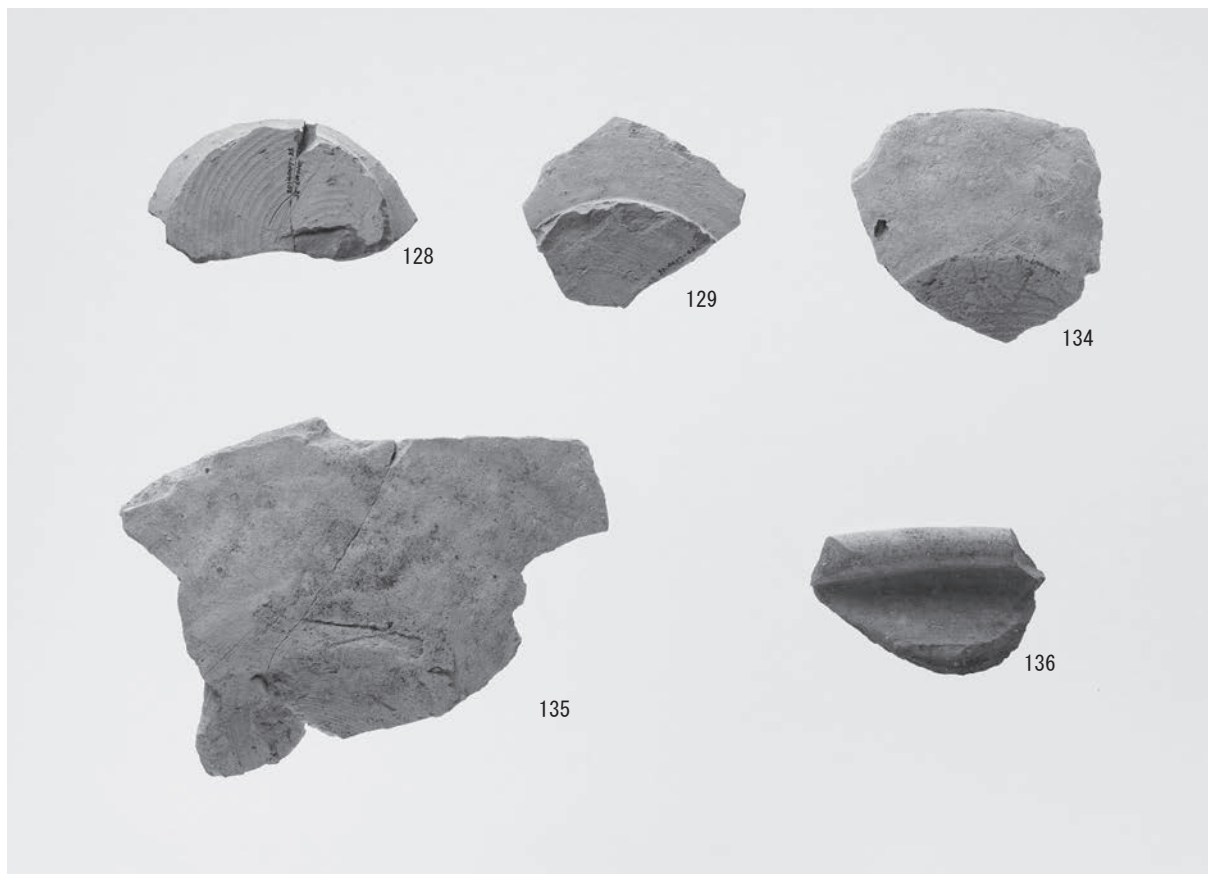
包含層出土土器 (3)



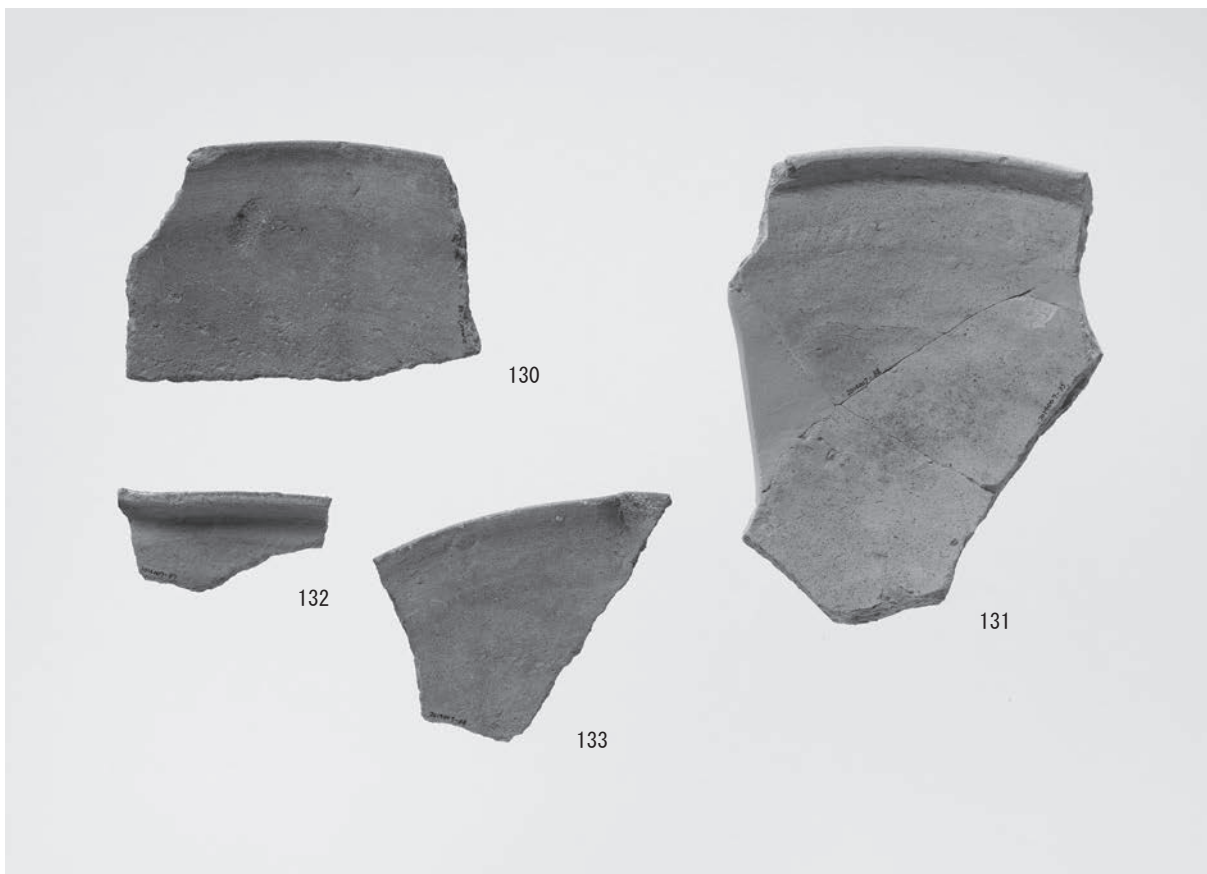
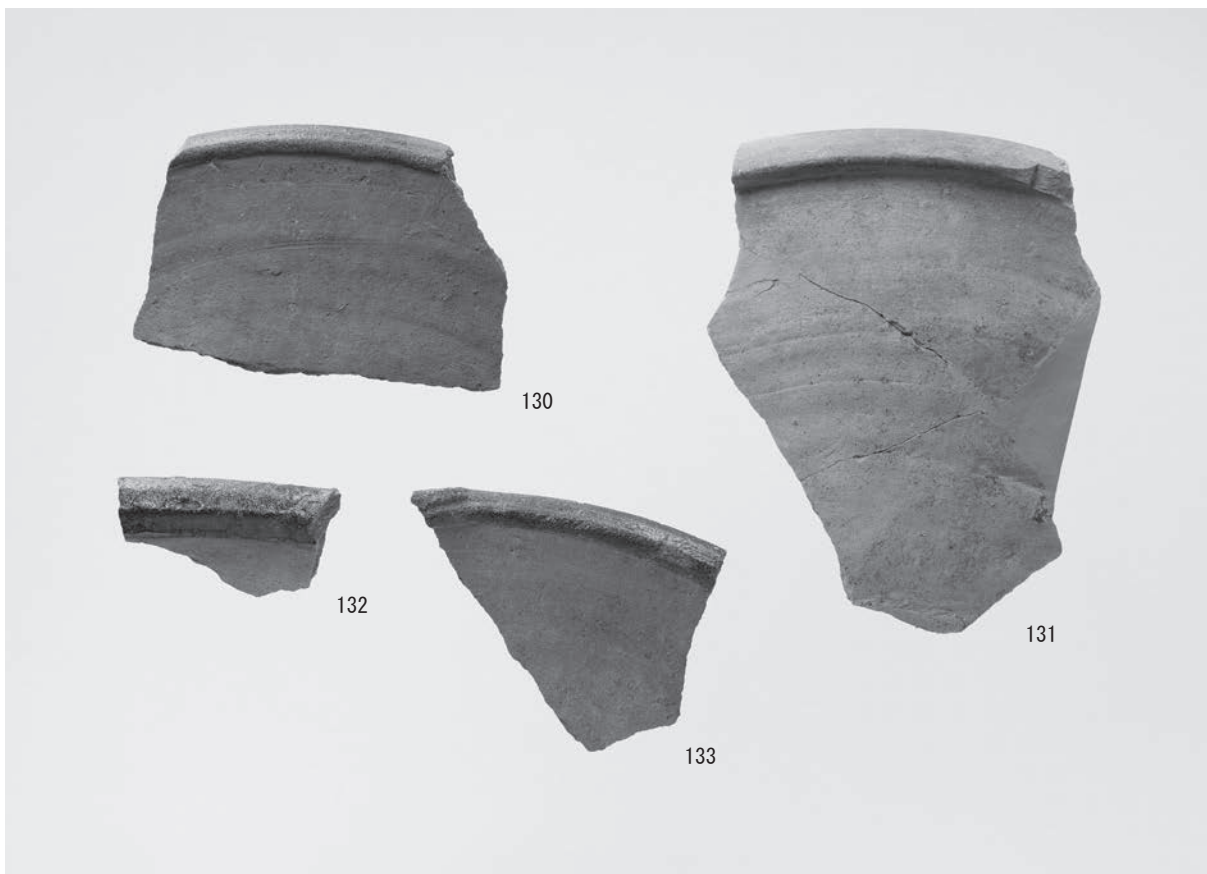
包含層出土土器 (4)



包含層出土土器 (5)



包含層出土土器 (6)



包含層出土土器 (7)

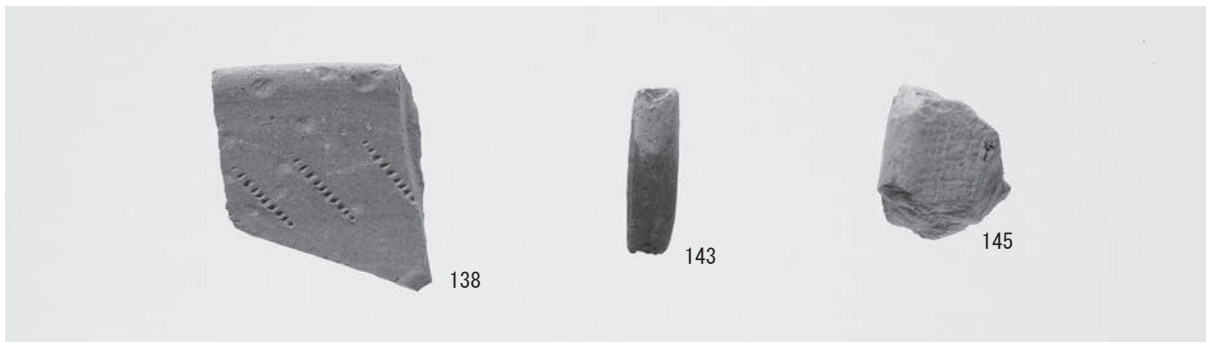
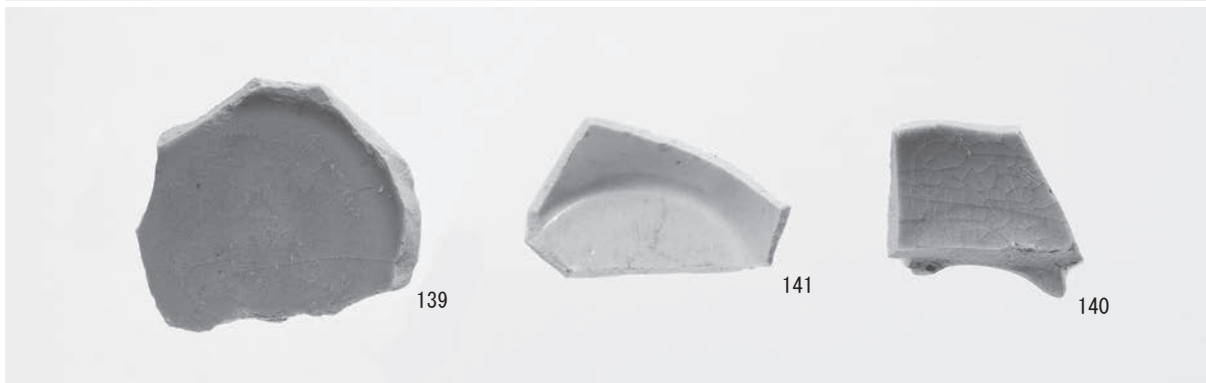
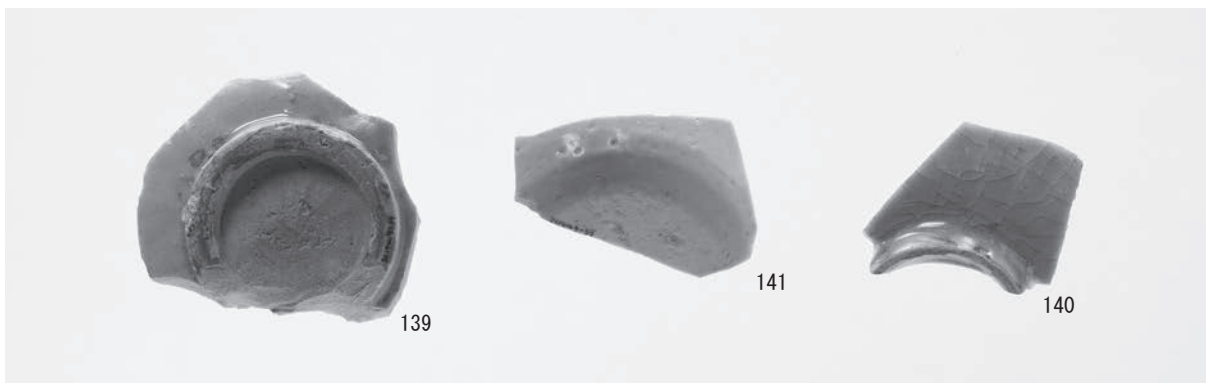


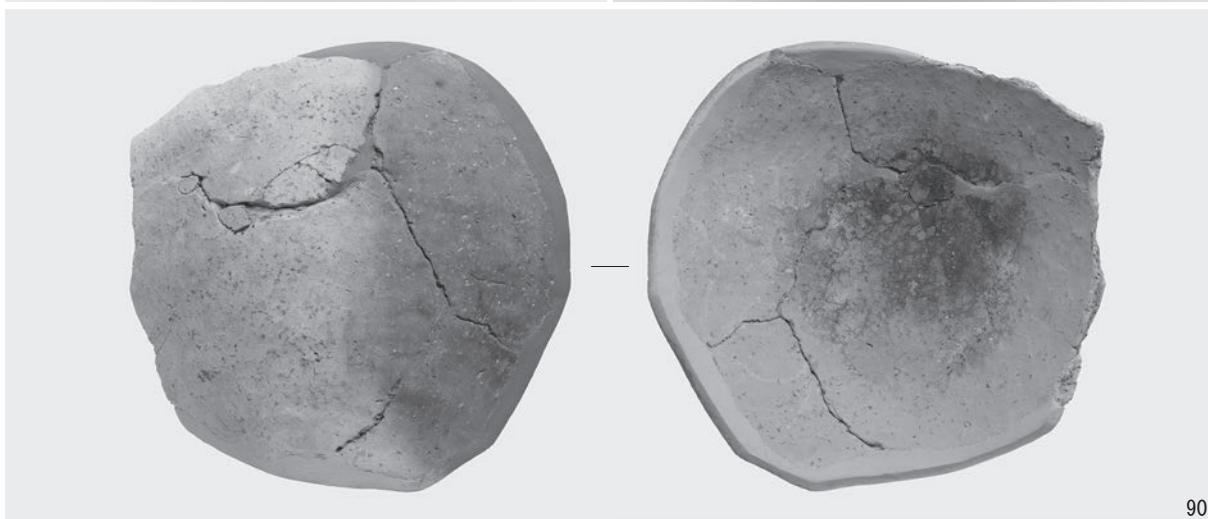
137



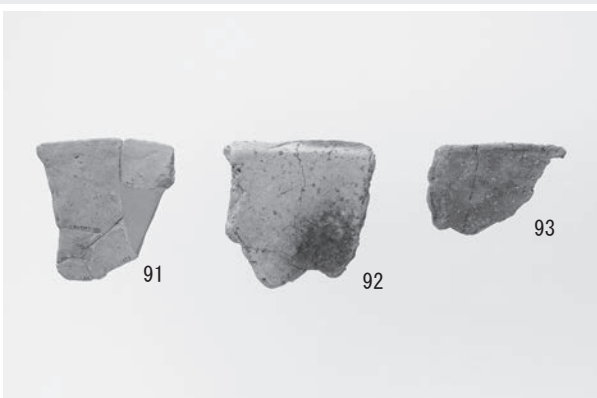
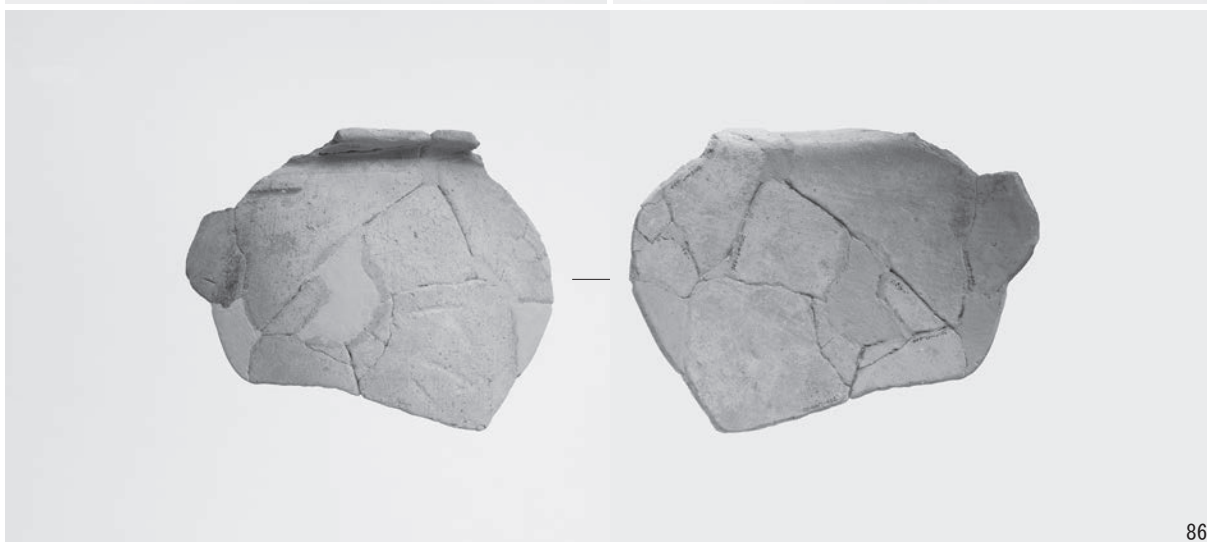
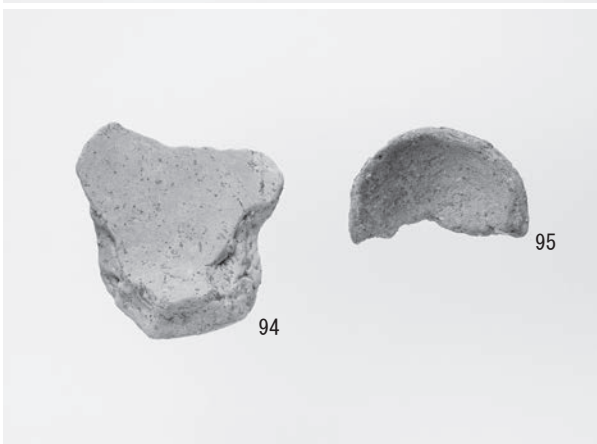
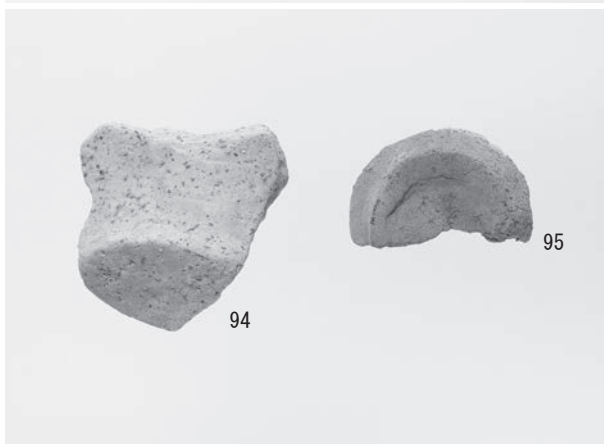
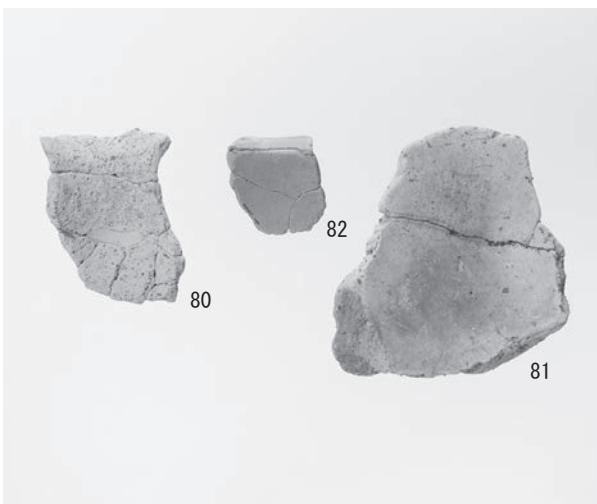
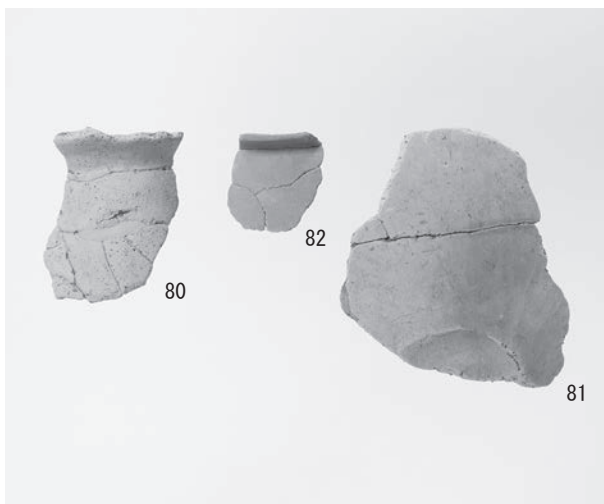
137

包含層出土土器 (8)

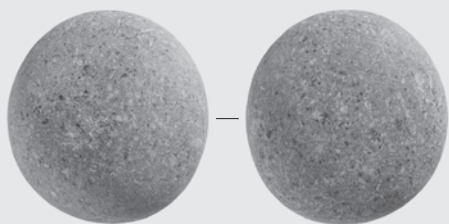




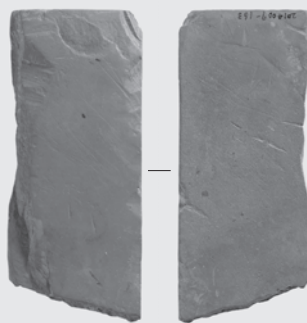
SK22・SK24・SK30・SK39、SP80 出土土器



SK22・SK24、SP151・SP199・SP208・SP245 出土土器



S 1



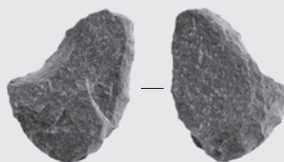
S 2



S 3



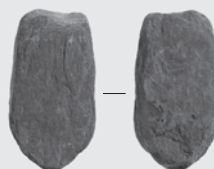
S 4



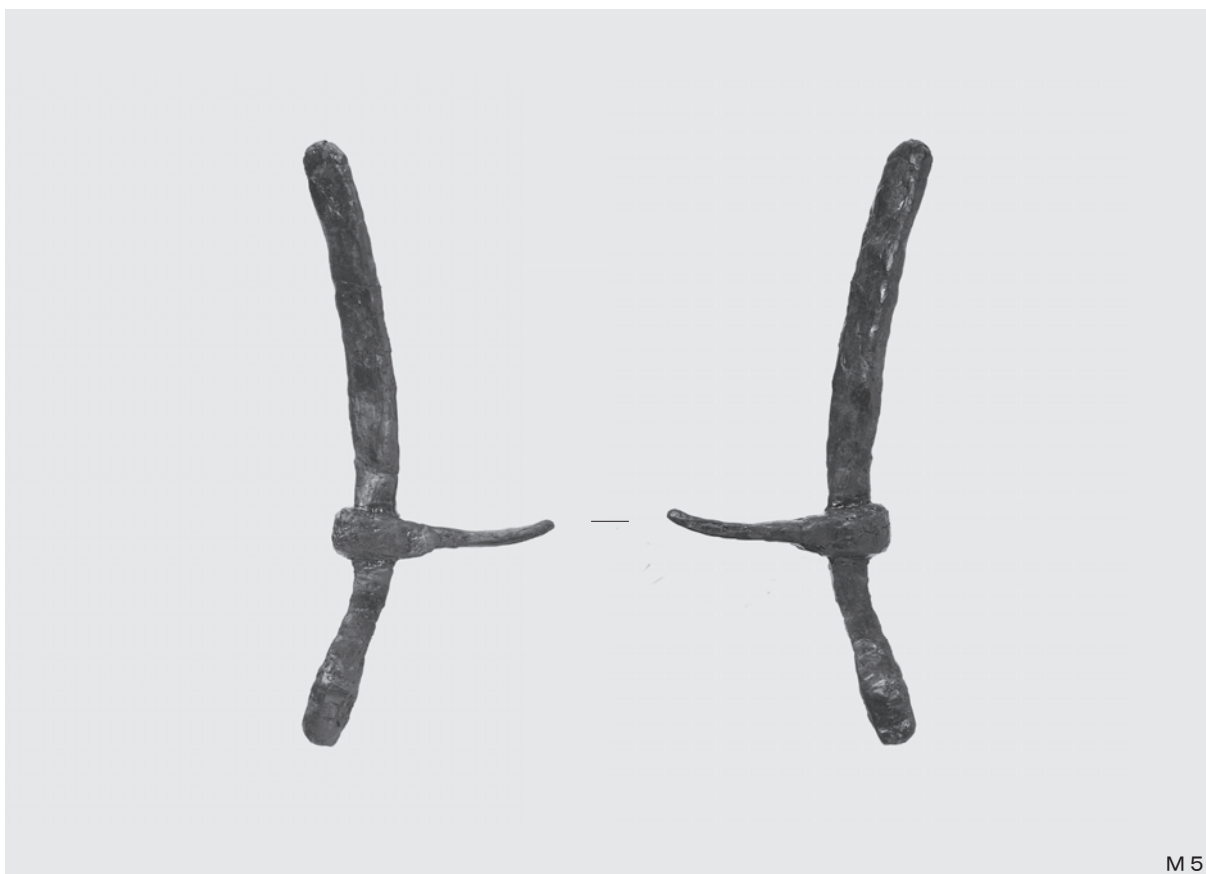
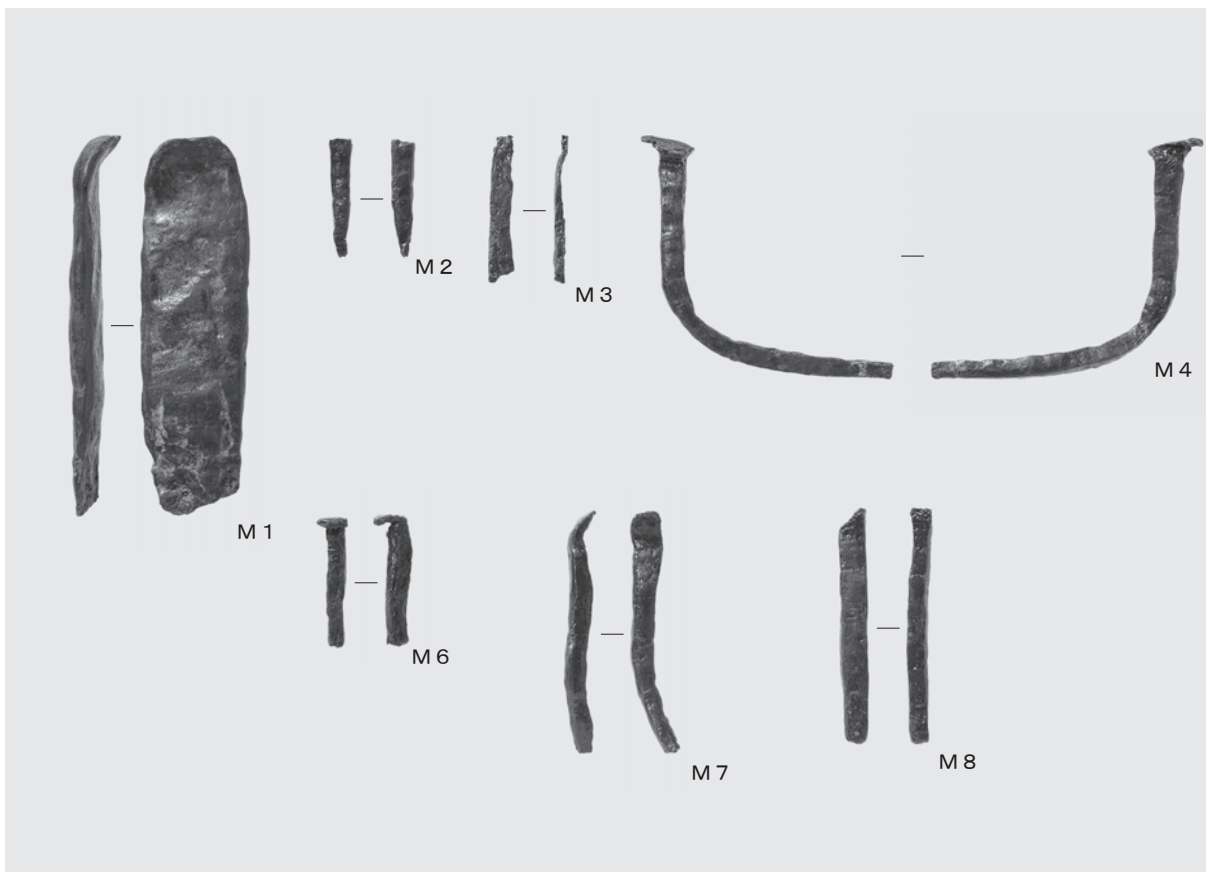
S 5



S 7

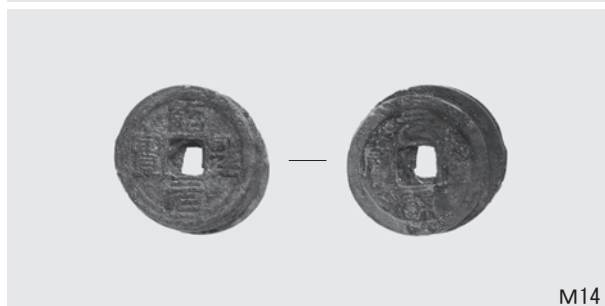
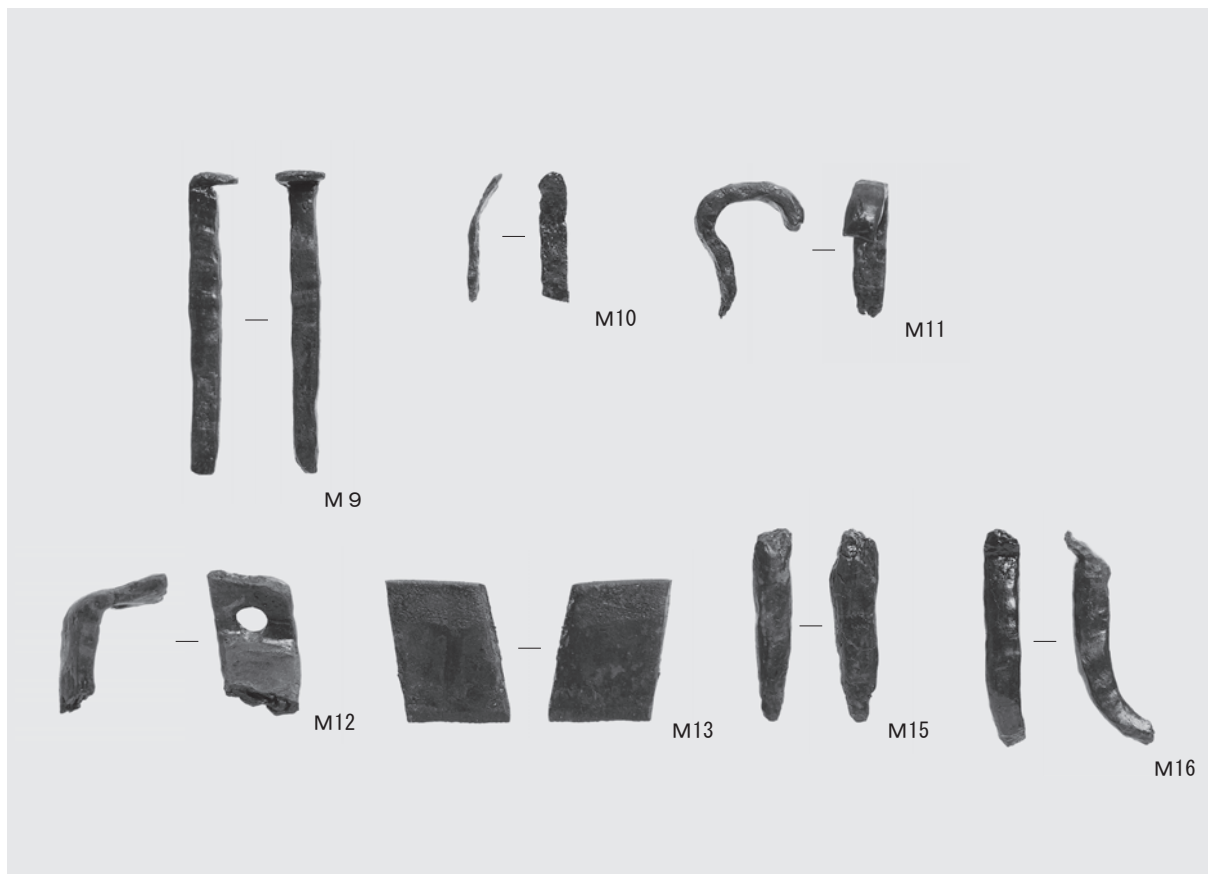


S 8



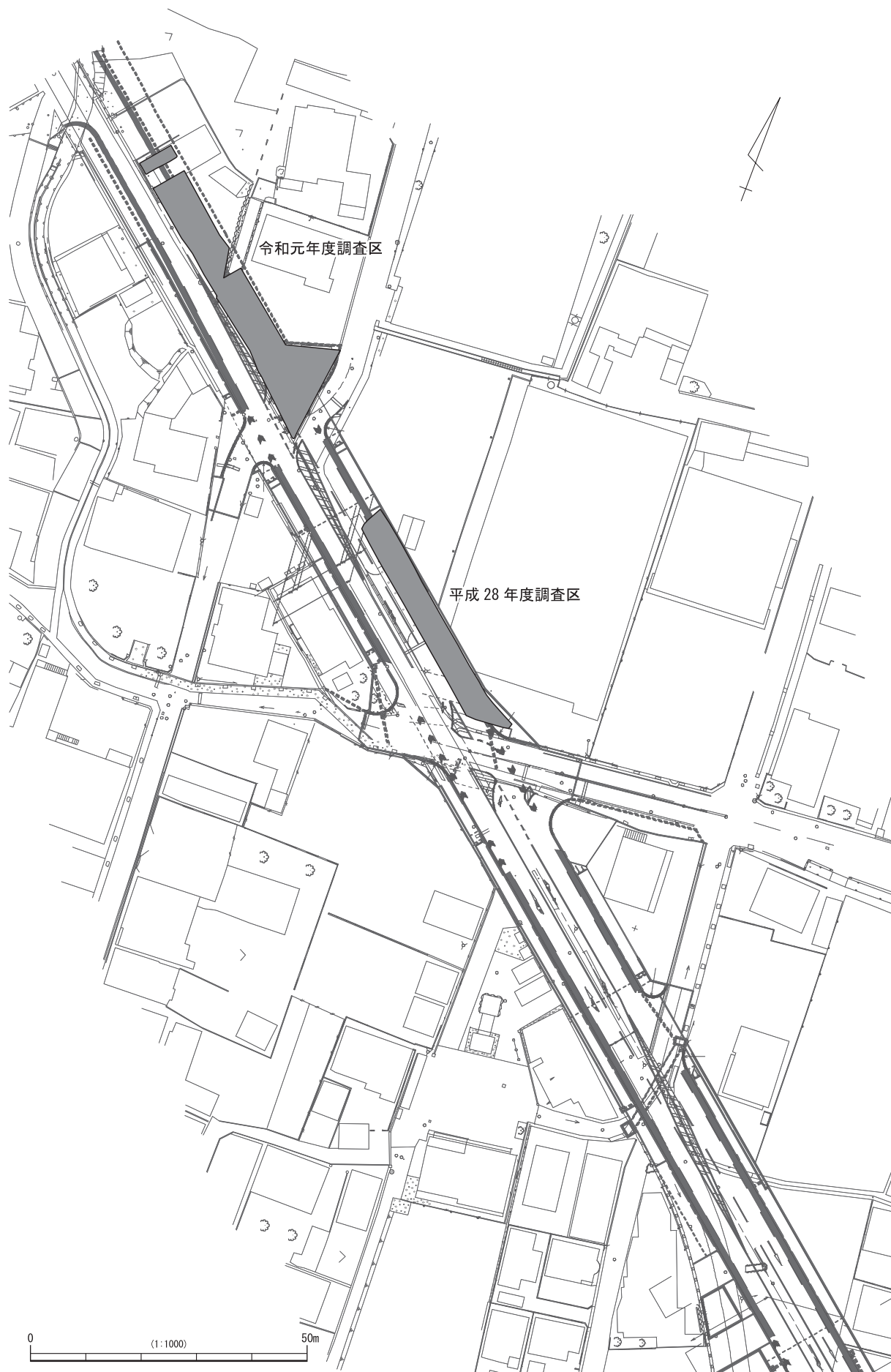
SD・SK・SP・SX出土金属器

M5

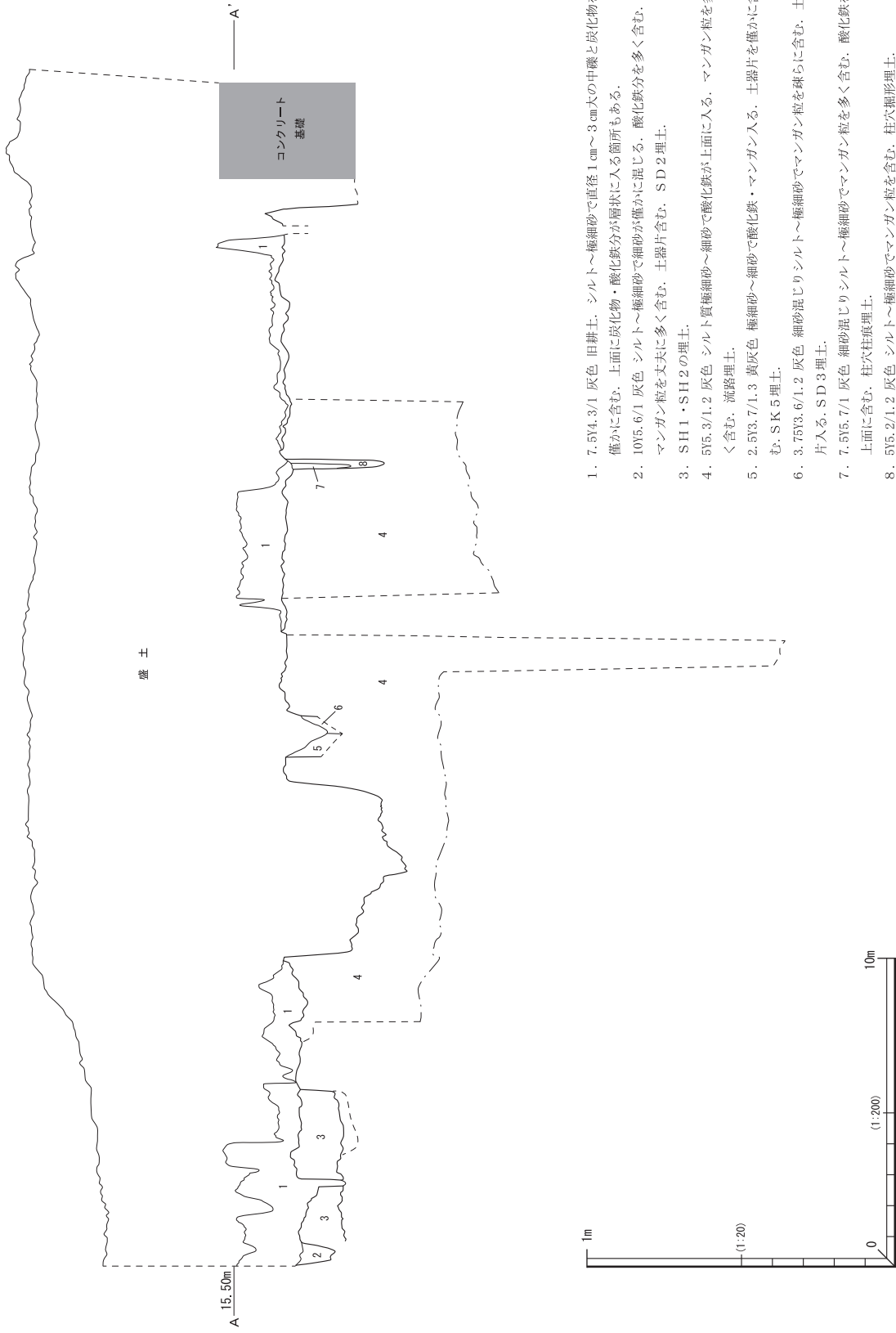


城山遺跡

図版

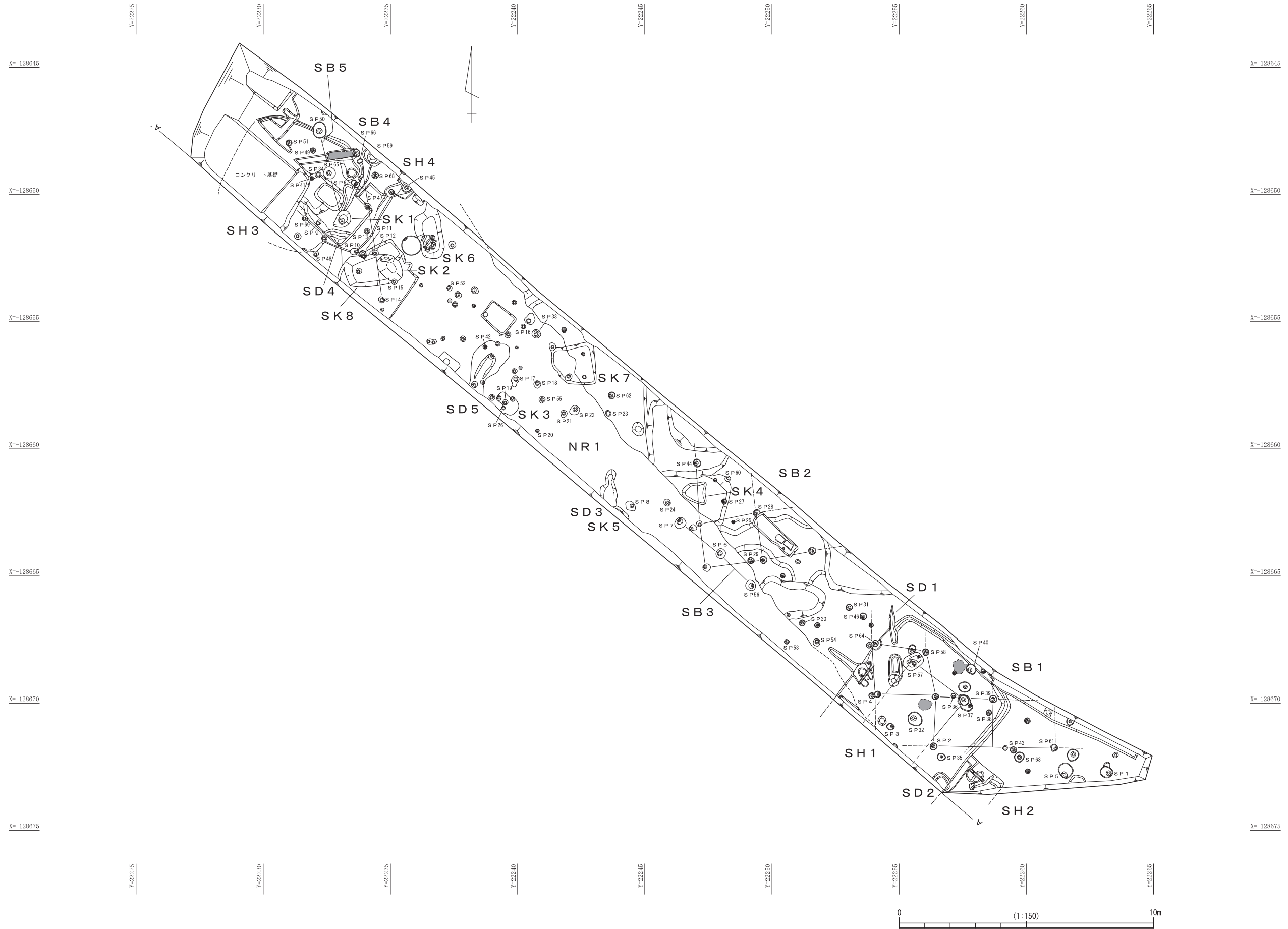


調査区の位置

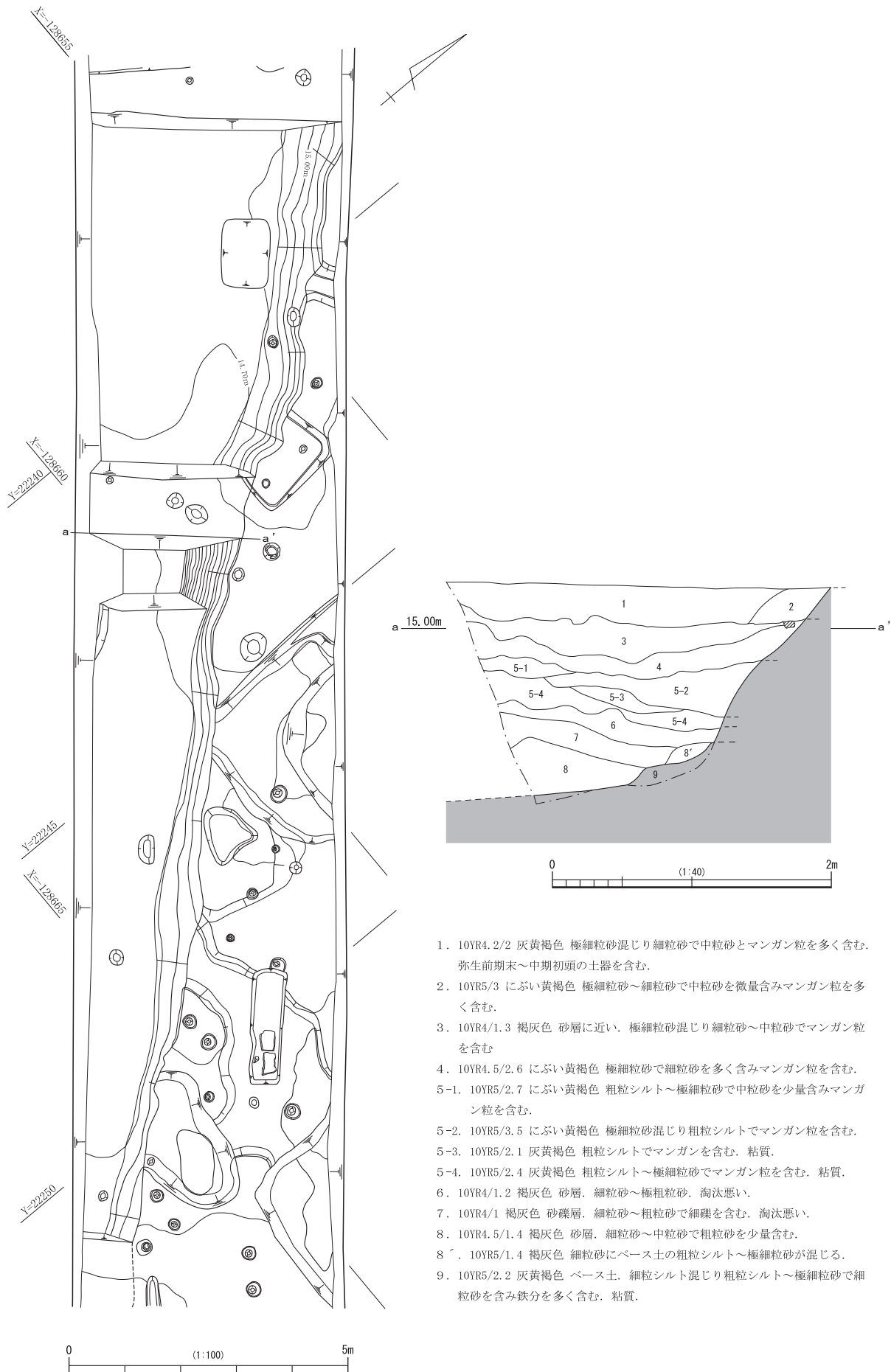


1. 7.5Y4.3/1 灰色 旧耕土。シルト～極細砂で直径1cm～3cm大の中礫と炭化物を備かに含む。上面に炭化物・酸化鉄分が層状に入る箇所もある。
2. 10Y5.6/1 灰色 シルト～極細砂で細砂が僅かに混じる。酸化鉄分を多く含む。マンガン粒を丈夫に多く含む。土器片含む。SD2埋土。
3. SH1・SH2の埋土。
4. 5Y5.3/1.2 灰色 シルト質極細砂～細砂で酸化鉄が上面に入る。マンガン粒を多く含む。流路埋土。
5. 2.5Y3.7/1.3 黄灰色 極細砂～細砂で酸化鉄・マンガン入る。土器片を僅かに含む。SK5埋土。
6. 3.75Y3.6/1.2 灰色 細砂混じりシルト～極細砂でマンガン粒を練らに含む。土器片入る。SD3埋土。
7. 7.5Y5.7/1 灰色 細砂混じりシルト～極細砂でマンガン粒を多く含む。酸化鉄を上面に含む。柱穴柱痕埋土。
8. 5Y5.2/1.2 灰色 シルト～極細砂でマンガン粒を含む。柱穴楕形埋土。

調査区南西壁土層断面



上層・下層全体図



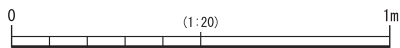
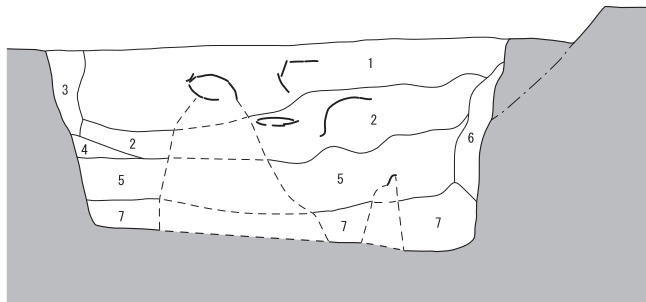
1. 10YR4.2/2 灰黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂とマンガン粒を多く含む。弥生前期末～中期初頭の土器を含む。
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂を微量含みマンガン粒を多く含む。
3. 10YR4/1.3 褐灰色 砂層に近い。極細粒砂混じり細粒砂～中粒砂でマンガン粒を含む。
4. 10YR4.5/2.6 にぶい黄褐色 極細粒砂で細粒砂を多く含みマンガン粒を含む。
- 5-1. 10YR5/2.7 にぶい黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂を少量含みマンガン粒を含む。
- 5-2. 10YR5/3.5 にぶい黄褐色 極細粒砂混じり粗粒シルトでマンガン粒を含む。
- 5-3. 10YR5/2.1 灰黄褐色 粗粒シルトでマンガンを含む。粘質。
- 5-4. 10YR5/2.4 灰黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂でマンガン粒を含む。粘質。
6. 10YR4/1.2 褐灰色 砂層。細粒砂～極粗粒砂。淘汰悪い。
7. 10YR4/1 褐灰色 砂礫層。細粒砂～粗粒砂で細礫を含む。淘汰悪い。
8. 10YR4.5/1.4 褐灰色 砂層。細粒砂～中粒砂で粗粒砂を少量含む。
- 8' 10YR5/1.4 褐灰色 細粒砂にベース土の粗粒シルト～極細粒砂が混じる。
9. 10YR5/2.2 灰黄褐色 ベース土。細粒シルト混じり粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂を含み鉄分を多く含む。粘質。

NR1 平面・埋土土層断面

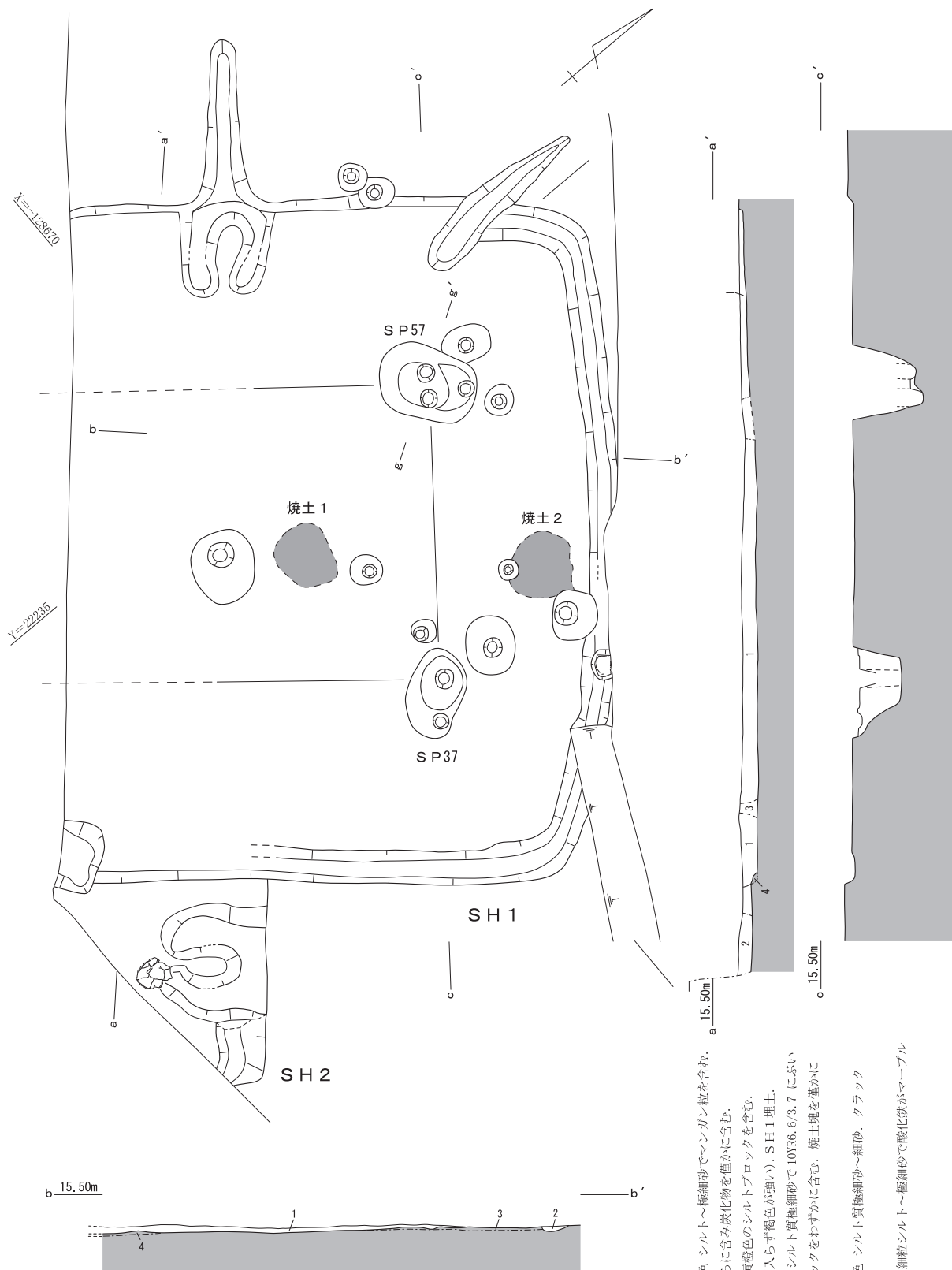


a 15.50m

—— a'



1. 10YR4/2 灰黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂を少量含みマンガン粒を多く含む。土器を含む。
2. 10YR4/1.8 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂・マンガン粒を多く含む。土器を多く含む。
3. 10YR5/2 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂を微量含みマンガン粒を含む。地山土が混じる。
4. 10YR4.5/1.4 褐灰色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂を微量含む。地山土と混じた層。
5. 10YR3.8/2 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂を微量含みマンガン粒を多く含む。土器を含む。
6. 10YR5/3.5 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂。地山と混じた層。
7. 10YR3.4/2 黒褐色 極細粒砂で細粒砂～中粒砂を少量含む。やや粘質。地山ブロックを含む。

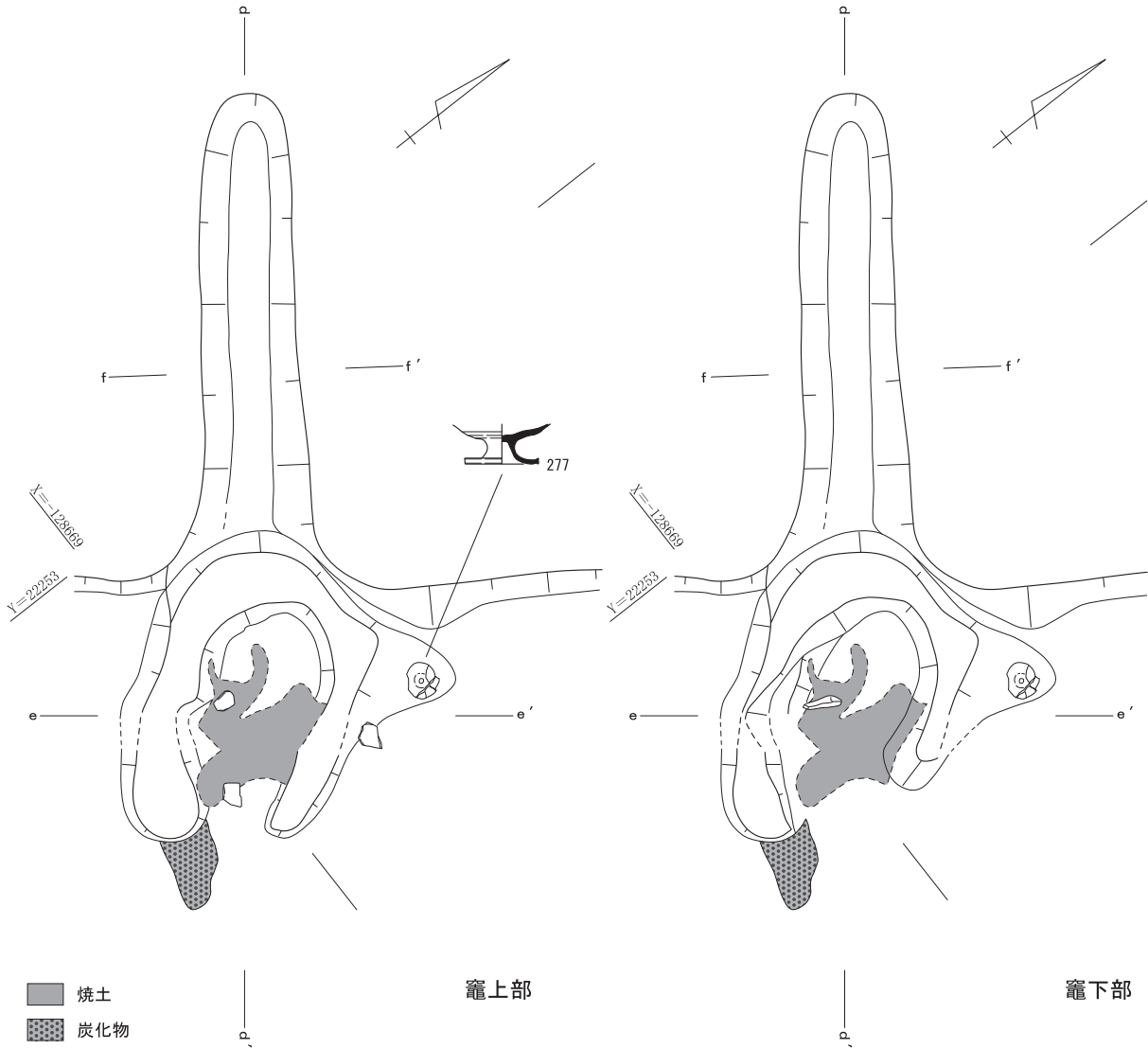


1. 10YR4.7/1.6 灰黄褐色 シルト～極細砂でマンガン粒を含む。土器片・焼土塊を疎らに含み炭化物を僅かに含む。10YR6.2/3.4 にぶい黄橙色のシルトブロックを含む。(上面はブロックほぼ入らず褐色が強い)。SH 1 埋土。
2. 10YR5.2/1.3 褐灰色 細粒シルト～極細砂でマンガン粒を疎らに含み焼土塊をわずかに含む。10YR7/3.4 にぶい黄橙色のシルトブロックを含む。やや土壌化。
3. 10YR6.3/2.3 灰黄褐色 シルト～極細砂でマンガン粒を含み酸化鉄が多く入る。地山か。
4. 2.5Y5.3/1.4 黄灰色 シルト～極細砂で酸化鉄が入る。砂質強い。地山。

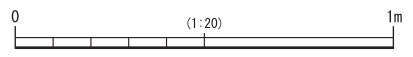
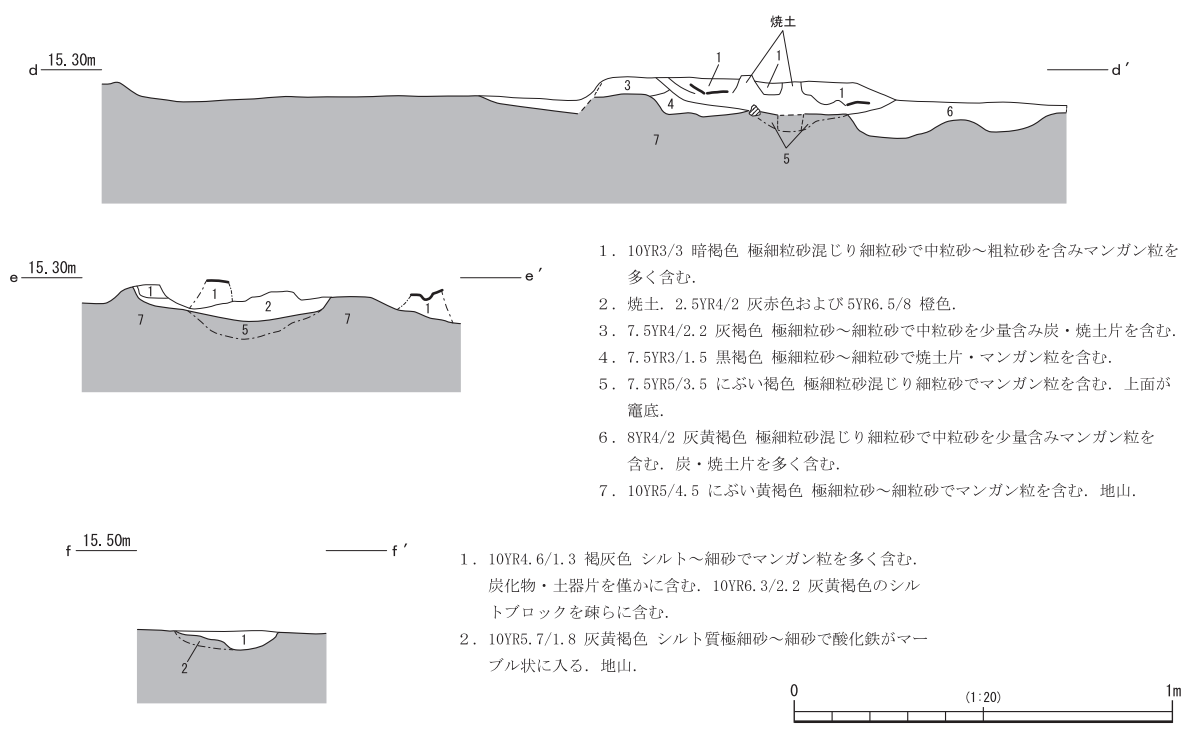
1. 10YR4.7/1.6 灰黄褐色 シルト～極細砂でマンガン粒を含む。土器片・焼土塊を疎らに含み炭化物を僅かに含む。10YR6.2/3.4 にぶい黄褐色のシルトブロックを含む。(上面はブロックほぼ入らず褐色が強い)。SH 1 埋土。
2. 10YR5.3/1.3 褐灰色 シルト質極細砂で10YR6.6/3.7 にぶい黄褐色のシルトブロックをわずかに含む。焼土塊を僅かに含む。SH 2 埋土。
3. 2.5Y5.2/1.8 暗灰黄色 シルト質極細砂～細砂。クラックへの貫入か。
4. 2.5Y4.8/2 暗灰黄色 細粒シルト～極細砂で酸化鉄がマーブル状に入る。地山。

SH 1・SH 2

城山遺跡
平成二十八年 度

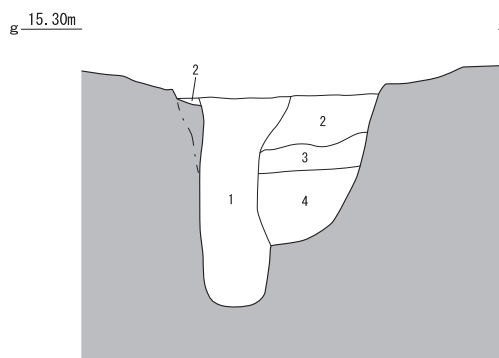


■ 焼土
■ 炭化物



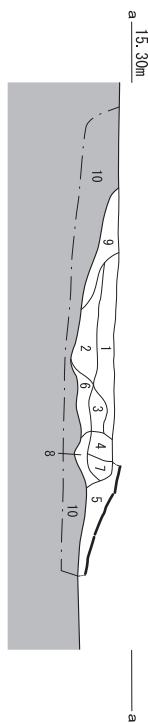
SH1 竈

SP57

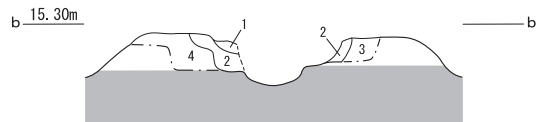
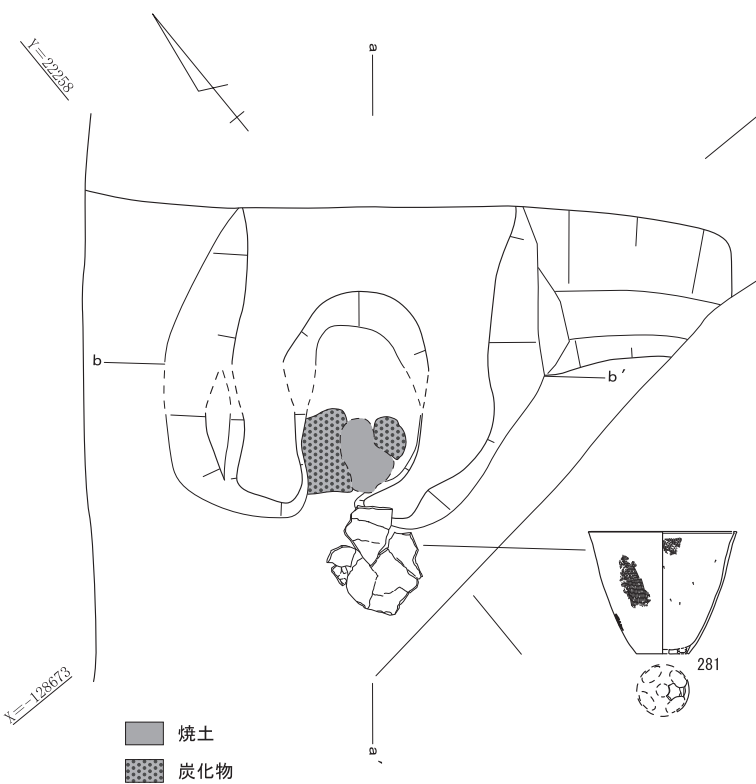


1. 10YR4.2/1.2 褐灰色 細粒シルト～極細砂で明黄褐色を上部にブロック状に含む。
2. 10YR4/1.7 灰黄褐色 シルト～極細砂で明黄褐色をブロック状に含む。炭化物を含む。
3. 2.5Y4.6/1.3 黄灰色 細粒シルトで明黄褐色ブロックを多く含む。やや粘質。
4. 10YR4.3/1.5 褐灰色 シルト～極細砂。粘性弱い。

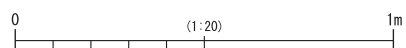
SH2竈

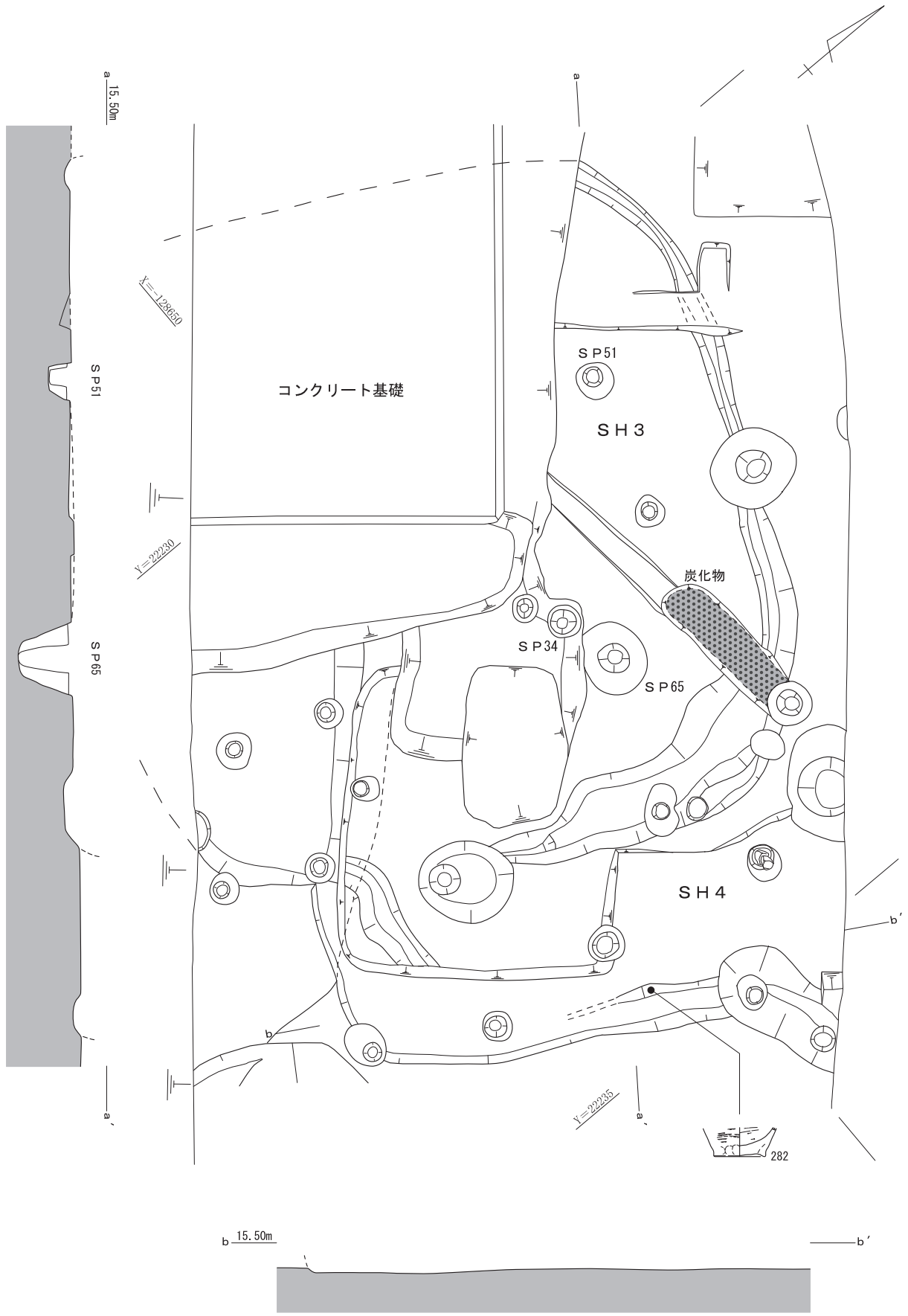


1. 10YR5/2.4 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂とマンガン粒を含む。
2. 10YR4/2.8 にぶい黄褐色 細粒砂～中粒砂でマンガン粒・鉄分を含む。砂質。
3. 7.5YR4/2 灰褐色 細粒砂で中粒砂～粗粒砂を含む。焼土片・マンガン粒・鉄分を含む。
4. 5YR5/7 明赤褐色 極細粒砂混じり細粒砂で鉄分・マンガン粒を含む。竈壁。
5. 10YR4/2 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂を微量含みマンガン粒を多く含む。
6. 5YR4.6/8 明赤褐色 極細粒砂～細粒砂。燃焼部底で上面が焼土面。
7. 4層と同じ。落下竈壁。
8. 7.5YR3/1.5 黒褐色 極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を含む。落焼後の堆積。
9. 7.5YR2.4/1 黒色 極細粒砂～細粒砂で炭・マンガン粒を含む。
10. 10YR5/4.5 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を含む。地山。

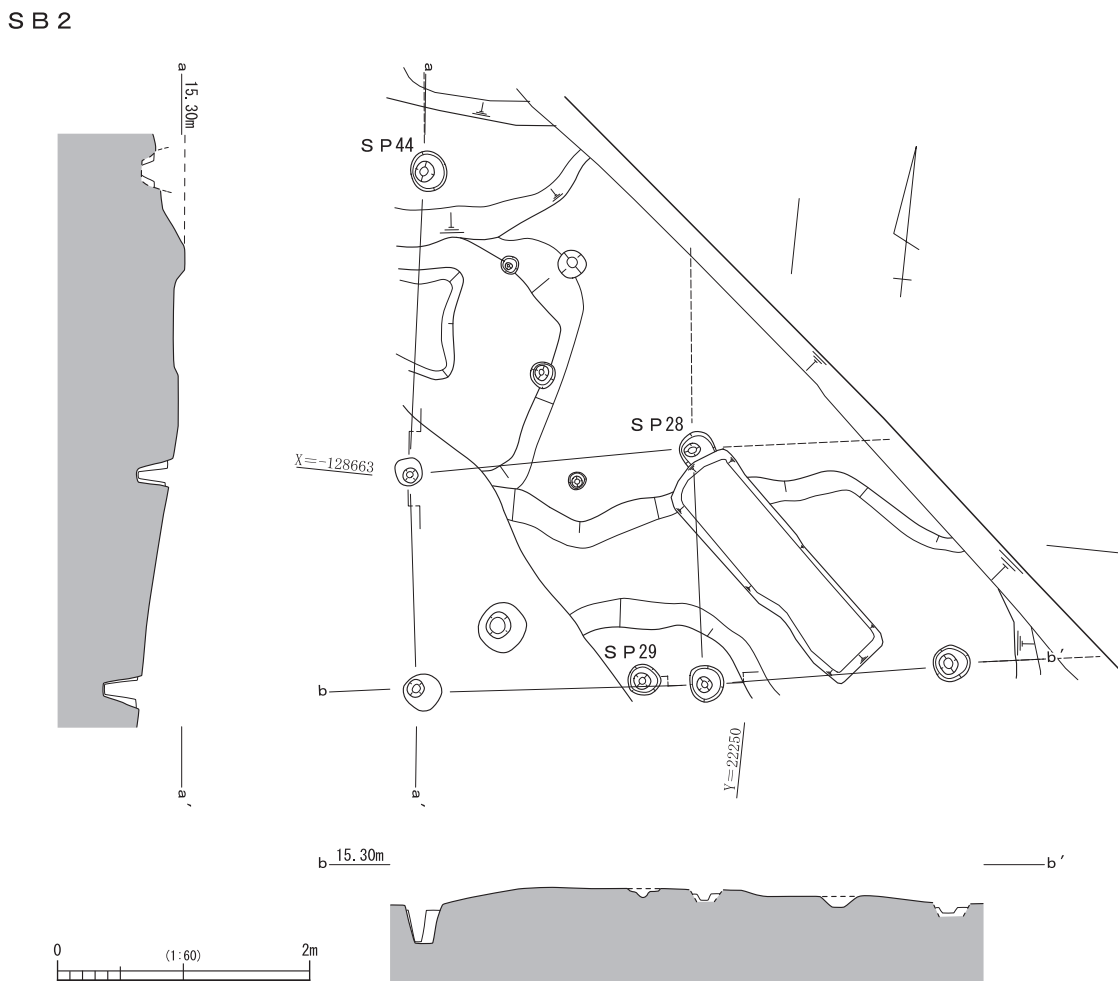
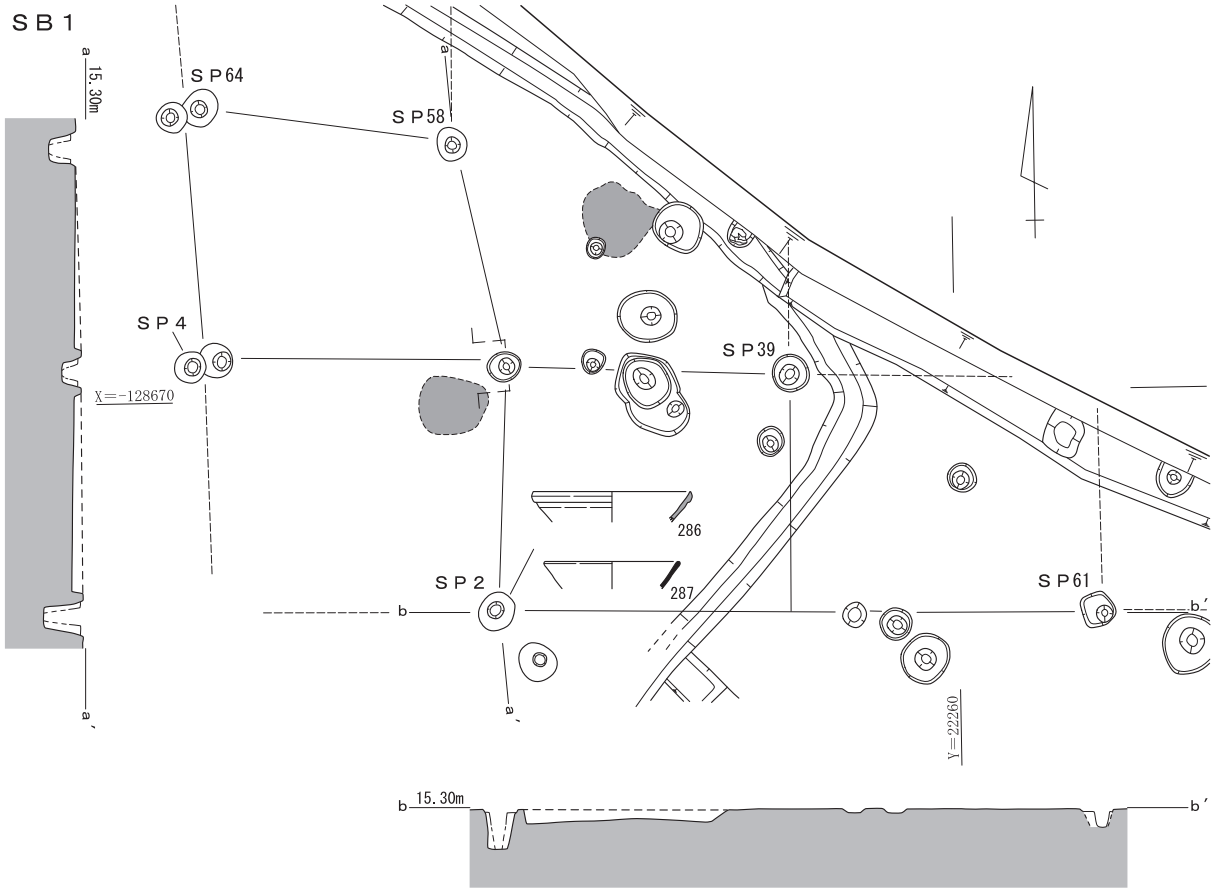


1. 5YR4.5/5.2 明赤褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂を含む。落下竈壁。
2. 7.5YR4/1.3 褐灰色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂・マンガン粒を含む。
3. 5YR4.4/6 赤褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂・マンガン粒を含む。
4. 10YR5.4/4 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂を少量含みマンガン粒を含む。竈本体。

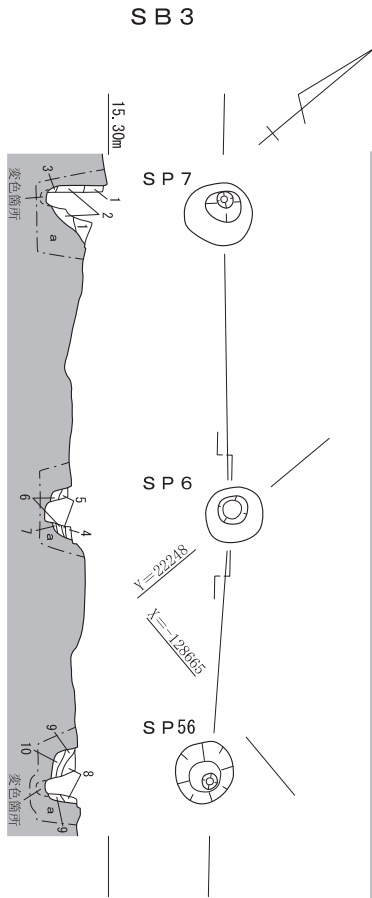




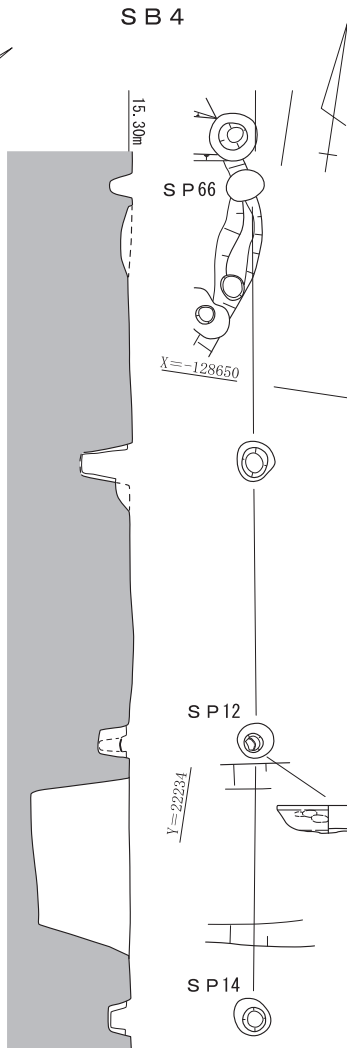
SH3・SH4



SB 1・SB 2

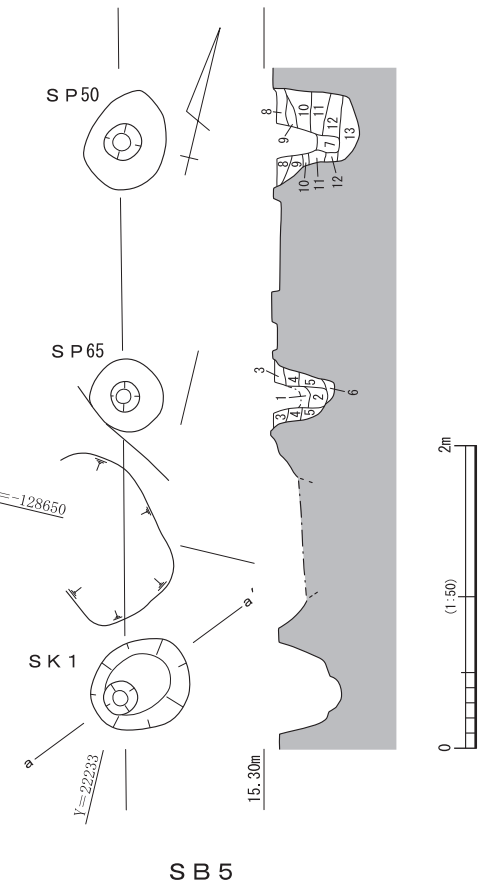


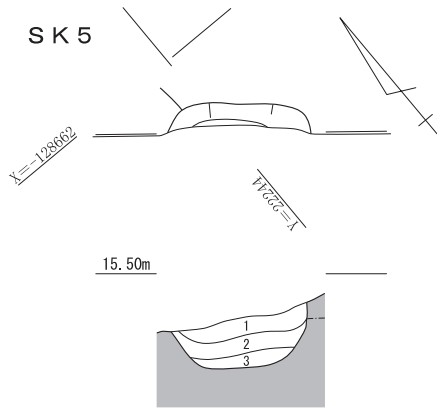
- SB3**
1. 10YR3.7/1.8 灰黄褐色 シルト～極細砂で10YR6.3/2.5 灰黄褐色のシルトがブロック状に入る。
 2. 10YR5.2/3 灰黄褐色 シルト混じり極細砂～細砂でマンガン粒を疎らに含む。
 3. 2.5Y5.3/1.6 暗灰黄色 シルト～極細砂でやや粘質。
 4. 10YR4.3/1.4 褐灰色 シルト～極細砂で土器片を含む。
 5. 10YR4.7/2.3 灰黄褐色 シルトでやや粘質。
 6. 10YR3.6/2.7 にぶい黄褐色 極細砂混じりシルトで2.5Y7/1 灰白色シルトがブロック状に入る。
 7. 10YR3.4/3.3 暗褐色 細粒シルトでやや粘質。
 8. 10YR5.2/2.3 灰黄褐色 シルト～極細砂で10YR6.2 灰黄褐色の極細砂～細砂がブロック状に入る。土器片を含む。
 9. 10YR5.3/1.7 灰黄褐色 シルト混じり極細砂～細砂で10YR4/1 褐色のシルトブロックが疎らに入る。
 10. 10YR4.2/2.4 灰黄褐色 シルトでやや粘質。
- a. 2.5Y5.6/1.7 灰黄色 細粒シルト～細砂でマンガン粒を含む。砂質強い、柱状の下は5Y7/1.5 灰白色に変色。



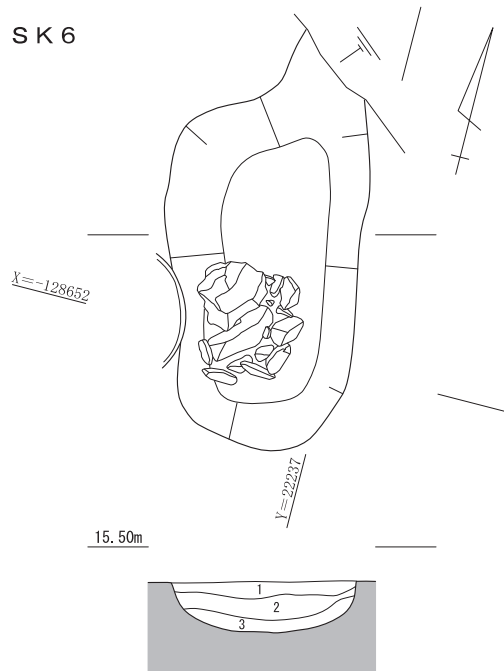
- SB3～SB5**
1. 10YR3.4/2 黒褐色 極細粒混じり細粒砂～中粒砂でマンガン粒を含み地山ブロックをマーブル状に含む。
 2. 10YR4.3/2 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂を含みマンガン粒を含む。直径5mm～3cm大の地山ブロックを含む。
 3. 10YR5.2/4 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を含む。やや粘質。

- SB5**
1. 10YR4.3/3.7 褐色 細砂混じりシルト～極細砂で直径5mm程度の粘土塊を僅かに含む。
 2. 10YR4.6/3.2 にぶい黄褐色 シルト～極細砂でシルト質強く2.5Y5.4/3.3 黄褐色のシルトブロックを含む。
 3. 10YR4.7/2.2 灰黄褐色 極細砂～細砂でマンガン粒を疎らに含む炭化物を僅かに含む。
 4. 10YR4.8/3.7 にぶい黄褐色 シルト混じり極細砂～細砂でマンガン粒を僅かに含む10YR7.3/5.5 明黄褐色のシルトブロックを含む。
 5. 10YR4.2/3.8 褐色 細砂混じりシルト～極細砂で炭化物を僅かに含む。
 6. 10YR5.2/6 にぶい黄褐色 細砂混じりシルトでシルト質強い。
 7. 10YR4.6/2.3 灰黄褐色 シルト質極細砂～細砂で炭化物を僅かに含む。
 8. 10YR4.3/1.6 灰黄褐色 極細砂～細砂で10YR7/5 明黄褐色のシルトブロックを含み土器片を含む。炭化物を僅かに含む。
 9. 10YR4.3/3.3 にぶい黄褐色 シルト混じり極細砂～細砂で土器片を含む。
 10. 10YR4.7/2.4 灰黄褐色 細砂混じりシルト～極細砂で10YR6.2/3.4 にぶい黄褐色のシルト～極細砂がマーブル状に入る。
 11. 10YR4.2/3.5 褐色 シルト混じり極細砂～細砂で炭化物を僅かに含む。
 12. 10YR4.6/3.4 にぶい黄褐色 シルト～極細砂で下半に10YR6.3/6 明黄褐色のシルトブロックを含む。
 13. 10YR3.4/3.2 暗褐色 細砂混じりシルト～極細砂で10YR7/4.3 にぶい黄褐色のシルトブロックに入る。炭化物を僅かに含む。

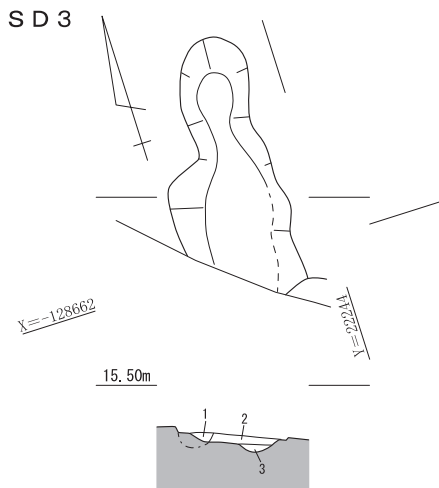




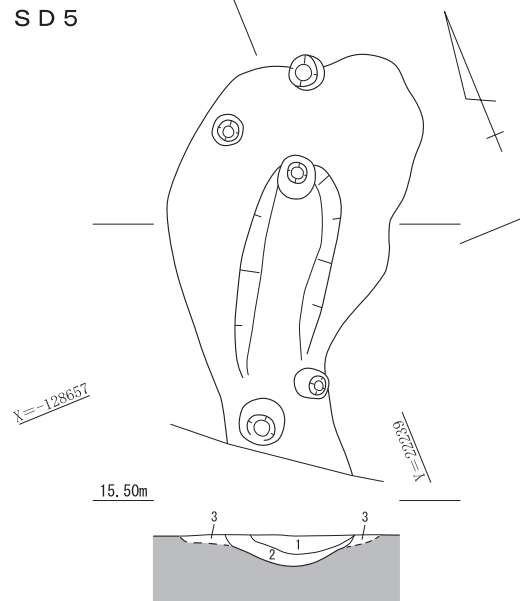
1. 10YR3.6/2 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂でやや粘質。炭粒を少量含み地山ブロックを含む。マンガン粒を多く含む。
2. 10YR4/2.6 にぶい黄褐色 極細粒砂で細粒砂を多く含みマンガン粒を多く含む。やや粘質。
3. 10YR4/2 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で炭粒を含みマンガン粒を多く含む。やや砂質。



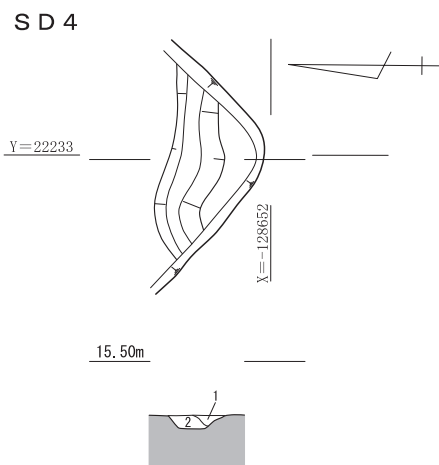
1. 2.5Y6.2/2.3 灰黄色 シルトでマンガン粒を含み 10YR5/3 にぶい黄褐色のシルトブロックを僅かに含む。酸化鉄入る。
2. 10YR6.7/2.2 にぶい黄褐色 細粒シルトでマンガン粒を疎らに含み土器片・炭化物を僅かに含む。やや粘質。
3. 10YR5.4/2.3 灰黄褐色 極細砂混じり細粒シルトでマンガン粒・土器片・炭化物を僅かに含む。7.5YR5.3/8 明褐色のシルト～極細砂がブロック状に入る。



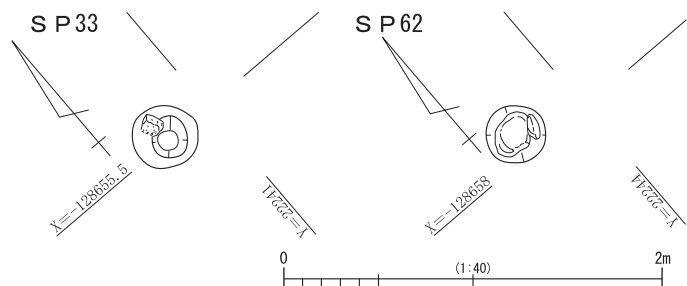
1. 10YR3.2/1.5 黒褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂を少量含む。還元状態の土。
2. 10YR4/2.2 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂を少量含みマンガン粒を多く含む。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂を少量含みマンガン粒を多く含む。

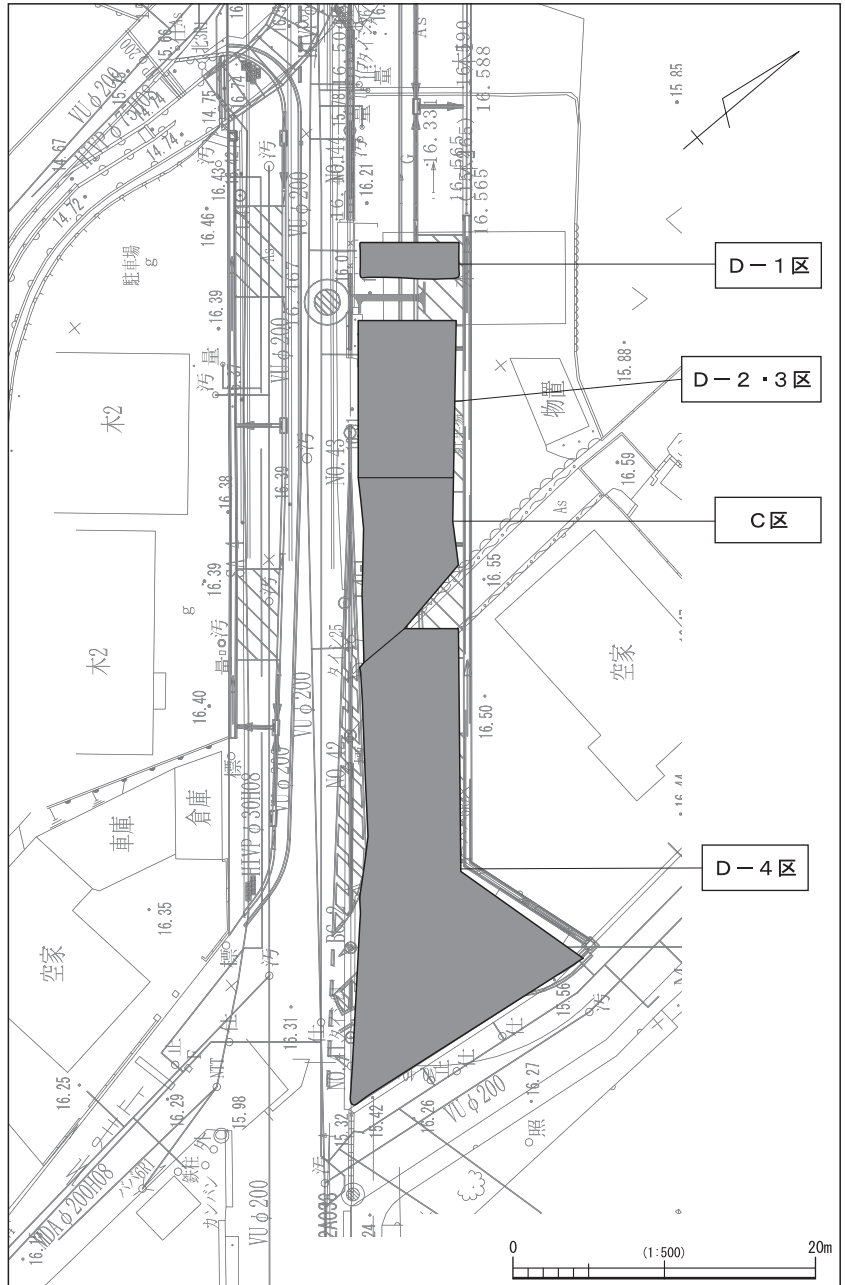
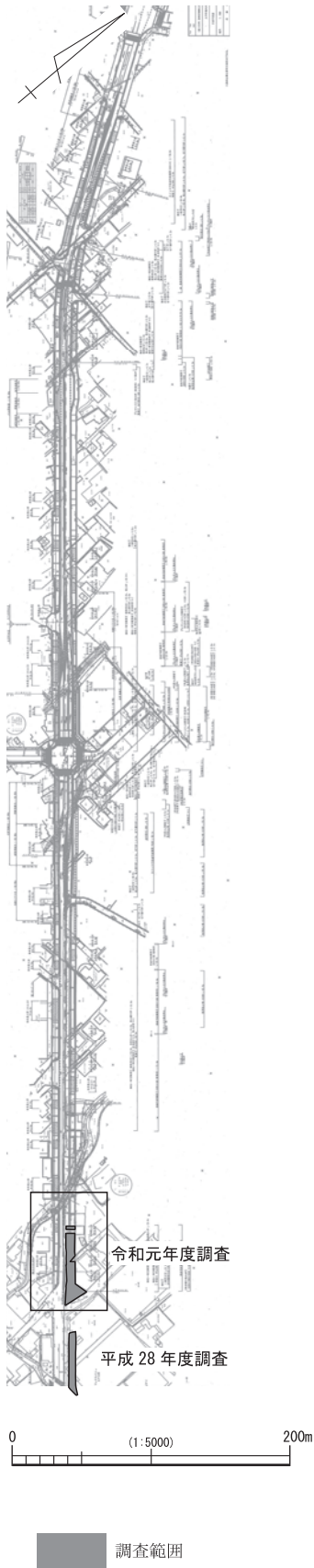


1. 10YR5/3.5 にぶい黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂を含み鉄分・マンガン粒を含む。砂質。
2. 10YR5/2 灰黄褐色 細粒砂で極細粒砂・中粒砂を少量含みマンガン粒・鉄分を含む。
3. 10YR4/1.6 灰黄褐色 細粒砂で中粒砂を少量含みマンガン粒を多く含む。

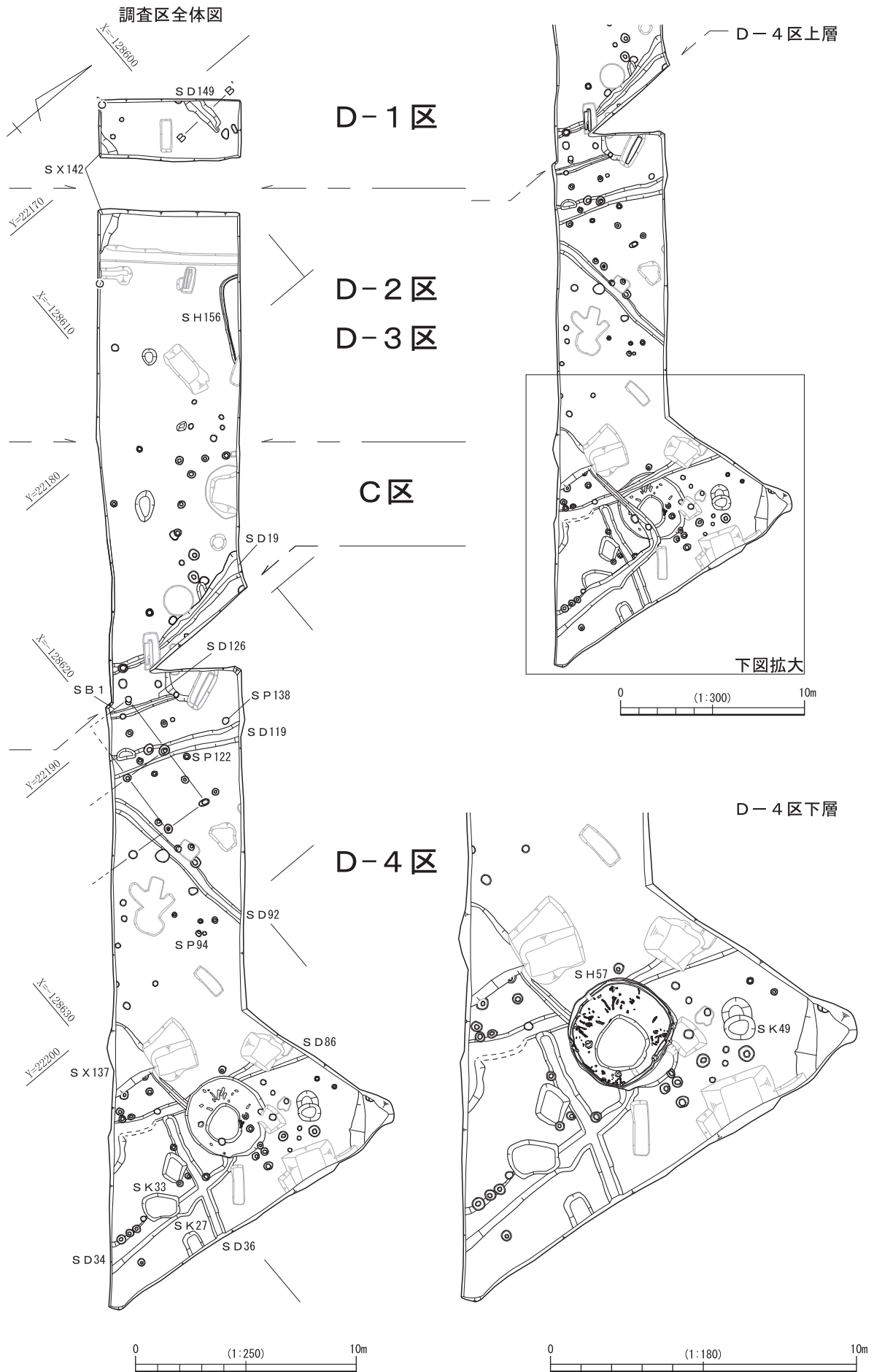


1. 10YR4/1.7 灰黄褐色 細粒砂混じり極細粒砂でマンガン粒を含む。やや粘質。
2. 10YR4/2.6 にぶい黄褐色 細粒砂混じり極細粒砂でマンガン粒を多く含む。

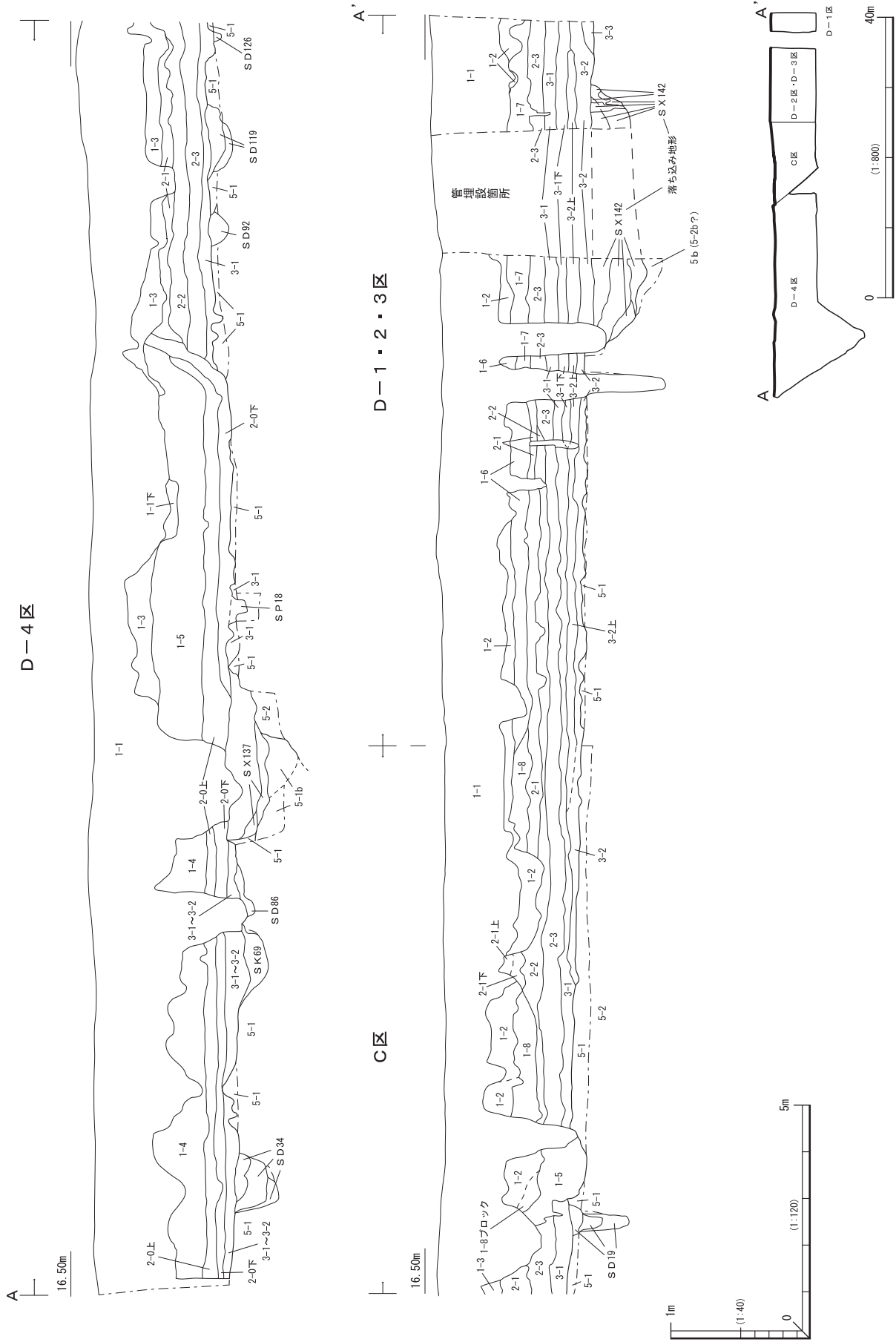




調査区の位置



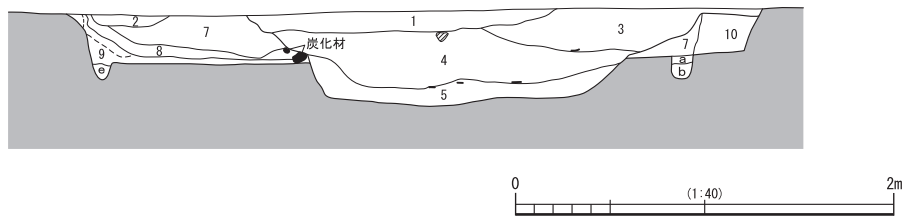
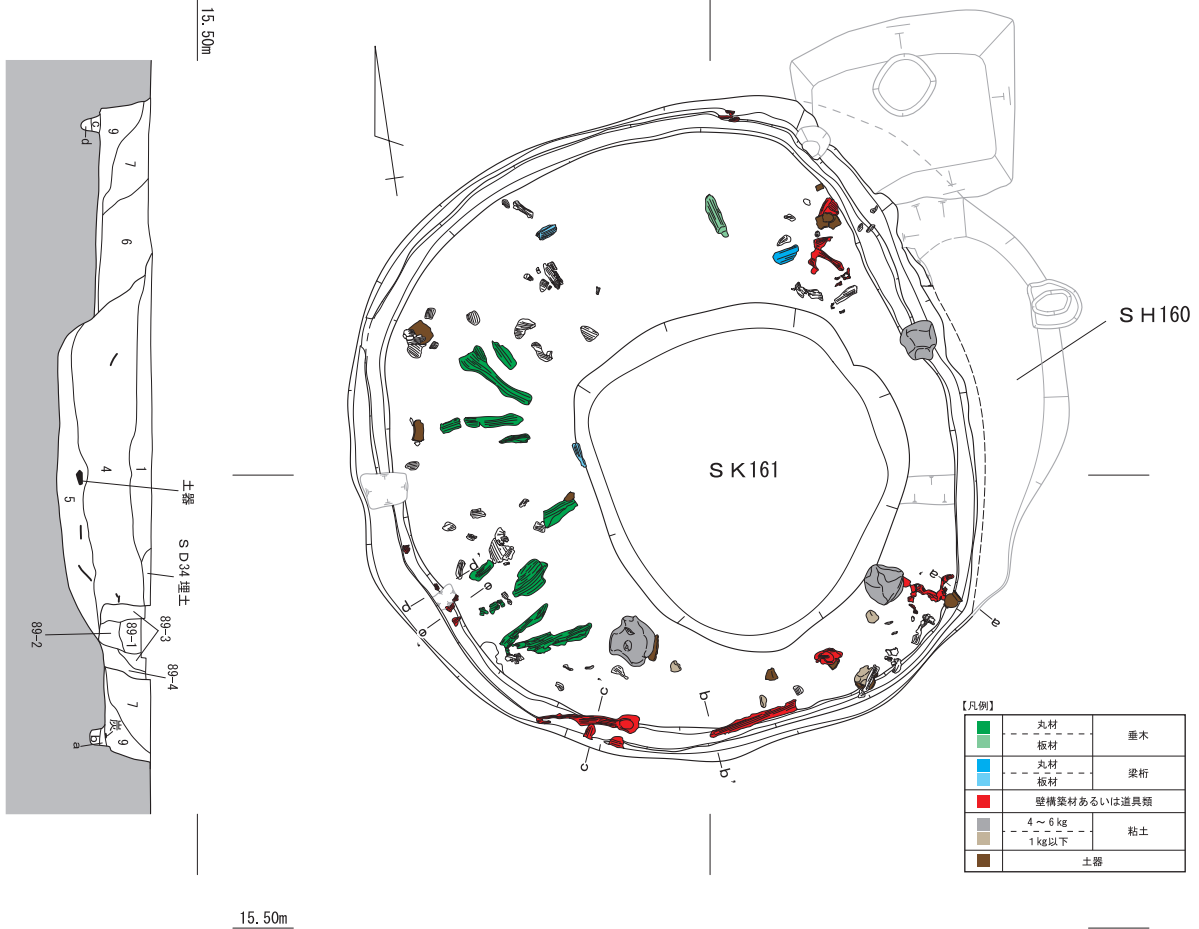
調査区全体平面図



D-4、C、D-1～3区南西壁土層断面図

基本層序番号	土層番号	土層	
第 1 層	1-1	現代碎石（上部）、現代盛土・攪乱（下部）	
	1-1下	現代盛土	
	1-2	現代整地土	
	1-3	現代耕土	
	1-4	現代盛土（造成土）	
	1-5	攪乱	
	1-6	現代耕土（整地土直下）	
	1-7	現代耕土	
第 2 層	第2-0層	2-0上	土壌層（旧耕土）
	第2-0層	2-0下	土壌層（旧耕土）
	第2-1層	2-1	土壌層（旧耕土）
	第2-1層	2-1上	土壌層（旧耕土）
	第2-1層	2-1下	土壌層（旧耕土）
	第2-2層	2-2	土壌層（旧耕土）
	第2-3層	2-3	土壌層（旧耕土）
第 3 層	第3-1層	3-1	土壌層（旧耕土）（遺物包含層）
	第3-1層	3-1下	土壌層（旧耕土）（遺物包含層）
	第3-2層	3-2上	土壌層（旧耕土）（遺物包含層）
	第3-2層	3-2	土壌層（旧耕土）（遺物包含層）
	第3-1～2層	3-1～2	土壌層（旧耕土）（遺物包含層）
	第3-3層	3-3	土壌層（旧耕土）（遺物包含層）
第 4 層	なし	※一部遺構埋土（SK27・SD36等）に残る可能性あり	
第 5 層	第5-1 a 層	5-1 a	自然堆積層のやや土壌化層（基盤層）
	第5-1 b 層	5-1 b 上	自然堆積層（基盤層）
	第5-1 b 層	5-1 b 下	自然堆積層（基盤層）
	第5-2層	5-2	自然堆積層（基盤層）
	第5 b 層	5 b	自然堆積層（基盤層）
遺構埋土	SD17	遺構埋土（SD17）	
	SX137	遺構埋土（SX137）	
	SD119	遺構埋土（SD119）	
	SD92	遺構埋土（SD92）	
	SK69	遺構埋土（SK69）	
	SD34	遺構埋土（SD34）	
	SK144	遺構埋土（SK144）	
	SX142	遺構埋土（SX142）	

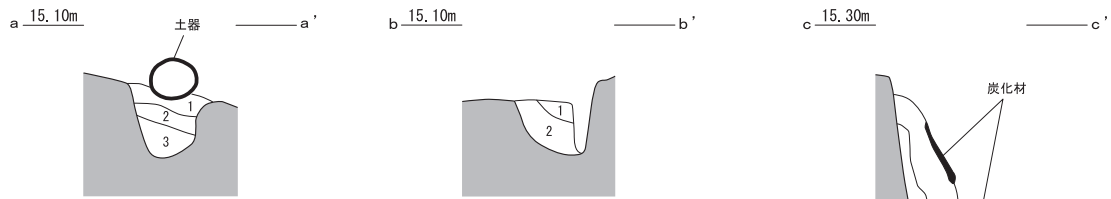
SH57



- | | | | |
|------------------------|---------|---------------------------------|----------|
| 1. 2.5Y4/4 | オリブ褐色 | 極粗砂〜粗砂混じりシルト質極細砂 (中央の窪地に堆積した土) | SK161の埋土 |
| 2. 10YR4/4 | 褐色 | シルト質極細砂〜細砂 マンガン沈着 (SD86埋土) | |
| 3. 10YR4/6 | 褐色 | 極粗砂〜粗砂混じりシルト質極細砂〜細砂 固くしまる | |
| 4. 10YR3/4 | 暗褐色 | シルト混じり極細砂〜中砂 炭化物 土器混じる | |
| 5. 10YR3/4 | 暗褐色 | 極細砂〜細砂質シルト 炭化物 土器混じる | |
| 6. 10YR3/3 | 暗褐色 | 極粗砂〜粗砂混じりシルト質極細砂〜細砂 固くしまる | |
| 7. 10YR4/4 | 褐色 | シルト混じり中砂〜極細砂 | |
| 8. 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | シルト〜極細砂混じり極粗砂〜中砂 | |
| 9. 10YR3/4 | 暗褐色 | シルト混じり極粗砂〜中砂 炭化材・焼土混じる | |
| 10. 2.5Y4/4 | オリブ褐色 | シルト混じり極粗砂〜細砂 (SH160の埋土) | |
| 89-1. 10YR3/4 | 暗褐色 | シルト質極細砂〜細砂 | 柱痕 |
| 89-2. 10YR5/3 | 黄褐色 | シルト質極細砂〜細砂 (極細砂〜細砂の粒団混じる、炭化物含む) | |
| 89-3. 10YR4/4 | 褐色 | 極細砂質シルト | |
| 89-4. SH57の4と7のブロック混じる | | | 掘形 |
| 周壁溝 a. 2.5Y5/3 | 黄褐色 | シルト質細砂〜中砂 炭化材含む | 周壁溝 |
| 周壁溝 b. 2.5Y5/2 | 灰オリブ色 | シルト質細砂〜中砂 | |
| 周壁溝 c. 10YR6/6 | 明黄褐色混じり | 7.5Y6/2 灰オリブ色 シルト・炭混じりシルト〜中砂 | |
| 周壁溝 d. 7.5Y5/2 | 灰オリブ色 | シルト・炭混じり細砂〜中砂 | |
| 周壁溝 e. 5Y5/3 | 灰オリブ色 | 炭・シルト混じり細砂〜粗砂 | |

D-4区 SH57・SH160・SK161 平面・断面図

炭化材 21・19

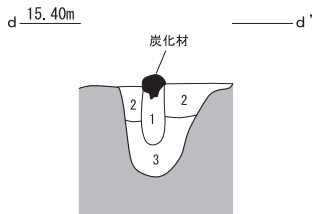


- 1. 2.5Y6/6 明黄褐色 シルト質細砂～中砂
- 2. 2.5GY6/1 オリーブ灰色 炭混じりシルト質
細砂～中砂 やや粘質強い
- 3. 2.5Y7/6 明黄褐色 シルト質細砂～中砂

- 1. 10YR6/6 褐灰色 シルト質中砂～粗砂 炭化材含む
- 2. 2.5Y6/6 明黄褐色 シルト質細砂～中砂

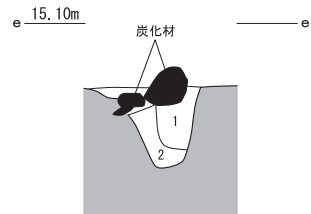
- 1. 2.5GY5/1 オリーブ灰色混じりの
10YR6/4 にぶい黄褐色 シルト質中砂～粗砂
炭化材含む
- 2. 7.5YR5/4 にぶい褐色 シルト混じり細砂～中砂

炭化材 25

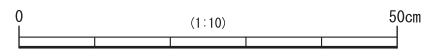


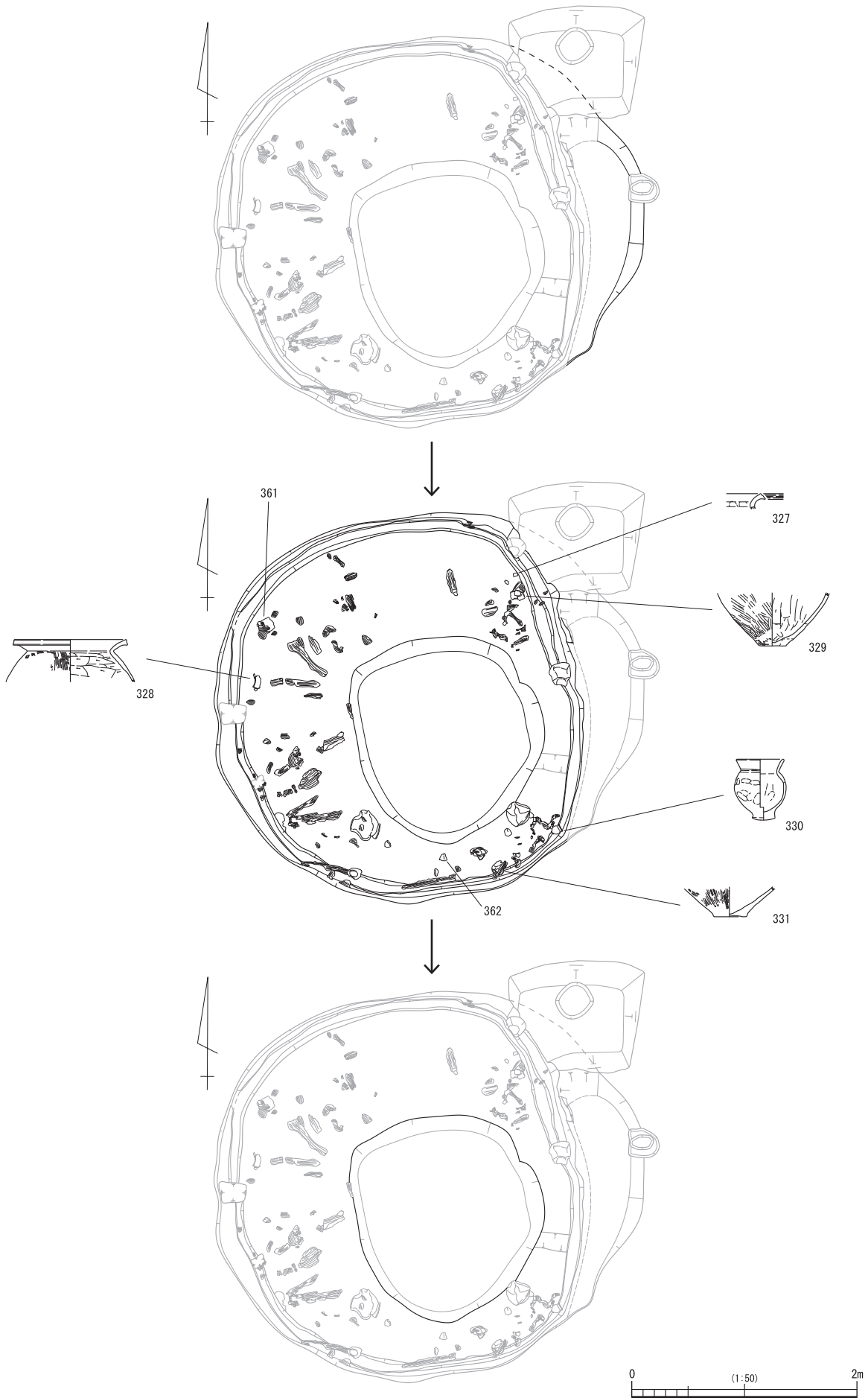
- 1. 2.5Y6/3 にぶい黄色 シルト混じりシルト～中砂
- 2. 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト混じり細砂～中砂 炭混じる
- 3. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト混じり細砂～粗砂

炭化材 24



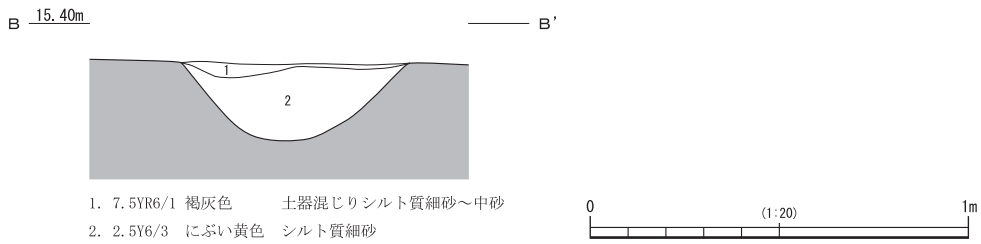
- 1. 7.5Y6/2 灰オリーブ色混じりの 2.5Y5/4 黄褐色 シルト質中砂
- 2. 2.5Y5/3 黄褐色 シルト混じり細砂～中砂



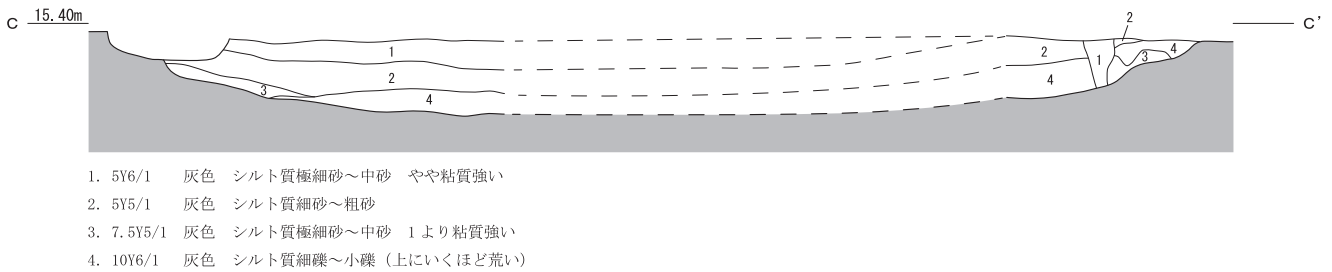


竪穴住居（竪穴建物）跡の変遷

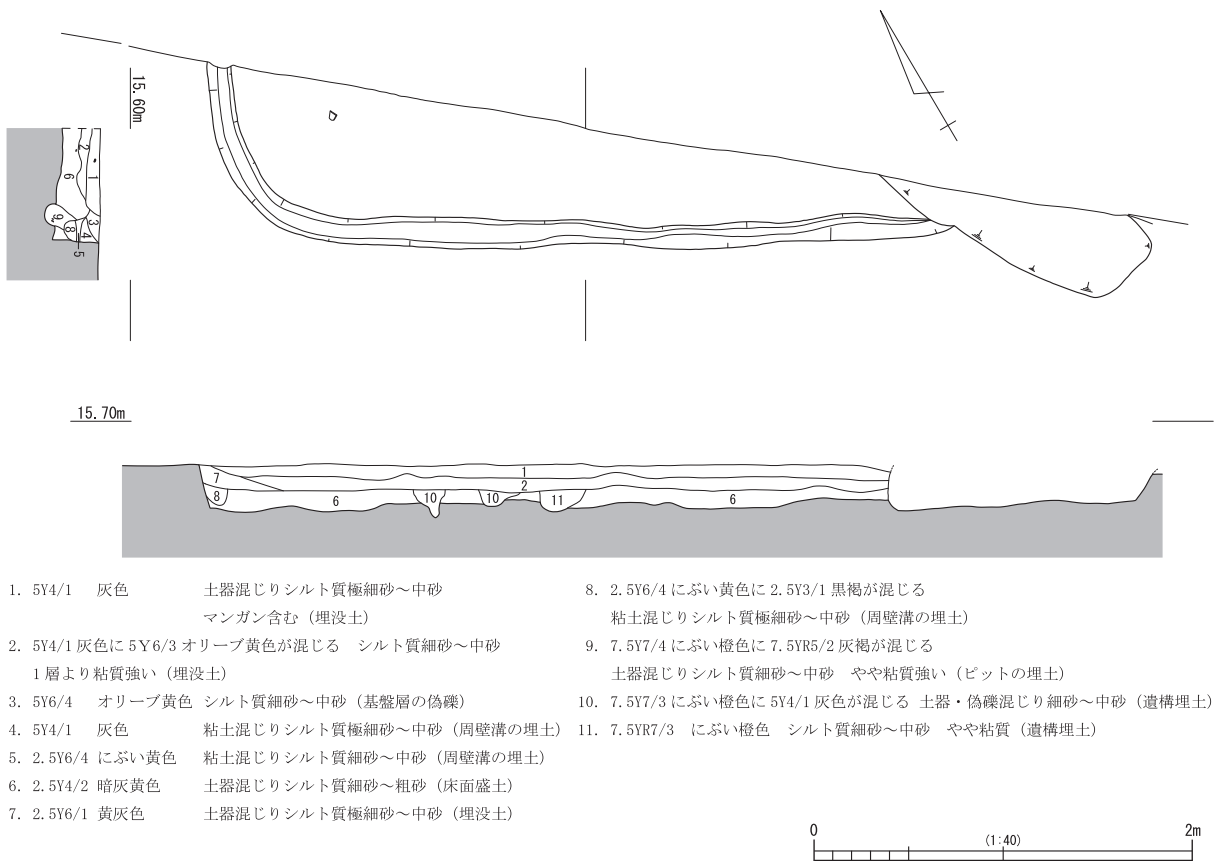
SD149



SX142

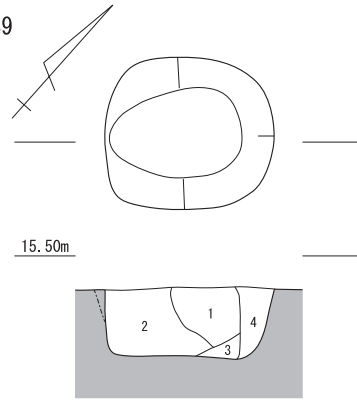


SH156

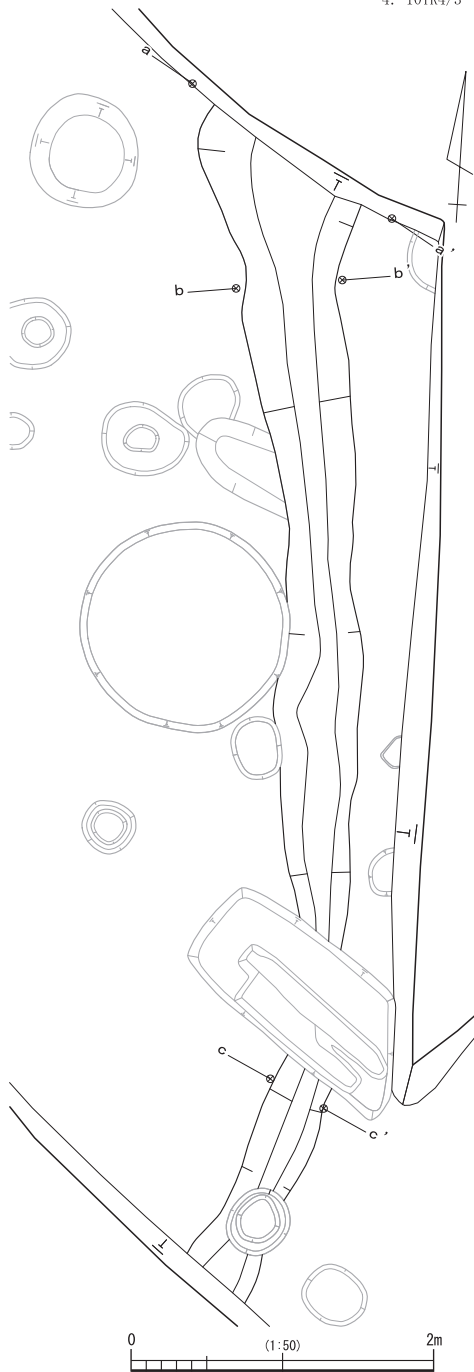


城山遺跡
令和元年度

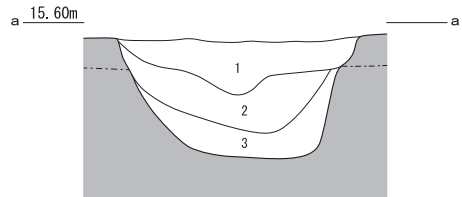
SK49



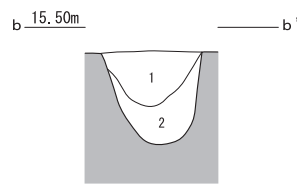
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂に10YR6/4 にぶい黄橙粒含む
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂に10YR6/4 にぶい黄橙粒多く含む
3. 10YR3/3 暗褐色 シルト質極細砂
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂



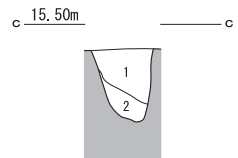
SD19



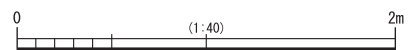
1. 5YR4/1 褐灰色 極細・細砂含むシルト質土 上部マンガン沈着 酸化鉄を多量
1～3cm大の礫を数点含む
2. 7.5YR5/2 灰褐色 極細・細砂含むシルト質土 酸化鉄を多量
1～3cm大の5YR4/1 褐灰色ブロックを少量含む
3. 5YR5/1 褐灰色 極細・細砂含むシルト質土 酸化鉄を含む
1～3cm大の5YR4/1 褐灰色ブロックを少量含む



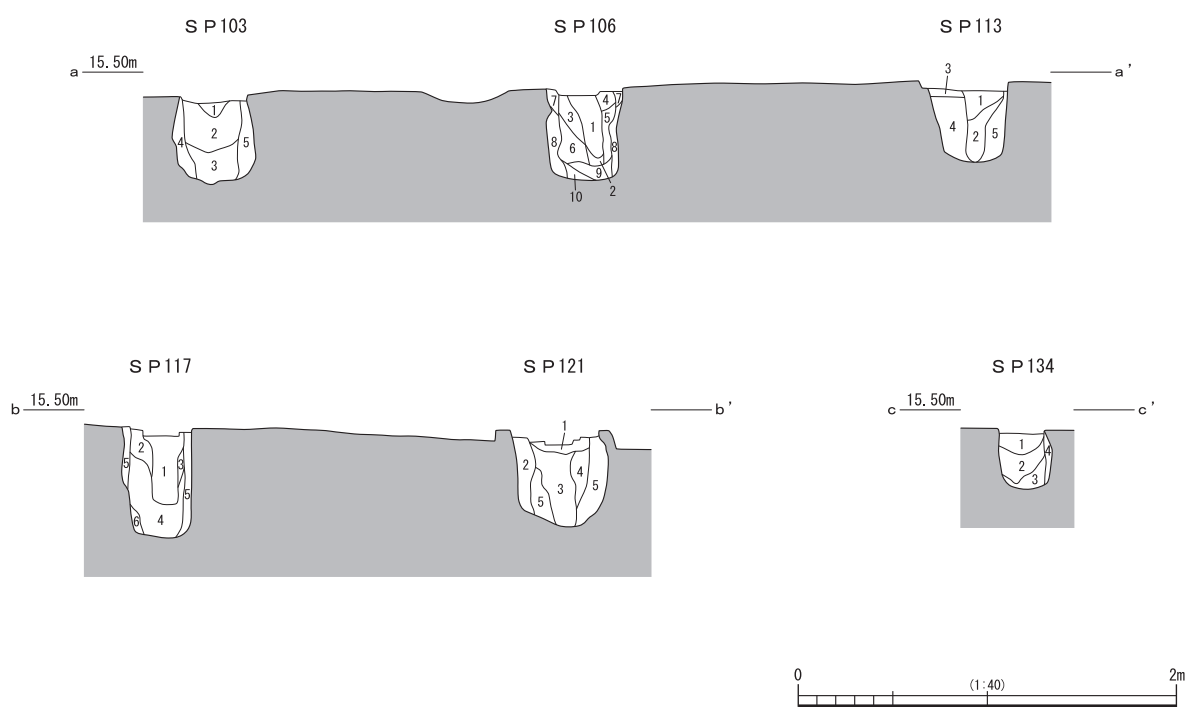
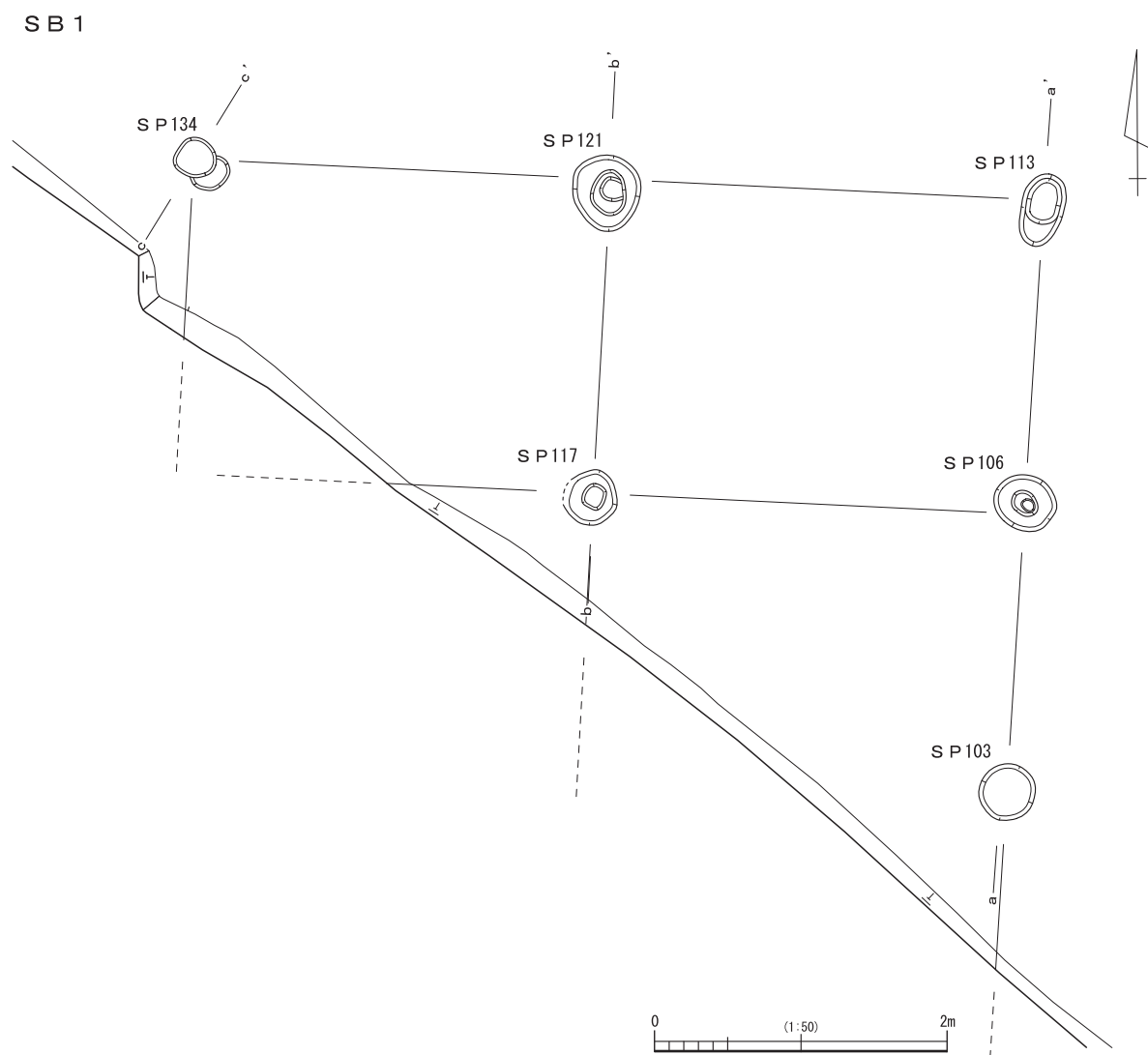
1. 10YR4/6 褐色 シルト質中砂～細砂 ややゆるい 斑鉄あり
2. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 中砂～極細砂質シルト ややゆるい



1. 5YR4/1 褐灰色 極細・細砂含むシルト質土 マンガン・酸化鉄含む
0.5～3cm大の10YR5/1 褐灰色ブロックを含む
0.1～0.5cm大の礫を少量 1～3cm大の礫を微量含む
2. 7.5YR5/1 褐灰色 細砂含むシルト質土 酸化鉄を含む
0.1～1cm大の礫を微量 0.5～1cm大の10YR5/1 褐灰色



C区 SK49・SD19 平面・断面図



D-4区 SB 1 平面・断面図

S B 1

S P 103

- 10YR6/2 灰黄褐色 細・中砂含むシルト質土 マンガン微量 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を少量 0.1～0.5 cm大の 5YR5/2 灰褐色を微量 0.1～0.3 cm大の 7.5YR5/6 明褐色を含む
- 10YR6/2 灰黄褐色 細・中砂含むシルト質土と 5YR5/2 灰褐色 細・中砂含むシルト質土がミルフィーユ状で存在し柱の加圧でたわんでいる
- 5YR5/2 灰褐色 細・中砂含むシルト質土 マンガン少量 0.1～1 cm大の 7.5YR5/6 明褐色を少量 0.1～0.5 cm大の 10YR6/2 灰黄褐色を少量含む
- 2.5YR5/1 赤灰色 細砂含むシルト質土 マンガン少量 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を含む 1.5 cm大の 7.5YR5/1 褐灰色ブロックを含む 0.1～0.3 cm大の 7.5YR5/6 明褐色を少量 2.5YR4/1 赤灰色ブロックを含む (この中にマンガン多量)
- 4と同じだが 2.5YR4/1 赤灰色ブロックを少量含む

S P 106

- 7.5YR5/1 褐灰色 極細・細砂含むシルト質土 マンガン少量 0.1～0.5 cm大の炭を少量 0.3 cm大の焼土を微量 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を少量 0.1～0.3 cm大の 7.5YR5/6 明褐色を含む
- 5YR5/1 褐灰色 細・中砂含むシルト質土 マンガン微量 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を少量 0.1～0.3 cm大の 7.5YR5/6 明褐色を微量 0.1～0.3 cm大の 10YR6/2 灰黄褐色を少量含む
- 5YR6/1 褐灰色 細砂含むシルト質土 マンガン少量 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を含む 0.1～0.3 cm大の 7.5YR5/6 明褐色を少量 0.1～0.5 cm大の 10YR6/2 灰黄褐色を含む 0.1～0.3 cm大の炭を微量含む
- 10YR6/2 灰黄褐色 細砂含むシルト質土 マンガン微量 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を微量 0.1～0.5 cm大の 10YR5/1 褐灰色を少量 0.1～0.3 cm大の 7.5YR5/6 明褐色を含む
- 7.5YR5/2 灰褐色 細・中砂含むシルト質土 マンガン少量 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を含む 0.1～0.3 cm大の 7.5YR5/6 明褐色を少量 0.1～0.3 cm大の 10YR6/2 灰黄褐色を少量含む
- 5YR5/1 褐灰色 細砂含むシルト質土 マンガン少量 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を少量 0.1～1 cm大の 7.5YR5/6 明褐色を少量 0.1～1 cm大の 10YR6/2 灰黄褐色を少量含む
- 5YR5/1 褐灰色 細・中砂含むシルト質土 マンガン含む 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を少量 0.1～0.3 cm大の 7.5YR5/6 明褐色を少量含む
- 7.5YR5/1 褐灰色 細砂含むシルト質土 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を少量含む
- 7.5YR6/1 褐灰色 細・中砂含むシルト質土 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を少量含む
- 5YR5/2 灰褐色 細・中砂含むシルト質土 0.1～0.3 cm大の 10YR6/1 褐灰色、7.5YR5/6 明褐色を微量含む

S P 113

- 10YR6/2 灰黄褐色 細・中砂含むシルト質土 マンガン少量 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を少量 0.1～0.3 cm大の 7.5YR5/6 明褐色を微量 0.1～1 cm大の礫を微量含む
- 10YR6/2 灰黄褐色 細・中砂含むシルト質土 マンガン少量 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色、7.5YR5/6 明褐色を含む 0.1～1 cm大の礫を少量含む
- 10YR5/1 褐灰色 細・中砂含むシルト質土 マンガン少量 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を少量 0.1～1 cm大の 7.5YR5/6 明褐色を少量含む
- 10YR6/1 褐灰色 細・中砂含むシルト質土 マンガン含む 0.1～0.5 cm大の炭を微量 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色、7.5YR5/6 明褐色を含む 0.1～0.5 cm大の礫を微量含む
- 5YR5/2 灰褐色 細・中砂含むシルト質土 マンガン少量 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を含む 0.1～1 cm大の 10YR6/2 灰黄褐色を少量 0.1～0.5 cm大の 7.5YR5/6 明褐色を含む 0.1～0.3 cm大の 5YR4/1 褐灰色を微量含む

S P 117

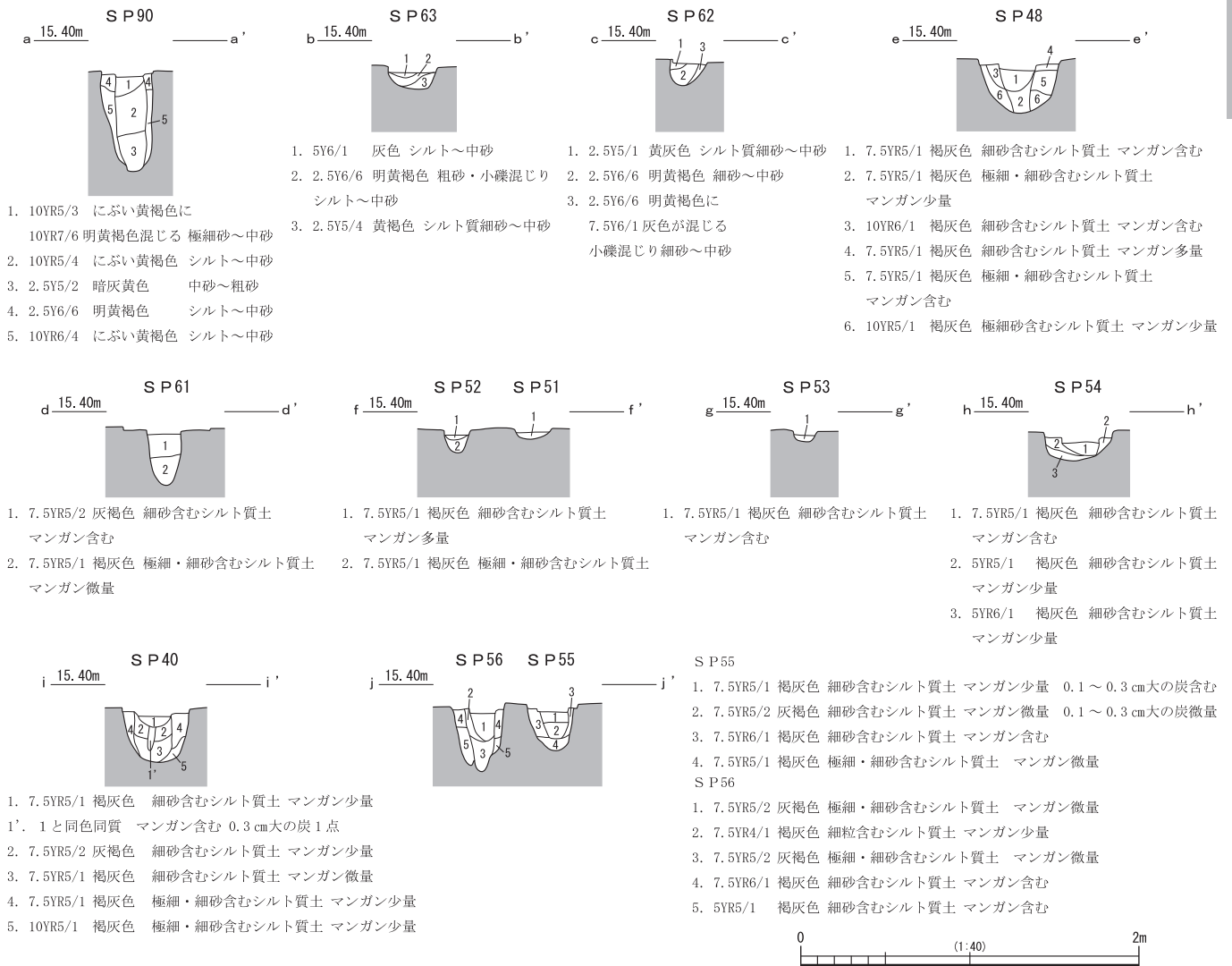
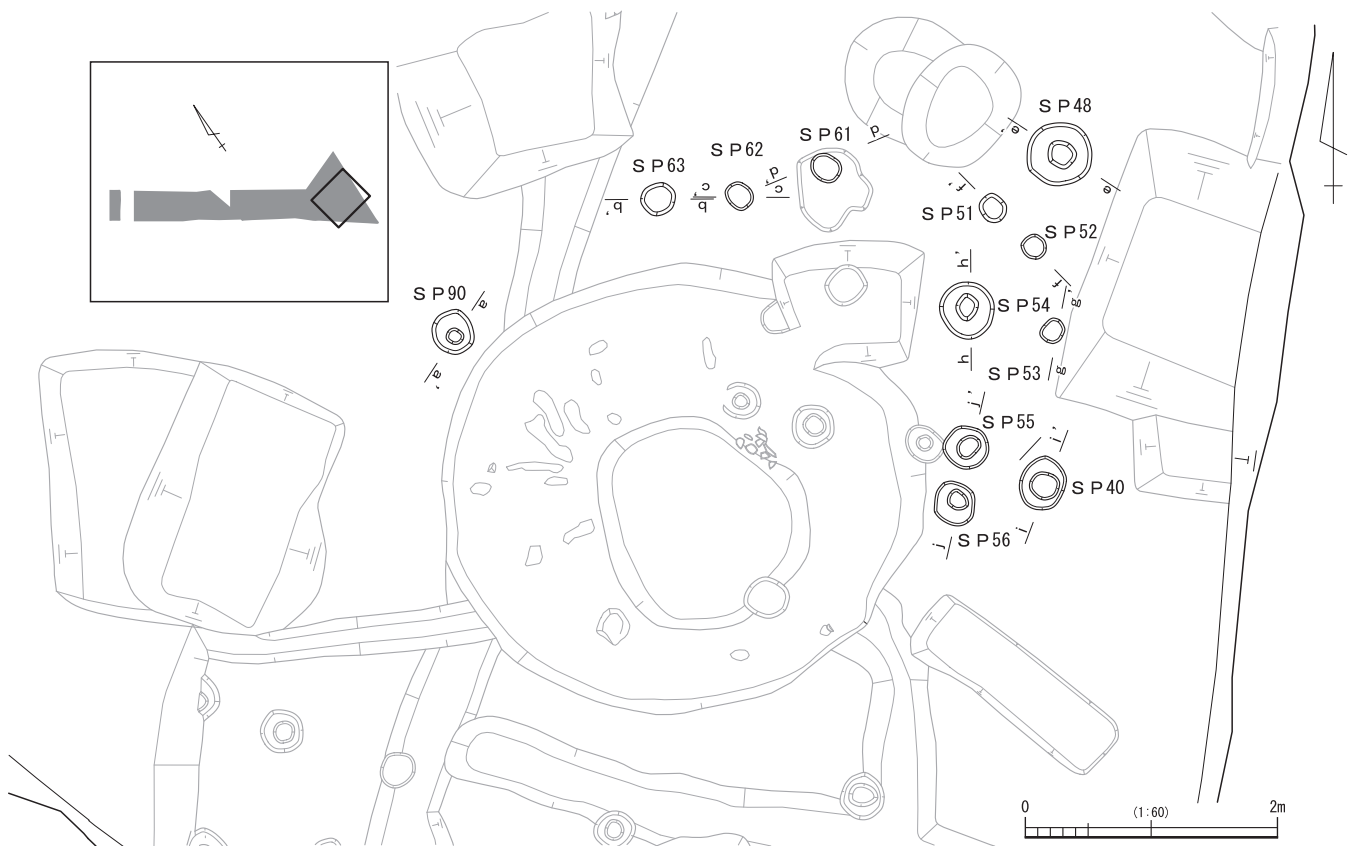
- 10YR6/2 灰黄褐色 細・中砂含むシルト質土 マンガン少量 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色と 7.5YR5/6 明褐色を含む
- 10YR5/1 褐灰色 細・中砂含むシルト質土 マンガン少量 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を含む 0.5～2 cm大の 10YR6/2 灰黄褐色を少量含む
- 7.5YR5/1 褐灰色 細・中砂含むシルト質土 マンガン少量 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を含む 0.5～1 cm大の 10YR6/2 灰黄褐色を含む
- 7.5YR5/1 褐灰色 細・中砂含むシルト質土 マンガン微量 10YR6/2 灰黄褐色をミルフィーユ状に含み柱の圧でたわんでいる
- 7.5YR5/1 褐灰色 細砂含むシルト質土 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を少量含む
- 7.5YR5/1 褐灰色 細砂含むシルト質土 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を微量 0.1～0.3 cm大の 10YR6/1 褐灰色を微量含む

S P 121

- 7.5YR5/1 褐灰色 細・中砂含むシルト質土 マンガン含む 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を含む 0.3～0.5 cm大の 10YR5/2 灰黄褐色を含む
- 7.5YR6/1 褐灰色 極細・細砂含むシルト質土 マンガン少量 0.1～0.3 cm大の 7.5YR5/6 明褐色を少量 0.3～0.5 cm大の 5YR4/1 褐灰色を少量含む
- 5YR5/1 褐灰色 極細・細砂含むシルト質土 マンガン少量 0.5～3 cm大の 10YR5/2 灰黄褐色を含む 炭・土器片を少量 0.1～0.3 cm大の 7.5YR5/6 明褐色を少量含む
- 7.5YR5/2 灰褐色 細砂含むシルト質土 マンガン少量 0.1～0.3 cm大の 7.5YR5/6 明褐色を含む 0.1～1 cm大の 10YR5/2 灰黄褐色を含む
- 2.5Y6/1 黄灰色 シルト質細砂～中砂

S P 134

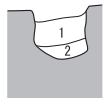
- 10YR5/2 灰黄褐色 細砂含むシルト質土 マンガン少量 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を少量含む
- 10YR5/2 灰黄褐色 細砂含むシルト質土 マンガン微量 0.1～0.5 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を含む
- 7.5YR5/2 灰褐色 極細砂含むシルト質土 マンガンをごく微量 0.1～0.3 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を少量含む
- 10YR4/2 灰黄褐色 極細・細砂含むシルト質土 マンガン少量 0.1～0.5 cm大の 5YR3/3 暗赤褐色を含む 0.5 cm大の焼土粒子 (5YR5/6 明赤褐色) を1点含む



D-4区 柱穴群(1) 平面・断面図



SP 85
a 15.40m a'



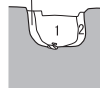
1. 10YR7/4 にぶい黄褐色 細砂～中砂
2. 10YR6/2 灰黄褐色 シルト質細砂～中砂

SP 130
b 15.40m b'



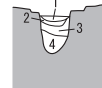
1. 10YR4/4 褐色 極細砂～中砂 炭化物含む
2. 10YR4/6 褐色 シルト混じり極細砂～細砂
3. 10YR4/4 褐色 粗砂混じり極細砂～細砂

SP 91
c 15.40m c'



1. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト質細砂～中砂 やや粘性あり
2. 5Y6/2 灰オリーブ色 シルト質細砂～粗砂 上方へと荒くなる

SP 67
d 15.40m d'



1. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト質細砂～中砂
2. 5Y6/2 灰オリーブ色 細砂～中砂
3. 7.5Y6/1 灰色に 2.5Y6/3 にぶい黄色混じる シルト質細砂～中砂
4. 2.5Y7/1 灰色 細砂～中砂

SP 58
e 15.40m e'



1. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト質細砂～中砂 土器混じる
2. 2.5Y7/4 浅黄色 シルト質極細砂～細砂
3. 5Y6/1 灰色 シルト質細砂～中砂
4. 7.5YR5/3 にぶい褐色 シルト質細砂～中砂

SP 129
f 15.40m f'



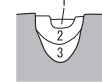
1. 10YR4/4 褐色 シルト質極細砂～中砂 炭化物混じる
2. 10YR4/2 暗灰黄色 粗砂～中砂混じり細砂
3. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 極細砂～細砂

SP 35
g 15.40m g'



1. 7.5YR6/2 灰褐色 細粒砂含むシルト質土 マンガン少量
2. 7.5Y5/1 褐灰色 細粒砂含むシルト質土 マンガン微量
3. 5YR5/1 褐灰色 細・中粒砂含むシルト質土 マンガン微量
4. 7.5YR6/1 褐灰色 極細・細粒砂含むシルト質土 マンガン微量

SP 37
h 15.40m h'



1. 10YR3/3 暗褐色 シルト質細砂～中砂 柱痕
2. 7.5Y5/2 灰オリーブ色 細砂～粗砂
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト質細砂～中砂 やや粘質強い

SP 64
i 15.40m i'



1. 10YR3/4 暗褐色 シルト混じり極細砂～細砂 焼土細片含む
2. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 シルト混じり極細砂～中砂
3. 10YR4/4 褐色 細砂～中砂 焼土細片含む
4. 10YR4/6 褐色 シルト混じり極細砂～細砂 固くしまる

SP 65
j 15.40m j'

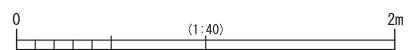


1. 10YR3/4 暗褐色 シルト混じり極細砂～細砂 焼土細片含む
2. 10YR4/4 褐色 細砂～中砂 焼土細片含む
3. 10YR4/6 褐色 シルト混じり極細砂～細砂 固くしまる

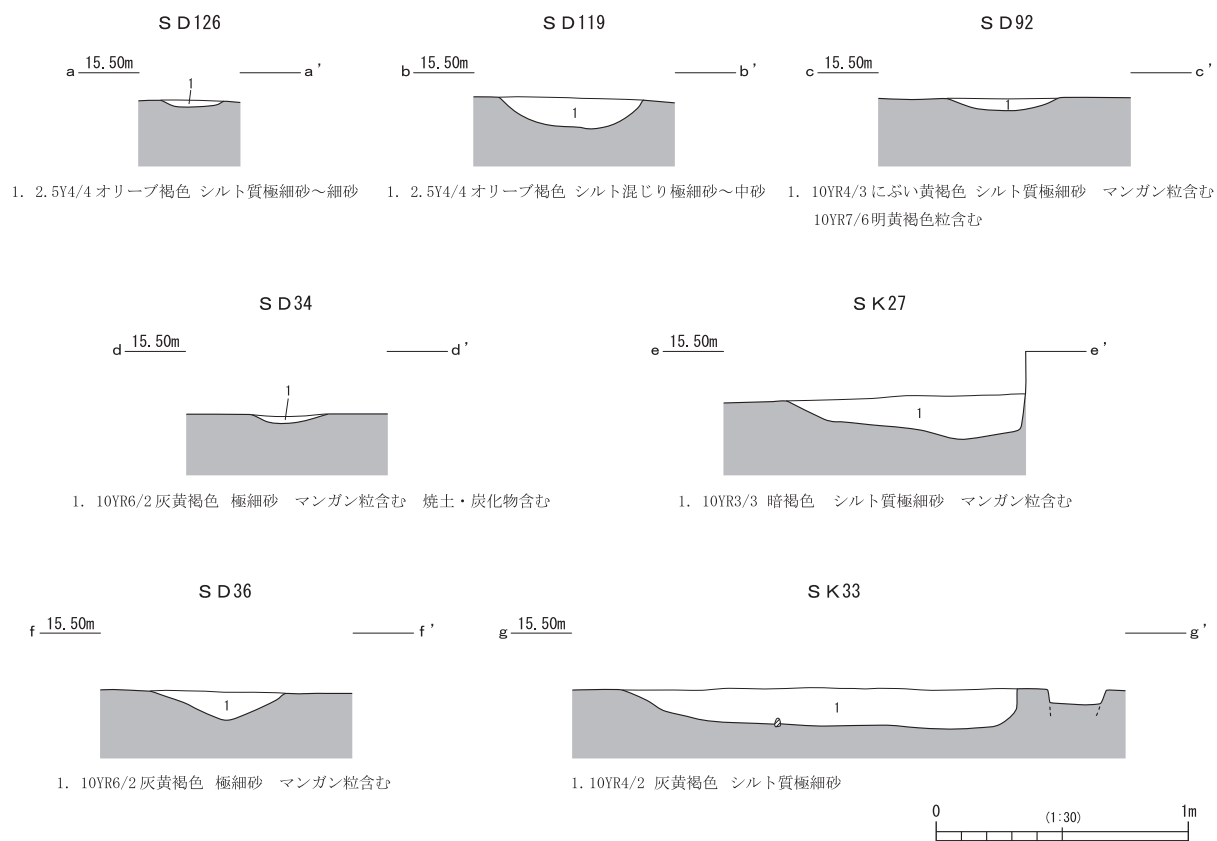
SP 38
k 15.40m k'



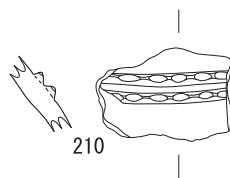
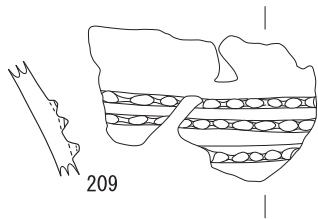
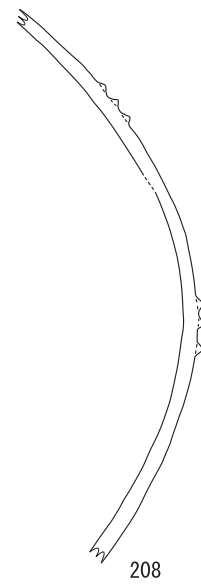
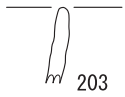
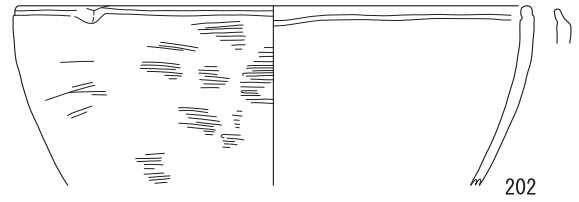
1. 10YR5/4 にぶい黄褐色に 2.5Y6/1 黄灰色が混じる シルト質細砂～中砂
2. 2.5Y6/1 黄灰色 細砂～中砂

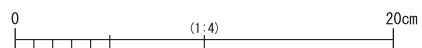
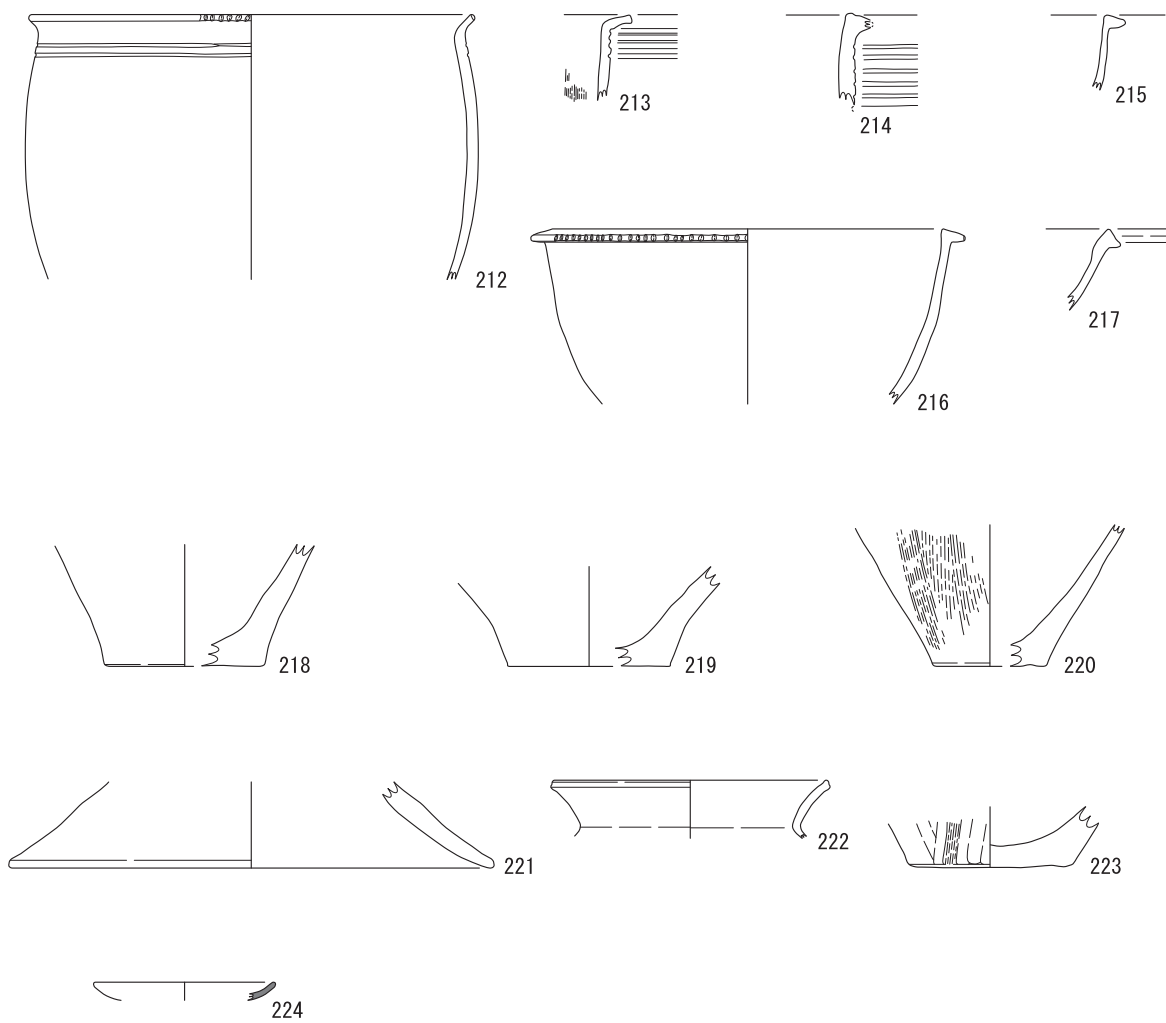


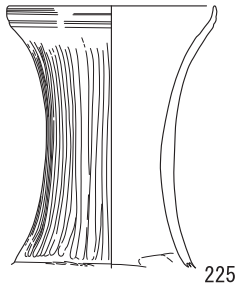
D-4区 柱穴群(2) 平面・断面図



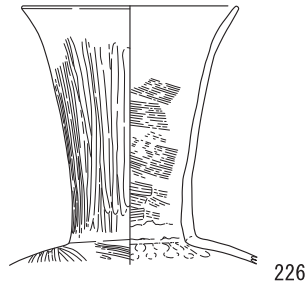
D-4区 SD・SK 平面・断面図



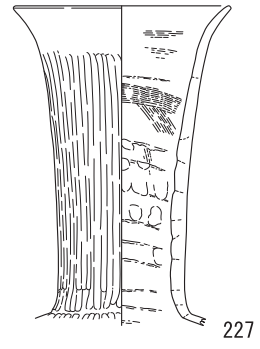




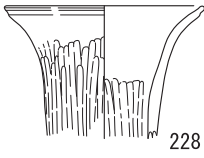
225



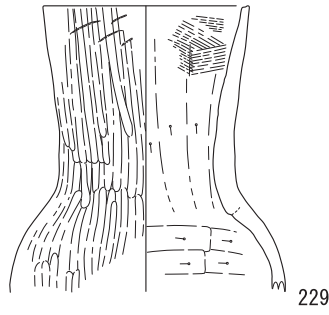
226



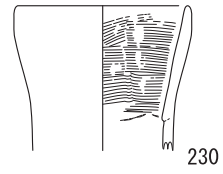
227



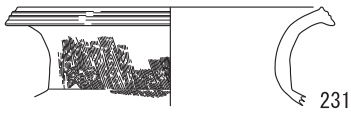
228



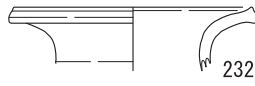
229



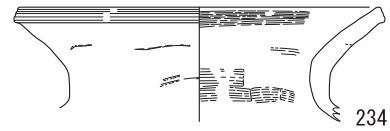
230



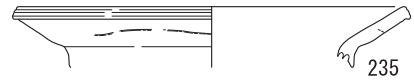
231



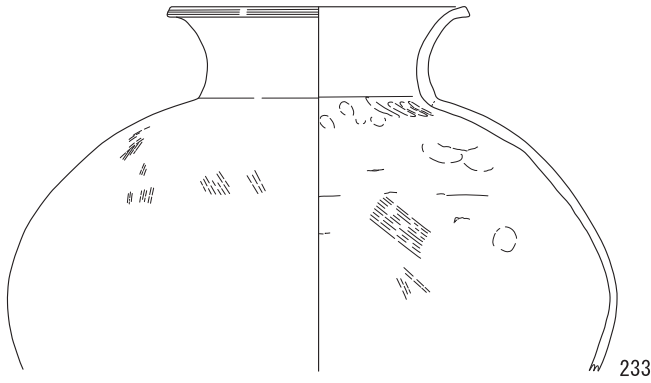
232



234



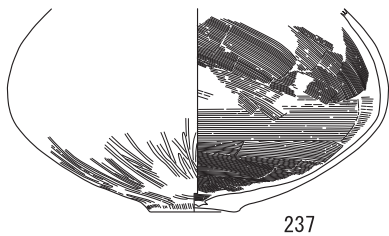
235



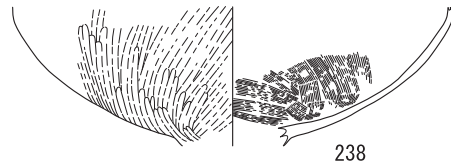
233



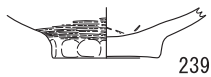
236



237



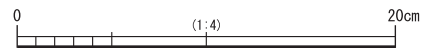
238

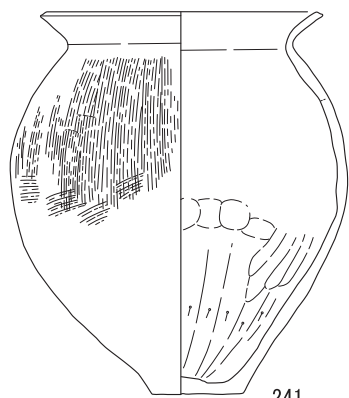


239

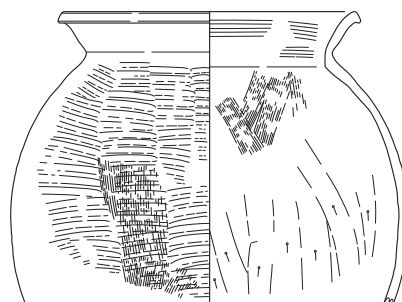


240

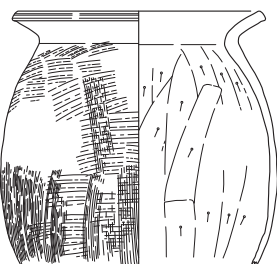




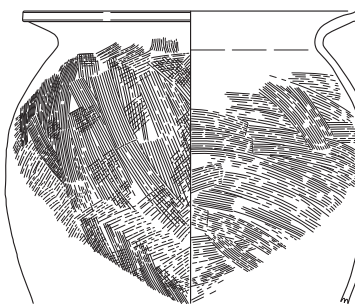
241



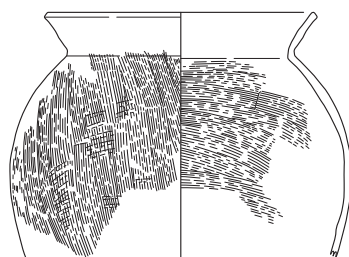
242



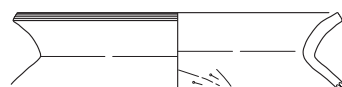
243



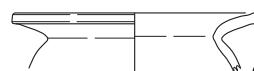
244



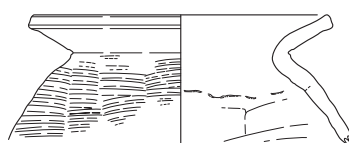
245



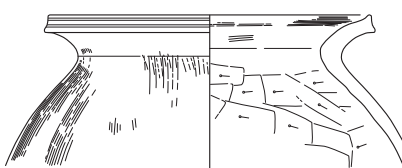
246



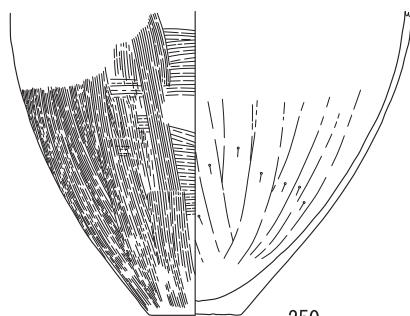
247



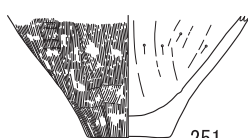
248



249



250



251



252



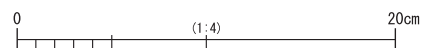
253

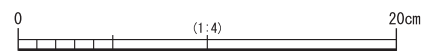
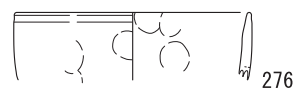
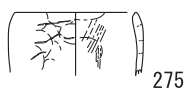
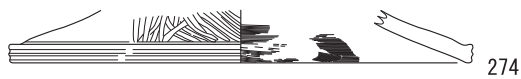
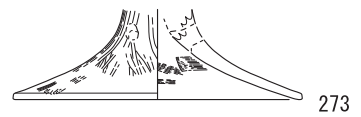
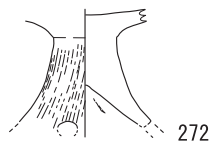
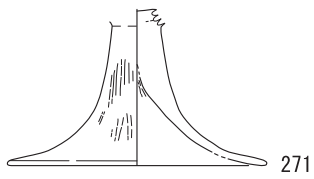
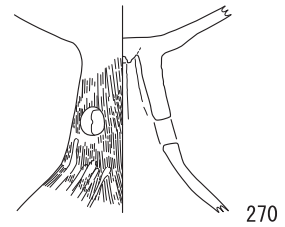
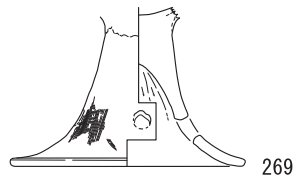
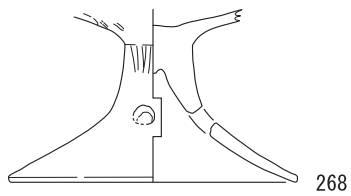
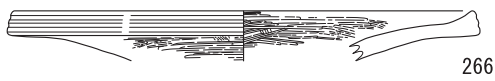
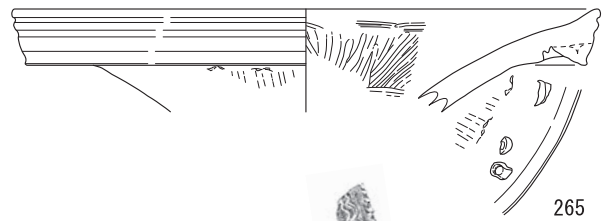
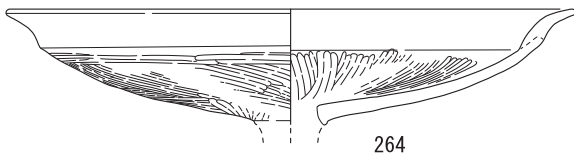
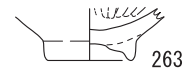
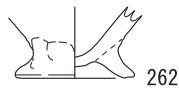
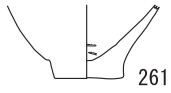
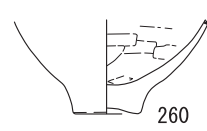
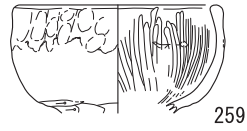
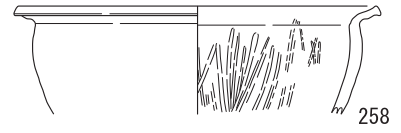
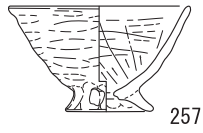
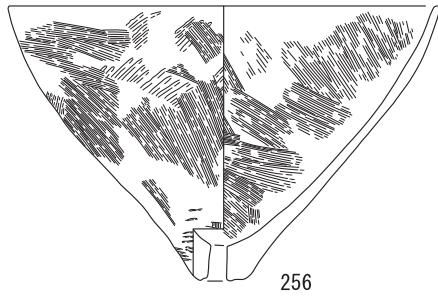


254



255





SH 1



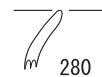
277



278

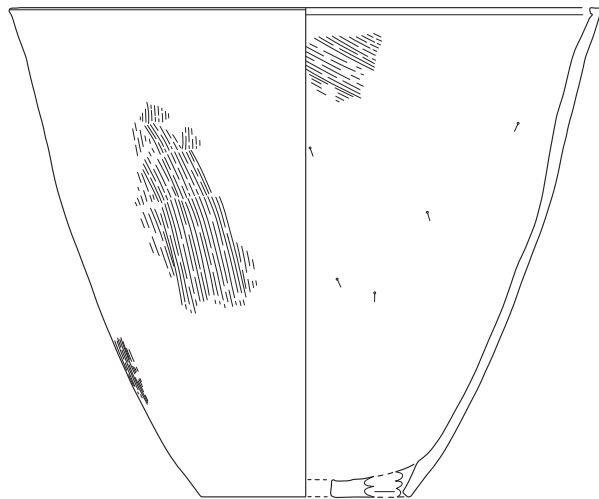


279

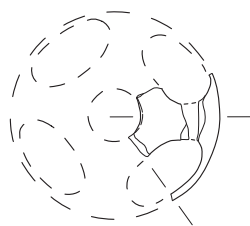


280

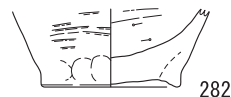
SH 2



281

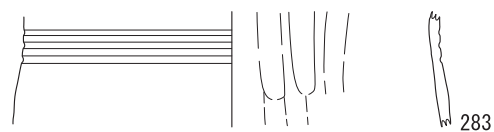


SH 4



282

SK 7

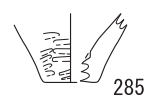


283

SB 5

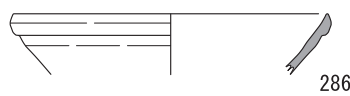


284

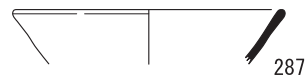


285

SB 1

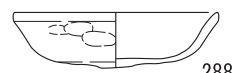


286



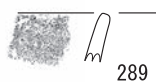
287

SB 4



288

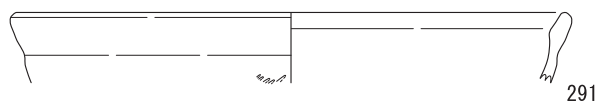
柱穴



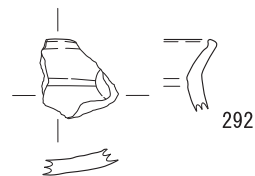
289



290

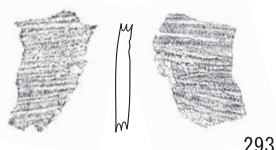


291

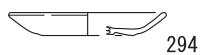


292

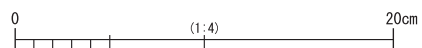
包含層

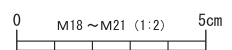
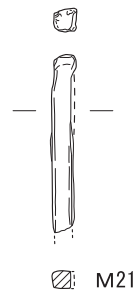
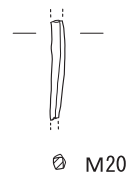
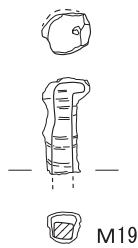
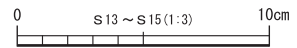
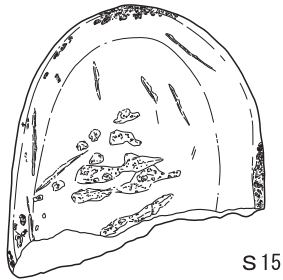
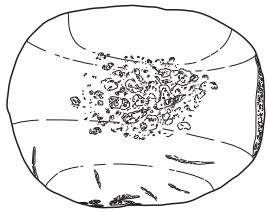
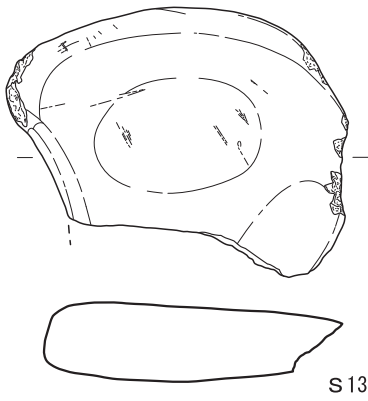
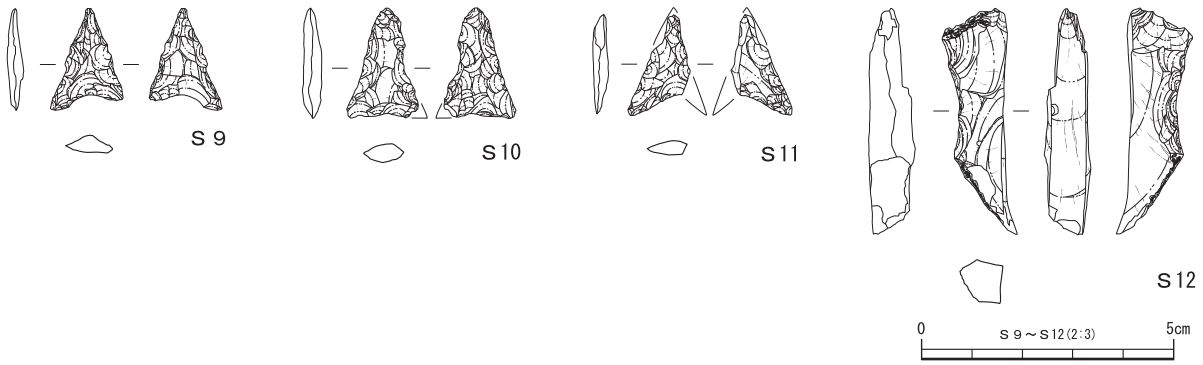


293

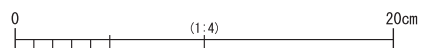
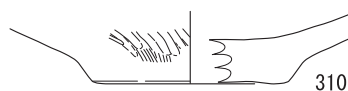
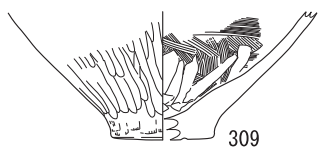
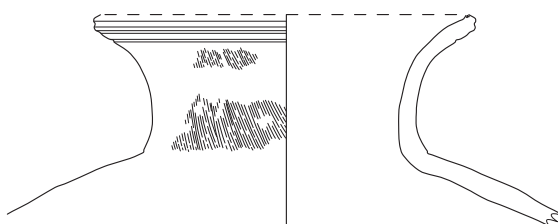
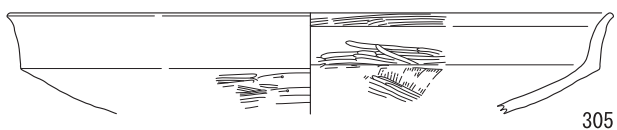
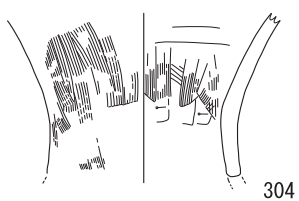
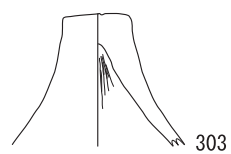
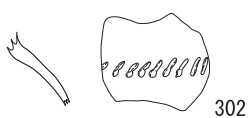
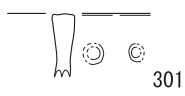


294



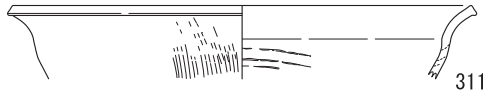


S K 161



城山遺跡
令和元年度

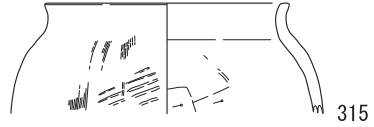
S K161



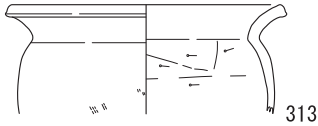
311



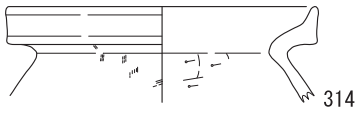
312



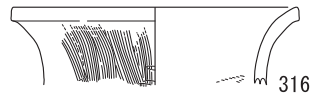
315



313

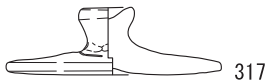


314



316

S H57・S H160 埋土



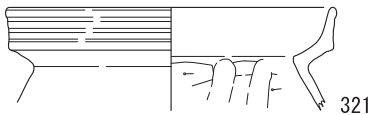
317



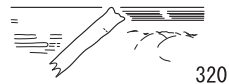
318



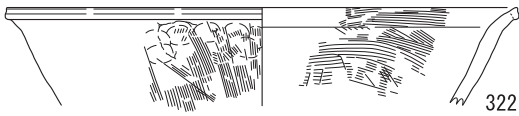
319



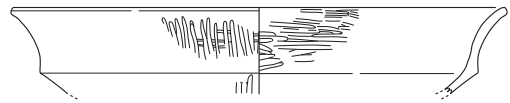
321



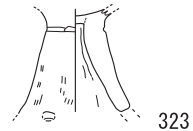
320



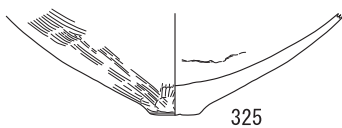
322



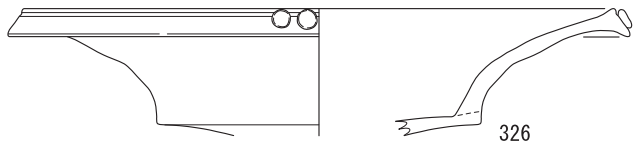
324



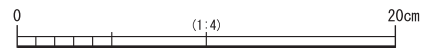
323



325



326

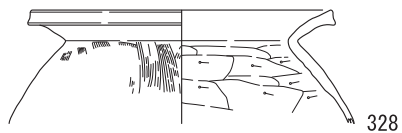


城山遺跡
令和元年度

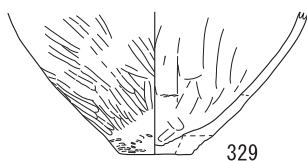
S H57 床面



327



328



329

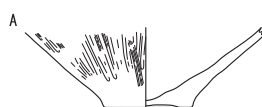


330

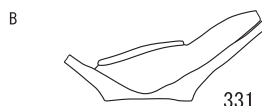


B

A



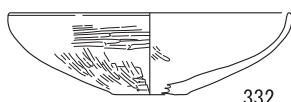
A



B

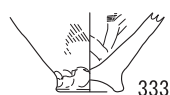
331

機械掘削



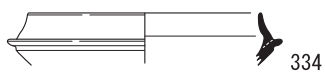
332

S D36

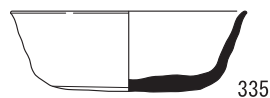


333

S D149



334

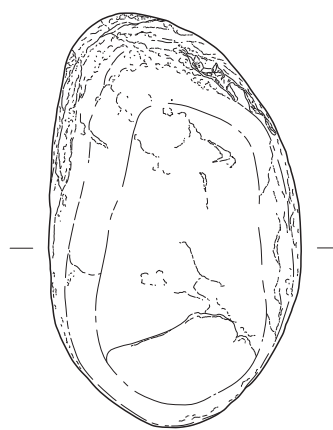


335

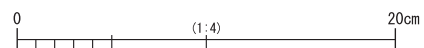
S P122



336



S 16



城山遺跡

写真図版



調査区上空から北西を望む（南東から、2016年9月14日撮影）



調査区上空から南東を望む（北西から、2016年9月14日撮影）



調査区上空から南西を望む（北東から、2016年9月14日撮影）



調査区全景（北東上空から、2016年9月14日撮影）



調査区全景（南東上空から、2016年9月14日撮影）



調査区全景（北西上空から、2016年9月14日撮影）



調査区上層全景（北西から）



調査区下層全景（北西から）



調査区上層全景（南東から）



NR1 全景（北西から）



NR1 埋土土層断面（南東から）



SK8 全景（北から）



SK8 土器出土状況（西から）



SK8 土器出土状況（南から）



SK8 埋土土層断面（東から）



①NR1内 土器 216 出土状況（南西から）



②SK8 土器出土状況（北西から）



③SK8 完掘状況（北から）



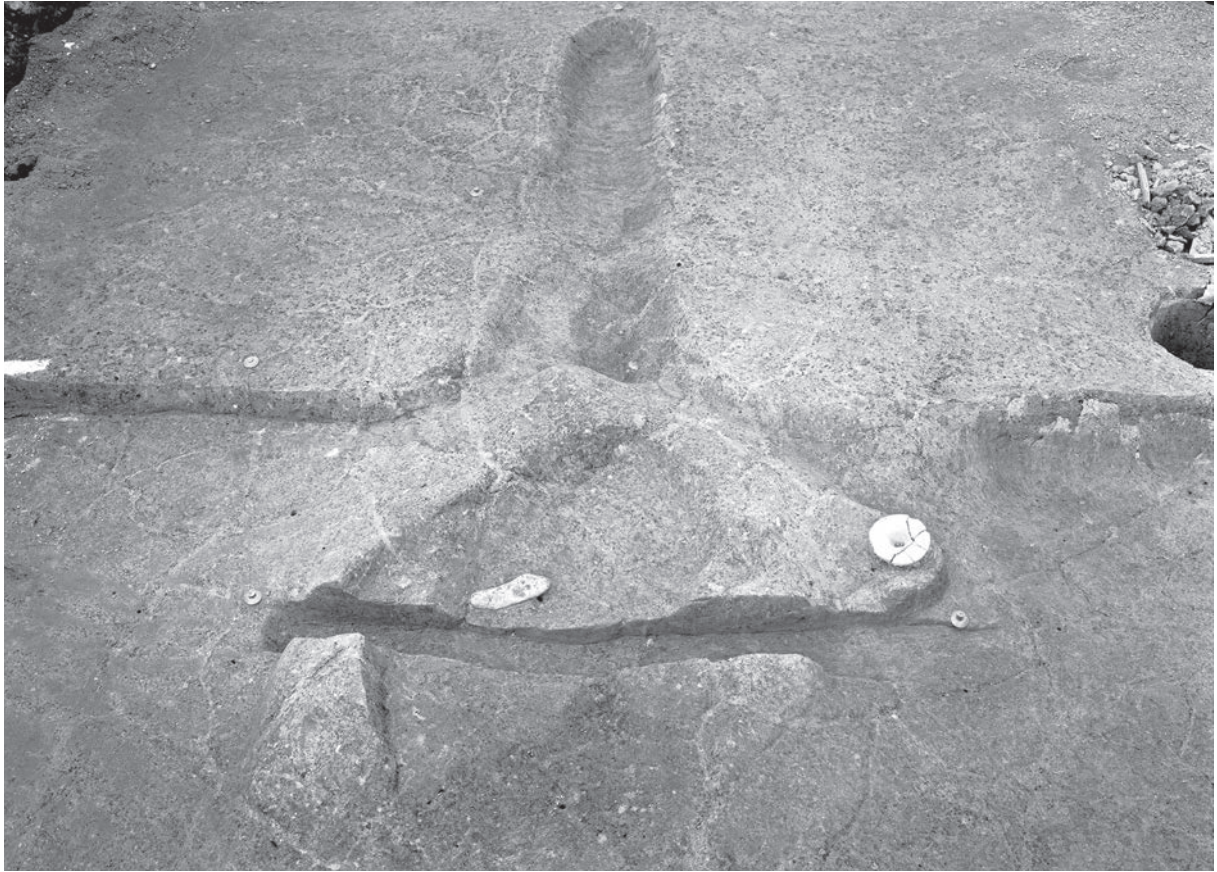
④SK8 完掘状況（南東から）



SH1・SH2（東から）



SH1・SH2・SB1（北西から）



SH1 竈 (南東から)



① SH1 竈 上部埋土除去後 (南東から)



② SH1 竈 埋土土層断面 (南西から)



③ SH1 竈 截ち割り断面 (南東から)



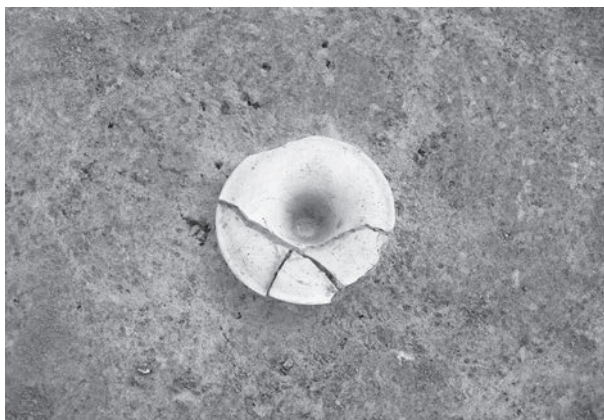
④ SH1 竈 截ち割り断面 (南西から)



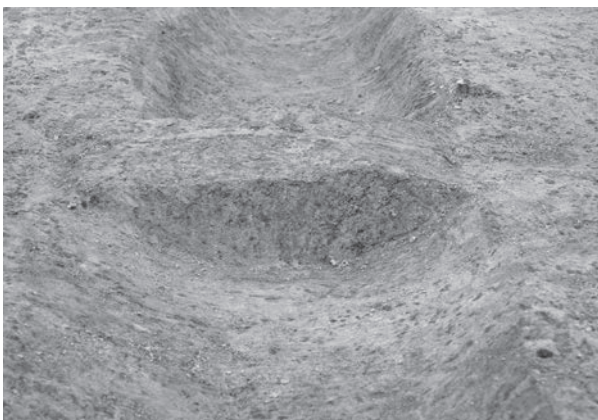
①SH1 埋土土層断面（南東から）



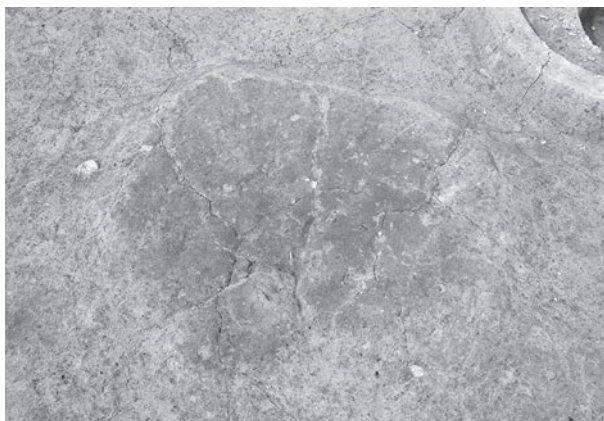
②SH1 埋土土層断面（北から）



③SH1 竈脇 高坏 277 出土状況（北東から）



④SH1 煙道部 埋土土層断面（南東から）



⑤SH1内焼土1（南西から）



⑥SH1内焼土1 截ち割り断面（北西から）



⑦SH1内焼土2 截ち割り断面（北西から）



⑧SH1内SP57 埋土土層断面（北東から）



SH2 竈（南西から）



①SH2 竈（南東から）



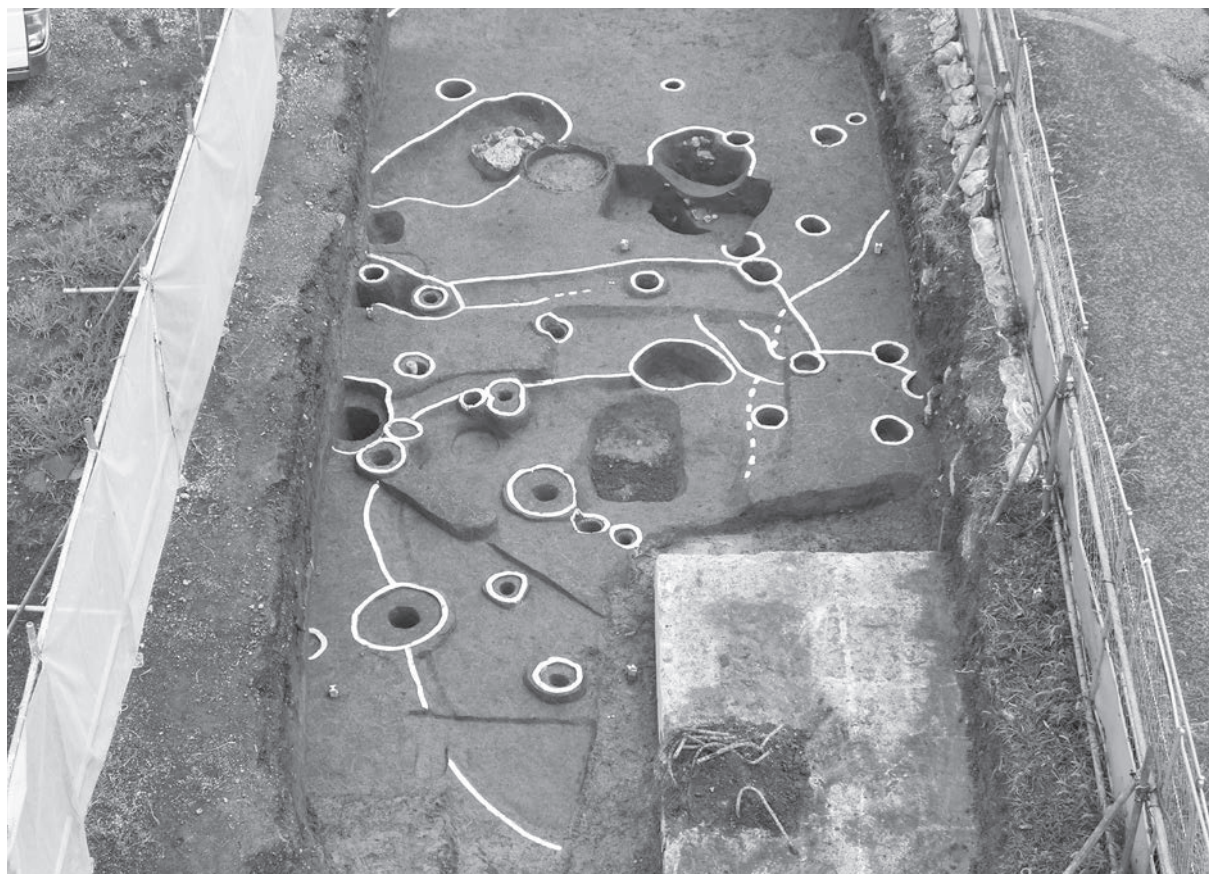
②SH2 竈 埋土土層断面（北西から）



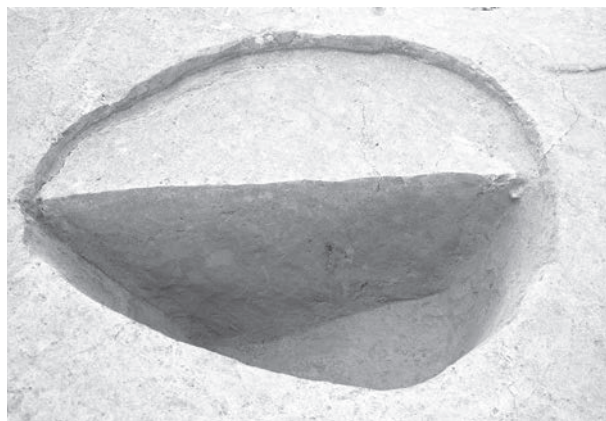
③SH2 竈 截ち割り断面（北西から）



④SH2 埋土土層断面（北東から）



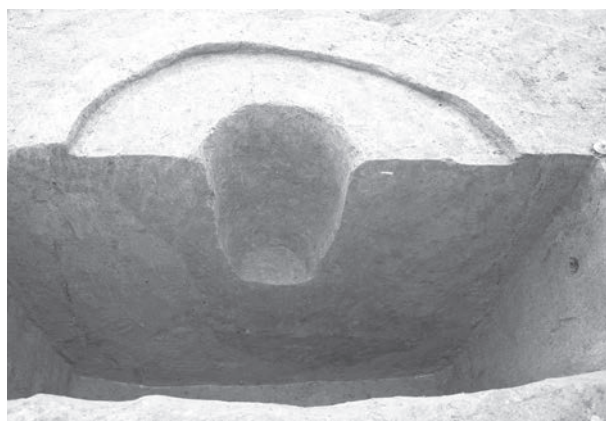
SH3・SH4・SB4・SB5（北西から）



①SB5内SK1 埋土土層断面（南東から）



②SB5内SP65 截ち割り断面（東から）



③SB5内SP50 截ち割り断面（東から）



SB2・SB3 (南東から)



①SB3内SP6 截ち割り断面 (南西から)



②SB3内SP7 截ち割り断面 (南西から)



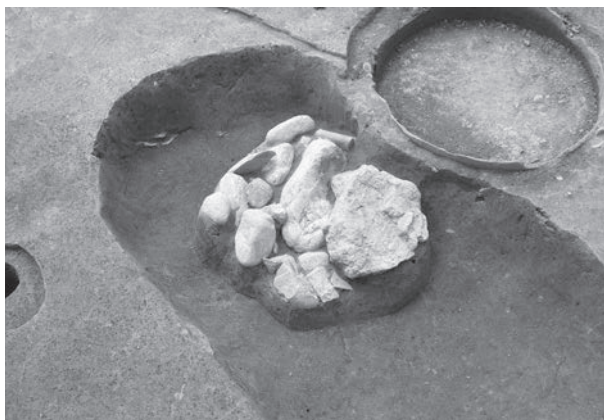
③SB3内SP56 截ち割り断面 (南西から)



①SK5 埋土土層断面（北東から）



②SK6（東から）



③SK6 礫検出状況（北東から）



④SK6 埋土土層断面（北から）



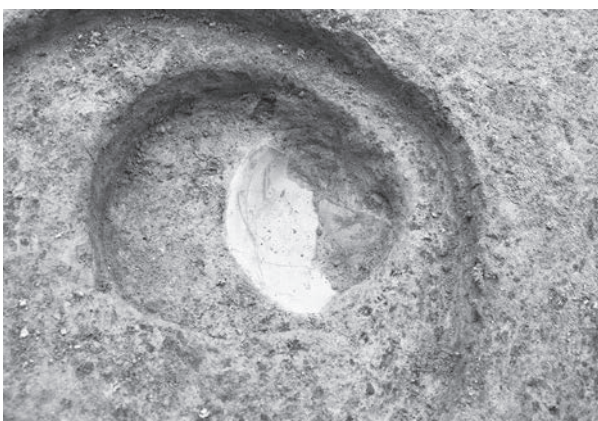
⑤SD3 埋土土層断面（北から）



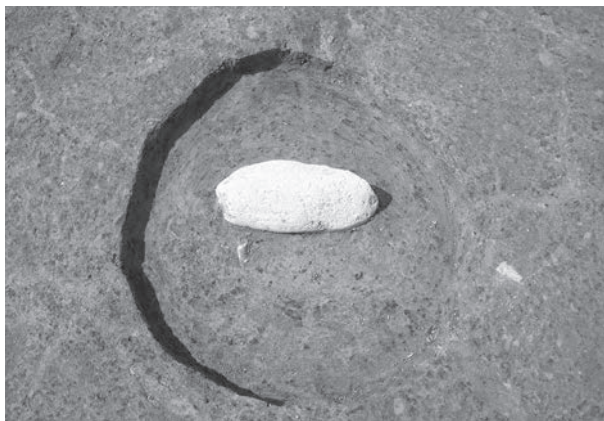
⑥SD4 埋土土層断面（南東から）



⑦SD5 埋土土層断面（北から）



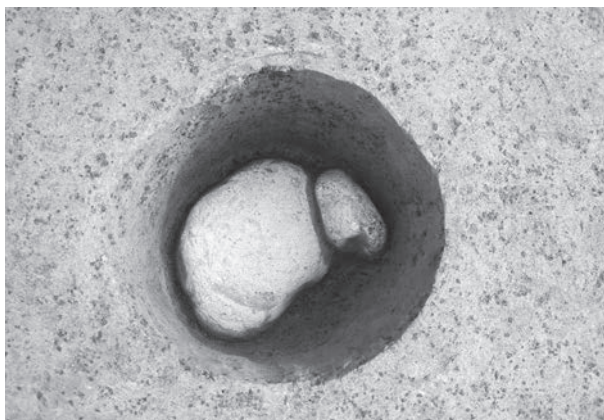
⑧SB4内SP12 皿288出土状況（北から）



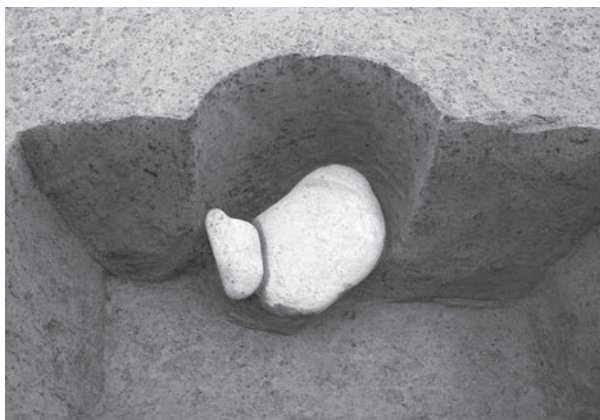
① S P 32 礫出土状況（北東から）



② S P 41 石製品 S 15 出土状況（南東から）



③ S P 62 礎板石検出状況（南から）



④ S P 62 礎板石（北から）



⑤ 機械掘削状況（東から）



⑥ 遺構掘削状況（北から）



⑦ 遺構平面実測状況（西から）



⑧ 空中写真撮影状況（北西から）



調査区遠景（南東から）



調査区遠景（北西から）



D-1・2・3区 全景（上が北西）



D-4区 全景（上が南）



D-1・2・3区 全景（北西から）



C区 全景（南東から）



D-4区 全景（南東から）



D-1区 南西壁断面（東から）



D-2・3区 南西壁断面（北から）



C区 南西壁断面（北から）

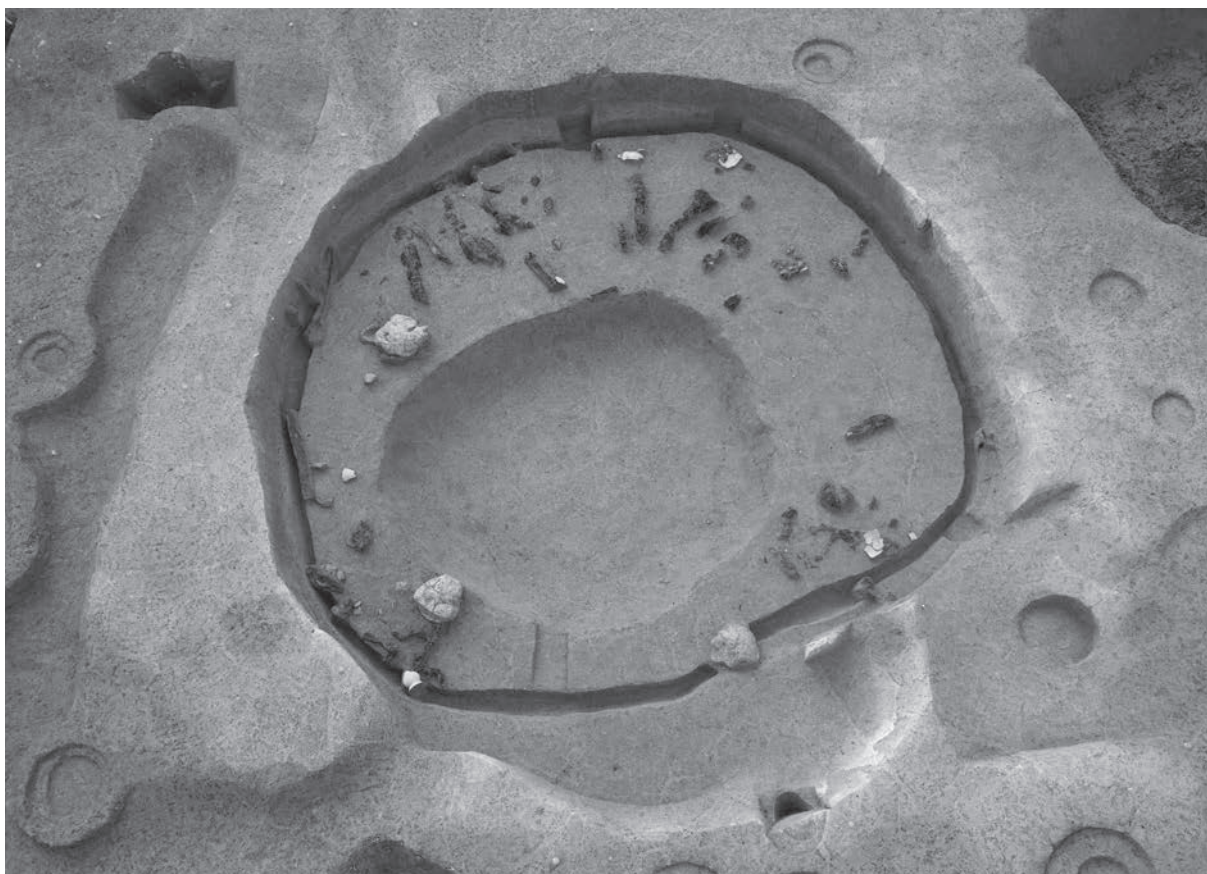


D-4区 南西壁断面（東から）

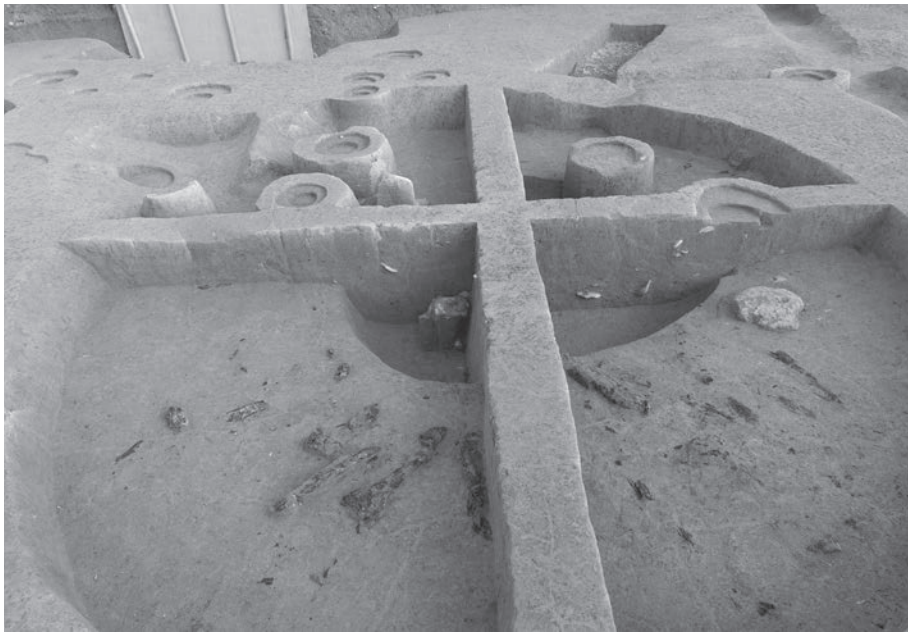


D-4区 検出状況（北から）

城山遺跡
令和元年度



SH57とSH160 全景（東から）



S H57 と S K161
南北土層断面（西から）



S H57 と S K161
東西土層断面（南から）



S H57 と S K161
東西土層断面（南西から）



SH57 垂木炭化材 (aから)



SH57 垂木炭化材 (bから)



SH57 炭化材 (cから)



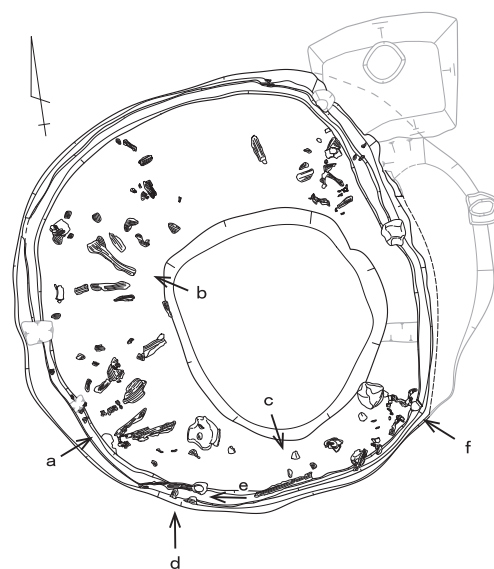
SH57 炭化材 (dから)



SH57 壁構築材 (eから)



SH57 炭化材 (fから)





S H57 粘土出土状況 (aから)



S H57 土器・炭化物・粘土出土状況 (1) (bから)



S H57 土器・炭化物・粘土出土状況 (2) (cから)



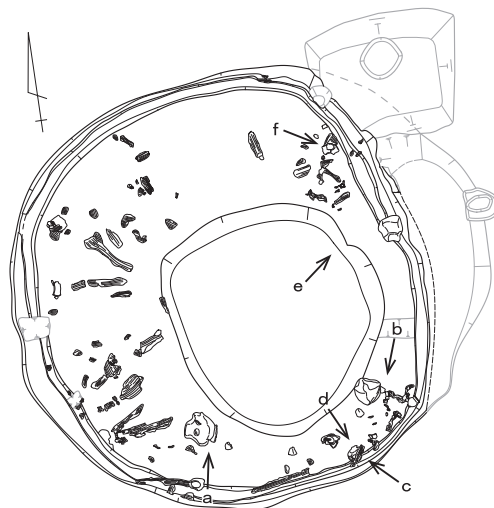
S H57 土器・炭化物・粘土出土状況 (3) (dから)



S K161 土器出土状況 (eから)



S H57 土器検出状況 (fから)





SH57 周壁溝断面（北から）



SK27 断面（西から）



SK33 断面（西から）



SD36 断面（東から）



SD149 断面（東から）



SX142 断面（北から D-2・3区）



SX142 断面（北から D-1区）

城山遺跡
令和元年度



S H156 検出状況（南から）



S H156
南北土層断面（西から）



S H156
東西土層断面（北から）



SK49 断面 (南から)



SD19 断面 (南から)



SP58 断面 (西から)



SP94 断面 (東から)



SP122 断面 (東から)



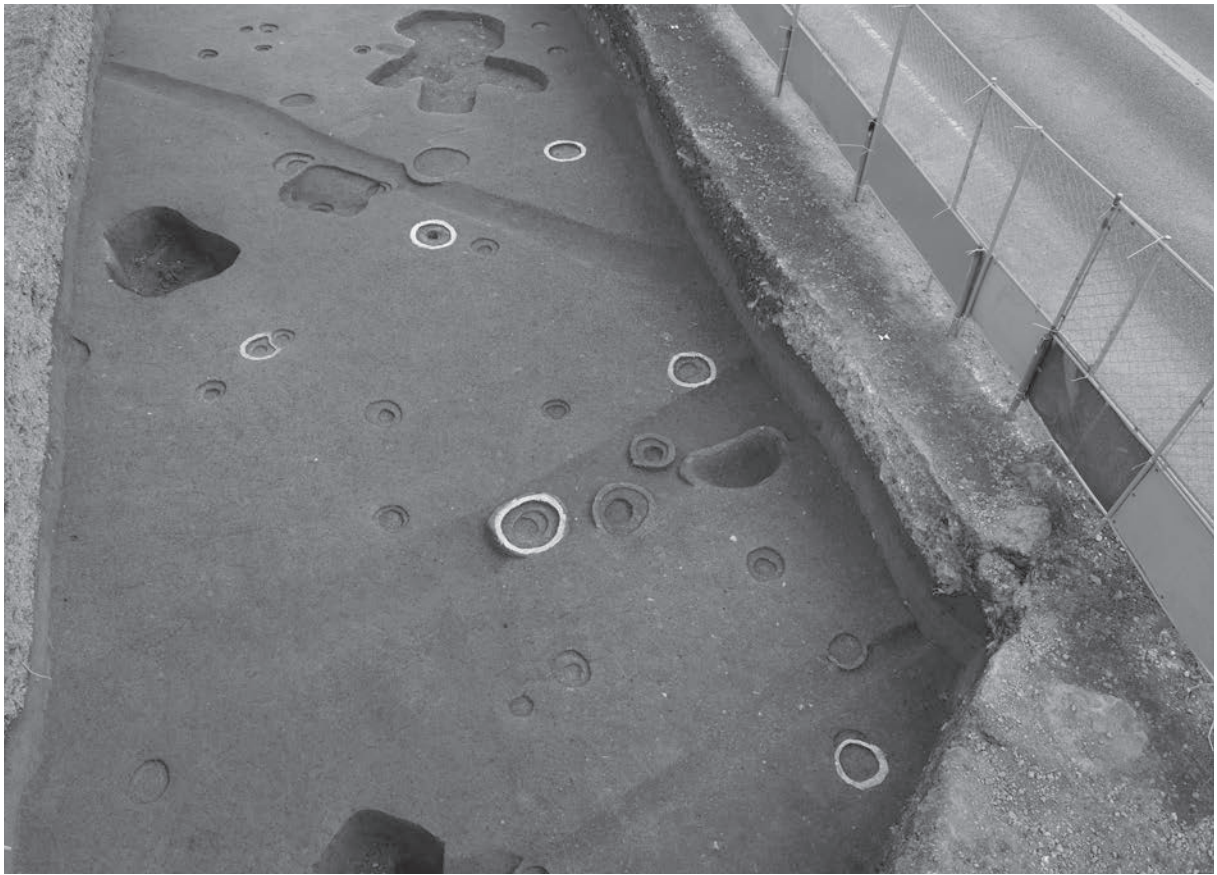
SP138 断面 (南東から)



SP40 断面 (東から)



SP48 断面 (北東から)



SB1 検出状況（北西から）



SP103 断面（東から）



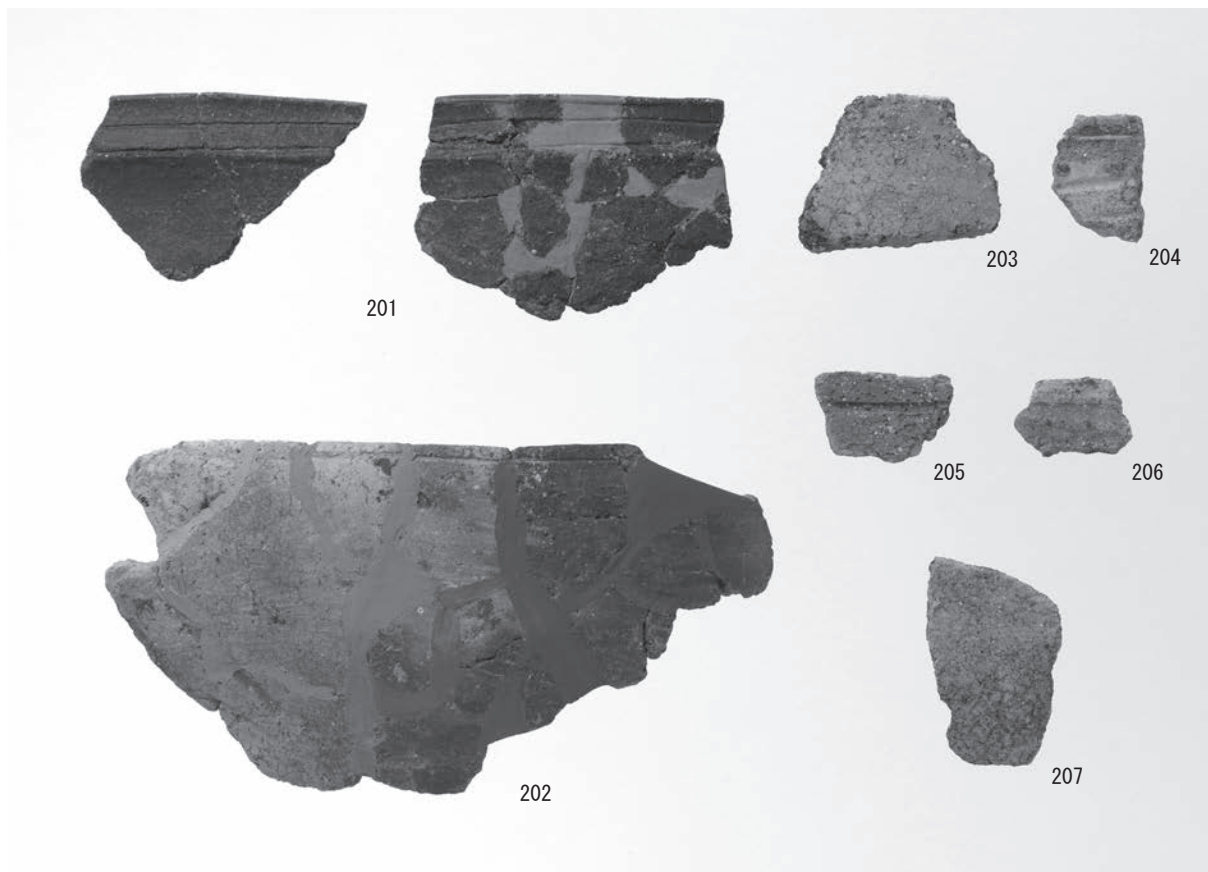
SP113 断面（東から）



SP121 断面（東から）

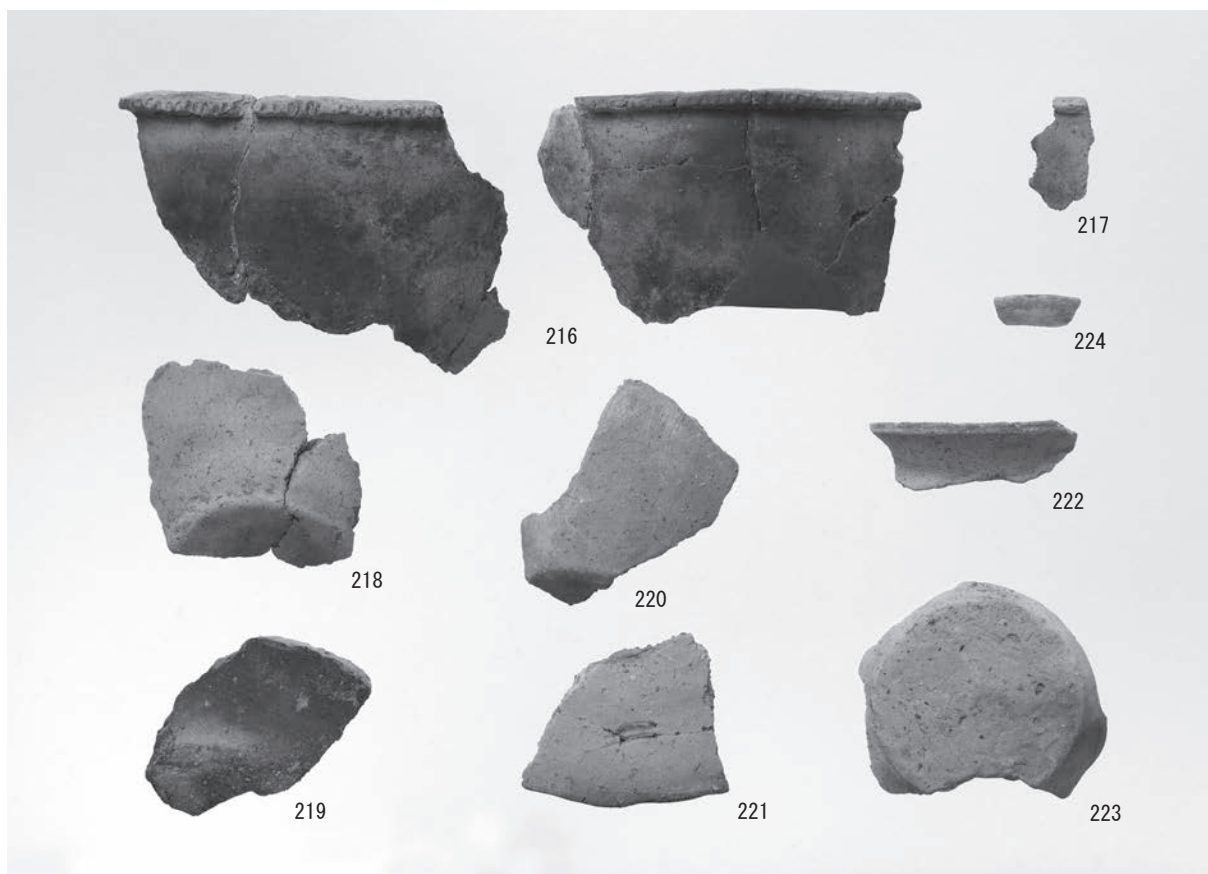
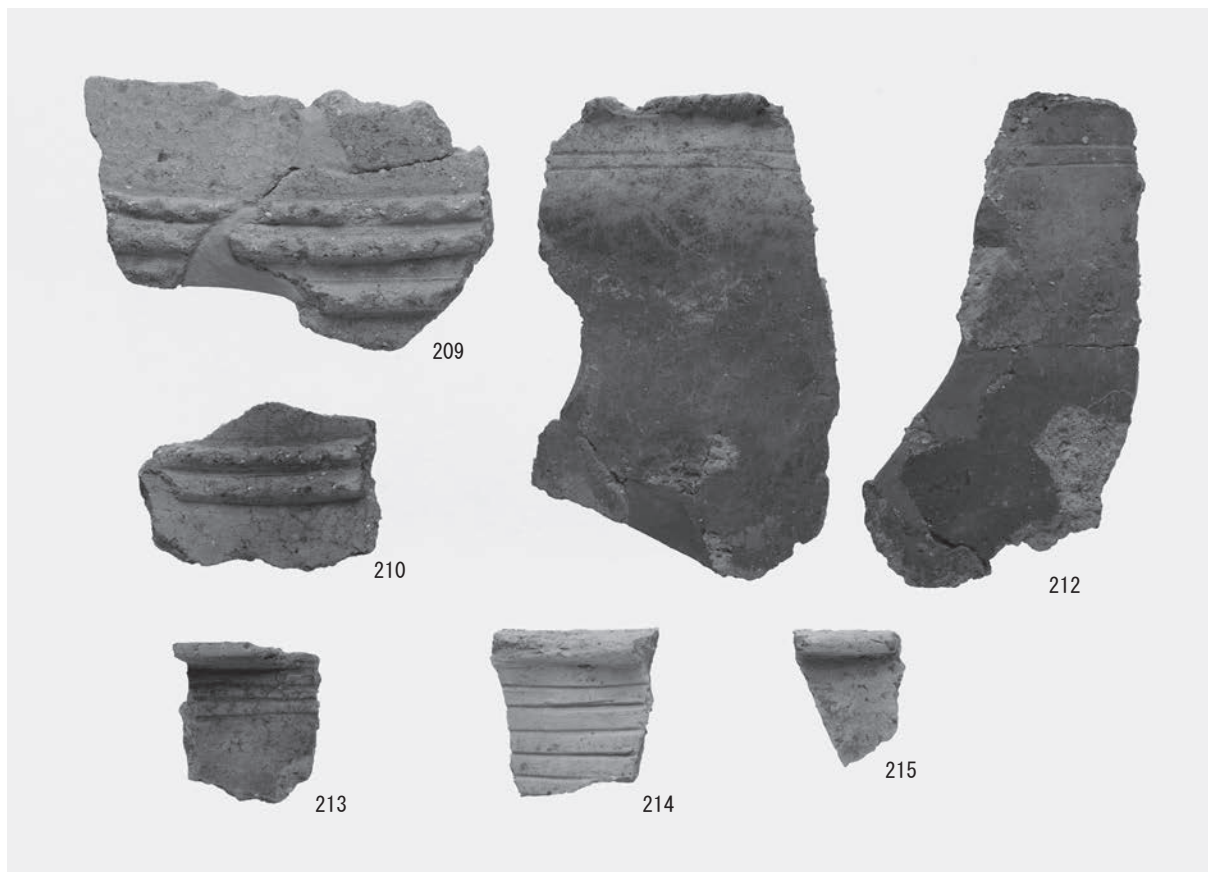


SP134 断面（南東から）

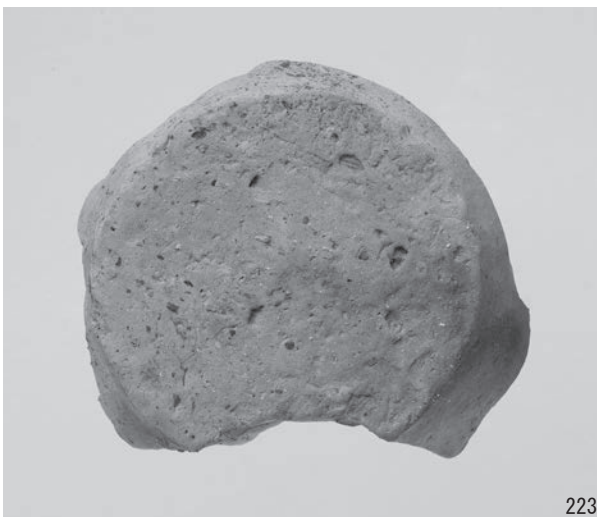
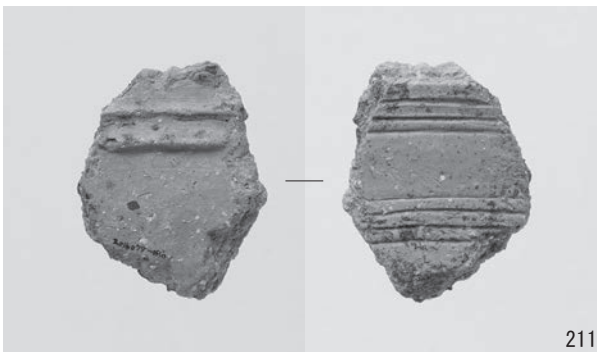


NR1出土土器(1)

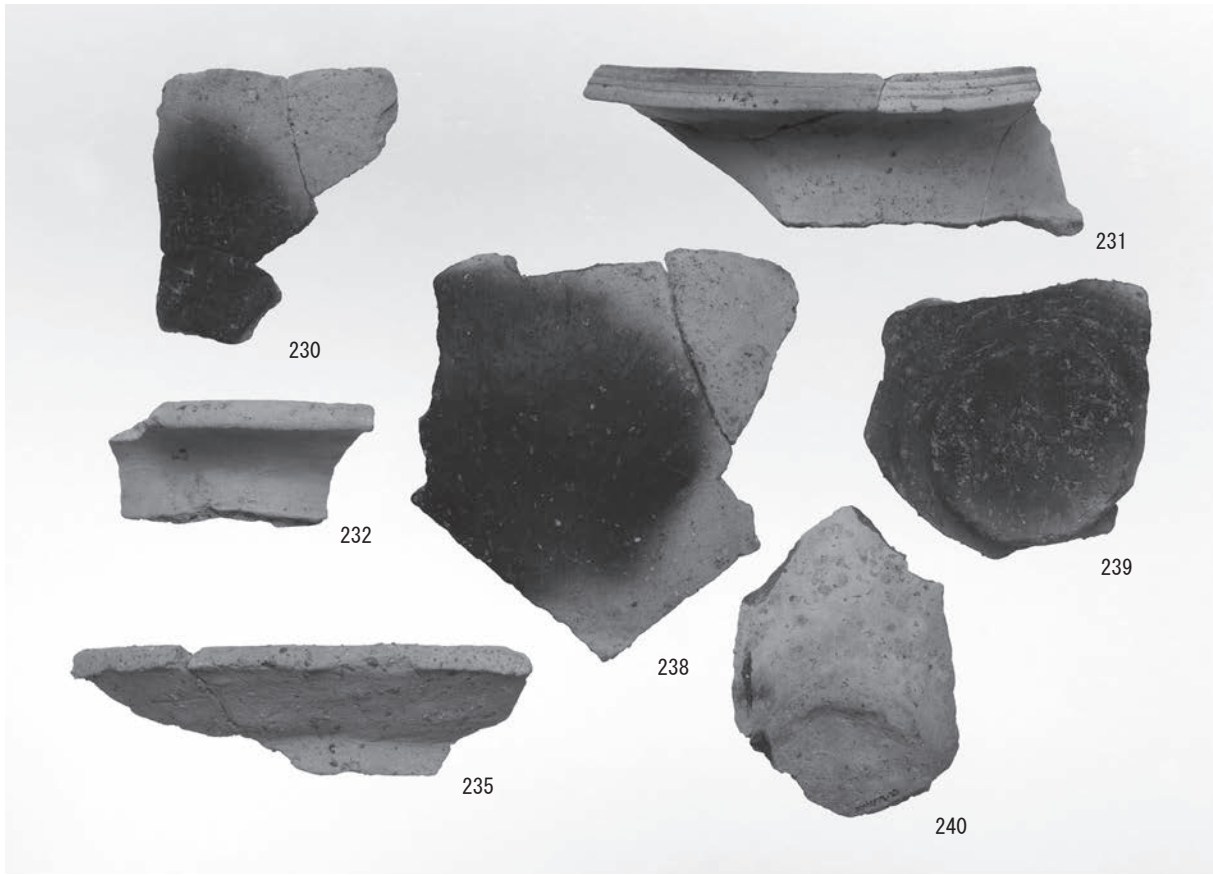
208



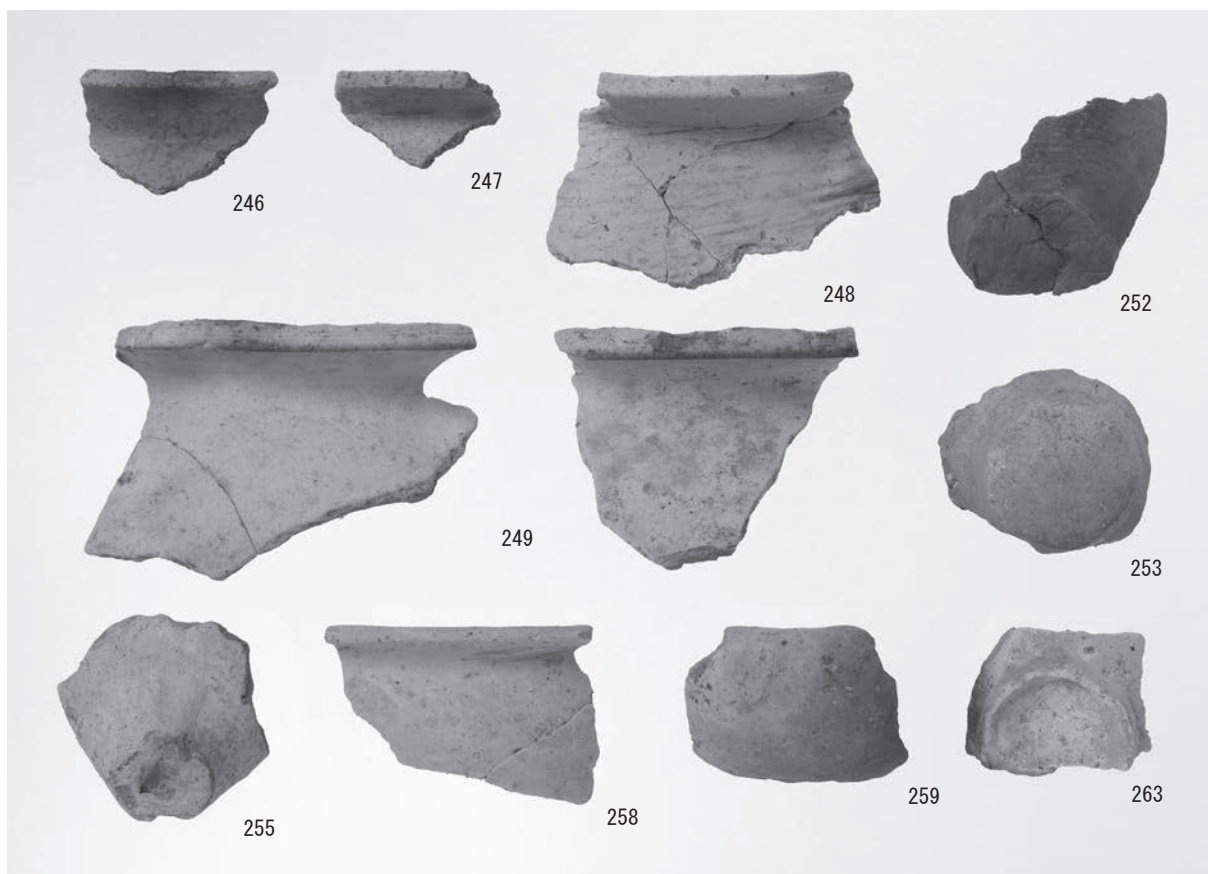
NR 1 出土土器 (2)



NR 1 出土土器 (3)、SK 8 出土土器 (1)



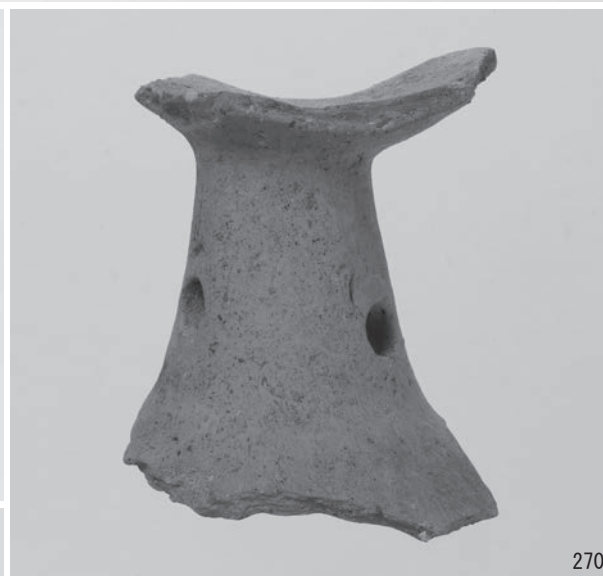
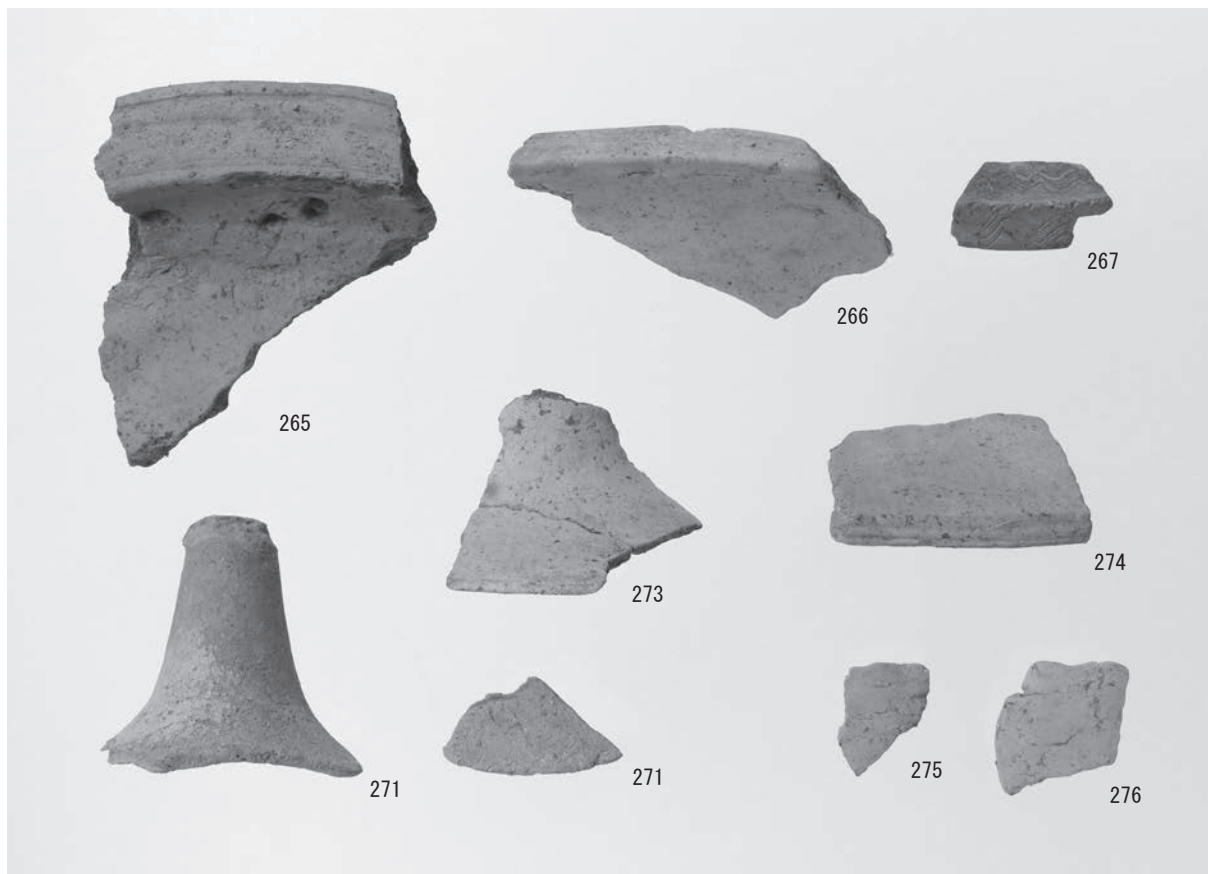
SK8出土土器(2)



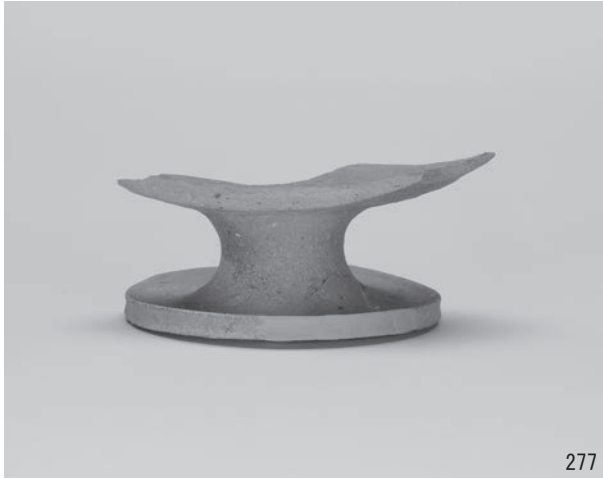
SK8出土土器(3)



SK8出土土器(4)



SK8出土土器(5)



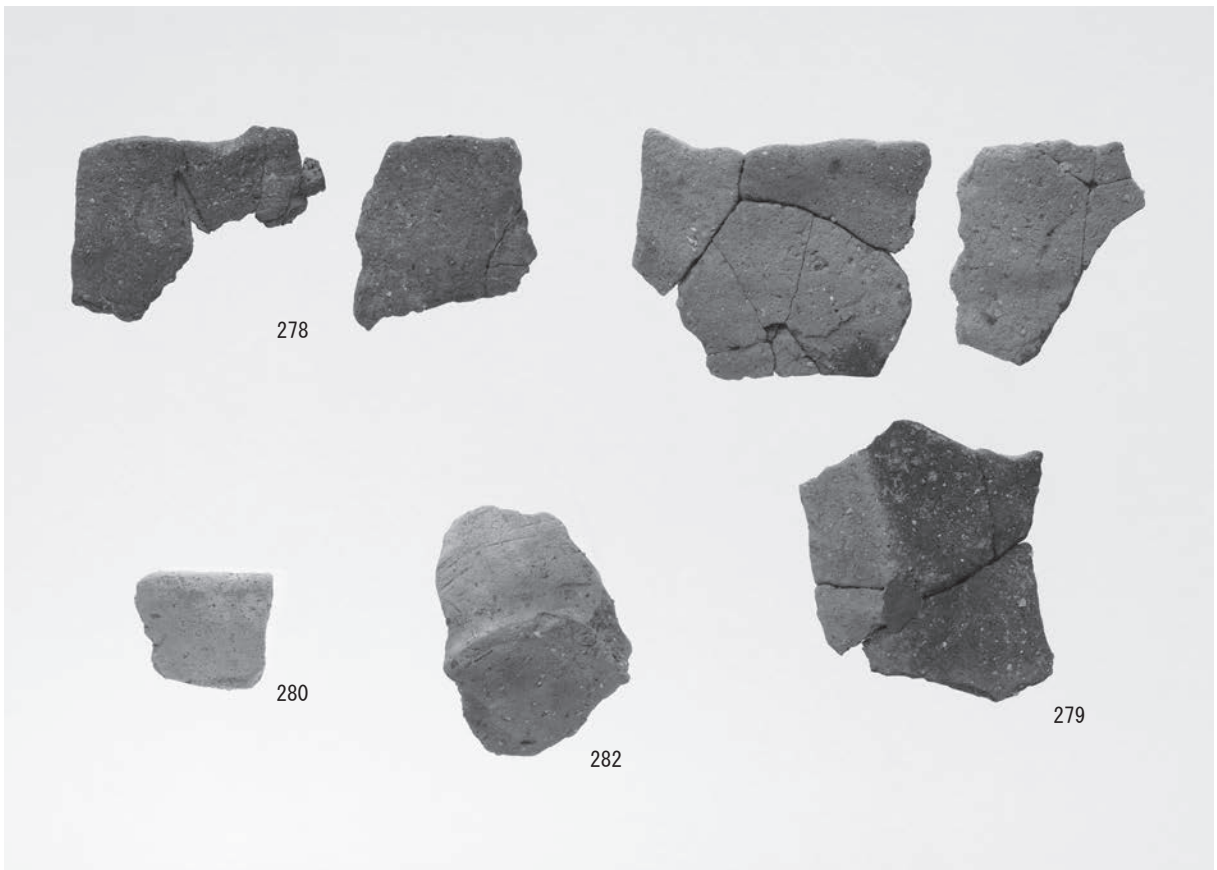
277



288



281



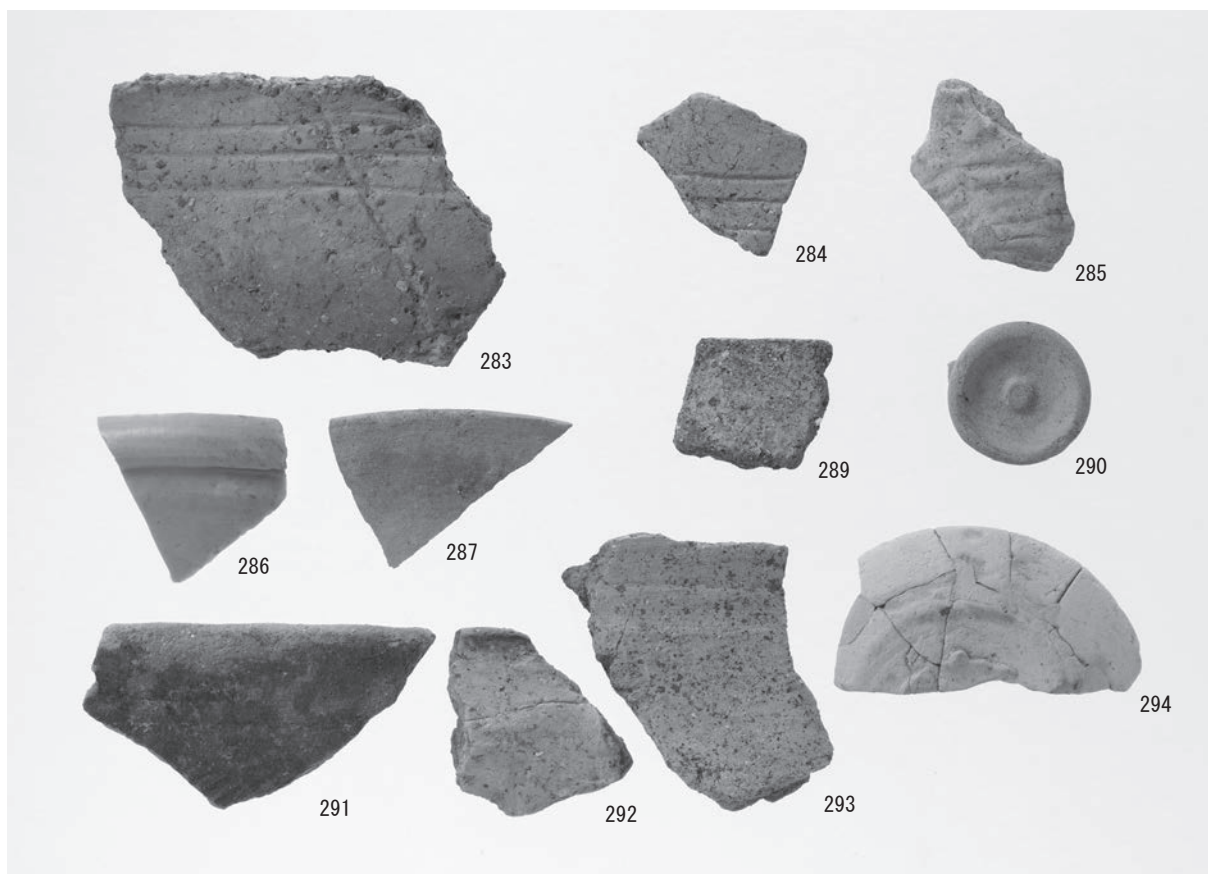
278

280

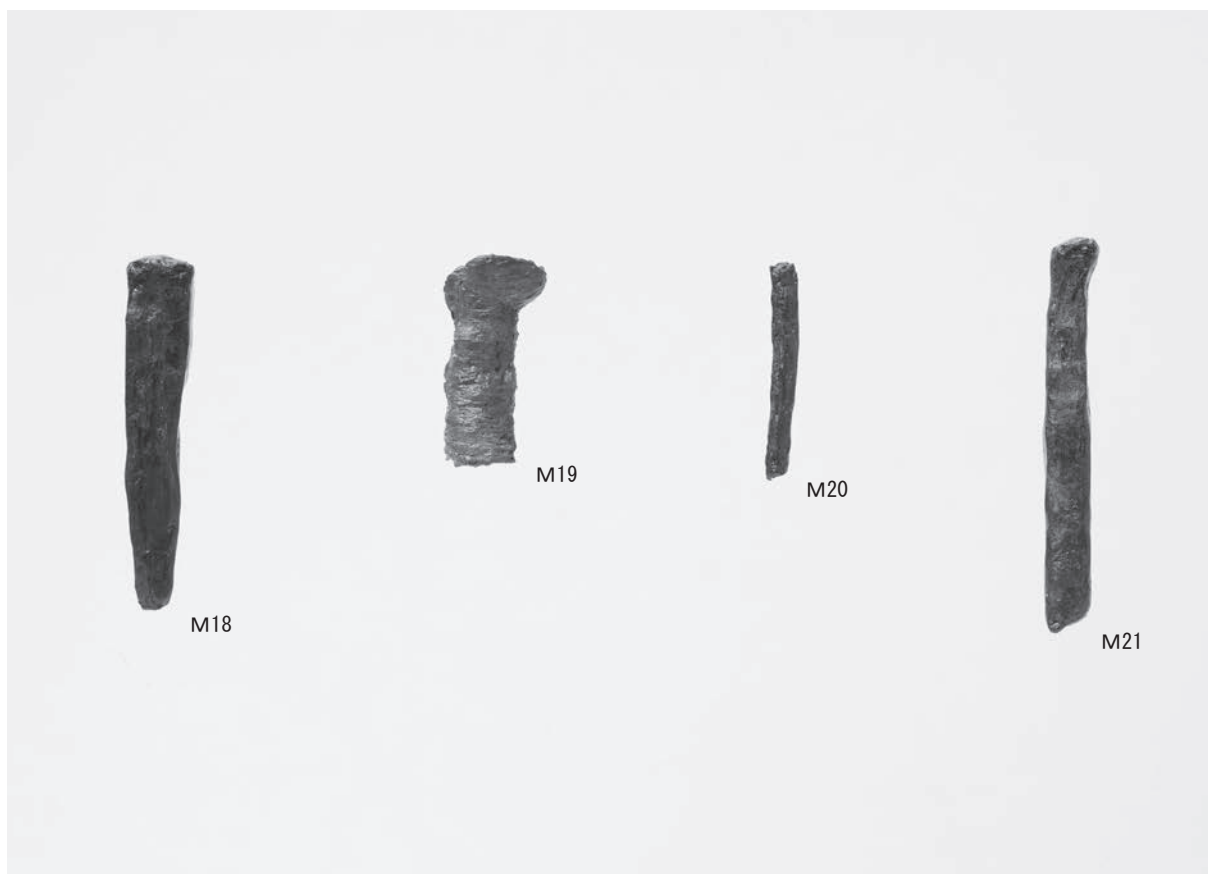
282

279

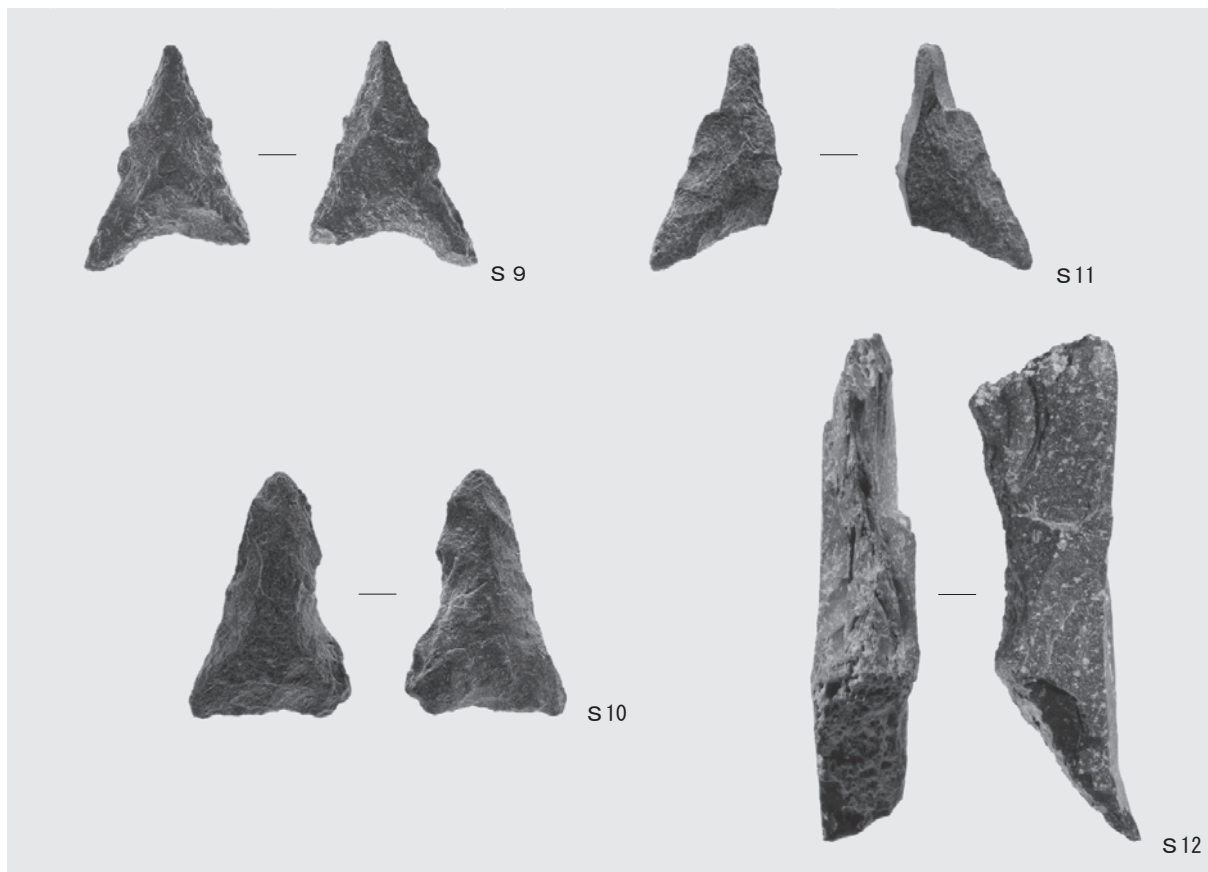
SH1・SH2・SH4・SB4内SP12出土土器



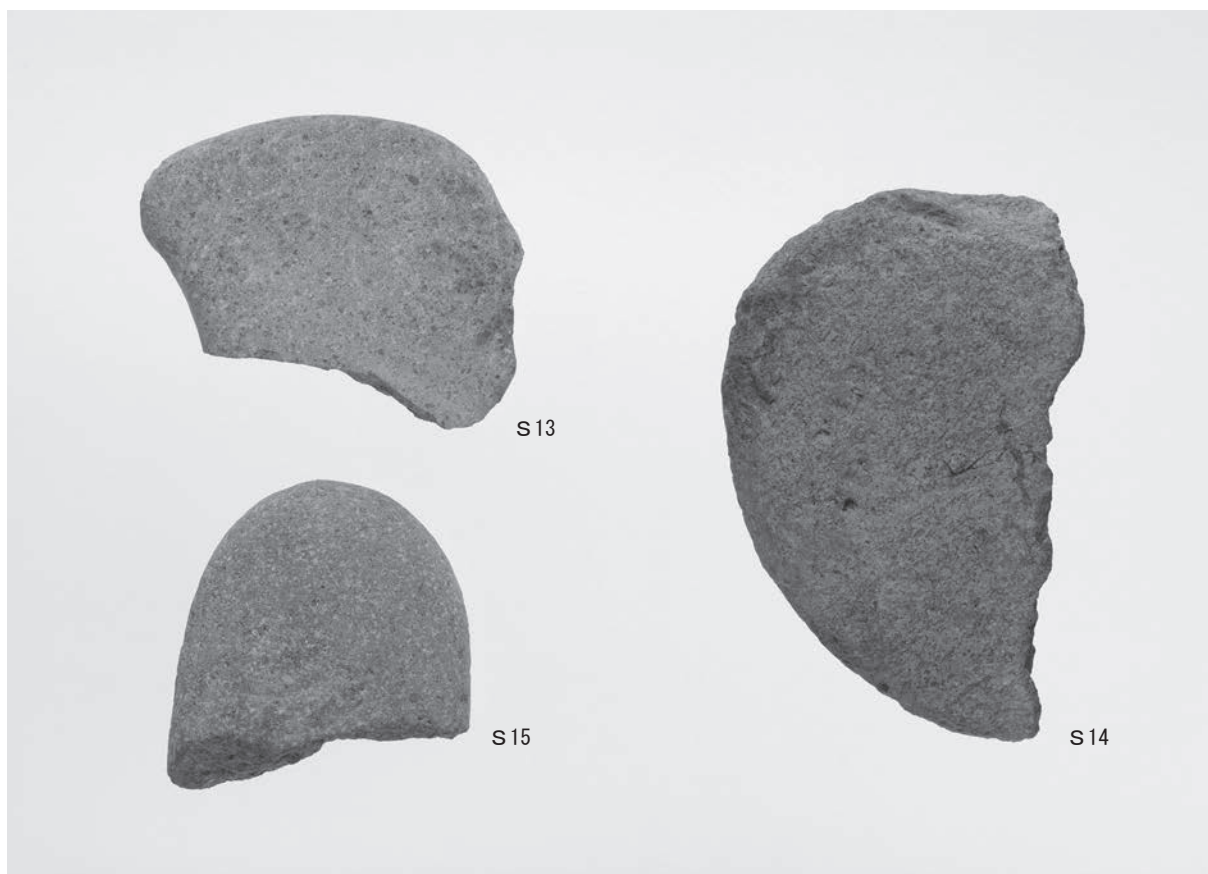
SK7・SB1内SP(柱穴)・SB5内SP・SP・包含層出土土器



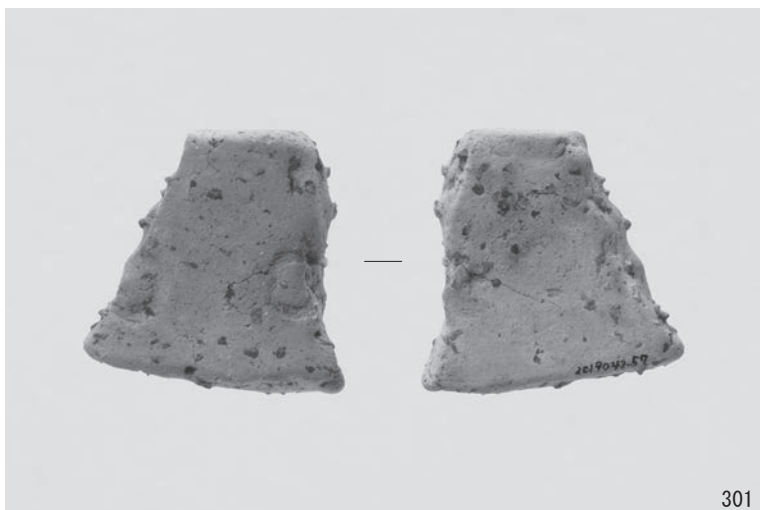
SH1・SP(柱穴)・包含層出土鉄釘



NR1・SB5内SP(柱穴)・SP・包含層出土石器



SK8・SP(柱穴)出土石製品



301



302



304



307



309



303

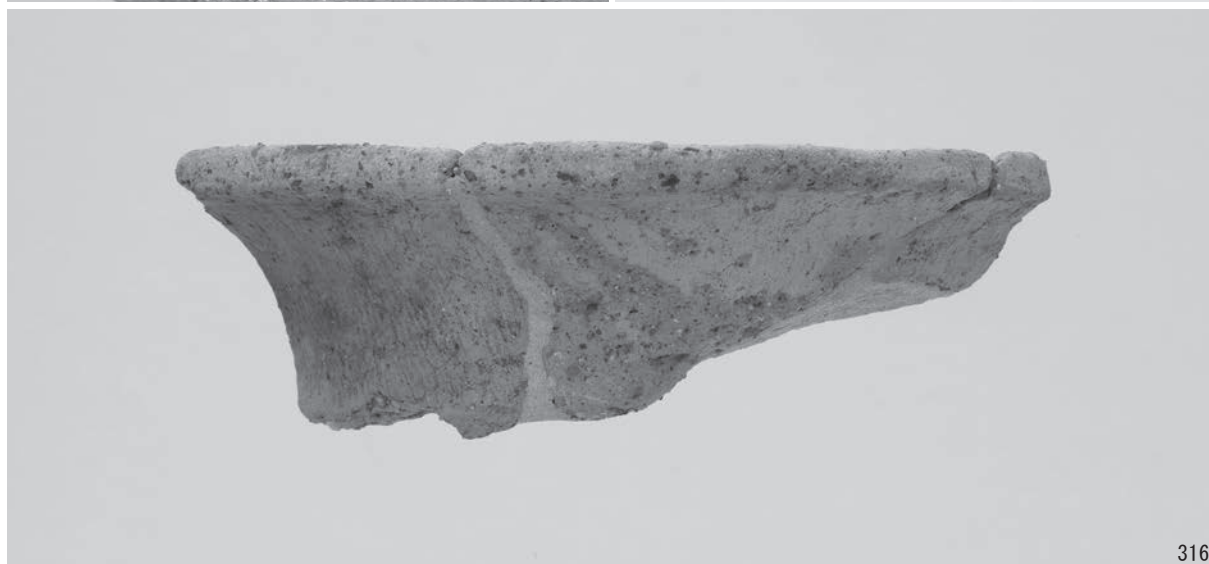
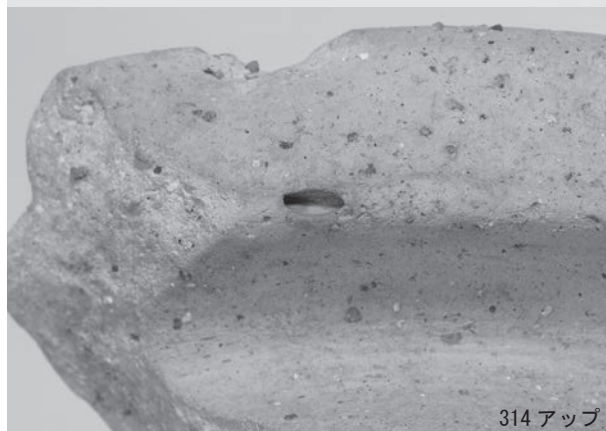
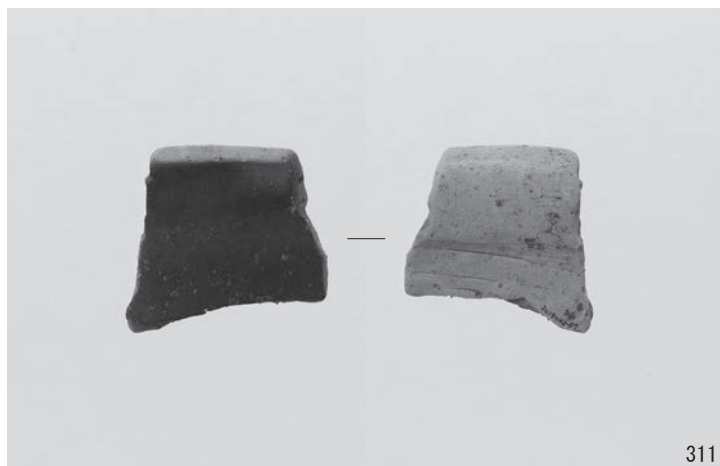


308

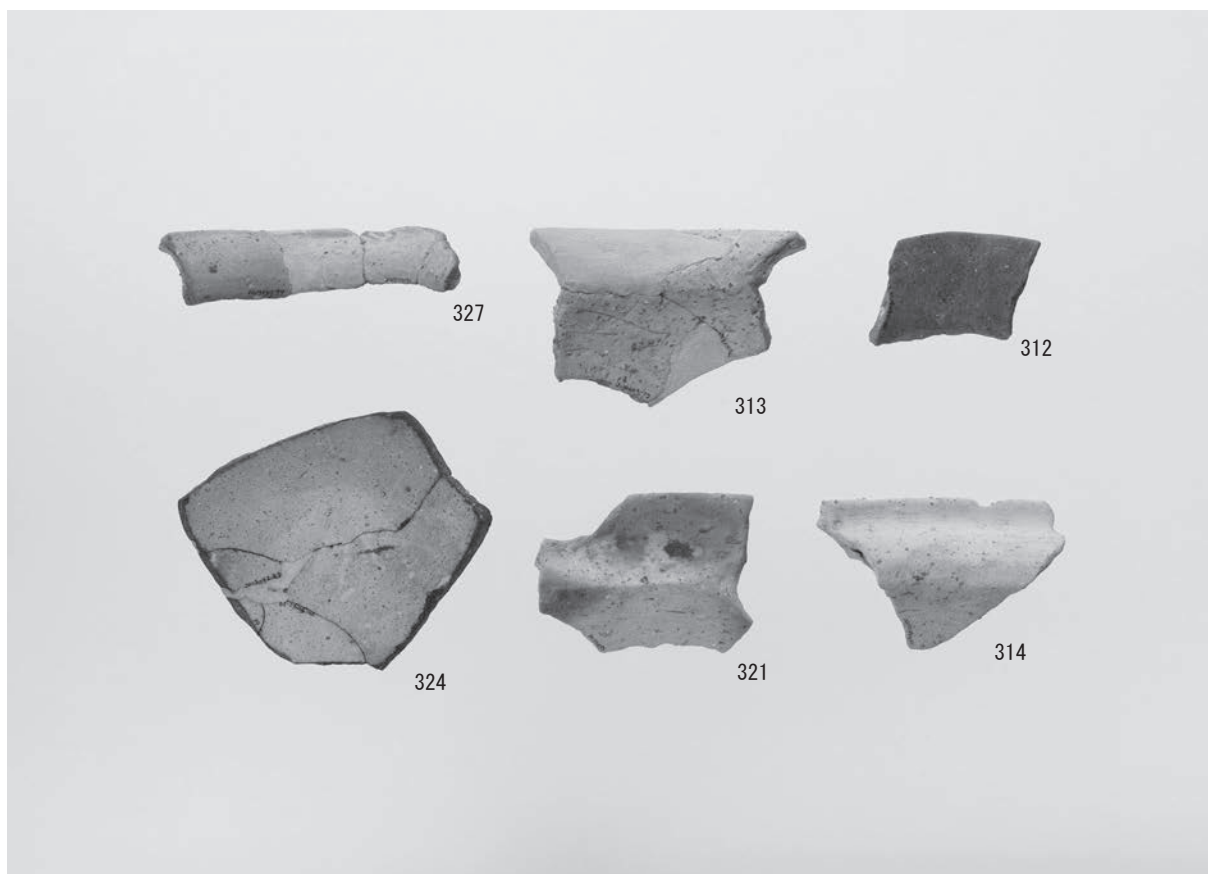
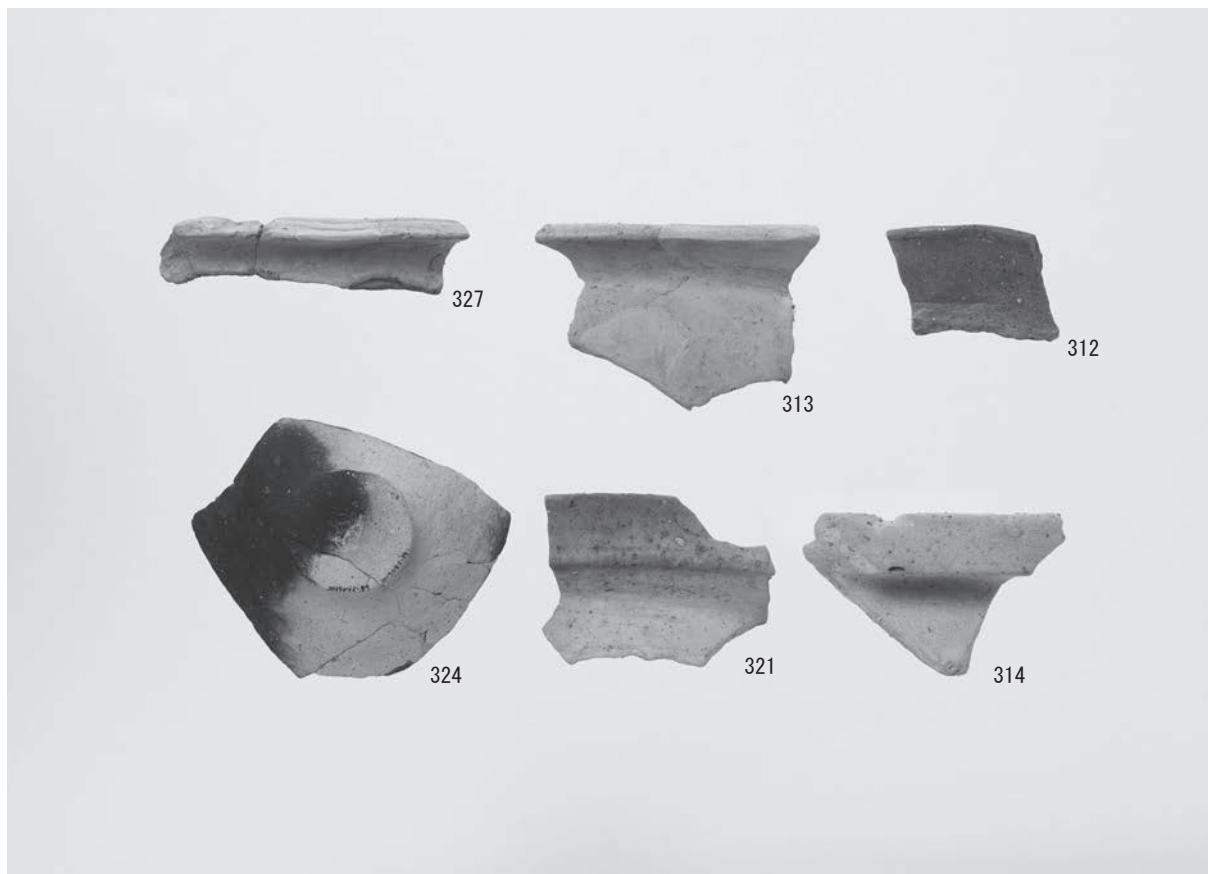
城山遺跡
令和元年度



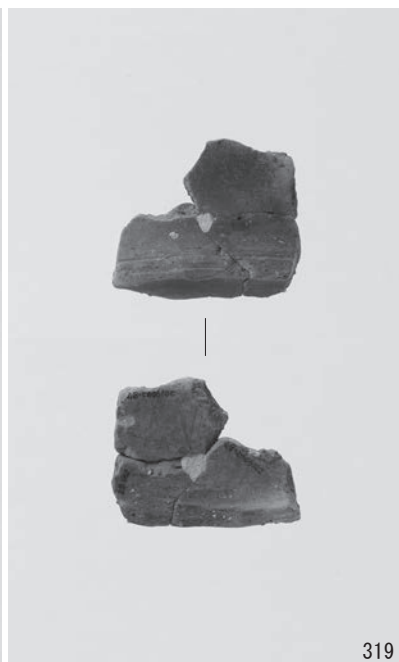
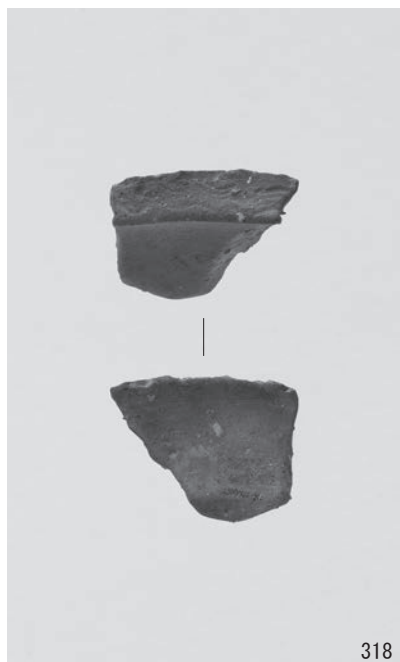
S K161 出土土器 (2)



城山遺跡
令和元年度



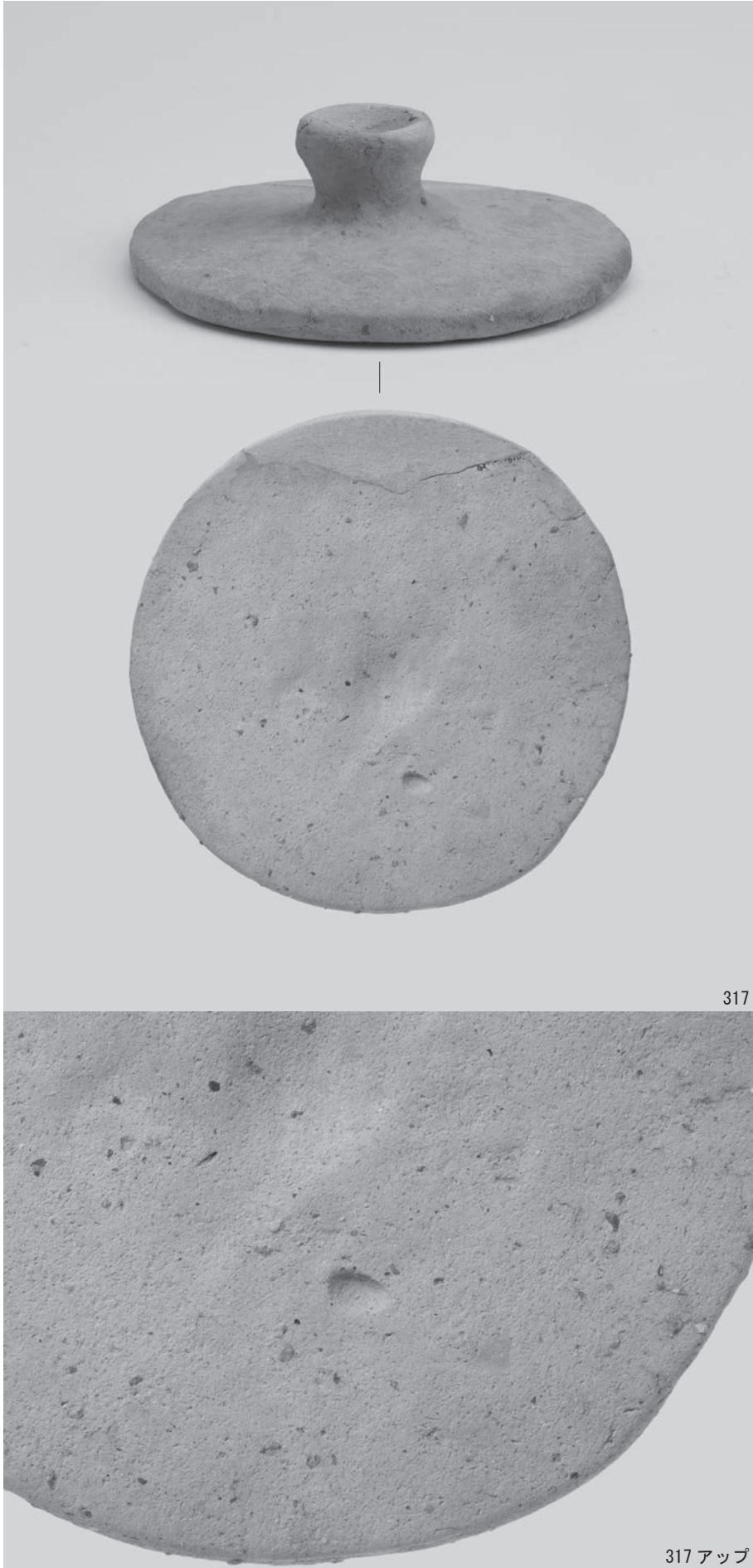
SK161・SH57・SH160 埋土出土土器 (2)



城山遺跡
令和元年度

S K161・S H57・S H160 埋土出土土器 (3)

城山遺跡
令和元年度



S H57・S H160 埋土出土土器



328



330



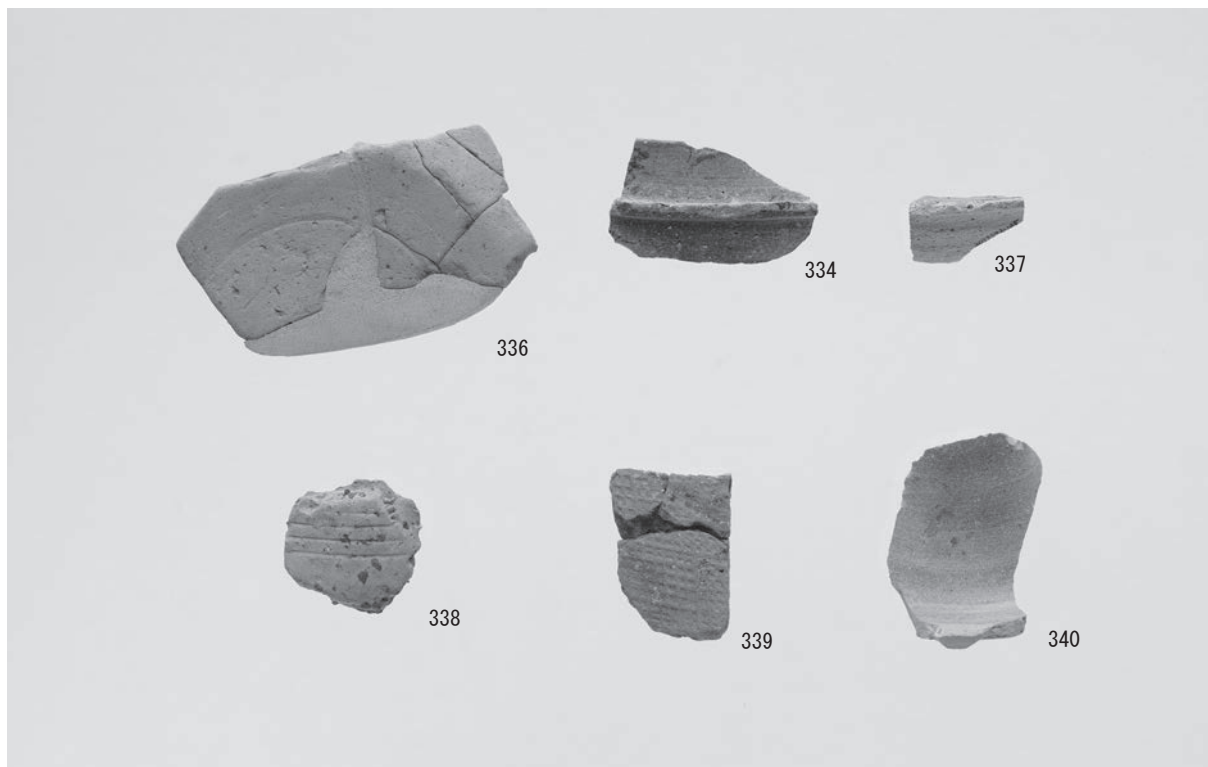
329

S H57 床面出土土器 (1)

城山遺跡
令和元年度



S H57 床面出土土器 (2)

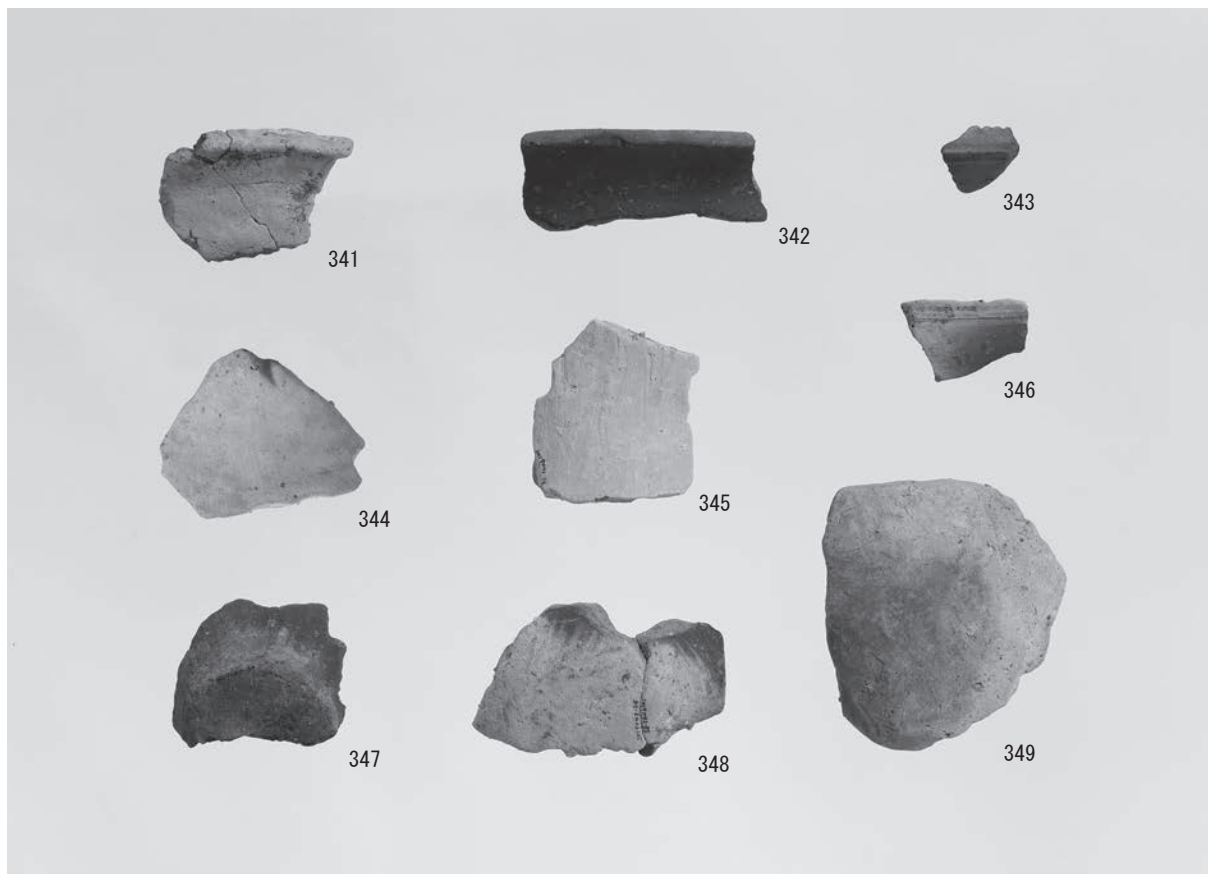


出土土器 (1)

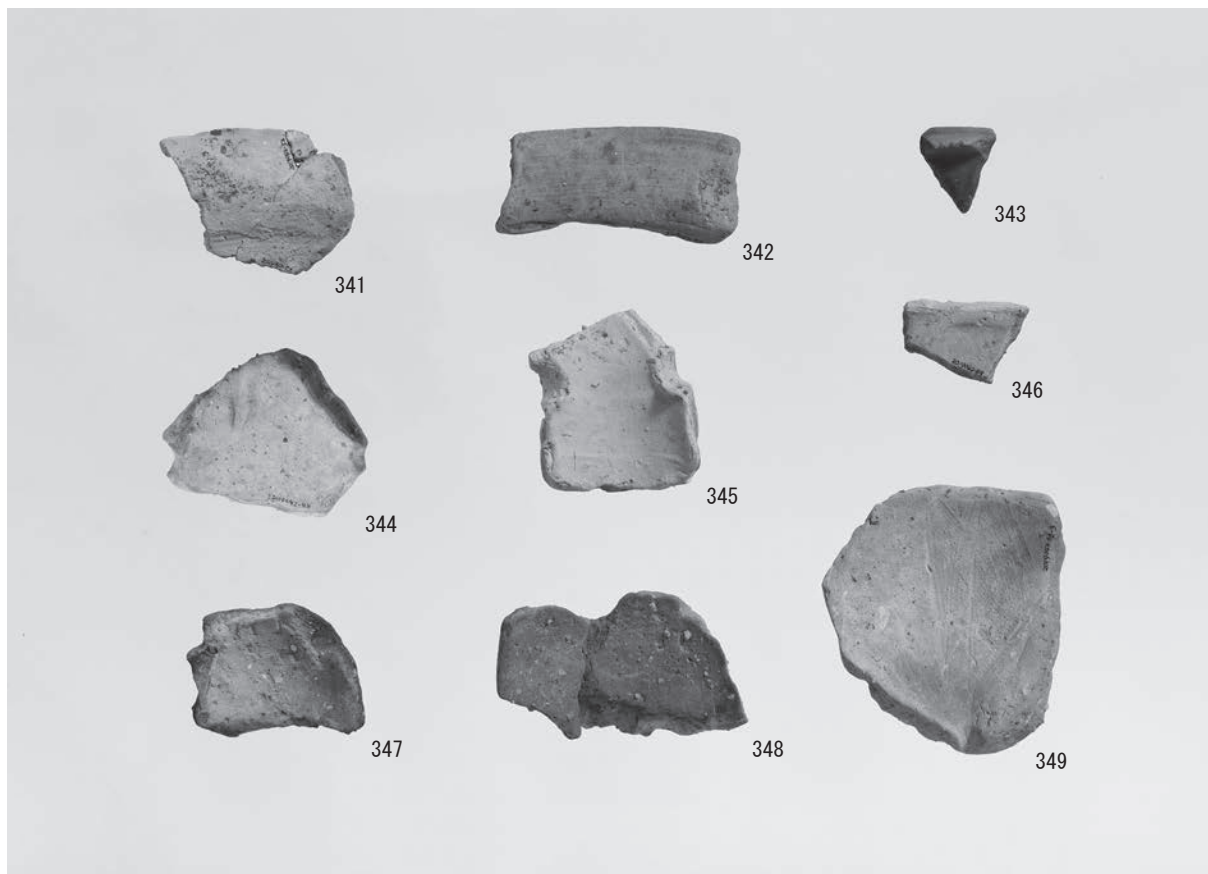
332



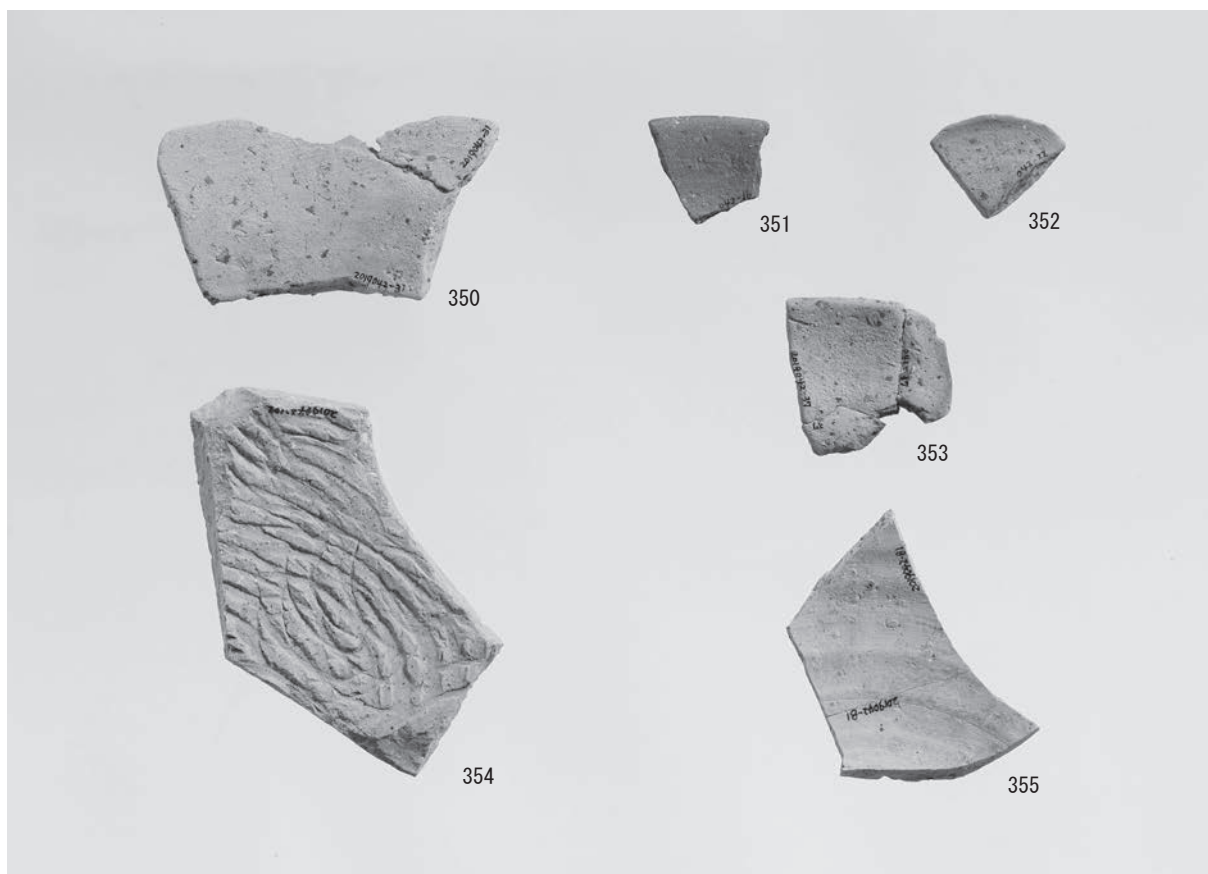
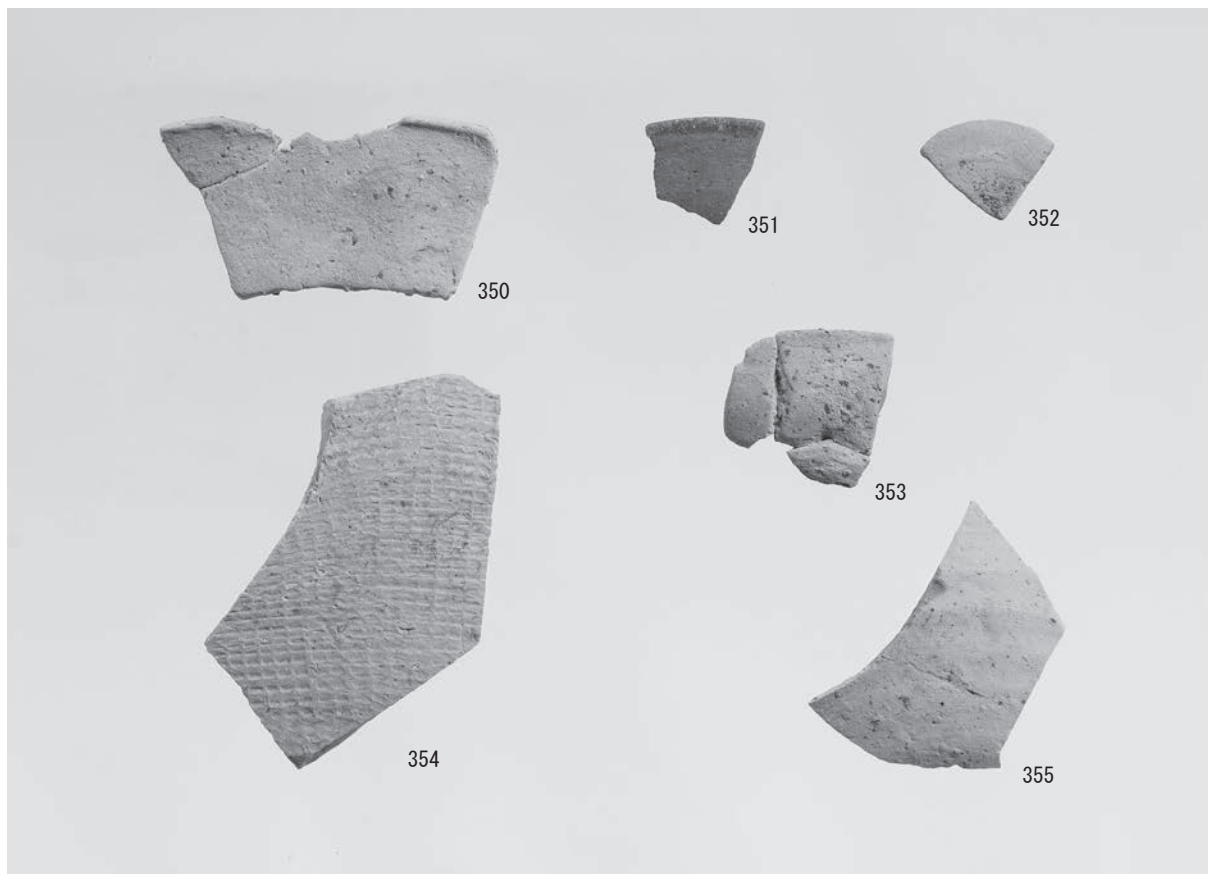
S K161 出土石製品



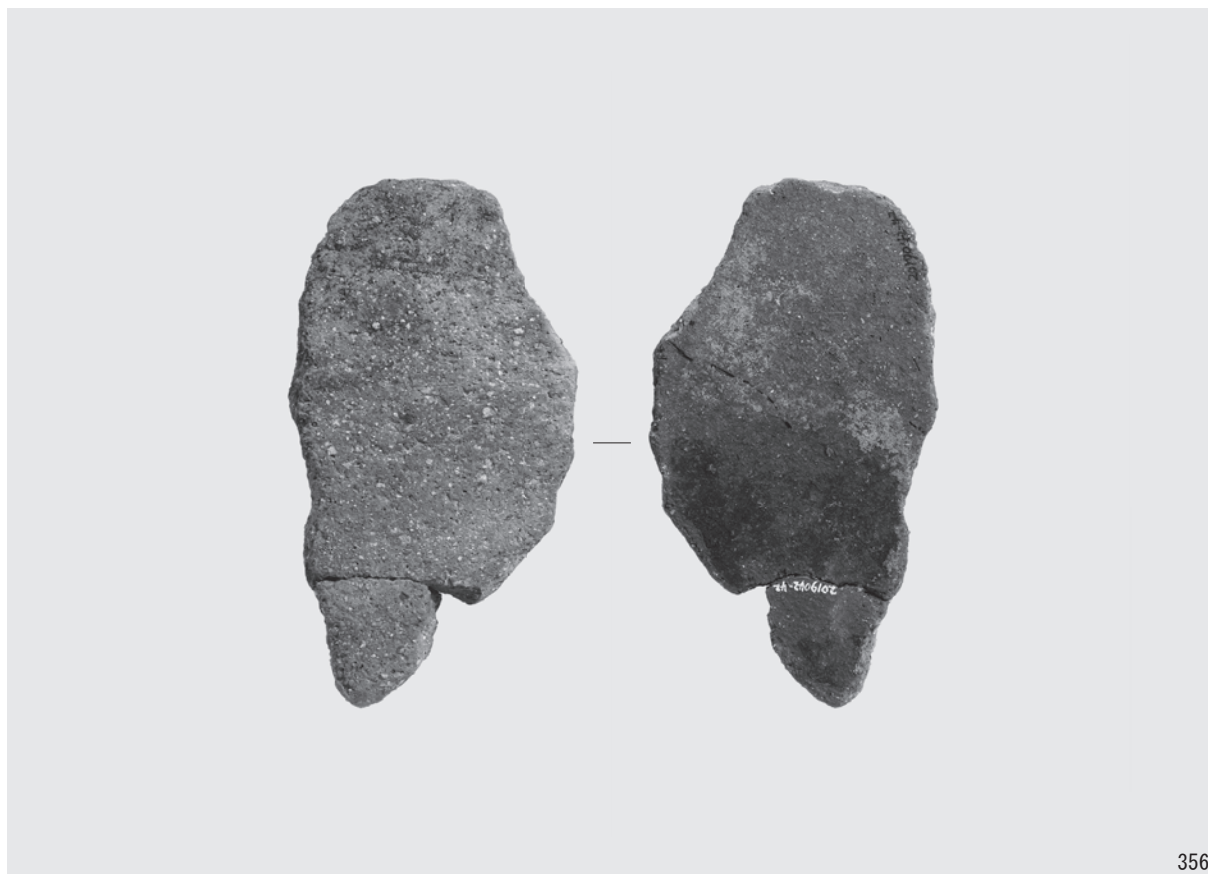
城山遺跡
令和元年度



出土土器 (2)



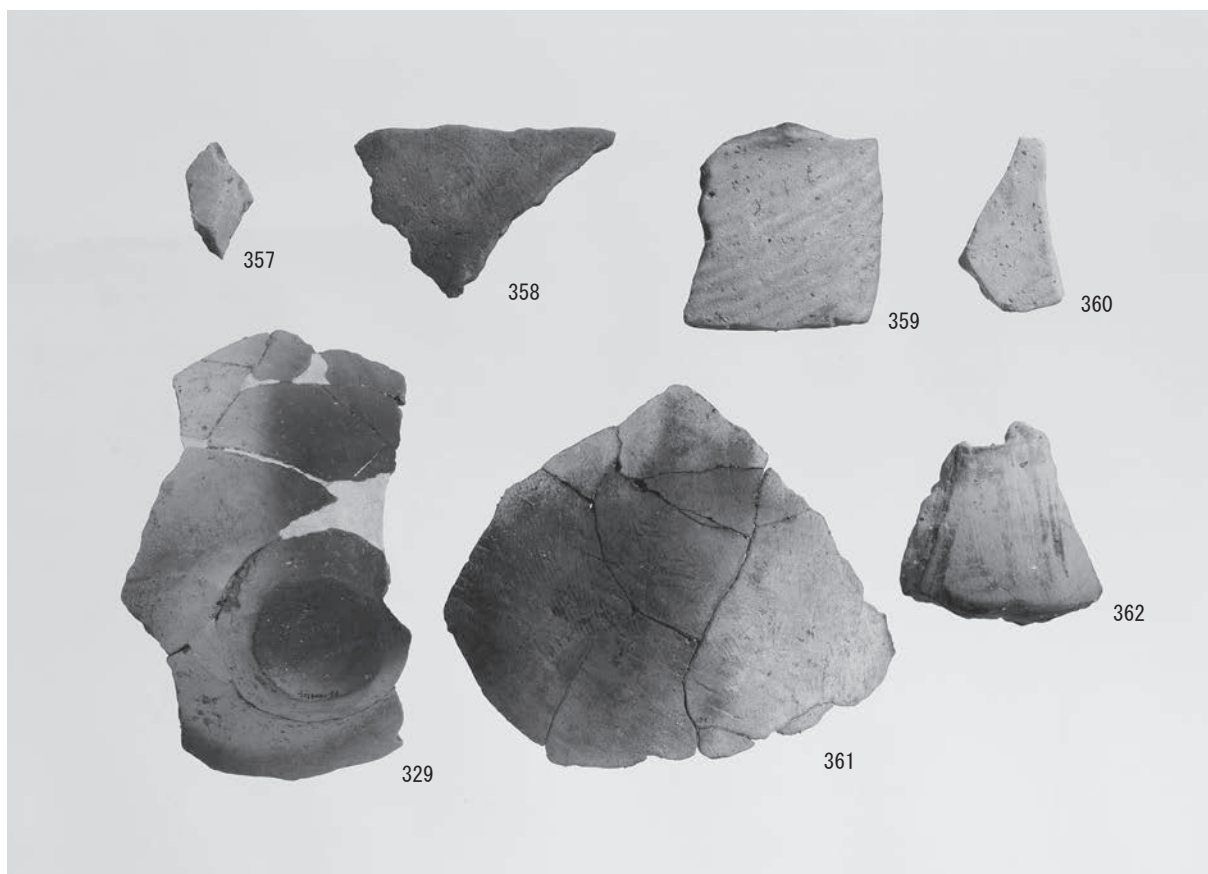
出土土器（3）



356

S X 137 出土土器

城山遺跡
令和元年度



胎土分析土器一覽

報告書抄録

ふりがな	いかるがきたいせき・しろやまいせき							
書名	鵜北遺跡・城山遺跡							
副書名	(国) 179号(太子道路) 道路建設改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第536冊							
編著者名	野田優人 岸本一宏 久保弘幸 垣内拓郎 松崎光伸							
編集機関	公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号(兵庫県立考古博物館内) TEL 079-437-5561							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL 078-362-3784							
発行年月日	令和6年(2024)年3月25日							
資料保管機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 TEL 079-437-5589							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間 (遺跡調査番号)	調査面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
いかるがきたいせき 鵜北遺跡	いぼぐんたいしちよう 揖保郡太子町 佐用岡	284645	450246	34° 50' 15"	134° 34' 45"	平成26年5月31日～ 平成26年7月31日 (2014007)	701 ㎡	記録保存調査
しろやまいせき 城山遺跡	いぼぐんたいしちよう 揖保郡太子町 鵜	284645	450005	34° 50' 24"	134° 34' 35"	平成28年8月18日～ 平成28年9月23日 (2016077)	174 ㎡	記録保存調査
				34° 50' 25"	134° 34' 33"	令和元年11月11日～ 令和2年2月28日 (2019042)	334 ㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鵜北遺跡	集落	弥生時代～ 平安・鎌倉時代	掘立柱建物跡・堅穴建物 跡・柵・土坑・溝・石組 遺構	弥生土器・土師器・須恵器・韓 式土器・陶磁器・石器・鉄器		韓式系土器・青白磁梅瓶・ 黄釉鉄絵陶器		
城山遺跡	集落	縄文時代～ 中世	掘立柱建物跡・堅穴建物 跡・柵・土坑・溝・流路	縄文土器・弥生土器・土師器・ 須恵器・石器・鉄器		焼失建物跡が土器製作の 性格を有する		
要約	<p>鵜北遺跡は揖保郡太子町佐用岡、城山遺跡は揖保郡太子町鵜に所在している。両遺跡は、揖保川最大支流、林田川左岸の揖龍平野に位置する。かつては、法隆寺領荘園の含まれ、周辺には条里地割が残っている。</p> <p>鵜北遺跡では、弥生時代前期末～中期初頭、弥生時代中期、古墳時代、平安時代後期～鎌倉時代の遺構・遺物が見つかっている。なかでも、平安時代後期～鎌倉時代の集石遺構からは、多種多様な遺物が出土しており、県下でも出土例の少ない陶磁器類が出土している。</p> <p>城山遺跡では、縄文時代後期～弥生時代中期、弥生時代後期、古墳時代中期～飛鳥時代、平安時代後期～中世の遺構・遺物が見つかっている。なかでも、弥生時代後期の焼失建物跡は、建物構造が明らかになるだけでなく、土器工房としての性格と様相が明らかになった。</p>							

兵庫県文化財調査報告 第 536 冊

揖保郡太子町

鷗北遺跡・城山遺跡

— (国) 179 号 (太子道路) 道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和 6 (2024) 年 3 月 25 日 発行

編集：公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒 675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中 1 丁目 1 番 1 号

(兵庫県立考古博物館内)

発行：兵庫県教育委員会

〒 650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通 5 丁目 10 番 1 号

印刷：小野高速印刷株式会社

〒 670-0933 姫路市平野町 62 番地
